マジメな話

岡田斗司夫

世紀末・対談

Toshio Okada
the talk with generations of japan

ASPECT

アニメな話

岡田斗司夫

世紀末・対談

Toshio Okada
the talk with generations of japan

ASPECT

マジメな話

目次

岡田斗司夫でみる世の中年表

社会の動き・世相

'58
●売春防止法施行
●一万円札発行

'59
●明仁皇太子、美智子妃ご成婚

'61 '60
●日米新安保条約成立
●レジャーブーム(登山者、スキー客大幅増)

'63
●日米間テレビ宇宙中継受信実験成功、ケネディ米大統領暗殺ニュース受信
●テレビアニメ『鉄腕アトム』放映開始

'64
●東京五輪開催

'66
●いざなぎ景気(~'70まで)
●3Cが新三種の神器に

'67
●マンガ『巨人の星』連載開始
●怪獣ブーム

'68
●GNPが米に次いで二位に
●現金三億円強奪事件

'70 '69
●東大紛争激化
●大阪で万博開催
●よど号ハイジャック事件

'71
●沖縄返還
●日本マクドナルド一号店オープン
●『日清カップヌードル』発売

'72
●札幌五輪開催

'74 '73
●『ぴあ』創刊
●オイルショック
●戦後初の経済マイナス成長
●高校進学率が九〇パーセントを超す

'75
●ユリ・ゲラー来日。超能力ブーム
●ベトナム戦争終結
●SLブーム

'76
●戦後生まれが総人口の半数を超える
●ロッキード事件で田中前首相ら逮捕

'77
●平均寿命世界一(男七二・六九歳、女七七・九五歳)
●アニメ映画『宇宙戦艦ヤマト』ヒット。アニメブーム

'78
●日中平和友好条約調印
●竹の子族、原宿に出現

'79
●すかいらーく、デニーズなど郊外レストラン盛況
●国公立大学共通一次試験実施
●インベーダーゲーム流行の兆し

岡田斗司夫

'58
●大阪市住吉区で誕生

'63
●遠里小野幼稚園入園

'65 '64
●遠里小野幼稚園自主退園
●大阪市立遠里小野小学校入学

'68
●毎日二十四時間、プラモデルのことを考える

'70 '69
●月着陸を、自宅で見る
●大阪万博見学

'71
●大阪市立三稜中学校入学。初めて女の子とつき合う

'74 '73
●突然、受験勉強がおもしろくなり、一日八時間勉強する
●大阪府立今宮高等学校入学

'75
●映画研を乗っとり、SF研に改造

'77
●四天王寺予備校入学

'78
●大阪電気通信大学入学

'79
●大阪にて『第四回日本SFショー』を主催

対談した方々

'59
●岸田秀氏、大学院修了
●宮台真司氏、誕生

'60
●堺屋太一氏、通産省入省

'63 '62
●小林よしのり氏、小学校入学
●今野敏氏、小学校入学
●堺屋氏、昭和三十七年度版の通商白書『水平分業論』を書く

'66 '65 '64
●鶴見済氏、誕生
●宮台氏、小学校入学
●小林氏、中学校入学
●大槻ケンヂ氏、誕生

'68
●堺屋氏、大阪万博開催に携わる
●今野氏、中学校入学

'69
●小林氏、高校入学

'71
●今野氏、高校入学
●宮台氏、中学校入学
●鶴見氏、小学校入学

'72
●岸田氏、和光大助教授に就任

'74 '73
●小林氏、大学入学
●大槻氏、小学校入学
●今野氏、大学入学
●宮台氏、高校入学

'75
●堺屋氏、沖縄国際海洋博開催に携わる
●小林氏『東大一直線』でデビュー

'76
●岸田氏『ものぐさ精神分析』発表

'77
●宮台氏、大学入学
●鶴見氏、中学校入学

'78
●堺屋氏、通産省退官
●今野氏、問題小説新人賞受賞

'79
●今野氏、東芝EMI入社
●大槻氏、中学校入学

'80
●ソニー『ウォークマン』発売
●テレビアニメ『機動戦士ガンダム』放映
●モスクワ五輪、日本不参加
●校内暴力、家庭内暴力急増

'81
●神戸で『ポートピア'81』開催

'82
●東北・上越新幹線開業

'83
●東京ディズニーランド開園

'84
●グリコ・森永事件
●『週刊少年ジャンプ』四百万部突破

'85
●つくばで科学万博開催
●ファミコンソフト『スーパーマリオブラザーズ』発売

'86
●ソ連チェルノブイリ原発事故
●新人類が流行語に

'87
●ファミコンソフト『ドラゴンクエスト』発売
●国鉄民営化、JR発足
●パソコン通信元年。続々とホストが開局

'88
●リクルート事件発覚
●バブル最盛期

'89
●昭和天皇崩御、平成と改元
●ベルリンの壁崩壊
●連続幼女殺害事件で宮崎勤逮捕

'90
●即位の礼
●テレビアニメ『ちびまる子ちゃん』人気

'91
●湾岸戦争勃発

'92
●PKO協力法案可決

'93
●浩宮皇太子、雅子妃ご成婚
●Jリーグ元年

'94
●連立内閣発足、首相に社会党の村山氏
●いじめ自殺相次ぐ

'95
●阪神淡路大震災
●地下鉄サリン事件

'96
●薬害エイズ裁判で患者側勝訴
●ペルー日本大使館人質事件

'97
●神戸小六男児殺害事件で中学生逮捕
●ダイアナ元英皇太子妃事故死
●アニメ映画『もののけ姫』ヒット

'80
●ボストンにて『第四二回世界SF大会』に参加

'81
●大阪にて『第二〇回日本SF大会　DAICON3』の総合プロデューサーを務める

'82
●大阪にSF専門店『ゼネラルプロダクツ』を開店
●マニア向け模型『ガレージキット』を日本で初めて商品化に成功

'83
●和美さんと結婚
●ガレージキットの展示・即売イベント『ワンダーフェスティバル』を東京・大阪で同時開催
●大阪にて『第二二回日本SF大会　DAICON4』主催

'85
●アニメ、ゲームなどの制作会社ガイナックスを設立、代表取締役に就任

'87
●ガイナックス第一回企画の長編オリジナルアニメ映画『オネアミスの翼』完成。春休み映画として全国の東宝東和洋画系列にて公開

'88
●オリジナルビデオアニメ『トップをねらえ!』の企画、原作、脚本、プロデュースを担当

'90
●NHK、東宝と共同で制作したテレビアニメ『不思議の海のナディア』放映開始

'91
●アニメ『ちびまる子ちゃん』人気
●米・サンフランシスコにて映像イベント『ANIME/CON』を主催

'92
●パソコンゲーム『プリンセスメーカー』発売
●休養を決意。DAICON/FILM、ゼネラルプロダクツ、ガイナックスに関わるすべての権利を共同経営陣に譲って退社

'94
●東大教養学部非常勤講師就任マルチメディアゼミ開講

'95
●『ぼくたちの洗脳社会』発表

'96
●東大教養学部おたく文化論ゼミ開講
●『オタク学入門』発表

'97
●(株)オタキング設立
●『東大オタク学講座』発表

'80
●小室直樹氏『ソビエト帝国の崩壊』発表
●鶴見氏、高校入学

'81
●宮台氏、大学院進学

'82
●今野氏、東芝EMI退社
●大槻氏、高校入学

'84
●宮台氏、マーケティング会社設立
●鶴見氏、大学入学

'85
●小室氏『韓国の悲劇』発表

'88
●大槻氏(筋肉少女帯)メジャーデビュー

'89
●小林氏の『おぼっちゃまくん』がテレビアニメ化
●鶴見氏、電気メーカー入社

'92
●大槻氏『新興宗教オモイデ教』発表

'93
●宮台氏、東京都立大助教授に就任

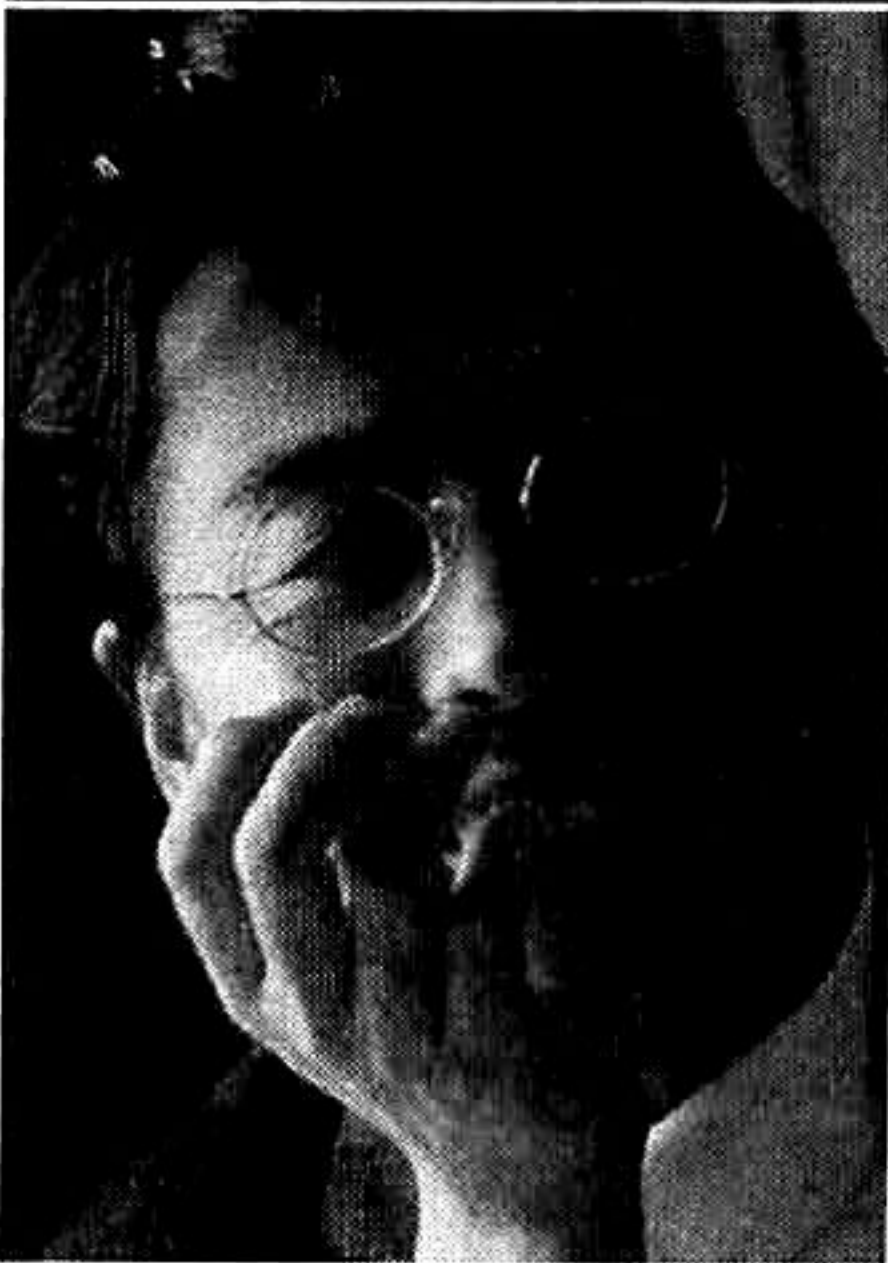
'95
●鶴見氏『完全自殺マニュアル』発表

本書は『週刊アスキー』の連載「オタキングダム」（九七年六月二日号〜十月六日号）、特集「SIM JAPAN」（九七年七月七日号）内の対談記事に、加筆し再構成したものです。なお、宮台真司さん、岡田和美さんは本書を作るにあたり、新たに取材しました。

小林よしのり

思想なき時代の『ゴーマニズム宣言』

Yoshinori Kobayashi

一九五三年福岡県生まれ。マンガ家。大学在学中の七五年『東大一直線』でデビュー。八六年に連載を開始した『おぼっちゃまくん』はブームを呼び、テレビアニメ化された。『SPA!』で連載を始めた『ゴーマニズム宣言』では、オウム真理教、薬害エイズ、従軍慰安婦などの社会問題を取りあげ、新境地を開く。現在『SAPIO』で『新ゴーマニズム宣言』を連載中。また学者や文化人などで結成している「新しい歴史教科書をつくる会」のメンバーとしても活動している。近著に『教科書が教えかねない自虐』(共著・ぶんか社)、『逆説のゴーマニズム宣言――朝日新聞の正義』(共著・小学館)がある。

このシリーズ最初の対談者に、オタキングは小林よしのりさんを選んだ。薬害エイズや従軍慰安婦などの社会問題で、従来のマンガ家の枠を飛び越えた活動を展開する小林さん。「オタク」で世界征服してやろうという「野望」に燃えていたオタキングにとっては、その戦略と覚悟はぜひとも確認しておきたいところだったようだ。現代の「カリスマ」を前に、怒濤の岡田トークが爆裂！　その力技に一同圧倒、の回である。（九七年四月二十四日対談）

宮台真司はオタクだ

岡田　今回の『ゴーマニズム宣言』、敵は宮台真司さんでしたね（笑）。

小林　いつか書いてやんなきゃ、しょうがないと思ってたんだよな。よっぽどわしに惚れあげとるみたいで、『終わりなき日常』の本にも、わしの名前を麻原彰晃と並べて出してたし、書くものにしょっちゅうわしのことが出てくる。それを見ると、わしがテレビに出てしゃべったことも、いちいちチェックしているんだよなあ。

岡田　宮台さんって、テレビが好きなんですよね。以前、大阪の大学であったシンポジウムで一緒になって、その帰りの飛行機で、ずっとアニメの話をしてました。僕ね、「オタク仲間」という線を引いて、その人のオタク度合いで自分との距離を測るんです（笑）。だから、宮台さんの場合は「よし、宮台、お前、オターク！」という（笑）。僕はOKなんです（笑）。

小林　でもあんまりオタクってとこ、出さないよね。

岡田　出さないですね。まあ宮台さんは、ビジュアル的にも気をつかっていますよね。そこはちょっといけません。いけませんっていうのは単なるヒガミですが（笑）。

従軍慰安婦問題に勝ち目はあるか

岡田　今アメリカでは、メディア・リテラシー教育というのが叫ばれているんです。これは簡単に言うと、メディアを信用するなという教育なんですよ。向こうでは規制が撤廃されて、出版と放送を同じところがやれるようになったために、マスコミは産業として強化された半面、言論を好き勝手に操る力も強化されてしまった。では、国民のほうもメディアに対して強化しようと。メディアの言うことを簡単に信用しないで、記事の裏にある背景を読んだり、テレビのフレームの外で何があったのかを、常に考えさせる教育っていうのをやっている。

　で、僕から見たら、今小林さんが戦っていらっしゃる戦場というのは、どうも従軍慰安婦ではないと思うんですよ。今回はたまたま従軍慰安婦問題[001]ですけど、そのバックにはメディア・リテラシーという意識があるのではないかと思うんですけど。

小林　ああ、かなり正確なんじゃないかな。今やってるのも、大新聞によってずっと報道されて世間に通ってしまっていることを疑わせるということだし。テレビだって、『朝まで生テレビ』の舞台裏なんかはみんな知らされていなかったわけだしね。報道されているものをそのまま信じないような体質を、みんなが作ってくれれば、もうそれでいいって気持ちはあるけどね。

岡田　極端な話、今回の従軍慰安婦問題は、負けはどのへんまで考えていらっしゃいますか（笑）。

001――
従軍慰安婦問題
第二次世界大戦中、戦地の日本軍の性的「慰安」のため、当時の植民地であった朝鮮半島や東南アジアの占領地から強制、またはその他の方法で集められ、非人間的な屈辱を受けたとする女性たちが、日本政府を相手に謝罪と補償を求めている問題。政府は強制連行の事実を認め、元慰安婦を支援するための任意団体を発足させた。だが、識者や文化人の中には強制連行ではなかったという意見もあり、小林さんはその一人。

勝利条件はわかりやすい。日本人全員が、強制連行はなかったと考えるという。でも、負けでも「いい負け」と「悪い負け」がありますよね。こんな形でだったら負けてもいいやというのは?

小林　負けでもいい負けねえ……。そうだなあ、政府とか文部大臣あたりは今の方針を曲げないままだけど、一般の人たちの多くは、もうしっかりと疑ってしまって、ずいぶんと根を張ってしまうということかな。そこからあとは、彼らが常識として広げていくと思うんだよ。今、当時の慰安婦というものが強制連行ではないことは、知的に体力のついた人間にかなり広がっているから、今後、彼らが慰安婦・性奴隷という言説を塗り替えるくらいの力は、持っていると思っているけどね。

岡田　勝ち負けというより、自分でものごとをきちんと判断するようなやつが世の中に育てば、それが本望?

小林　まあ、原則それだよね。

岡田　では彼らが、たとえば小林さんや西尾幹二[002]さんが書かれているものを読んだ上で「やっぱり強制連行はあったし、日本は謝ったほうがいいや」と判断して、これからも土下座だとするのはOKなんですか。

小林　「こりゃ、あったわ」って判断したら、わしのところに説得できる論拠を持ってくるはずだよ。今はどうしても説得されないから、わしはどんどん攻めっぱなしになっているわけで。

岡田　じつは、この対談場所に来る寸前まで、従軍慰安婦問題について、僕はどっちだろうと考えていたんですよ。でも、二人で笑っている写真が誌面に載る限りは、たぶん僕は小林さん側だと見られるんですよ。もう、これはどうしようもない(笑)。

002——
西尾幹二(にしお・かんじ)
一九三五〜。ドイツ文学者、評論家。電気通信大教授。専門のドイツ文学のほか、政治、文化、教育問題にも関心を持つ。「新しい歴史教科書をつくる会」の呼びかけ人の一人である。関連著書に『歴史を裁く愚かさ——新しい歴史教科書のために』など。

小林　そうなんだ。

岡田　それは、小林さんとメディアとの対立が従軍慰安婦ではなくて、メディアという巨大な宗教に入っているか入っていないかという、宗教裁判になっているからです。僕としては、それに巻きこまれたくねえなっていうのが正直あるんですよ。

というのは、僕はそのメディア宗教の中で商売をしているわけで。宗教の教会の縁日で、ものを売っているわけですよ。小林さんもこの間までその縁日でものを売っていて「薬害エイズ[003]、コワイよ、コワイよ。あれ、悪いよ、悪いよ」ってやっていたのに、今回はそのメディアのシステムをぶっ壊す方向に行っているわけですよね。

小林　なるほど。だけど、何て言うのかな、わしはどうしても、将来的にはこっちが主流になるという確信が、メディアそのものがこっちに追随してくる確信がある。

岡田　結構、勝ち目あり？

小林　もう、絶対に勝つと思ってる。今度出した『新ゴーマニズム宣言』の第三巻が、さっそく売れていてね。それを見たマスコミの若い人なんかから、反響がどんどん来ている。「こんなにわかりやすくて説得力のあるものはなかった」って。だから、吉見義明[004]をはじめとする謝罪派の学者たちとの論争でも、もう確実に勝てるという自信があるんだよね。

岡田　この状況で勝ったら気持ちいいでしょうね。

小林　ああ、そりゃもう間違いなく勝てると思う。あの三巻を見たら、謝罪派は完全に青ざめると思うよ。しかもこっちにはまだ手があって、だいたい二カ月おきに次の手を打っていくから。間違

003
薬害エイズ
おもに八二年～八六年に、血友病治療などのために病院で投与された、アメリカからの輸入非加熱血液製剤がエイズウイルスに汚染されていたため、千九百人近くがエイズに感染、死亡者も四百人を超すという深刻な薬害事件となった。官・民・医の癒着によるこの事件の構造は、大きな社会問題に発展。小林さんも支援グループを作り、患者とともに抗議行動を展開した。九六年三月には、患者と国・製薬会社間で争われていた裁判で和解が成立。厚生大臣、菅直人（九六年当時）は、国の責任を認め患者に謝罪した。

004
吉見義明（よしみ・よしあき）
一九四六～。中央大学商学部教授。歴史に関しては「感情を排し、資料に基づくデータの積み重ねが不可欠」との持論で研究を進める。編著に『従軍慰安婦資料集』など。

いなく勝てるよね。

優等生の論理が通用しなくなってきた

小林　その三巻の後書きにも書いたんだけど、論議しているものに忠実に耳を貸せば、勝てると思う。でも、それを「おかわいそうに」という感情が阻むんだよね。テレビで韓国のおばあさんが泣いているのを見て、その姿をかわいそうだと思う同情心には、どうしても逆らえない。
　でも、本当の情の論理で言えば、それが自分の知り合いとか、おじいちゃんや親戚という血のつながっている人たちだから、「かわいそう」となるはずでしょ。なのに、テレビを通して「かわいそう」と言うわけじゃない。テレビがなかったら「かわいそう」と思いようがないわけだからね。

岡田　そうですよね。

小林　結局、メディアを通して湧き上がってきた、人権宗教の「おかわいそうに」の論理なわけだ。テレビと新聞が一番大きな力を持って、みんなを洗脳してしまった。そのメディアの虚構を、どうわからせるかなんだよね。
　わしらの論理は、たとえれば不良の論理なんよね。向こう側は「これだけかわいそうな方たちがいますね、謝りましょう」って、優等生のきれいごとをいつも言っている。それを延々繰り返しすぎて、時代的に限界に来ていると思うわけ。「戦争はとにかく悪かった。戦争にまつわる残酷なことはいっぱいあった。気の毒なこともいろいろありすぎた。いちいち謝りましょう」と、クラスの一番優等生の部分が一生懸命率先して言ってて、これまでは五十人のクラスのうち四十人が優等生

側で、「謝りましょう」だった。こっちの不良側は十人もいなくて、密かに教室の隅で「あのバカ野郎、何が従軍慰安婦だよ、何が南京大虐殺だよな」とかコッソリ言ってたわけ。万が一、本気になって「何が南京大虐殺三十万人だよ」なんて言おうものなら、四十人がドワーッと来るもんだから、とてもじゃないけど言えなかった。でも、今はそうじゃなくなってきているわけよ。教室の中央に向かって言うやつが、どんどん増えてきている。

岡田 その一番おもしろい段階って、こちらが十五人、相手が三十五人ぐらいですよね。

小林 そうだね。今、そのへんまで来てるよ。

岡田 僕もそう思います。そこから二十五を超えて三十以上になると、そろそろ小林さんもおもしろくなくなってきますよね。

小林 もう過半数超えたら、そのあとは勢いづいちゃうから。わしの仕事はそこまで。

岡田 いいとこだけ持っていきますね（笑）。

小林 あとはたぶん反動がつくだろうから、とにかく、そこまで覆していくのが醍醐味なわけでね。

岡田 それでガーッと勢いがつくと、「まったく悪くなかったんだ」と言うやつが出てきて、これはこれで困っちゃうわけですよね。

小林 そうしたら、またそのときの少数派につけばいいんじゃないのかな（笑）。

謝罪は日本にとって損か得か

岡田 僕の場合、肉親を考えても全然接点がないし、大阪育ちで近所に韓国人も住んでいたけど、

近いからかえってリアリティがない。だから極めてどっちでもいいという考え方なんですよ。前に小林さんが「国際貢献をするのでも兵隊を出すのでも何でもいいから、どんな損得があるのか教えてくれ」と書いておられましたが、その感覚にとても近いんですよね。謝ってもいい。その逆に、謝れと言ってるやつを、一人残らず拉致して潰して回ってもいいんです。国益という言い方はおかしいかもしれないけれど、僕らにとって、一番得になることって何だろうと考えてしまうんですよ。

ただその場合の「僕ら」という線が、僕と小林さんとは違うと思うんです。小林さんはたぶん「日本人」というところで線を引いていらっしゃって、僕は「オタク」で引いているんですよ。

小林　「オタク」で引けますか。

岡田　僕にしてみれば、アメリカのオタクと僕とは同じ国民なんだけれども、同じ日本人でも、僕と国籍が違う人がいっぱいいるような感触なんですね。

小林　ちょっと待ってよ。わし自身の中では、「日本人」というところで線を引いているわけでもないみたいな気がする。つまり、こういうことなんだと思う。国益というところで謝ったほうがいいというのは、今までで言えば、それは儲けだよね。アジアの市場を拡大して、もっと儲けたいという。

岡田　それが今までの国益ですよね。

小林　ところが、たとえば最近、金属バットで自分の子どもをぶん殴って殺しちゃった親父の裁判があってね。その親父は子どもが家庭内暴力をふるうようになって、精神科のカウンセラーに聞きに行ったら、「子どもにはとにかく一切逆らうな」と、カウンセリングされたわけ。それで親父は、

自分の息子にまったく逆らわなくなって、しまいには自分が寝るときに息子に三つ指ついて「寝てもよろしいでしょうか」と挨拶しにいくようになってしまった。すると子どもは、もっと暴れだす。

わしはそれを聞いたら、ほんと、その子どもかわいそうだなと思ってしまうわけよ。だって、そこまで尊厳のない自分の親父を見たら、もうつくづくいやになって、どこまでやればいったいこの親父はこういう、何ていうか尊厳のなさみたいなものを改めてくれるのか、どうやったらこいつのどうしようもない根性が直って、親父としての誇りを持ってくれるんだろうかと、子どもはずっと思っていたと思うんよね。その子どもの感覚が、今の社会にもそろそろ出てきていると思うわけ。

要するに、儲けのためだったら頭なんか下げてしまえという大人の尊厳のなさに、果して人々が満足しているかやね。わし自身はイラついているし、若い人たちも同じくらいイラついているから、同調する人がたくさんいるんだと思う。「日本人」にとって一番得になることっていうより、損得超えて、「尊厳」のないやつにはイラつくってことだけにすぎない。まあ、「尊厳」があれば、日本の国益に結びつくって考えてもいいけど。

岡田 僕自身は、その国益を経済的利益とはあまり考えてないんですよ。自分の言葉で言うと、洗脳的利益なんです。自分の言葉なのでちょっと崩しにくいんですけれども、要するに、どれぐらい日本がカッコいいかのほうが重要であるということなんです。日本人の本質というのは、日本の文化や風習や人々のふるまいにあるわけですから、よその国が日本を真似たり、日本文化をコピーするようになることが重要であると。いかにして日本的なものを増やすかという戦いに、僕たちは参加している。これが僕の考えなんですよ。

小林　なるほど。それはすごくわかる。つまりわしの言葉では「尊厳」というカッコよさなんだよ。

岡田　僕は「オタク」の国益のために尽くしているので、いかに世の中の人がオタクになるか、オタクのふるまいを真似するか、という戦いをしているんです。極めて分の悪い戦いですけれど(笑)。

小林　前にテレビで、「オタク文化というものがアメリカに勝てるんじゃないか」と言ってたじゃない。わし、あれにすごく感動したんよ。

岡田　あれは勝ち目があると思ってるんです。逆に言えば、世界中に氾濫しているポップ・カルチャーとか、英語で書いてあるのがカッコいい、という感覚がありますよね。あれは結局記号にすぎないんだから、俺たちのほうに変えることも可能だろうと思うんです。変えたら相当グロテスクだろうけど、今のグロテスクさとそんなに変わらないなら、俺の国民が豊かなほうがいい(笑)。

小林　なるほど。オタク文化でむしろ侵略してやろうみたいな、オタクナショナリズムね。その感覚はすごいね。それができるなら、オタク文化もたしかにすごいかもしれないな。

美学という戦場

岡田　そこで、今の問題としては、日本という国はこれ以上金稼いでも、カッコよく見えないと。じゃあもっとカッコよく見せて、他の国が日本を真似るにはどうすればいいかという戦場で、「今度は一回突っ張ってみるという戦略もありだ」という意見と、「まだ謝るほうがカッコいい」という意見があるんだったら、僕は納得するんですよ。つまり、日本をよりカッコよく見せるという共通の利益を目指して、手法の違いで戦っているわけですから。

ところが今は、正しいか正しくないかで議論が進みがちじゃないですか。証拠がどうしたとかこうしたとか。でも、証拠なんてあとで捏造すりゃいいわけですし（笑）。どちらのほうがカッコいいか、僕ならそのポイントを優先すると思うんですよ。

小林　カッコいいかっていうのは、わしもすごい価値観だと思う。たとえばペルーのフジモリ大統領が[005]、日本大使館に武力突入したじゃない。わしはやっぱり、あのほうがカッコいいと思うわけよ。

岡田　そうですね。あれは、日本、スゲエ、カッコ悪かったですね。

小林　あれがカッコいいという感覚ですら、最近やっと広がった風潮の中で思っているわけで、ちょっと前までは、福田（元総理）が[006]赤軍派を逃がしちゃったときのように、「人命は地球より重い」と言っていたほうがカッコよかったんよね。そういう時代がずっと続いていたんだけれど、「もう、世界中からカッコ悪いと言われてるじゃねえかよ」と言う連中がどんどん出てきて争いを始めた。

でも、そこへ大新聞やテレビが「いや違う」と。正々堂々と謝ることがカッコいいという言説を、布教しているんだもん。しかも、それを言うために事実を歪めることまでするわけ。そこを「お前らは事実を歪めている。事実を歪めてまで謝ったほうがカッコいいと言っているのがお前らだ」ということを証明するためには、その事実も出していくしかない。証明するしかないから。

岡田　極論ですが、それに対抗して、「わしらも事実を歪めてでも謝らん」という姿勢を、まず作っちゃう。

小林　それを言ったら、イデオロギー重視だから悪人にされるな。まず、どこのメディアにも出してもらえない状態に（笑）。だって朝日新聞をはじめとする日本のメディアのほうが、じつはイデオ

005――
ペルーのフジモリ大統領が……
九六年十二月十七日、ペルーの日本人大使公邸をトゥパク・アマル革命運動（MRTA）の武装ゲリラが襲撃、天皇誕生日を祝うパーティーに集まっていた人々を人質にたてこもった。服役中の仲間の釈放を要求するゲリラとペルー政府との交渉は難航。九七年四月二十二日、ペルー政府は秘かに掘り進めていたトンネルから特殊部隊を突入させて、公邸内を爆破。ゲリラは全員殺され、人質は約四カ月ぶりに解放された。この作戦については、ペルー政府から日本政府への事前連絡はなく、フジモリ大統領の強い決断で実行された。

006――
福田（元総理）が……
七七年九月二十八日、パリ発東京行きの日航機が、日本赤軍にハイジャックされダッカ空港に着陸。犯人は日本政府に対し、同志ら九名の釈放と身代金を要求した。当時の首相であった福田赳夫は人質の命を尊重するとし、超法規的措置で犯人の要求を受け入れた。しかし国際社会からは「テロリストを世界に放った」との批判を集めた。

ロギー重視というのが実体なんだから。『ゴーマニズム宣言』でも、じつはそこまで言いきったことはあるんよ。「自分の祖父の代を守るためには、自分は悪人にだってなる」と。でもそこまで言うと、いわゆる右翼の人たちの論説とほとんど変わりないんだよね。わかって言ってんだもん、こっちは。

岡田　でも「新しい歴史教科書をつくる会」の中で、「カッコいい論」のところにいるのって、小林さんだけのような気がするな。ほかの人はみんな「正しい論」のところにいるように思える。

小林　ああ、正しい論ね。『正論』って雑誌あるもんね。

岡田　オレはここに西部邁[007]さんがいても、うなずくとはとても思えないんですよ。

小林　ほお、そうなのかねえ。まあ、謝罪側なんて、もっとカッコ悪いやつらしかいないんじゃないかなって感じがするけど。

岡田　あまり話を「カッコいいかどうか」でまとめられたら、困りますか。

小林　いや、それは全然かまわないんだけれども、何て言うのか、それはたしかにうなずけるよ。カッコいいカッコ悪いという感覚を持ちこんだり、そこで解釈した人は、今までいなかったから。向こう側が言っている、ペコペコと誠実に謝ろうというのは、カッコ悪い。ダサイよ。だいたい、事実によって謝ろうというような言い方も、わしにはカッコいいと思えんわけよ。事実、ファクトが大事だと。それによって謝るから、しっかり調査しようじゃないかっていう言い方。

岡田　僕は、事実はあまり重要視していないんですよ。どちらかというと、カッコいい男のモデルケースを提示できないことが、今の言論状況の混乱を招いているのではないのかなと。つまり、ど

007

西部邁（にしべ・すすむ）

一九三九〜。評論家。専門は社会経済学。学生時代は東大自治会委員長、全学連執行委員として六〇年安保を闘う。学者としては、新古典派経済学を専攻するも、米、英での生活をきっかけに伝統や歴史を重視する英国の保守主義思想に転向。以来、一貫して大衆批判、高度大衆社会批判を展開、伝統・言葉・ルールの尊重を強調している。雑誌『発言者』主幹。著者多数。

ういう責任の取り方をするかということですよね。

たとえば、ある疑いをかけられただけで、恥だと感じて切腹する考え方も昔はあって、これもひとつの美学ですよね。その上に立って、「日本はこれで経済的に破算してもいいから、民族的な切腹をするために謝る。それによって日本は、このような信頼を得ることができるんだ」と謝罪派が言ったら、僕はそれはOKなんですよ。でも、そこまでの覚悟もないようだし。

小林 そうだね。「金は政府が出す、オラ出さない」って思ってるもん。

岡田 逆に「新しい教科書をつくる会」の方々は、「俺たちは、ちょっと頑固な古いタイプの男というものの復権を目指しているんだから、いちいち全部に謝ってられない。通すところは通して、だめだったときは叩かれてもかまわない」とか。

たぶん、新しい教科書を作ることで、近隣諸国と衝突が起こると思うんです。東南アジアとかに進出している企業にしてみたら、小林さんたちがやっている活動というのは、すごく耳の痛い活動ですよね。ごまかしながら何とかうまくやってきた関係に、もう一回火をつけられてしまって。日本はあの論をベースにして、再軍備するのではないかと思われる。小林さんたちはそのつもりがなくても、彼らにとってはその可能性はあるだろうし。最終的に、小林さんの話を聞いて育った世代が、オウム[008]みたいに変になってしまって、「日本が再軍備する可能性もありでいいじゃんか」って言いだすかもしれない。でも、「たとえそうなっても謝らないぞ」と。これも美しい覚悟だと思うんですよ。こういうふうに両者とも最悪のモデルケースを出して判断してくれって言ったら、僕はすごくわかりやすくていいなと思うんですよよ。

008――
オウム
オウム真理教。教祖・麻原彰晃が八六年四月「オウム神仙の会」を発足。最初は古代ヨガ、原始仏教、大乗仏教などを教義の根本として、ヨガの修行による病気の治癒や空中浮遊などの超能力獲得を目的としていたが、さまざまなイニシエーション（通過儀礼）を経て解脱を目指す指向性が強まり、教義も神秘的・超自然現象などの尊重へと変化。やがて人類の救済と終末論思想を主張するようになる。教団が世間を騒がせはじめたのが、宗教法人として認可された八九年から。弁護士一家の失踪にはじまり、九五年三月の東京地下鉄サリン事件へと至る。さまざまな薬物による修行、大量の武器の製作・所有、毒ガスによる無差別大量殺人の決行、それらを指示したのが高学歴の教団幹部だったことなど、宗教問題という枠を大きく超え、日本中を大きく揺さぶった大事件。現在、教団幹部の裁判が続行中だが、依然として信仰を続ける人もおり、オウム問題の根深さや難しさを示す。

キャラクターの勝負

小林　本当は、わしにはわしなりの恐ろしい企みがあるんだけど、それは全部言えない、この段階では（笑）。それを言ってしまうことは、誠実じゃないんよ。ストーリーには引きがいるから。

ただ、少なくとも、「正しい」という用語をどれだけ使っても、謝罪派の悪人の底ぐらいは、知れてると思ってる。むしろわしは、たとえば西尾幹二とか藤岡信勝[009]とか、かなり癖のある人間がこちらにいるわけじゃない。謝罪派側に並んでいる人材を見ると、こっちにいるメンバーのほうがはるかに狂気を秘めていると思うてるよ。だいたい、漫画のキャラクターにしようとすれば、はっきりわかるよ。謝罪派側のキャラクターをどんなに並べたって、東大通とか、おぼっちゃまくんとか、そういうキャラクターにならないもん。あれは立たないよ、キャラクターとして。でも、こっちは西尾幹二にしたって誰にしたって、似顔絵を描いて動かしてみた段階で、キャラクター立っていくやつがいっぱいいてさ。

岡田　でも、薬害エイズの安部英[010]でもキャラ立ったわけでしょう。

小林　立ちました。

岡田　立ちゃいいってわけでもないですよね（笑）。

小林　うん。でも、たとえば、吉見義明を主人公にするか、安部英を主人公にするかって言ったら、やっぱり安部英を主人公にせざるをえないよね。吉見義明では、どうやったって立たないわ。だから、立てばいいわけじゃないけど……。

009――
藤岡信勝（ふじおか・のぶかつ）
一九四三〜。東京大学大学院教育学研究科教授。教育学の専門家で「新しい教科書をつくる会」の副会長でもある。著書に『社会認識教育の方法』『近現代史教育の改革』など。

010――
安部英（あべ・たけし）
一九一六〜。元帝京大学副学長。血友病の権威だったが、九六年、帝京大学病院で非加熱の輸入血液製剤による治療を受けていた血友病患者がエイズウィルスに感染して死亡した問題で、業務上過失致死の容疑で逮捕された。

岡田　立てばいいんですね、やっぱり（笑）。

小林　マンガとしては、物語としてはね、安部英を認めざるをえない。やっぱり悪人じゃないと立たないよね。そりゃ、薬害エイズという社会的な問題においては、絶対に許されないけど。

だからわしは、物語的には、安部英よりも小林よしのりのほうが悪党じゃないといけないと思ってるけど、キャラクターとしては吉見義明よりは安部英じゃないと立たないなあ、どうやっても。

岡田　わかりやすい話ですね。

小林　その悪人を描くんだとしたら、「新しい教科書をつくる会」に賛同している人たちのほうが、おそらく個性は強烈だよ。そういう部分でカッコいい。

それじゃあ、東大通はカッコよくないのかっていう話になっていくけれど、わしは、あれがカッコいいと思っているし、カッコいいと思わせたい人間なんだよね。そこに、わしのオタク文化に対する違和感があるんよ。オタク文化の中で、外国にどんどん輸出されていくキャラクターって、要は姿のカッコよさでしょう。

岡田　そうですね。

小林　姿の美しさと言っても、それは八頭身、九頭身の、顔が小さくて足の長い人間で、日本人ではありようのない姿をしているわけでしょう。日本人という印すらなくて、国籍を除外して受け入れられているという部分もあるわけじゃない。

たとえばそこで『子連れ狼』が受けるなら勝ったと思う。それと同じで、東大通[011]とかおぼっちゃまくん[012]のような、わしのキャラクターがカッコいいと世界で認められないと、日本が勝ったってこ

011 東大通
小林よしのりのデビュー作『東大一直線』の主人公。破天荒なギャグとふるまいで周囲を脅かす転校生。

012 おぼっちゃまくん
小林よしのりのギャグマンガ『おぼっちゃまくん』の主人公「御坊茶魔」のこと。超大金持ちの小学生で、押しの強いキャラクターと莫大な財力に任せ、悪乗りを繰り広げる。

とにならないと思ってるんよ。

岡田　まずかたちから入る人は、最初は八頭身とかのキャラが好きになるんですよ。ところがある程度練れていくと、それをデフォルメ・キャラクターで、自分たちで描きだすんです。つまり、そこでようやく、「かわいい文化圏」に入ってくるわけですよ。

　僕がオタク文化が侵略性を持っていると言っているのは、そのバックグラウンドにある、あれを生みだす日本人の思想なんですよ。かわいいものがよくて、一見カッコいいものの中に、すごいグロテスクなものを秘めますよね。そういう日本人の思想的なものも一緒に輸出しちゃってるんですよ。外国人は、カッコいい映像を見ているつもりでも、その心情込みで受け取ってしまうから。『きまぐれ☆オレンジロード』[013]っていう、ふやけたマンガをアメリカで放送したら、それを見ていた黒人のマッチョな兄ちゃんが、僕も三角関係、四角関係がいいと、だんだん変わっていくんです。アメリカ人の恋愛というのは、普通、好きになったらアタックなんですが、秘めた恋のほうがいいとか言いだすんですよ。マンガがツールになって、私たちの感性全体が輸出されているんです。

小林　なるほど。そうか。

岡田　僕らがハリウッド映画を見ていると、自由がいいとかポジティブなことがいいと洗脳されていきますよね。日本アニメの場合は、一見カッコいいロボットのようなものを輸出しているように見せて、じつは日本的な感覚を輸出しているんですよ。そこに勝ち目があるなと。世界全体がフロンティアで発展しているような時代であれば、アメリカ的なほうに行きやすいんです。でも今、資源がもう限界に来ていて、いかに国際的な協力、協力とはつまりこまめな紛争ということですが、

013――
きまぐれ☆オレンジロード
『週刊少年ジャンプ』に連載された青春マンガ。超能力を持つ主人公が、元不良美少女と、積極的な後輩の間で揺れ動く恋愛もの。マンガはまつもと泉。

こまめな紛争の中で、どう活躍するのかに関しては、日本の少女マンガ的な、恋愛におけるパラレルな人間関係みたいなものをOKとする感覚って、すごく強いんですよ。今頑張れば、たぶん五百年征服できる。僕はこの五十年ぐらいが勝負だと思ってます。

小林 なるほどね。オタク文化が、日本人の感情や心情とかに通じる道を開いてしまうという可能性は、たしかにありそうな感じはするね。

岡田 それはアメリカ人がこの百年ぐらいでやったことですよね。少なくとも僕らが叩きこまれてきたのは、国際間においては経済をはじめ、すべて侵略競争でしかないと。今、私たちは文化の侵略競争というものの際(きわ)に来ていて、これから五百年、また負け組さんになるのは、俺はいやなんです。勝ち組さんに行きたいんですよ。ひとつの方法としてアメリカ文化の侵略の手先みたいになって、渋谷の街をヒップホップの格好をして、ヘイッてやるのもありだと思うけど。でもそれは配給欲しさに占領軍に媚びるみたいなもので(笑)、男のやり方ではないと。

小林 そういう意味では、すごくよくわかるなぁ。

岡田 ただ、私たちの武器は、はた目から見て大変情けない。『たまごっち』とか、『ポケモン』とか、美少女アニメとか、ロリコンなどがラインナップされていて、恥ずかしいことは恥ずかしいんですけどね。

小林 そこの通路を開いとってくれれば、そこから先、わしが潜入していく素地もあると認められはするけどね。最初に東大通から入っていっても、絶対進んでいけないような状態ってあるからな。

岡田 どちらかというと、そちらのほうが本質ですから。第一、マンガが読めるようになるのって、

相当訓練が必要なんですよね。

もう女子どもには迎合しない

岡田 ちょっと話がそれますけど、僕、少女マンガが読めるようになってから、女の子の考え方って変わったと思うんですよ。今の女子高生の考え方と、二十代後半ぐらいの女性編集者の考え方のギャップって、どれぐらい少女マンガを読んだかにあると思っているんです。今の少女マンガって、もう少女マンガではないですから。その断絶にあるんじゃないのかと感じているんですけどね。やっぱり、僕にしてみりゃ、少女マンガを読んでいない女の子たちというのは違う国民なんですよ。あいつらのために、僕は指一本動かす気にならないんですよ(笑)。

小林 今は少女マンガそのものがもう死滅してしまっていて、今の若い子たちは、少女マンガなんかうざったくて読んどられんという状況になってきてるわけだから。彼女たちのほうが、もっと男っぽくなってる可能性はあるね。

岡田 あれは別の国民です。できれば殲滅(せんめつ)したい(笑)。昔の僕だったらそいつらを殺すなり、監禁するなりしなくちゃいけなかったけど、今はその人の心の五パーセントから一〇パーセントを、僕らの感覚に共感させればいいと考えるようになりました。そうなれば、個人の中でオタクもありという状況になる。そのルートを開いちゃえばいいんだって。悪者だな。

小林 日本のラブコメの中にある女々しさの美学みたいなものが、外国を洗脳していくスピードが速いのか。それとも逆に日本の若い女の子全員が、白人や黒人のほうがたくましくてカッコいいと、

向こうに全部なびいてしまい、日本人の男はすっかり取り残されて誰にも相手にされなくなるスピードが速いのか。その勝負になってきてるところがあるからさ。

岡田　僕は三年ぐらい前から、「女子どもにはわからん」という表現をあえて使っているんです（笑）。そろそろこれ、言っちゃっていいんじゃないかな。これまでは、女子どもがマーケティングの対象だったから絶対だめでした。だから僕は、オタク文化をあえて「女子どもにわからない世界」と定義して、自分の本にも「男中心のオタク文化」と書きました。実際その通りなんですよ。今のメディアは、女の子にしかわからない世界というのをうち立てて、それを全部オヤジたちにわからせようとする情報がずっと流れています。これには私たち負けますよ。洗脳される消費者の側にいるわけですから。

さっきの話で、女の子がみんな白人黒人がカッコよくて、日本人の男が取り残されるんだったら、これを切り離しちゃう。それで「俺たちにしかわからないやつ」を作るとかして、ターゲットをよそへ求めたほうが手っ取り早いんじゃないかと。私たちが目指すカッコよさというのは、今の日本の女の子を対象にするんじゃなくて、もう少し外。アジア諸国とか欧米でもいいですし、または年齢層の幅を広げるでもいいですけど、そのほうが戦略としてはありじゃないかなと。

小林　どうかね、そのへんは。それ、勝ち目あるのかね（笑）。いったい、女の子にふり回されているオヤジっていうのは何なの？

岡田　僕が見ている範囲では、サブカルチャーというものの解釈の、最終形態だと思うんですけども、「繁栄がいい、大量消費がいい、若いのがいい」って言ったら、もう女の子に行き着くしかな

いわけです。日本だけが先にポンと行き着いた。それで、オヤジさんたちが女の子的な感覚を消費のポイントにして、ここにもあり、あそこにもありと、どんどん自分たちで拡大解釈して売っていくんですよ。でも、それは限界だと思いますけどね。現にその最先端にいる女の子たちは、楽しそうじゃないですから。自分たちが流行をリードしているという楽しさもない。もしあったら、あんなに年がら年中、やることを変えないと思うんですよ。

小林　ある意味、オタク世代と言われる三十代は、やっぱり今のオタク的な気質を持っていてさ。そのオタク的な気質にロリコン的な気質も含まれているから、女子高校生あたりに相当ナメられてしまっている状況も、出てきているよね。

岡田　それは、その気質があってなおかつ頭下げるからだと思うんですよ。そんな女、買わなきゃいいんです。「何で俺が金出してまで、女としなくちゃいけねえんだよ」とまで言って、ちょうどバランス取れるんですよ。

小林　そこまで行ったやつだったらわかるけれどもね。

岡田　あえてこの五十年間我慢して、百年後の栄光を取る。まあその間にみんな死んじゃうんですけどね（笑）。うまくいきゃ、五十年かかんないですよ。

中途ハンパなオタクはだめだ

岡田　だいたい、今、オタクのやつが、オタク辞めてモテるかといったらそんなのありえない。モテるなんてことを目的にしちゃだめなんですよ。

小林　徹底的にオタクに徹してくれればいいんだけれどもね。

岡田　僕が見ている限り、「オタク」と「普通」の境目を行ったり来たりしてる人が、一番社会性がないですよ。そういうやつって、オタクから見るとなんかヘボいし、所詮どこかのオタク評論家みたいな人の言葉を焼き直して言っているだけ。あるときは小林さんの言っていることを鵜呑みにしてしゃべったり、またあるときは僕の言っていることを鵜呑みにしてしゃべってしまう、そういう連中がいっぱいいる。そんなやつのほうが、可能性ないなと思うんですよね。

小林　すっかりオタクのほうに行ってしまったやつのほうがいい？

岡田　ええ。そういうやつの言葉は、自分が反社会的であってもかまわないと思って積み上げたものだから、結構リアリティや重みがあるんです。でも、中途半端なところで妥協して世間様と合わせた言葉は、案外おもしろくならない（笑）。

小林　しかし、たとえば、岡田斗司夫とか竹内義和[014]とか、いわゆる自称オタクと言っている人間は、やっぱり商売うまいよ（笑）。で、たとえば、宅八郎[015]とかというのは商売下手だよ。

岡田　でも、あのほうが商売になりますよ。ただ宅さんの場合は、この商売全体がイメージ産業であって、それぞれが教祖になる一種の宗教であるというところまで行き着いちゃったんですよ。すると既存のシステムや信者たち自身が、過剰に「オタク＝狂気の演技」を求めてしまう。僕や竹内さんの場合は、過剰にオタクを演じなくても、素のままで大丈夫なんですよ。

小林　演じてるか、素のままかという勝負か。

岡田　べつにTシャツ着て、紙袋持たなくてもいいんです。俺、座りゃオタクだよ。座ってオタク、

014――――
竹内義和（たけうち・よしかず）
一九五五〜。作家、コラムニスト、出版プロデューサー。著書に『大映テレビの研究―不滅のテレビジャンキー』『格闘耳袋』、プロデュース作品に『特殊メイクの世界』『悪魔オカルト大全科』『SEX百科』など多数。

015――――
宅八郎（たく・はちろう）
一九六二〜。フリーライター。かつて「オタク評論家」として一世を風靡した。九五年頃に起きた小林よしのり氏とのオウム論争がきっかけで再び注目を集める。著書に『イカす！おたく天国』『処刑宣言』、共著に『オウム大論争』など。

立ってオタク。

小林　それはすごくわかるな。

岡田　ただ、竹内さんは、常識人たらんとしているんですよね。そこに僕は、竹内さんとのギャップを感じます。竹内さんは、オタクであることと常識人であることを、両立させるのがいいと考えていらっしゃるんです。そのへんは世代差があるんですけど、そんな常識人いらないって。それは常識じゃなくて、ものを考えりゃいいだけだよって。オタクであることと、ものを考えることが両立すれば、必要な常識なんか勝手に身につくし。

小林　岡田さんがオタクとしての売り方がうまいと言ったのは、要するに自分をどうプロモートしたらどう見られるか、どういう効果が跳ね返ってくるかっていうのを計算してるんだよね。でもそのためには、自分の外側にもうひとつ視点を持ってなきゃいけないわけじゃない。でも、オタクにはそれがないから、それは頭が悪いからです。

岡田　いや、それは頭が悪いからです。

小林　そうなの？

岡田　そうです、絶対そうです。

以前呉智英[016]さんが、みんながバカとか気違いという言葉を失ったとおっしゃっていて、僕はオタク問題の根本はそれだと思っているんです。オタクというのは、根源的には、たとえばいくつになってもアニメやマンガを見ているバカっぽい趣味なんですよ。そのバカっぽいサークルにはどんなやつがいるかというと、本当に頭が幼稚でロボットやアニメが好きなやつと（笑）、自分自身でも

016——
呉智英（くれ・ともふさ）
一九四六〜。評論家。儒教の思想に基づいた封建主義者を任ずる評論家。近代主義に対する根強い違和感から、「民主主義は近代が生んだ最大の迷妄」と主張する。マンガ評論も手がける。著書に『封建主義、その理論と情熱』『バカにつける薬』『現代マンガの全体像』など。

「やっぱアニメってくだらないかもな」とわかっていながら、それでも好きだというやつがいるんですよ。これをひとくくりにしちゃうと、「あえてロボットアニメが好きなやつ」っていうのは、過剰に世間を意識せざるをえないですね。だって、自分の趣味が幼稚だと自覚しているわけですから。そうなると、その中で一番煙たくなってくるのは、無自覚にロボットアニメが好きな幼稚なやつ。こういうやつらに対しては、本来はただ単に精神年齢が低いとか、バカだとか、与太郎だっていう言葉で済むはずなんですけれども、そういう言葉を民主主義教育で使えなくなってしまった。そんなオタク内サークルの差別用語は「オタク」なんですよ。「あいつはオタクだ」って幼稚な人たちをバカにして安心している。俺、それがいやなんですよ。幸せになるんだったら、切り離して幸せになるんじゃなくて、みんな一緒に幸せになったほうがいいじゃないですか。その中で、あえてバカはバカって言えばいいし、常識のないやつには常識ないと言えばいいだけであって。そいつらに、わざわざオタクという新語を作る必要はないんですよ。だってメタな社会から見ると、そいつらを含めて僕たちはオタクと呼ばれているわけですからね。切り離すことはできないんですよ。

小林　そうか。オタクの中にも階層があるのか。結局、いろいろいるってことなわけね。

岡田　はい。とくにオタクの人たちというのは、自分がどうかというのを説明するのが好きですよね。小林さんのところにも、ものすごい分量の便箋が来たら、だいたいそれはオタクですよね。過剰に説明が好きで、それも自分のことをわかってくれるまでやめない、という習性のやつらがいるんです。

小林　だろうね。たとえば薬害エイズをやりはじめると、薬害エイズのオタクが出てくるんよね。

誰が関わっていてとか、その全貌を調べて延々と手紙に書いて送ってくれるんだ。でも、そうやって知識を得ること自体をおもしろがっているやつが、やっぱり出てくるよね。

岡田 そのやつらって、役に立たないですか。

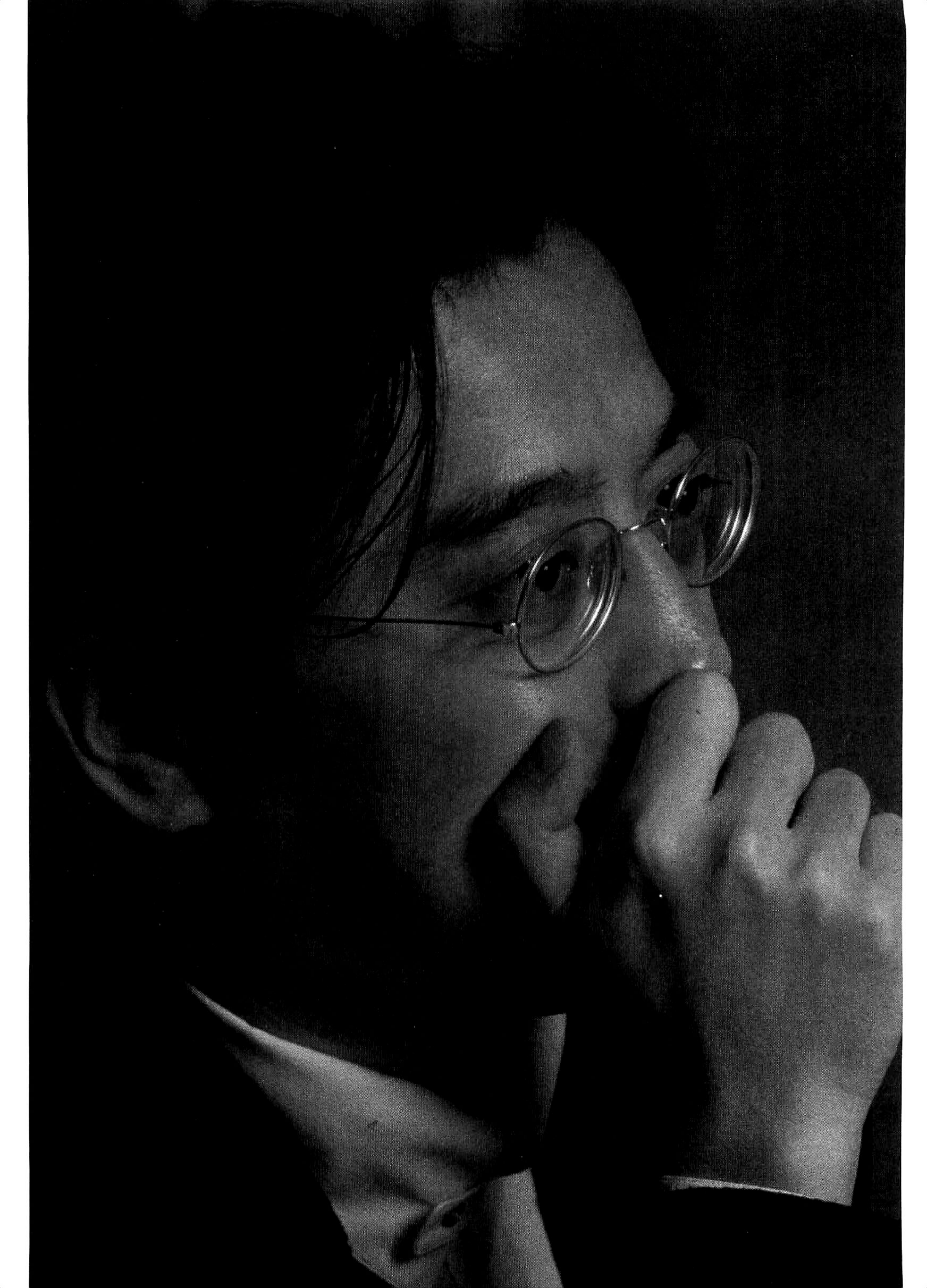
小林 役に立たないよ。

岡田 立たないですか（笑）。そうか。

小林 知識を与える場を用意すれば、彼らは一生懸命勉強するじゃない。関心持ってくれるだけでもという意味では、たしかにそれは役に立ってはいるんだ。集まれと言えば集まってくれたりもするし。でも、目的がそれていいるんじゃないかなって言いたいんだよね。

岡田 僕なんかはオタクの習性は利用するほうなんで、そういうやつらは研究職につけりゃいい。本来、学者なんてそんなやつらがやればいいんだし。「あんたら勉強好きなんだから、永遠に勉強してろ」と。それで、たとえば今さらマクロ経済学やるよりは、鉄腕アトムの研究して絶版マンガでも集めてろよっていうほうが、みなさんのお役に立つんじゃないですか。

小林 わしの役には立ちそうだね。

岡田 だから、オタクからの手紙って、聞いている限りはうっとうしいけれども、そういう生き方をやってるほうが、少なくとも世間の迷惑にはならない。研究だけしていて、コレクター的に抱えこんでしまって、実際に見せないやつのほうが難儀ですよ。

オタクの価値相対主義

小林 うちのスタッフにもオタクがいるよ。岡田さんの本もしっかり読みこんでるし、竹内義和の大映テレビの何とかいう本も持っている。怪獣から何から、マンガも昔の手塚治虫から全部揃えまくってるやつなんだけど、この男はすごく役に立つんだよ（笑）。今回の従軍慰安婦問題でも、謝罪派側がそれこそオタクのように、いろんな資料をどんどん分析して持ってくるわけだけど、こっちはそれにつき合う暇はない。だから、そのオタクの彼に「わしはこれ、絶対に戦争犯罪じゃなくて戦争冤罪だと思うから、君を戦争冤罪研究センターの所長にする」と言ってね（笑）。従軍慰安婦問題を徹底的に調べてくれと言っとったら、ものすごく調べる。もう、謝罪派の本すべてを読んでいくわけ。吉見義明の資料集から何から、全部に目を通すんだけど、膨大な知識を持ってしまって。

岡田 便利ですね（笑）。

小林 すごい便利。わしがテレビの討論番組に出ていくとき、彼をタクシーの横に乗せてパーッと出発するの。テレビ局に着くまでに、彼にどんどん質問して（笑）、その間に覚えていくんよ。

岡田 大統領の執務官みたいにブリーフィングあるわけですね。

小林 そのときに一気に覚えこんで、その知識でテレビの生番組に行くんだけど、やっぱりそいつはすごい。知識の量で戦うんだったら、おそらく吉見義明に勝つよ。ただ、パフォーマンスの部分とか、しゃべり方の部分での負けはあるだろうけど。

岡田 でもそれって、その彼が実際には、従軍慰安婦問題は結局どうなのかという価値判断を、ギ

リギリのところでしていないから、勝てるんじゃないんですか？　オタク特有の価値相対主義というのがあって、僕自身もそれなんです。でなければ、知識ってそんなに蓄えられない。信念があると他人の心情の本って読めませんから。どっちでもいいと思ってなきゃあんなに読めない。

　じつのところ、本当はどうでもいいんですよ。おもしろいのは、小林先生の戦争に加担している、軍師みたいな気楽な態度。つまり、作戦がうまくいきさえすれば、戦争に勝とうが負けようが関係ねえっていう。それがオタクの無責任なポジションなんですよ。

小林　どうなのかね。じつに楽しそうに勉強してるけどね。もし、あいつを向こうの謝罪派側に置いたら、ものすごい活躍をする恐れはあるな（笑）。

岡田　そういう、いやなやつですよ、オタクって（笑）。信義がないですよ。

小林　なるほどね。優秀なオタクを見つけておかなあかんね（笑）。

岡田　何人かストックしておくといいです。でも三人以上いるとうっとうしい（笑）。

小林　一人で十分だね（笑）。

岡田　僕がオウムをまったく他人ごとに思えないのは、この相対主義というスタンスなんです。これがオウムみたいになりやすい。正直言って、オタクの人って常に判断を預ける人間を探しているんですよ。大きな流れとしては、ある時期は宮崎駿[017]みたいな人だったりもするし、オウムもそれに含まれると思うし。またある時期は『別冊宝島』みたいなのがルートを開いた、オカルトっぽい価値観もあるし。特定の個人じゃなくても、いろいろなものや時代の流れなどに、ついつい無批判に考えをポンと預けてしまって、価値判断を任せてしまう。その中で勝手に勉強して、「どっちもあ

017

宮崎駿（みやざき・はやお）

一九四一〜。アニメーション作家。六三年に東映動画部に入社、その後数社を経てフリー、アニメ制作事務所を設立。数々のヒット作品を生みつづけ、九七年の『もののけ姫』は空前のヒットとなった。代表作に『風の谷のナウシカ』『となりのトトロ』など。

るよね」と言いながら、いつの間にか時代にグイグイ押しつけてる悪い癖があるんですよ。

僕もそうなんです。これはどうしようもないんですけれどもね。ただ、今はこの相対主義を「手段」として使いこなしていない、エセ相対主義者が多い。だから相対主義が誤解されると思うんですけれども。つまり、何かを選ぶとき、できるだけ偏見をなくそうという手段なわけです。消費者がたくさんあるラーメンの中からひとつを選ぶとき、もちろんそれは価値相対で選ぶわけですよ。それと同じように、言論や思想に関しても、選ぶための相対主義のはずなんですよ。あとから自分で構築するために、一回リセットしましょうというだけの思想ですから。ところが、このリセットボタンを押しっぱなしにしていたら、何も作れないんですよ。ツールとして使いこなせない人というのは、押したままにしてるんです。それを押せば負けないのはわかっているから。相対主義って、絶対負けない思想なんですが、勝てない思想でもあるんですよ（笑）。だから貧乏くさい討論になっちゃうんですよね。

小林　たしかに、こっちが絶対だって言えなくなっちゃうからな。

岡田　だから、情の部分でホロッときちゃったり、強力な教祖が出てきたらコロッといってしまうというのは、その相対主義でずーっと通せるほど心の強い人が、あまりいないということなんですね。そんなに、すべてのものを相対として見られるはずがないですよ。

豊かな世代の動かし方

岡田　メディア・リテラシーに話を戻しますと、僕自身、二年ほど前から大だまし戦争というのを

やっていまして。「オタクというのは海外では評価を得ているんだ」という大ボラ話が、どこまで通用するかなと思って意識的にまいていたら、結構いけるんですよ。今、みんな相当信じてますが、あれは僕が作ったホラですから。針小棒大だから針はあるけど、でも針程度。

小林　でも、かなりいろいろと報道されてたよね。

岡田　僕がそれをやって得た感触は、メディアというのはコントロール可能で、みんながこれをやっているのに、全然やっていない人や知らない人もいっぱいいる、ということなんです。僕たちの常識というのは、人権思想にしろ何にしろ、たとえば僕みたいに意識的にやっていればいいですが、無意識も含めていろいろな仕掛けの上に乗っかってできているわけじゃないですか。なのに、それを知らないのは不利だし、相手を知らないでだますゲームというのは、もうあまりおもしろくねえよなって。だから、僕はこの仕掛けをバラしちゃって、もともと日本ではすごくネガティブだった「オタク」という言葉を、ある程度ポジティブなところへ持ってくるのに成功した。まあセコイですけどね。

小林さんの場合、エイズの薬害運動では仕掛けられる側で、今回の従軍慰安婦問題に関しては仕掛ける側ですよね。つまり、意図的な洗脳の被害者の側であり、加害者の側であると。僕の場合は、数年前の宮崎事件[018]によるオタクバッシングで長年被害者だったから、これぐらい返してもいいやと思って返した。じゃあ、そういうことをわざとやった者同士、話ができるかなと思ったんです。

小林　なるほどね、そうか。わしは、マスメディアに対する懐疑の念っていうのは、おそらくこの慰安婦問題をひっくり返してしまったら、相当に鍛えられると思っているんだよな。だってオウム

018――
宮崎事件
八八年から八九年にかけ、埼玉、東京で四人の幼女が犠牲になった連続幼女誘拐殺人事件。犯人の宮崎勤はホラービデオやロリコンビデオのマニアで、公開された彼の部屋の様子などから「オタク」の犯罪として、大きな波紋を呼んだ。九七年に東京地裁は死刑判決を言い渡し、現在控訴中。

のときも薬害エイズのときも、ひっくり返すのは無理だって言われてたよ、ずっと。

岡田 僕がオタクに関していけるなと思ったのは、マスメディアを動かすにはいくつかの仕掛け、スイッチがあって、それ以外のところを押しても無駄なんです。僕が押したのは「オタク文化の海外評価」というもので、これは結構、効きがいいんですよ。

小林 なるほど、外圧から来るわけね。

岡田 はい。それで、今回の教科書問題に関するスイッチはどのへんですか。謝ってばかりはカッコ悪いというあたりなんでしょうか。

小林 たぶん、沈黙している多数はすでにスイッチ入ってるんだが、マスコミを通して出てくる声がうるさいんだ。わしの『おぼっちゃまくん』の読者で、連載当時小学四、五年生ぐらいから中学二年生ぐらいの世代は、今はもう二十歳前後になっているんだけど、彼らの中には感覚が違うのもいると思う。まず、謝って自分を誠実に見せることがカッコいいって感性はないわけでしょう。

岡田 小林さんのマンガを読んで育った人というのは、基本的に文明とか繁栄というものに対して、非常に肯定的ですよね。かわいそうな人に謝るというのは、繁栄に対する後ろめたさがないとできないですよ。少なくとも、『おぼっちゃまくん』を読んでたら、そういう後ろめたさって持ってないですよ。

小林 なるほど。『おぼっちゃまくん』をちゃんと読んでくれてたらね。

岡田 さらにそのあと、『少年ジャンプ』が連続攻撃で出してきたラブコメや格闘もののマンガ群、あそこらへんには繁栄に対する批判みたいなものが、一切含まれていなかった。そこに、八〇年代

の『少年ジャンプ』の強さがあったと思うんですよ。

小林　まず豊かであることが前提になってしまっていて、何の罪悪感もなくそれを受け入れるんだったら、すごいけどね。

岡田　逆に、貧乏が前提の世代にとっては、豊かな自分というのが虚構に見えるわけです。彼らの中には「お前ら、いざというときどうするんだ」って言い方をする人がいるけど、その「いざ」とは、貧乏になったときのことなんですよ。「お前らそんなボンヤリ生きてるけど、貧乏になったらどうすんだ」って。その貧乏はありえないのに、それが本来のポジションだと言ってしまう。

ところが、今の十代から二十代前半の人たちはすでに繁栄が前提なので、繁栄を前提として謝るのか謝らないのか、という考え方だと思うんですよ。だから、それにコンプレックスを持てと言っても、それはピントはずれですよ。「俺たちは豊かで彼らは貧乏だから悪いと思え」と言われても、思えないですよ。

小林　なるほどな。貧乏が前提のやつが罪悪感を持つってか。大月隆寛[019]が、高度経済成長を語る言葉というのがないとか言ってたけど。もし、豊かなのはまったく当然だと揺るぎなく信じこんでいたら、豊かを持続するために謝罪とか、自虐したふりをして儲けねばならないんだとか言われても、ピンと来ないだろうね。

岡田　おそらく豊かというのは、システムが全部できていることですよね。じゃあ、豊かな時代の自虐とかコンプレックスというのは「お前がいなくても代わりはいる」とか「お前は必要な社会のパーツじゃない」ということだ思うんですよ。だから「お前が動けば社会が動くぞ。このシステム

019——
大月隆寛（おおつき・たかひろ）
一九五九〜。民俗学者。宗教、政治、マンガなど幅広いテーマで評論活動を行なう。テレビ番組の司会なども務める。著書に『厩舎物語』『もの書きがTVに出るということ』など。

が変わるんだぞ」という、薬害エイズのときのような動かし方でチョンと突いたら、スッと動くのかなと。つまり、それが豊かな世代の動かし方ですよね。「いつ貧乏になるかわからないぞ」というボタンを押しても動かないけど、「お前がいる意味はじつはあるんだ」というボタンにはみんなすごい敏感ですよ。

小林 なるほどね。これは『新ゴーマニズム宣言』の四巻にも書いたけどね。五年ぐらい前の講演で、『おぼっちゃまくん』のファンだという、小学五年生の女の子にサインをしてやった。その子が最近電話かけてきたんだけど、今は高校一年生になったんだって。で、中学のときから『ゴーマニズム宣言』を読んでいて、『おぼっちゃまくん』『ゴーマニズム宣言』と入ってきているわけよね。それとか、今、読者から送られてくる手紙でも、プリクラ貼った女子高校生なんかがどんどん入ってきつつあるんだよね。その子たちは、わしとしては意識がすでに違っているというか。

岡田 男の場合、「システムが変わるぞ」というほうでまだ動くんです。それが微妙ではあっても、自分が社会やシステムを動かせるんだという確信が見つかるまで、永遠に元気がなくダラダラと生きることはある（笑）。でも女の子はもっと冷めてるから、システムが変わることにリアリティを持ちえないんです。彼女たちのリアリティは「そんなことしたって就職できないんだし」とか「あんないいこと言われても総合職は追いだされるんだし」といった、自分はいてもいなくてもいい存在だというところにある。となると、今あるネットワークのようなものが自分の存在理由だと、どうしてもなっていきますよね。人と人とのつながりを確認するだけの産業のほうに、過剰に行かざるをえない。

『ゴーマニズム宣言』は宗教だ

小林　人と人とのつながりと言えば、結局共通の言語がなくなってしまっているからね。『ゴーマニズム宣言』というのは、その中で使用されている言葉とか語り口みたいなものが、読者を結びつける言語になってしまっていて、その共同体というのが、もうでき上がってしまっているんだよね。

若い読者には、共通の言語というのが親との間にもないし、クラスの友だちとの間にもなかなかないんだと思うんよ。今はプリクラであるとか写真機をいつも持ってて、誰とでも一生懸命撮ってその写真をいっぱいストックしているけれど、あれはつまり言葉の代わりなんであって、言葉でつながっているわけじゃない。じゃあ自分自身の存在を取りまく社会を、どんな言葉で語ればいいんだって言ったら、その言葉を与えてくれる人が世の中にいないんだよね。そこで『ゴーマニズム宣言』を見たときに、この言葉だとすごくわかると。さらにこの言葉でつながっている人たちがずいぶんたくさんいるみたいだと感じて、その言葉の共同体に入りこんできているというのかな。オタクの場合でもオタク文化の中のいろんなアイテムで語られる共同体の中にいて、充足感を得ているんだろうし。ある意味、それが三十代ぐらいの共通言語だったのかもしれないけれどもね。『ゴーマニズム宣言』も、そういう言葉の共同体になってしまっているところがあるから、そういう部分でも、わしはそんな勝手にやめられないんだよね。

岡田　つまり僕がやっていることも小林さんの『ゴーマニズム宣言』も、そういう人々のコミュニケーションツールに使われて、アイデンティティーのもとになっているということですよね。それ

はすなわち宗教ってことですよね。

小林　まあ、そうだね。

岡田　僕はそれ、全然悪くないと思います。宗教から離れられるものなら、この三千年で離れてみろと思いますね。言葉と宗教はくっついているものですから、人間が言語を持っている限り、必ず宗教はあります。でも参加している人たちは「これは宗教だ」と気づいているんでしょうか。気がつかなくてもいいのかもわからないけど、僕は「君たちが岡田斗司夫をアイデンティファイして話している限り、それは僕の宗教に属しているわけだから、お布施を払っていただきます」と言いますよ。

小林　最近、大月隆寛が「新しい教科書をつくる会」のシンポジウムに来た人たちを取材して回ったら、若い子たちはやっぱり、『ゴーマニズム宣言』から入ってきたというのが多いらしいんだ。その中に宮古島に住んでいる女の子がいて、彼女は「小林よしのりがサリンをまけと言ったら、私はまく」と言っているらしい（笑）。

岡田　それぐらいのやつがいなきゃ、つまらないですね（笑）。

小林　何ていうか、「宗教だってべつにいい」と言って選択する、そういう居直りができるぐらいまで、読者の思考そのものが複雑になってきていると思うよ。それはわしが金日成にたとえながら、カリスマと言われはじめた自分を相対化するマンガやら何やらをさんざん描いてきて、それを全部読んでしまった読者は、わしがマンガで「うちのスタッフはサリンまかないと言っているよ」と描いても、「それでも私はまく」と。そういうやつまで出てきちゃったわけだから。それは、もう承

知しているけど、でもあえてそう言ったほうが自分でもおもしろい、という選択をしているんじゃないかなと思うけどね。

エンターテインメントはもういらない

岡田　以前、東大の僕のゼミで小林さんに対談していただいたときに、「もうマンガはいいじゃないですか。エンターテインメントなんか捨てて、行っちゃえ行っちゃえ」って言ったんですよね。

小林　わし、あんなふうに言われたの、初めてなんよ。みんなに「とにかくやめろ、物語に戻れ。物語がお前の日常だろうが」って言われ続けてきて。「やめる必要ない」と言ったのは、西部邁と岡田斗司夫しかいない（笑）。

岡田　うわ、そうなんですか（笑）。僕、あのときにかなり不遜なことを言ってしまったんですが、本当は物語の世界を描いてくれていたほうが、僕はライバルが少なくて済むんです。このことに関して自覚しているやつって、おそらく日本に五人もいないはずであって、小林さんはその一人じゃないかなと。俺はそっちに行こうと思っているから、将来思いっきりぶつかる可能性があるんですよ（笑）。そのときは宗教戦争になって、本当にサリンの世界になっちゃいます（笑）。ただ、そういうやつらが何人かいないと、もう、おもしろくなりようがないというか。

エンターテインメントはもういいというのは、僕は、おもしろさっていうのを否定しているからなんです。現実社会がこんなに崩れちゃったら、その現実をもう一回物語化して語るしかないですよね。だから今はしょうがなく、政治家の汚職とか芸能人のスキャンダルなんかを、まるでギリシ

ャ神話みたいに語っているわけですよ。「いやいや、それはヘレナが嫉妬して……」とか「太陽神アポロンが……」というのと同じ。宗教がない時代のローマ市民は、あんなことを語るしかなかったわけです。やっぱり人間には何かが必要なわけで、じゃあ、宗教のほうへ行ってしまったほうがおもしれえよって。そうか、西部さんも同じことを言ってるか。でも西部さんはきっと、俺のライバルを育てようとかじゃなくて、ともに戦いましょうだと思うんですけれども（笑）。

小林　どういうつもりなのかな。

岡田　これ以上、あやつらにおもしろいもの与えてどうするんですか。今の状況下、フィクションでおもしろいものなんて、おいしいたこやき屋を開くのと同じくらい意味がない。おいしいものよりは体にいいものを、という流れと同じように、体にいいもの、みんなの頭にいいものを作ったほうがいいですよ。

小林　なるほどね、そうか。

岡田　小林さんの場合は「職業＝小林よしのり」で、マンガはツールに見えるんですよ。まず「小林よしのり」が描いているというのがあって、その上で今回の話は何だろうと。

小林　大人はそうかもしれないけど、子どもは違うでしょう。

岡田　もう、子どもは切っていいですよ。女子どもは切る（笑）。女子どもがターゲットっていうのは平成以前ですよ。

小林　なるほどね。わしはそこのところに、すごく分離した感覚がある。やっぱり、自分が手塚治虫とかに育てられてるじゃない。子どもの憧れがマンガだった、その恩恵みたいなものに、ものす

ごく感謝しているから、それをちゃんと継承しないと、すごく罪悪感が芽生えるところがある。

岡田 いや、もう今は継承したあとです。これ以上は、ジュースに砂糖を溶かすようなものです。

小林 継承したあと（笑）。なるほどね、そうか。

岡田 小林さんが、もし今『少年ジャンプ』で連載したら、一人、あの雑誌の枠からはずれるわけですよね。だからもういいと、本当に思いますけどね。新人のマンガ家だったら別ですけれど、今、小林さんがマンガの文化を豊かにする必要は、僕はやっぱり感じないですよね。

今のマンガの文化というのは、基本的に二十代のやつが頑張って、三十代が発展させるという構造ですよね。この二十年間、その構造だけは変わっていないので、もう三十代終わったら「俺は恩返ししたから、若いお前らがマンガを発展させなさい。俺は俺でやることがあるから」と言っていいんじゃないのかな。その上で、マンガの可能性をほかの人たちに見せるだけでいいと思います。小林さんって、弱気になるとマンガ家というクリエイターのほうへコソコソッと逃げて（笑）。

小林 弱気になるとね。

岡田 強気になるとガーッと出るという（笑）。

小林 そうなのかなあ。なるほど（笑）。ほお、そうか（笑）。

岡田 小林さんの場合は、マンガの中に入っている情念がバクハツしさえすれば、マンガという不自由なツールを使っても、ここまでできるというのが武器ですから。情念をファイヤーさせて世に出られるんだったら出たほうがいいし、弱気になってコソコソしたいときはマンガ描くのもよし。でもそれは、老後の楽しみのためにとっておいたらどうですか（笑）。

小林　なるほどね。そんなこと言われたの、初めてだよ（笑）。

日本征服宣言

岡田　僕は、ツールとして『ゴーマニズム宣言』が出てきたとき「吉本隆明[020]どうするんだ」って思ったんですよ。「今からお前、マンガの勉強しろ」って（笑）。僕はあのときに初めて「マンガ家になりたい」と強く思ったんです。それは今の従軍慰安婦問題でも、論理性がある説得なんて、みんな聞かないわけですよね。聞きたいものを聞きたい順番で、どういうふうにプレゼンテーションするのかを待っている状態で、情報を咀嚼する顎の力がすごく弱くなっているわけです。僕らの世代はまだ活字に対する信仰はあるほうだけれど、たとえば漢詩に対する信仰とか、シェークスピアの引用に対する信仰みたいなものはありません。

それと同じように、若いやつらは活字に対する信仰はないけど、マンガみたいな表現形式とか、キャラクター化に対する信仰はあると思うんですね。だったら西部も吉本も今からマンガの勉強をして、五年後ぐらいに生き残ることを何とか考えないと、ヤバイんじゃないかと思っているわけなんですよ。『ゴーマニズム宣言』の、考えていることをマンガに描いて、イベントにして、自分をキャラクター化する手法、というか、思想ですね。あれはイケまっせ。

小林　なるほど。乗せ方が最高にうまいな。

岡田　それに、これまで、マンガ家から大人になる道っていうのを、誰一人提示していないじゃないですか。マンガ家のまま死んじゃった人ばっかりでしょう。マンガというところからカッコいい

020——
吉本隆明（よしもと・たかあき）
一九二四〜。詩人、思想家。戦後最大の新左翼の理論的指導者。近代日本文化は西欧の借りもので、日本の大衆をとらえ損なっていると批判。独自の思想を生み出そうとする姿勢は、六〇〜七〇年代の若者に大きな影響を及ぼした。八〇年代以降は「現在とは何か」をめぐり『空虚としての主題』『マス・イメージ論』などを発表、サブカルチャー全般に対しても考察を重ねる。

男像みたいなのを見せてくれないから、マンガに対する憧れは何となくあるけど、マンガ家という職業への憧れは持ちにくい。つまりオタクの人も、それと同時に一家の主であり、会社員でありとかいう属性を求められるのと同じように、マンガ家と同時に社会人でもあるという属性が、求められるはずなんです。ところがそこはクリエイターの聖域というやつで、愚かな人間でもいいという感覚があるじゃないですか。もうそれは、なくしてしまって大丈夫なんじゃないですか。一般社会のど真ん中に来て大丈夫。選挙出ましょうよ、とは言いませんが（笑）。

小林　まあ、そりゃたしかだ。

岡田　この年になって、田植えしているばあちゃんに頭下げたくねえっスよ（笑）。

小林　うん、ないない（笑）。

岡田　それで栄耀栄華が保証されるんだったら、いくらでも田んぼに出て土下座しますけど（笑）。

小林　何でも言うなあ（笑）。

岡田　ともに日本を征服しましょう。小林さんは九州のほうをどうぞ。オレ関西に行きますから（笑）。いや、その前に連合国軍を作ろう（笑）。だって基本的に価値相対だから、オタク文化が世界を全部一色で塗るとは、どうしても考えにくい。濃いやつは心の中の八〇パーセントまでがオタク文化だけど、薄いやつはそれが一パーセントぐらいでもいい。それが世界人口の中に緩やかに分布しているというのが、私の望んでいる繁栄の姿です。

小林　こういうふうに言う人いないんだよ。初めて出てきた（笑）。この前の講義で初めて聞いて、どう対処していいものか、わからないような。

岡田　どれぐらい、こいつは本気で言っているんだろうかと。

小林　あきれた意見なんだよ。「ほお、そんなこと言う人間がおるのか」と思って。

クリエイターの時代は終わった

岡田　私がこう言ってしまえるベースというのは、ものを作る時代はとうとう終わっちゃった。もうクリエイターは終わったと思っているからなんです。

小林　ええ⁉　そこまで言うのか。

岡田　だって今、二十五歳以下で、クリエイターっていないじゃないですか。絶滅するんですよ。ここにいれば私たちは住みにくくなりますよ。十九世紀から二十世紀型文明の頂点として、創造者が頂点だというのはあったんですけれども、十年前くらいに崩れたという感触があったんですよね。

小林　たしかにクリエイターが一番だとか絶対だっていうのは、もう信仰だよね。信仰となるほどに普遍的な、みんなの中の観念だよね。

岡田　そのクリエイトされたものが、今は単なるコミュニケーションツールに堕ちつつありますよね。歌はうたいやすい歌。言説は、流行しやすい言説。言論も、コピーしやすくて、みんなが自分の言葉として言いやすいものでなければ流通しない。そうなってしまった以上、発言者が絶対であるという信仰は、ものすごい勢いで崩れていきます。私たちはその変化の真っただ中で、揺さぶられているのかなという気がします。

小林　なるほどね。それだったら一番最初の頃、『ゴーマニズム宣言』を描きはじめるとき、物語

に戻れとか何とか言われて、現実を物語化すること自体をやってみると言ったわしの意見は……。

岡田　それが一番の正解だと思います。虚構の物語は今あるもののアレンジだけで、あと千年はいけますから、このバリエーションがあれば大丈夫です。あとは、ネットワークや同人誌などが増えれば増えるほど、プロが商業ベースでやっている物語の意味がどんどん薄らいでいくと思いますね。

小林　プロとアマチュアの境はたしかになくなってきてるけど、それはプロがサボってるからとか、力がなくなってきたからと思っていたんだけど。プロが創造するもののパターンが出尽くしちゃったってこと？

岡田　それもあるし、プロでサボっているやつとアマで頑張っているやつが、完全に逆転してしまったんですね。これまでは、プロになるにはいろいろなことを我慢した上で、やっと作品の発表ができたわけですよね。でも今は我慢なしに発表する形態が、ホームページだ同人誌だと、ものすごい数で出てきてしまった。すると、ドロップアウトじゃないんですが、プロの中から次々とプロとアマの中間になる人も現われてくるんですね。こうなってしまうと、クリエイトというものに関する特殊性がなくなるんです。昔はマンガ家や小説家になるといえば、平凡な人生を全部捨てなきゃいけなかったのに、今はとんでもないことに、地方公務員しながらできるじゃないですか（笑）。

　さらにマンガの種類がすごく増えちゃったおかげで、千人の支持者がいれば何とか食える状況になってきたんです。そうなると、プロのマンガ家である利点、つまり作品発表の場が持てる、商業作品として発表できるということが、そう重要でもなくなる。だから今、コミケ[021]とかで描いているやつは「商業誌はどうせ好きなもの描けないからいやです」と言いますよ。かつて同人誌で描いて

021
コミケ
「コミックマーケット」の略。日本で開催される同人誌の即売会で、最も大きいイベント。マンガだけでなく、旅行エッセイや硬派な社会評論、缶コーヒーの目録、現役官僚による霞ヶ関批判……など、売買される本の種類だけでも、十万種は下らない。アニメやゲームのキャラクターの衣装で会場に集うコスプレーヤーも、話題のひとつ。夏と冬の年二回開かれる。

るのは、商業誌では勝負できない、内輪うけのマンガしか描けない、ネガティブなやつらのものだというイメージがありましたよね。でも今はそんな解釈は通用しないほど、そいつらの人数が莫大に増えちゃったわけです。今年の夏のコミケなんて五十万人ですよ。

小林 ほんと？

岡田 コミケだけで五十万人、そのほかにも週に一回の割合で、日本のどこかで似たようなイベントが開かれていますから、通算すれば日本国民の何パーセントという結構巨大な数が、それ目がけて動いている。それだけのマスの人間が自閉的であるわけがないですよ。そのぶんだけ商業誌の部数はどんどん減っていく。

小林 たしかに『ゴーマニズム宣言』をやっていると、前は学者というのは相当なものだと思っていたのが、じつは全然たいしたことないなと思う局面が、どんどん出てきた。今回なんかそれこそ、まるっきしのオタクにすぎないうちの若いスタッフに、従軍慰安婦について調べさせたら、謝罪側の権威の吉見義明だって打ち破れるほどの知識がついちゃうからね。向こう側を学者としてのプロだとするんだったら、アマチュアでも勝てる状態になっている。もしかすると、学者とか論壇とかの「権威」と言われているものも、ひょっとすると……。つまり、素人の水準がかなり上がってしまっているんだよね。

岡田 小林さんがマンガの中で描いている「テレビの情報操作にはごまかされない観客が増えている」というのは、すなわちアマチュアのレベルの上昇ですよね。逆に、それがバレる番組しか作れないというのが、プロのレベルの低下ですよね。

小林　なるほど、そうだよね。たしかに、金曜日に『朝まで生テレビ』に出て、自分が謝罪派側の仕掛けの中に突入していってしまって、これは何なんだって惑わされてしまったとするじゃない。でも、月曜日になるとそれを全部見破っている読者から、たちまちドーンと手紙が来るもんね。その手紙を見ると「ああ、そうだったのか、そうだったのか」となってしまうし。そういう読者は文章のレベルも、ものすごく高いんよ。でも手紙を出してくるのは、本当にこっちがピンチになったときだけなんよね。どうも、わしが困っているみたいだって見えると、ダーッと来るんよね。それ以外の人たちは自分勝手な思いをどんどん書いて、自分のコミュニケーションの手段として利用しているだけみたいだから、そのときに思い知らされるけどね。「うわ、こんなやつがいるのか」って。

僕らは利益代表者

岡田　僕は、小林よしのりという人間は、「小林よしのり」という思想集団がいて、その利益代表者にすぎないのではないかと思っているんですね。アメリカの大統領は、アメリカ国家の利益代表者なんですよね。僕は自分を「オタク」の利益代表者だと思っているんですよ。だからオタクの人からクレームが来れば、自分の考え方を平気で変えるんです。オタクにとって有利であるようなことをするのが僕の仕事で、オタクを利用して有名になろうっていうんじゃないんですよ。その仕事をちゃんとやっていれば、僕のところに幸せが返ってくるような仕掛けになっていると、信じているんです。

小林さんのところに、いい読者から手紙が来るということは、その人たちの心の中である程度の

パーセンテージでバーチャルな小林さんが運動しているわけですよね。その心の中の小林さんが手紙を書くわけですよ、「オレ小林」はこう言っていると。小林さんはその手紙を見て「そりゃ気ィつかんかったな」って自分の考え方を変える。つまり小林さんは『ゴーマニズム宣言』を通じて、小林さん的な思想の利益代表者としてそこに座っている。その人をカリスマと呼ぶだけであって。

小林　なるほどね。大月隆寛が『新ゴーマニズム宣言』の三巻を見て、相当衝撃を受けたらしく、「これはもう、小林よしのりのユニットになっている。こんなものを相手にするっていうのが、気が知れない」ってビックリしてたけど。

岡田　だから、最終的に小林さんも僕も、「あれは小林教だ」とか「岡田教だ」って言われると思うんですよ。そのときの反論として準備しているのが、「僕は、岡田斗司夫的なものの考え方の利益代表者にすぎない。僕以上のやつがいれば座を譲るし、自分は利益代表として、みんなの意見を取りまとめて最大限の幸福のために動くという、あんたたちが好きな民主主義そのものをやっているだけです。ただシステムに乗っていないだけです」と。

小林　それはわしも、抗議がいっぱい来るときは、そういうふうに書いたわ。わしに向かって連載を中止しろだの（笑）、わしが読者を洗脳していると抗議が来るんだけど、連載さえやめれば、読者が洗脳から解かれるはずだと思いこんでいるんだよ。となると、「これはわしに対して言っているんじゃなくて、わしの読者をバカにしている」、そう書いたんだよね。結局、読者が洗脳されているのではない。もしわしが、読者の考えに背くようなことばかり書けば、当然読者は逃げていく。そうするとわしは食えなくなってしまうんだから。

岡田　たとえば選挙で選ばれるといっても、二年に一回でしょう。小林さんの場合は隔週の雑誌だから、ひと月に二回選挙がある状況で、売れるか売れないかを常に判断されているんですよね。

小林　こっちは売れるようにしか描けないからな。反響を見れば、「ああ、これは受けてるんだ」とか、「これはだめなんだな」とかはっきりわかっちゃうわけだから。だから日常に戻れだの、物語の世界に戻れだのいろいろ言われるときは、わしの客、つまり読者そのものをただ取っていけばいいじゃないかと思うよ。いつでも取ってくれていいんだから。

岡田　分散型の国家になったんだから、みんなが国民を取り合えばいいんです。俺はとにかくみんなから税金を集めるシステムを確立して、自国民を養成して、強くして、さらに国民を増やすということをやっているだけだから。

思想家は絶滅した

岡田　さっきのプロとアマの話で言うと、カリスマというのはプロではないんです。それはツールなんですよ、みんなにとっての。みんな、一人でものを考えられなくて、何人かの意見を頭の中で合成するのが限度なんですよ。そうではない、自分の考えというのがオリジナリティ信仰であって、これの頂点にあるのがクリエイター信仰なんですけど。

今はみんな、自分一人でものを考えるんじゃなくて、本を読んだりいろんな人の考えを聞いたりして、頭の中でそれを組み合わせてコーディネートするしかできないわけです。そうなってくると、自分の中にカリスマが何種類かいて、そのバランスがいいか悪いかの問題になってくるんです。だ

から、小林さんと宅八郎さんの両方のファンであるということが、容易にできるようになるんですよ。それは自分の中の配置の問題で、部屋の中にコントラストとして、クロとシロを配置するようなものですよ。その幅をどれだけ取れるかですね。部屋の中に岡田斗司夫しかいないような人は、ほかの人から見てたぶん相当偏狭な人なんです。そうじゃなくて、そこに何人いるのか、そのバリエーションがどれだけあるのか。小林さんと宅さんしかいなかったら、それはそれでコントラストは取れているんですが、コーディネートする趣味が変ですよね。じゃあ、自分らしい調和の取れた部屋を作るとか、ファッションと同じで、ひとつのブランドで統一するんじゃなくて、全部パーツで揃えて、色に気を使うのと同じように、思想的にどれだけのカリスマが頭の中に配列されているのかというところで、みんな考えていますよね。

小林　そのへん、考えているのかね。

岡田　それが、現代の「知的であること」の上限なんですよ。知的以下はというと、小林よしのりが好きか嫌いかで導入しているわけです。現在の知的の上限は、たぶん、誰かの言論というのを組み合わせている人だと思います。僕はそれを、現代の思想家の方々に会ったり本を読んだりして、痛感しました。思想家っていないんです。絶滅品種なんですよ（笑）。どうも百年ほど前に絶滅しちゃったみたいですね。代弁屋さんみたいな人はいますけど。なぜかと言うと、彼らはものを考えずに、先に本を読んじゃってそれの組み合わせでしか考えられなくなっている。悪い癖ですよね（笑）。思想家は本を読むなって思うんですけど。本棚取ったら成立しないような人しか、残らなくなっちゃったんですよ。

小林　やたら知識仕込んでも、バカはバカだもんな。

岡田　こわい。というか、ひどいこと言ってます（笑）。まあそういう時代の中で、僕はみんなのツールのひとつになればいいかと思っているんですけどね。一色に染めようとすると、独裁者や宗教家になっちゃうけど、間接政治を増やしたりして人数を増やせばいいだけだから。

小林　マルクス主義みたいな思想的なものが全部潰れてしまって、それ以降は何もないわけだから。

岡田　今の思想家がやっていることは、社会現象を思想界の用語で言うだけの、当てはめ屋さんでしょう。そんなの思想家であるはずがないですよ。マルクスに謝れってやつですよね。僕は浅羽通明さん[022]が一時期名乗っていた「思考代行業」というのが気に入ってまして、これはいい職業ですよ。「あなたの代わりにものを考えまーす」という（笑）。

小林　だから、いわゆる知識人と呼ばれる人たちが書いたものを読んでも、納得しないのかもしれないね。たとえばクローンというテーマに対して「それにはこういう考えもある、ああいう考えもある、さらには……」と知識をバーッと披露していく。読み手は「そりゃああるだろうね、あるだろうね、だから何？」って最後のところを見ると、何も新しいものは提示されていない。「だから今後もいろいろな問題は絶えないであろう」みたいに終わっちゃう。「何なんだ、これは？　何が書いてあったんだ？」となるわけよ。俺ならこんなに知識を披露しなくても、自分勝手に書けると思うもの。

岡田　思想のプロのレベルが下がってきて、アマチュアのレベルが上がってしまったんですね。完全に逆転している。

022 ――
浅羽通明（あさば・みちあき）
一九五九〜。評論家。文化ネットワーク「みえない大学本舗」主宰者。「オタク世代」を代表する評論家の一人。『ニセ学生マニュアル』で話題を集める。言論が「活字もしくは電波という制度」に規定されるのを嫌い、プライベートペーパー『流行神』を発行、時間問題からサブカルチャーまで、さまざまなテーマについて、直接読者と論じ合う活動も展開している。

小林　ものを知っているというよりは、いろいろな人物、今なら岡田斗司夫とか小林よしのりという人間のコラージュが知的というわけ?

岡田　そうです。たぶん僕自身も今まで読んできた人の影響を強く受けて、そうなっているはずです。もうスタイルとしてばれないようにしていますけど(笑)。

小林　なるほどね。そんな状況なのか。でも、それはありうるよね。

岡田　たぶん僕と同世代、あるいはそれ以下の人たちは、必要以上に小林さんに近づくのを恐れているんですよ。「小林派」と呼ばれることに対する恐れがあるんです。彼らは他人にレッテルを貼りたがるくせに、自分にはレッテルを貼られたくないと思っている、根性なしのやつが多いんですよ。思想家ポジショニングマップみたいなものを作りたがるのに、その中に自分を入れないでおこうとする。

小林　ああ、なるほど。それは見ていて感じるね、たしかに。

岡田　でも、何かをするときには、立場を表明せざるをえないですよね。だから、大月さんみたいな根性がなかなか出ないんですよ。

小林　たとえば湾岸戦争のときに、文筆家が自分の立場を表明して、すごく恥をかいてしまったじゃない。あれ以降、自分の立場を表明するのを、みんなものすごくこわがっている感じするけどさ。ああいう形の表明してすごくバカやったとしても、それ以降自分が作りだすものやふるまいが、やっぱり強烈であったりおもしろけりゃ、それでいいんだろうに。

岡田　さっきも言いましたけれど、自分の中に今の知識人だの知性のあり方だのがいろいろあって

も、ほかの部分は除いて、その中の特定のひとつだけをお客様に出さなければいけないときがあるんですよね。でもその作業ができない。「自分はいろいろあっての自分です」と、どうしても言いたくなっちゃうんですよ。

だから、僕、以前小林さんと話したときに、一番すごいなと思ったのは「小林さんってこういう人ですよね」なんて言うと「そうかもしれん」って一回返してくれますよね。これは僕らの世代以下は絶対できないことです。自分が何か決めつけられそうなときは、必ず「っていうか」と言って反論しちゃうんですよ。これはもう弱点です。自分でも実感しているけど、自分を含めた世代的な弱点。

小林　そう、それはいつも感じるな。自分のプライドだけは、ものすごく高くなっているんだよね。従軍慰安婦でも、いろんな人が文章書いたりしているけど、こっちはそれを読んで間違いがあれば指摘するし、異論も言う。そうすると「それは知っていた」と必ず言うんだよね。「たしかに知らなかった」と認めれば、それだけで済むことなのに。それで自分の価値を著しく下げることってありえない。

岡田　でも、それって言論の世界の人が、昔からやっていることですよね。必ず一歩も引かない。絶対に譲らないことがカッコいいんだと思ってるから。だからそういう人と話すと、すごい疲れるんですよね。人前で話すときのおもしろさってあるのに、それをこいつら考えてねえのかって。

小林　そうだよな。

岡田　言論の人がだめなのは、彼らは一対一の「勝負」だと思っているけど、実際は一対多数の

「競争」なんです。討論では勝ち負けなんてつかなくて、お互いに傷つかない別れ方ができるかもしれないけど、実際には多数に対する影響力があれば、厳然たる順位なんてついちゃいますよね。これを意識していない人が、直接対決とかやりたがっているわけですよ。討論とかやったって無駄なんです。こういうことを言うと、朝日新聞の人とかに「それでいいと思うんですか!?」とか言われるんだけど（笑）。でもこういうメディアの社会って、少なくともあんたらが作ったんでしょと思っちゃいますよ。「『要するに、こういうルール』って正直に言っただけなのに、急に人のことを悪人みたいに言いやがって。君たちはルールを言わずしてやろうとしているのか。ずるいぞ」と。

クリエイターは老後の楽しみに

小林　いやあ、何かすごいねえ、今日は。クリエイターの価値観そのものまで、疑われてしまうとは思わんかったよなあ。

岡田　申し訳ございません（笑）。

小林　クリエイター信仰が、わしの中にもしっかりあったのにね。それ自体が壊れてきているとしたら、本当にすごいよなあ。

岡田　でも、小林さん自身もそこから一歩踏みだしてるんですよ。『ゴーマニズム宣言』だって、クリエイターは至上だという価値観を壊しちゃったんです。それも原因のひとつですから。その人がもう一回クリエイターの世界に戻ると言うから、何て厚かましいんだと。そんなのは老後の楽しみに取っておいてください（笑）。

岸田秀

精神分析はもういらない

Syu Kishida

一九三三年香川県生まれ。
評論家、和光大学教授。
早稲田大学文学部心理学科卒業、早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。フロイト理論を独自に発展させ「人間は本能の壊れた動物である」と主張し、精神分析の方法によって、日本の歴史を分析。近代日本の歪みを論じ、日本人の歴史と心理に新しい光を当てた。七六年より始まる『ものぐさ精神分析』シリーズはとくに有名である。

岸田先生は開口一番こう言った。「何をしゃべっていいか、よくわからないんですけれど……」。それもそのはず、じつは今回、もともとテーマはなかった。岸田先生といえば、精神分析を通じ人間の自我や性、国家、文明などを論じて話題を呼び、オタキングも大きな影響を受けた人物。「一度会って、お話をしたい」という希望だけで実現した、いわば、行きあたりばったり対談なのである。オタキングのツッコミを、ニコニコ顔でかわし続ける岸田先生。すれ違う二人の会話、いったいどこに着地するのか。（九七年五月二十六日対談）

「ものぐさ精神分析」の受け入れられ方、今・昔

岡田　僕が中学の頃、高校生だった姉がいきなりニヒルになってしまったんですよ（一同笑）。それで本棚を見ると、『ものぐさ精神分析』という本があって「これが悪いんだな」と思って、それから十年間読みませんでした。姉が突然、「すべては幻想さ」のようなことを言いだして。あの時代には、ものすごく影響を与えましたね。あの時代と比べて、今の時代というものの反応は、いかがですか。

岸田　ちょっと常識化したという面もありますね。

岡田　当時は、学生に殴りかかられたというような伝説も聞いているんですが。

岸田　今から二十年も前の話ですね。「理想というのは幻想で、理想のためにいろいろ献身するのは本人はいい気分かもしれないが、はた迷惑だ」なんて言ったら、怒ったやつがいて。今はさすがにそういうのはいませんね。

岡田　今の学生は、先生の学説を最初に聞いたとき、どういう反応をするものなんでしょうか。

岸田　僕は、『ものぐさ精神分析』を書く前に、同じような内容を授業でしゃべっていたんですね。出席なんか取らないけど、いつも大教室が満員で、かなりの反発もあったけど熱気もあったんです。それが、今は反発もなければ熱気もない。「また同じこと言ってるな、まあ聞いておこう」というような感じなんじゃないでしょうか。

岡田　それは先生の説が、一般化・常識化してきたからでしょうか。それとも、そもそも自分を知りたいという欲求が減ってきているからですか。

岸田　僕の講義がつまらなくなったということもありますが、一番大きいのは「恋愛だって性欲だってみんな幻想だ」というような発言が、ショッキングなものでなくなって、そういうことを聞き慣れてきたということなんだと思うんですけど。

岡田　これがどんどん進むと、将来はどうなりますか。つまり今、かろうじて強い自我を持っている僕ら世代くらいまでがみんな死んでしまって、「すべてが幻想だ」的なとらえ方をするのが当たり前の世代が、子どもを作って教育するようになったらどうなるんでしょう?

岸田　さあ、予想屋じゃないから、未来のことはわからないけれども。

岡田　先生がおっしゃられる、「すべてが幻想だ」というような考えがここまで一般化すると、先生ご本人ですら困ったなというような気になられませんか。

岸田　いや、僕はそんなことは考えないですけどね。そういうことになるならば、それもいいと。でも、たとえばセックスのタブーにしても、歴史的に見れば、規制がきつくなったり、緩くなった

りしています。今の時点で見ると、禁止が強かったセックスのタブーが、だんだん解放されて緩くなってきたところですね。また、反動でセックスのタブーは強くなるかもしれない。
だから、今のような柔らかい自我と、かつての堅い自我というのも、往復運動というか、緩みっぱなしではなく、その反動がいつか来るかもしれません。僕としてはセックスのタブーは弱いほうがいい、自我は柔らかいほうがいいと思いますが、未来のことはわかりません。

デジタル文明とは何か

岡田 「デジタル時代の文明は精神分析されうるか」というテーマは、僕からの提案なんです。どういうことかと言いますと、岸田先生がおっしゃられている「戦後日本の精神分析」という問題、それと現代のデジタル文明というものが、どのように関係し影響を与えているかということについて、お話できるのではないかと思ったんです。

岸田 僕はデジタル文明とか機械に弱くてね。デジタルとかアナログとか言われても、ピンとこないですね。インターネットも見たことないですし、コンピュータも持っていません。やっとワープロを使いはじめたぐらい。

岡田 あ、とうとうワープロを。

岸田 とうとう。だいたい鉛筆で原稿を書いていたんですけど、ちょっと腕をいためまして。それでワープロを使いはじめたというくらいなんです。機械のことには弱くて、現代機械の最前線にいる人とは、どうも話が合わないんですけれども。

岡田　明治維新とか、先生がおっしゃられている戦後日本というのは、まさに時代がゴロゴロッと転がっていったような、大きな変化だと思うんですよ。たとえば、印刷メディアやテレビの普及が、その変化の大きな原動力になっていると思うんです。それなら、現在、急激な勢いで拡大しているデジタル文明というのは、今の時代にとって大きな影響を与えるに違いないと思ったんです。

岸田　しかし、そのデジタル文明というのは何ですか。

岡田　デジタル文明という言い方が大げさかもしれませんが、電話で話すんじゃなくて、パソコン通信とかで、キーボードをパチパチたたいて画面に文字を表示させて、それで会話する状態ですね。

岸田　いや、そういうふうにして、今頃の人々は話し合ってるわけですか。

岡田　手紙を書いて出してたのが、電話するほうが便利になって、みんなそっちに行っちゃいましたが、それよりもパソコン通信でワープロの文字を送り合っているほうが、もっと便利なんですよ。

岸田　よくわかります。活字が出てくるわけですからね。

岡田　相手の言ってることがよくわかるし、好きなときに読めるし、電話のように相づちを打つ必要もない。

岸田　そうすると、手紙と同じようなメリットがあるわけですね。

岡田　また、パソコン通信をやってる人たちと層は別ですが、携帯電話やポケベルをずっと持ち歩いているような人たちがいますよね。

岸田　そうですね。僕なんかは携帯電話もポケベルも持ってないですけれども、学生たちが持っていてしょっちゅう使ってますね。

岡田　僕も大学で講義を持っているんですが、その最中に鳴らす学生もいて、さすがにあきれるときがあります。

岸田　いやいや。

岡田　そのような状況をふまえて、デジタル文明と大ざっぱに言っているんですが、年がら年中パソコン通信やら携帯電話で、コミュニケーションを取っているような人たちがどんどんと増えていて、そういう人たちというのは、明らかに自分とは違う存在じゃないのかなと思っているわけです。

岸田　どういうふうに違ってるんですか。

薄い悩み、薄い恋愛

岡田　これはまた違う側面からの見方なんですが、何かみんな、悩みが薄いなと思っているんです。

岸田　そう見えるんですけど、そうでもないんじゃないですか。

岡田　僕は、あれ、薄いと思います（笑）。でも、否定的にじゃなく、これはすばらしい状態ではないのかなと。とうとう、文明が頂点に到達した状態ではないのかなと思っているんですけれども。

岸田　たとえば、恋愛なんかでもあまり感情が高まるってことが少なくなってるんですかね。会いたくても会えないとか、言いたいこともすぐには言えない、そんな欲求不満があって恋愛感情が高まるのに、思い立ったらすぐに連絡できて、すぐに話せるわけだから。気持ちを高めている暇がないというか、まったく必要がないわけですね。そうすると、恋愛だって非常に軽くなってしまうような感じがあるんですが。そんなことはないんでしょうかね。

岡田　そのぶん重い恋愛に耐えられなくなって、ちょうどバランスがとれているというふうにも見えますね。

岸田　ちょうどいいですかね。

岡田　学生たちのつき合い方を見ていると、二回喧嘩したらもう別れるんです。

岸田　そうですね。僕も横目から見てると、そんな感じですね。

岡田　横目から見てるんですか（笑）。

岸田　そんな感じなんですけどね。そうすると恋愛が軽くなったということが先で、軽くなった恋愛にあたかも応ずるかのごとく、デジタルな通信が現われてきたとも考えられますね。

岡田　そうかもしれませんね。その因果関係はともかく、この傾向は親子電話が現われたのと、ほぼ同時進行的でした。今年、僕は三十九歳なんですけれども、僕が小さい頃は電話は家に一台、玄関あたりにあるのが普通でした。それが高校ぐらいのときに親子電話が登場して、自分の部屋に電話が付いて、みんな長電話するようになった。親同士が、「うちの電話代、二万円いった」とか「一万五千円だった」と立ち話で愚痴ったりする。僕はそういう世代でした。でも僕より十歳下の世代になると、もう自分の部屋に電話があって、さらにそこより十歳下の世代というのは、自分で持っているんですよ。

岸田　だんだんそういうふうになってきたんですね。僕の子ども時代なんか、まだ電話がある家のほうが少なくて。僕の家は商売をやっていましたから、電話はあったんです。でもいちいち局を呼びだして使うやつですから、とてもじゃないが子どもになんか使わせてもらえない。僕は、いまだ

に電話って抵抗がある。人間って最初の経験が非常に大きくて、そこからめったに抜けられないんですけれども。僕も、電話っていうのは子どものときのイメージのままで、いまだに用件を言ったらすぐ切るものだと思いこんでいるんです。僕の家には、今も黒いダイヤル式の電話がひとつしかなくて、電話が鳴るとそこに駆けていかなきゃいけないんですけど、とくに不便は感じていないんです。そういうようなことに不便を感じていない僕なんかを置いてけぼりにして、世の中はどんどん変わっていってるらしいですね。

岡田 僕には電話に対するそこまでのイメージってないんですが、今パソコン通信をやっているんです。パソコン通信というのは、お互いに書いたものを送り合うだけじゃなくて、会議室という共同掲示板のような機能があって、そこに自分の書いたものを掲示しておくと、それを読んだ人がその掲示板に返事や反論を書いていくんです。そんな会議室をいくつかやってます。

岸田 その掲示板というのは、誰が見られるんですか。

岡田 同じパソコン通信に参加している人なら、誰でも見られます。多いところだと、五万人ぐらいの人が見ているようなところもあります。そういう会議室っていうのは、特定の話題によって分かれています。

岸田 そこに書くと五万人が読むんですか。

岡田 正確には五万人が読める状態にあるということでしょう。実際に書いている人は、二十人ぐらいなんですよ。

岸田 そうすると、大多数の人は自分で参加をしないで読むだけというわけですか。

岡田　そうです。
岸田　読んで何が楽しいんですかね。
岡田　たぶん、応援してるんじゃないかと僕は思うんですけれども。スポーツの応援と同じようなもので。考え方の代理戦争みたいなものをやってるんじゃないのかなと。
岸田　いろいろな掲示板上で行なわれている議論なんかを見て、楽しんでいるという。
岡田　あと、議論だけじゃなく、その掲示板上で仲良しになったりするわけですよね。「○○さん、あなたのこと好きです。僕はあなたのファンなんです」っていうのを見て、自分もウーンってその気になって納得する。
岸田　読むだけの人っていうのは、それで世界とつながってるわけですね。

自分を表現する場の拡張と抑圧の消滅

岡田　世界とつながっているというか、パソコン通信をやっている人たちは、ネクラでふさがっているように批判されがちなんです。
岸田　でも、直接外に出かけていって、直接手を握るとか抱き合うとかしなくても、そして、自分の部屋に閉じこもっているだけなんだけど、自分の感情なり思いなりっていうのは自閉しているわけではなくて、あちこち広い世界へとつながっているというわけですね。
岡田　仲良くなると、直接みんな会うんですよ。そして、一緒になってカラオケ行ったりして。だから、単にネクラで自閉しているというのとは違うんです。僕、ある日、二週間ほどパソコンが故

障して使えなくなったんですが、そのときすごく不安になったんです。

岸田 というと、どうして不安になったんですか。

岡田 やっぱり、その世界から拒否される不安ですかね。「今、自分がそのパソコン通信の世界でどう思われているんだろう」とか、もしくは「俺を置き去りにするなんて許せない」というような不安とでもいうんでしょうか。自分の一部がそこにあると思っていたのに、いつの間にかその場所が失われてしまったような。家族がいたのに誰もいなくなってしまうとか、学校を退学になるのに似たような不安があったと思います。

岸田 そこはやはり自分の世界なんですね。現代は、みんな誰もがそれぞれの世界を持っていて、それぞれそこに住んでいるわけですね。そして、その世界の住人は何百人であったり何千人であったり何万人であったりで、同じところに住んでいるわけではないが、共通性のある世界にいるということですね。

岡田 それがひと昔前だったら、自分の家と町と、あと会社ぐらいしかなかった世界が、デジタル文明になって種類も爆発的に増え複層的になっちゃったと。

岸田 世界が広がったということですね。

岡田 パソコン通信で、僕はアニメーションの会議室に入っているんですが、映画の会議室をのぞくと、ここに集まっている人たちは、また全然別なんですよ。パソコン通信をやっている人といっても、集まる会議室が違うとメンバーがまるっきり違う。今パソコン通信で国内最大手のニフティサーブだと、そんな違った人たちが集まって二百万人という規模になっているんですよ。

岸田　基本的に、人はどうしても表現できないような自分を、いっぱい抱えこんでいるわけですね。昔は、学校や家庭といった集団にしか属していないと、それ以外に自分を表現できる場はなかったわけです。一部、不良グループを作るとかして表現したりすることもあったけども。でも、一風変わったいかがわしい趣味を持っていたりすると、それに関しては自分一人で悶々としていたわけです。でも今はどんなに少数派的なものでも、これまでは表現できなかった自分を表現する場ができたというわけですか。

岡田　アブノーマルな趣味でもOKなんですよ。

岸田　そういうことになってくると、自分を抑圧する必要がなくなってしまったというか、それではもう精神分析はいらなくなってしまいます。

岡田　あ、やっぱりそうですか。

岸田　それは極論ですけれど（一同笑）。

岡田　精神分析というのは、抑圧があるからあるんですか。

岸田　やっぱり、そうじゃないですかね。表現できない自分があって、それがいろいろな問題を起こすわけですからね。ノイローゼの症状なんていうのは、表現できない自分が歪んだ形で出てきたものですからね。だから、表現できない自分というものがなくなれば、ノイローゼもなくなると考えられます。

岡田　ただ、抑圧というものがなくなってしまったら、それは人間じゃないですよね。

岸田　うーん、いや、それは人間じゃないのかな。人類の定義の問題だと思うけど。

岡田　岸田先生の人間の定義というのは、フロイト[001]からの写しだとおっしゃっていますけども、たとえば、自我というのは、人間の中にある何やらわからないものと、社会からの抑圧との間に張ったスープの上の膜のように発生しているとか。

岸田　そうですね。とくに自我というのは、自分と社会をつないでいる膜というか通路というか、人間は自我を介してしか社会とつながれないわけですよね。岡田さんの言う、人間の中にある何やらわからんものというのを、精神分析ではエス[002]と言っていますが。

岡田　そのエスというのが強ければ強いほど、分厚い自我が生まれると思うんですけど。そして、抑圧も弱く、エスからの圧力も弱ければ、自我も薄くなってしまう。だから恋愛だって薄くてＯＫということになってしまう。

岸田　そうですね。だから、かつてのような大恋愛、あなたのためなら死んでもいいっていうような情熱的な恋愛がなぜ必要だったかと考えると、やはり恋愛っていうことにはいろいろな幻想がいっぱい貼りついていて、その幻想によってほかの関係では表現できない自己が、満たされていたというか。

岡田　自己を表現する場が増えて、恋愛を必要としなくなってしまった。

岸田　だから、かつての大恋愛のような形の恋愛は必要としなくなったんですね。

岡田　それって、僕はいいことだと思うんですよ。

岸田　はあはあ。

001
フロイト
一八五六〜一九三九。オーストリアの精神科医で精神分析の創始者。人間の意識には、明確な意識の底に、性的衝動による無意識があることを主張し、二十世紀の思想に大きな影響を与えた。著書に『夢判断』『精神分析入門』など。

002
エス
精神の奥底にある本能的エネルギーの源。不快を避けて、快を求める快楽原則に支配される。イドとも言う。

真実の人間関係なんてない

岡田　こう言うと、必ず僕より一世代上の方から怒られるんですよね。以前、猪瀬直樹[003]さんに怒られました。僕は、こんな結構なことはないと思うんですけど（笑）。

岸田　怒る人はどういう論理で怒ってるんですか。

岡田　「やはり人間には自然の状態があって、パソコン通信とか携帯電話とか使って行なわれる人間同士の関係なんて不自然だ。私はそんなことしたくもない」と言われてしまうんです。

岸田　僕のほうがまたはるかに上の世代になるんですけど、人間同士のふれ合いなんてものはね、幻想としてはあるけれどね。

岡田　そんなのないですし、あったら困りますよ（笑）。

岸田　あったら困るかなあ……。まあ、お互いにこれが本当の人間同士のふれ合いだと思っている二人が、共同幻想を持ってつき合っているぶんには、困りはしないと思いますけれど。岡田さんはなぜ、あったら困ると思うんですか。

岡田　また、嘘の世界に帰らなければいけないのかなと思ったわけです。真実の人間同士のふれ合いがあるなんて思うことで、逆に窮屈になってしまう。そういうものはないんだと思ったほうが、楽なスタンスに立てるんではないかと思っているんです。

岸田　真実の人間と人間の関係があるとすれば、それ以外のものは偽物だということになるから、それが困るというわけですかね。

003――――
猪瀬直樹（いのせ・なおき）
一九四六〜。ノンフィクション作家。大学時代は全共闘議長として学生運動に参加。ビル清掃や国労書記などの職を経て、フリーのライターとなる。八六年、日本の天皇制を中空構造としてとらえ、その権力構造を論じた『ミカドの肖像』で第十八回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。一貫して日本の権力構造の深層に迫ろうとする強い意欲のもと、独自の方法論で執筆を続ける。

岡田　今、僕としては、人間と人間の間にコミュニケーションなんてものはじつはなくて、その必要もないんだろうなと思うところがあるんです。でもこんなことを実感して、人間は生きていけるはずがないですよね。どこかで、この「人間関係なんて存在しない」という思いと、「人間関係なしには社会で生きていけない」という現実と、折り合いをつけている自分がいるわけです。

岸田　本当の心と心のふれ合いとか真の愛とかね、本当の自分の実現とかですね、そういうものはすべて幻想であって、その幻想に振り回されるのはよくないと思います。しかし、コミュニケーションなくして人間というのは生きていけないというか、うまくいかないんじゃないかと思いますけどね。やはり。

岡田　コミュニケーションだけあればいいんであって、じつはコミュニケーションの内容はいらないんだと思うんですけれども。そのコミュニケーションしているという状態さえあればいいのではないかと。よくコミュニケーションの内容が本物かどうかとか、魂のぶつかり合いがどうとか、中身偏重主義にいってしまうんですが、そんなものは関係ないのではないかと。

岸田　しかし、人間同士のコミュニケーションがなぜ必要かというと、やはり、ほかの人たちに自分が何らかの意味で是認されることが、必要だからじゃないのかなと思うんですけどね。たとえどんな変な趣味でも、自分一人で変な趣味を持っていたら悶々とするだけですが、同じような趣味を持っている他人が一人でもいれば、その人と自分の間に共有化されるものが生まれてくると。その二人の間で変な趣味は是認される。自分一人で抱えてしまうと荷が重いものが、片棒を担いでくれる人がいると楽になる。その片棒を担いでくれる人を求めるのが、コミュニケーションすることじ

ゃないかと僕は思うんです。だから、単にコミュニケーションだけあればいいかというと、違うんではないかと思うんですが、どうでしょうかね。

自我の延長としての子ども

岡田 先生は本の中で、「人間の本能は壊れた」と書かれてますよね。子どもを作る本能ももちろん。僕は、以前これを読んでアアーッとすごいショックだったんです。よくぞ言ってくれましたというような感じがありまして。そこから僕が考えたのは、人間は、子どもを作るというような本能をなくした部分を、コミュニケーションというような行為、つまりよその人に、自分というのをある程度わかってもらいたいというほうに、置き換えているのではないかと。

岸田 やっぱり、自我を支えるものというのは、人間である限り必要だと思うんですよ。動物が持っているような、種族保存の意味での本能は壊れてしまったけれども、自我を何らかの形で人々の間へ、社会へ伸ばしていきたいということはあるんじゃないですか。人間が子どもを作るのは、本能で作るのではなくて、自我の延長としての存在が欲しいからだと思うんですけどね。だから、自我の延長の手段がほかにいっぱいあるなら、子どもを作ることにこだわる必要はなくなっていきますよね。

岡田 もの書きとか表現者とか、自分の考えを人に知ってもらうチャンスの多い人があまり子どもを必要としないというのは、そのあたりにあるんじゃないですか。

岸田 そういうことだと思いますが、やはり、それも自我の延長と言えるんじゃないですか。自分

の表現した思想、自分の書いた文学作品でも何でもいいけれども、それを受け入れて共鳴してくれる人がいれば、そこに自我の延長があるわけで、そこで自我の延長を確認できる人というのは、べつに子どもを必要としないというのはありますね。

岡田　では、年がら年中、電話をしたりパソコン通信をしたりする人というのは、いろんな自我で自分を形作っているというか、お神輿を担ぐのは一人より何人もいたほうが楽、というようなものですね。

岸田　僕は詳しくないけれど、そういったパソコン通信などをいろいろとやっている人というのは、自我が拡散しているんだと思います。このグループでは自我のこの部分を出し、また別のグループではこの部分を出し、というように。でもそれでいいんじゃないですかね。

これまでは、一個の確立された自我を持って、それが首尾一貫して普遍的であらねばならないというような観念があったんです。昔は、そういう確固とした自我を持つことによって、かろうじて自分の存在というのは支えられていたわけですね。でも今は、昔のような主体的自我というようなものの必要性が、薄れてしまったんではないかな。

岡田　その状態を、僕はようやく達成できた、おめでたい状態だと思うんですよ。もう、何百年も主体的自我を持とうと無理をしてきたわけでしょ。

岸田　いや、まあ……。日本なら明治以降だと思いますけれど。

岡田　向こうでは、何百年か千年かぐらいですか。

岸田　いや、そんなことはないと思います。

岡田　産業革命以降ですか。

岸田　ええ、やはり、神が死んだことが関係あると思います。世界の秩序と人間を支えていた神が死んで、それでも何とか人間を支えなければならないから、理性なんてものが発明された。その理性を持った人間というのが主体的人間ということになったんだから、せいぜいフランス革命あたりから、二百年ぐらい前からじゃないですか。

岡田　その状態が人間にとっては、例外的なアブノーマルなわけじゃないですか。

岸田　だから、疲れるわけですよ。

岡田　そうですよね。やっぱりそうですよね。

デジタル革命で中世的精神世界に返る

岡田　それで、ようやく僕たちはこのデジタル革命で、デジタルの力で中世的な精神世界に返れるんじゃないかと。

岸田　なるほど。中世ね。

岡田　だから、今パソコン通信やってる人とか若い人たちって、あまりお金に執着しないんですよね。ものとか欲望には執着するんですけど、お金が持っている全能性みたいなものにはあまり執着しない。

たとえば、パソコン通信とかをやってる人は、とりあえず簡単なものを食べて、すぐカチャカチャとキーボードを打ちだす。これって年がら年中祈っているのと似たようなもので、パソコン通信

の世界に入りこんでいる人にとっては、天国にいるのと同じです。

岸田 それと中世と、どう似ているんですか。

岡田 行動が似ていると思うんです。中世のように、ろくに働かずにすぐにお祈りに行って神様との一対一の会話を楽しむみたいなもので、食うものもろくに食わずにさっさとネットに入ったら、ものは消費しないし、他人とのいやな関わり合いもないというあたりが、いいのではないかと。

岸田 その意味では、中世というのは、一生懸命働いてお金を稼いで金持ちになるという考えはないし、のんびりとはしていたでしょうね。いわゆる未開社会というのは、みんなのんびりしていますよね。近代人というのは何か目的があって、一生懸命働いて真理のためか理想のためか何か知らないけれども、それを実現するために頑張ったんですね。世界を征服して文明を伝えようと思っていた連中ですから。

岡田 それもコミュニケーションなんですよね。自分たちの文明という自我を広めていこうとする。

岸田 その連中の目から見ると、アフリカとか太平洋の島々でのんびりとやっている人たちが未開に見えたんでしょうけど。もちろん、未開というのは偏見なわけですが、あれは決して未発達ではなくて、ひとつの文化として、あのような状態に到達したんだと思います。それに反する疲れる文明というのは、近代ヨーロッパから始まったんで。

岡田 「疲れる文明」っていいですね（笑）。

岸田 しかし、一番よくないのはですね、そういう疲れる文明で、一生懸命頑張っているやつと、のんびりやっているやつが喧嘩すると、のんびりしてるほうが負けるんですね。そこなんですよ、

問題は。

岡田　コンピュータというのは、二十世紀の文明の頂点ですよね。これが結局、コミュニケーションのツールとなる。この世界的なコミュニケーションを作るために世界戦争をやって、世界中を資本主義社会にもっていって、世界中をケーブルでつなげて通信衛星を上げて、誰でもかれでもコミュニケーションできるようにした。文明はこれを目指していたんだなと。

岸田　その文明も、誰でもかれでもコミュニケーションできるような域に到達したから、これ以上は必要ないと。

岡田　この文明の先は、もうないんじゃないかと。たぶん、社会的インフラとかを整備する人もろくにいなくなるんで、この文明が数百年かけて滅びていくのを、僕たちは楽しんでいけばいいのかなと。

岸田　滅びるというのは、なぜ?

岡田　この文明、つまり今の通信の状態というのは、ある種、神経症的に維持しようとしなければ、そこらじゅうで線が切れちゃいますよね。でも、この状態から頑張って、ロケット工学士だとか何とか科学者だとかになるというやつは、ほとんどいないと思います。とくにそれは、先進国になればなるほど。

岸田　そうすると、いわゆる先進国というのはなぜ先進国になったかというと、一生懸命頑張ったからなったんだけれど、一生懸命疲れをものともせずに頑張ってきて、到達してみるとこれ以上進歩する必要がなくなって、だんだんだんだん疲れることをしなくなる。ということは、非常に楽な

ことになるんですかね。

岡田　僕は、楽なことになると思うんですよ。

岸田　そうなればいいんですけどね。さっき言ったように、のんびりする人々と頑張る連中が喧嘩すると、頑張る連中が勝つ。近代というのはずっと、のんびりしていた人々が頑張る連中に殺されていった時代ですからね。

武力の時代からコミュニケーションの覇権の時代へ

岡田　この場合の頑張る連中というのは、頑張ってコミュニケーションの主導権を取るという、コミュニケーション内での覇権争いになっていくんで、現実に剣を取ってとか、自分の影響力を直接行使してとかではなく、電子ネット上での影響力を行使し合うという競争が発生するわけですよ。

岸田　そうすると、自己表現というかコミュニケーションの手段として、かつては軍事力とか武力という手段が最高に有力だったけど、今や、そんなものはむしろいらないと。現在の発達したデジタル文明が生みだしたコミュニケーションの手段があれば、自分を表現するのはそれでかなえられるわけだから、これまでの時代と比べて武力なんか必要なくなるということですかね。

　しかし、まだ世界には核兵器があり、核兵器を持っているアメリカなんかがいばっているわけだしね。そう簡単に、頑張る連中が勝つという世界が消えていくとも思えないですけれども。それでもだんだんと、頑張るやつが尊敬されなくなってきてることは、たしかだと思うんですけどね。

岡田　その頑張り方が、武力じゃなくてコミュニケーションを取るほうに移っている気がするんで

す。アメリカも今熱心なのは、アメリカの正義を宣伝することであったり、もしくはアメリカのコミュニケーションの形態を強要するというふうに、変わってきてるんじゃないですか。

岸田 しかし、いざアメリカのコミュニケーションを認めない、イラクのような国が出てくると、やっぱりアメリカは湾岸戦争を始めるわけですしね。

岡田 その場合も、アメリカはコミュニケーションの主導権を取って、世界的な世論形成をする。イラクはイラクでラジオを使って国民を煽っていく。ラジオって、民主主義をファシズムにする、一番いい装置だと思いますけれど。テレビになると、何だかファシズムが成立しない気がしますね。

岸田 なるほど、宣伝戦っていうのかな。そっちのほうが大きくなってきてることはたしかかな。

岡田 僕が思うに、民主主義というのは印刷媒体によって成立している政治形態で、それがラジオになったらファシズムになる。でもそれがテレビになったらファシズムは消えてしまう。ファシズムっていうのは、その程度のテクノロジーに支えられているもんなんじゃないでしょうか。

岸田 なるほど、ヒトラーが一番使ったのはラジオですからね。あの時代、ラジオをもっとも効果的に使ったのはヒトラーでしたね。

岡田 印刷媒体で政権を争っているときは、普通選挙というのはなくて、字が読める人だけの選挙だった。それがラジオになった瞬間に普通選挙になって、ほとんどの大人が選挙権を持つというふうに世の中がシフトした。それがテレビの登場で、ひとつの陣営だけの一方的な宣伝というのが、もう無理になってきてしまった。僕はこの段階で、ファシズムの心配というのはないと考えています。今なんて、デジタルなネットワークでさらに拡散していますから。

岸田　そうですね。今のようなたくさんの小さなグループがそれぞれに発信できるようになったら、発信側が持っている権力も分散されて、ファシズムは成立しにくいですね。

岡田　国家も成立しにくいですよね。

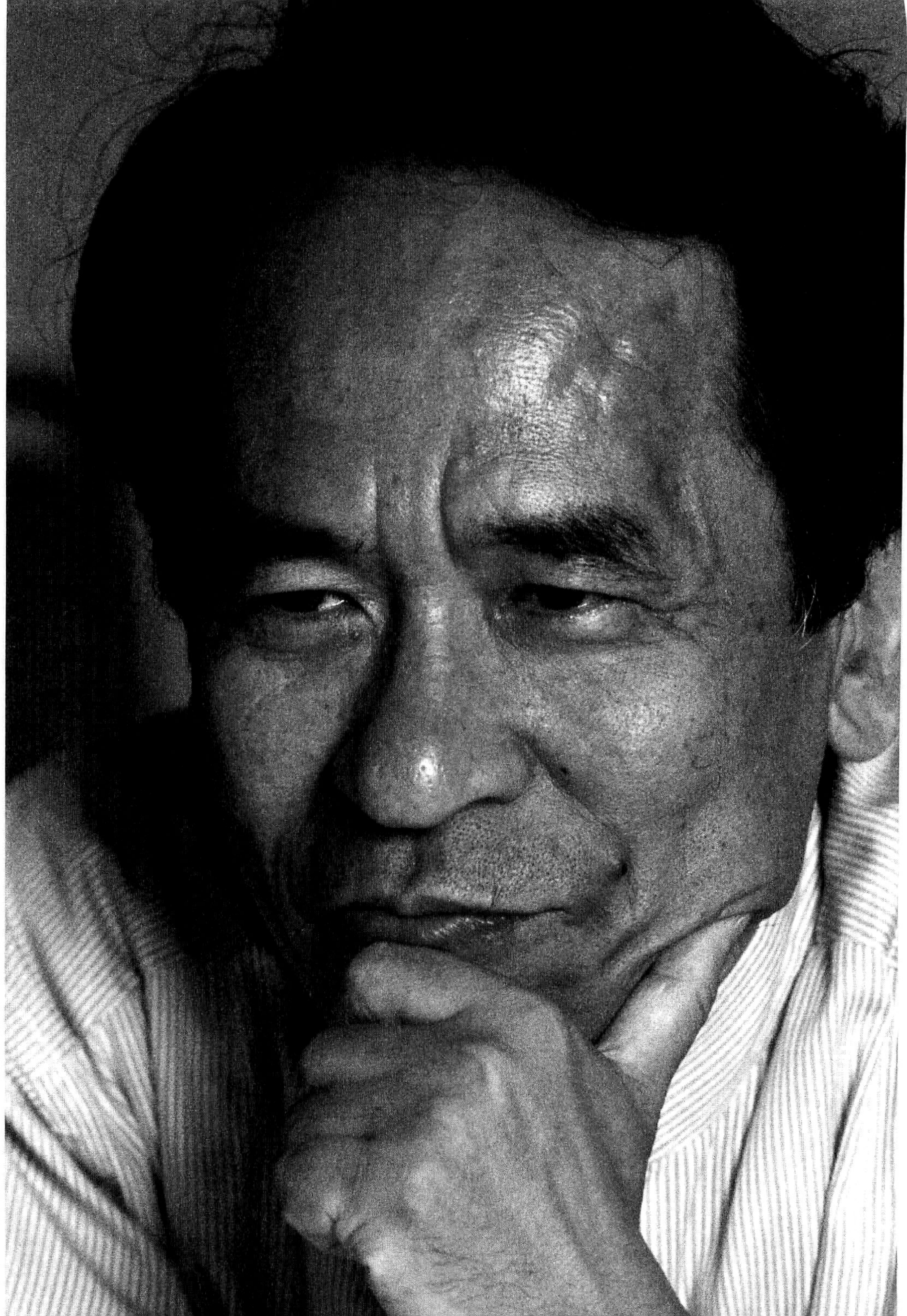
しかし、さっきの中世の話で、みんなのんびりしてたって言いましたけど、それは今の僕らから見ればであって、案外あの時代の人たちは、青筋立てて必死に祈っていたかもしれませんよね。

岸田　そうですね。祈り間違えたら、地獄に行くかもしれないわけだから。

岡田　本当の意味での「のんびりする」というのはないんでしょうね。

岸田　ただ、今の学生たちなんかは、本当にのんびりしているね。あんまり勉強もしなくなったしね。しかし、考えてみると大学の授業でやってることは、たいてい、いらないことでね（一同笑）。教養を身につけて知識を深めたら、どうなるかなんてことはわからないわけで。勉強なんてそれ自体がおもしろくなければやることないですよね。

岡田　学問というのは、実用化できないジャンルがほとんどじゃないですか。

岸田　明治以来の立身出世主義が通用していたのは、勉強して学問を深めれば、出世できるという幻想があったからですよ。「学もし成らずんば、死すとも帰らず」とか言って。それが今や、決定的に崩れてしまったんじゃないですかね。だいたい、そういう幻想にかられて勉強していたわけですからね。それが崩れれば学生が勉強しなくなるのも当然で、そんなこと嘆いても始まらない。みんな勝手にやればいいと思っていますがね。

天使が生まれてくる

岡田 この頃、十歳ぐらいの子どもたちを見てると何となく「もし天使というのがいたとしたら、こんなふうなやつじゃないのかな」と思うんですが。

岸田 どういうの?

岡田 原罪がない。

岸田 原罪がないというのは?

岡田 何か、生きていることに引け目というのがない状態です。

岸田 原罪がないねぇ……。劣等感がない。

岡田 劣等感がない。生きている引け目を、抑圧と言ってもいいんですが、それが極めて薄い。そして、かすかに残った心の中の引け目みたいなものを、コミュニケーションのツールとして使ってしまう。

岸田 天使かどうか知らないけれども、劣等感とか罪悪感とか引け目とか、その種の感情が薄くなったというのはたしかですね。劣等感というと、それを努力して克服するというのが普通だったのに、それがあまりなくなったということも、みんなが勉強しなくなったことの一因かもしれない。

しかし、なぜ、劣等感とか罪悪感とかが薄れてきたんですかね。べつに、精神療法が効果を上げているわけではないと思うんだけど。

岡田 それは絶対にないですよ(笑)。たぶん、劣等感だとか罪悪感、もしくは抑圧の発生装置みた

いなものの効果が、薄くなってると思うんですけども。その装置が僕らの時代にはまだあって、彼らの時代には効果を失ってきた。

岸田 そうなんでしょうね。そうするとやっぱり天使が生まれてくるんですかね。だんだんだんだん。それはいい時代なのかなあ。

岡田 その天使のような人たちが起こす犯罪というのが、急に残虐になるというのもわかるんです。

岸田 どういう因果関係なんですか。

岡田 残虐な犯罪を犯さないということは、ある程度他人に共感できるということですよね。痛みを共感するというのは、自我がある時代の非常システムみたいなもので、本来はそんなものは必要なかったと思うんですよ。たとえば動物が他の動物を襲って食べるときに、かわいそうだなと思ったら、食べられなくなってしまうじゃないですか。人間にはそういった本来はいらない機構がついていて、それをやっとはずせるようになったのかなと。

岸田 しかし、歯止めがはずれると、残虐な犯罪を止められなくなるじゃないですか。その歯止めがなくなってもいいんですか。

岡田 おそらくいいと思いますけれども……。天使というのは、べつに愛の象徴ではなくて、原罪がないだけの状態ですから。当然、天使の中には残虐もあるでしょう。

岸田 いや、それは昔から子どもというのは残虐で、大人になればなるほど残虐でなくなるんですよね。普通は大人になれば、人が痛がっているという感覚が身についてくるんだけど、そういう感覚を身につけなくなったんですかね。

岡田　その必要がなくなってしまった。

岸田　必要なくなったのかな？

岡田　必要ないから、捨てたんだと思うんですけど。必要ならみんな持つわけであって、必要もないのに持たせようとするのには、無理がありますよ。

岸田　それを持たせるために今まで教育とか何とかって、みんな無理してきたんですね。

岡田　無理をしてきたわけです。

岸田　それは、本人たちはないほうが楽だろうけれど。しかし、やっぱり歯止めがないと困るし、必要があるから一生懸命頑張って教育することで、そういうものを植えつけてきたんですけれども。必要がなくなったとは……。実際に必要なくなったのかね。

岡田　今の人たちを見ていると、自分が自我を共有しているようなサークルでは、必要以上に働くんですよ。「この人の悲しみは俺の悲しみだ」みたいに。友だちを傷つけるなんて絶対にやりたくないと思っている人は山ほどいるんですが、友だちじゃない人には平気で残酷なことができる人たちだと、感じる部分があるんです。

われらの官僚組織改造案

岸田　だから、ある共同体の中だけならそれもいいんですけどね。しかし、外とも関係を持つときに困るんじゃないでしょうか。単なる趣味の会ならいいけれども、ある権力を持った集団が、外に対する残虐行為の歯止めを持たないというのは、非常に恐ろしいことになりますよね。

たとえば、厚生省の役人が血友病患者に対して取った行為は[004]、まさに、自分たち以外の集団に対して取った残虐行為でしょう。厚生省はひとつの共同体であって、その中では先輩後輩というお互いの思いやりで結ばれた関係があって、退職後も天下りで製薬会社の社長とかになって、厚生省のみんながうまく豊かに生活できるような構造を、一生懸命に作っているんですね。それが、血友病患者というのは厚生省の共同体に無関係な人々ですから、彼らがエイズになっても無関心なわけですね。厚生省の役人だけがある小島で暮らしてるならばいいんだけれど、やはり、権力を持った集団が自閉的になって、他者に対する共感を持たないというのは非常に困るわけですよ。

岡田　その困ることへの対処法は、彼らが厚生省という集団だけに属していたのが問題であって、役人の一人一人がまた別の集団に属していて、その中でエイズの人たちとつながりがあったら、回避できましたよね。つまり、厚生省の役人の家族にエイズの患者がいたら、ひとつの歯止めになったかもしれない。極端な話ですけどね。ただ彼らは単一の価値観の中にいるから悪かっただけで、もっと早くに多重な価値観の中に入ればよかったんだと考えられませんかね。

岸田　なるほど。しかし、現在の官僚組織というのは、さっきの頑張るじゃないけど、ほかのことは投げ捨てて一生懸命に頑張って勉強して、ほかの世界とつながらない人間を選ぶ形になっているわけですから。だから、必然的にああなるわけです。今の役人の選別の方法を全面的に変える必要があると思います。

岡田　勤務システムを変えて、週休最低三日にする。

岸田　週休三日?

004　厚生省の役人が……
→11ページ脚注参照

岡田　権力が集中する人ほど、自分が所属する集団にいる時間を、短くしていかないと危険なんじゃないかと。でも、職場の仲間と飲み会やってたら、結局同じなんですけど（笑）。

岸田　僕なんかは、国家公務員試験なんてやめればいいと思っているんですけどね。いろいろな人が辞めたり、しょっちゅうメンバーが替わっていれば閉じこもれないから、厚生省のようなことは防げるんじゃないかと思うんですけどね。

岡田　官僚組織というのは、効率を目指した組織としては、なかなかよくできていると思いますけれども。

岸田　効率的なんですよ。その効率的な部分がマイナスを生む。

岡田　官僚組織を変えようと思ったら、「効率的である」というすごく根本にあるものを、揺るがせずに改革する仕掛けを考えないときついですよね。

岸田　それはちょっと思いつかないな。どうだろうね。

岡田　学校で班替えってあるじゃないですか。あの要領で、役人全員を三年に一回くらい人事異動する。厚生省と大蔵省の役人を総入れ替えするとか。シャッフルすることができればだいぶ違いますよね。

岸田　それができればいいんですよ。役人だけじゃなくて、そのへんのホームレスなんかとも入れ替える（笑）。

岡田　それは彼らのプライドをいたく傷つけますよ（一同笑）。

自我はどんどん緩んでいく

岡田　さっき岸田先生と話が噛み合わなかったところがあったんですが、僕は人間はコミュニケーションだけしていればいいのではないか。意味のない会話でも、コミュニケーションしているという状態さえあれば自我の延長があった気になって、満足してしまうのではないかと考えているんですけれども。

岸田　意味のない会話というのはないと思うんだけどな。ちょっとした無駄話、世間話にしたって、表情でニコッとされれば、こっちが肯定されていると伝わってくるわけですからね。

岡田　そうですね。

岸田　やはり、話の内容だけじゃなくて、表情とかちょっとした身ぶりでも意味があるわけだから。

岡田　では、やはり、たわいのない世間話で十分なんですよね、コミュニケーションというのは。

岸田　ただ、たわいのない世間話ができるというのは、お互いが気を許し合っているということでしょう。だから相当な支えになるんじゃないでしょうか。

岡田　それがいろいろな人とできるというのは……。

岸田　非常にいいことだと思うんだけど。

岡田　それさえできていれば、人間ってあまりほかの欲望というのはないですね。

岸田　それさえできて、あとは飯を食べていれば、ほかにしなければならないことなんてないんじゃないの?

岡田　そういうふうに話すと、怒られませんか。それでよその国に勝てると思うのかって。僕は、ここでよく叱られるんです（笑）。先生は僕のように、気楽に考えられてはいないでしょうが。

岸田　いや、僕ものんびりしているほうがいいと思います。だが、やはり国際関係というものがあるからなあ。中国だって頑張っているしね。

岡田　だから、早いとこ中国にも、コミュニケーションのツールを大量に送りこまないとと思っているんです。そうなると、一生懸命でなくなるのではと。

岸田　日本もアメリカも一生懸命でなくなって、中国もそうなったら、みんながお互いに武器を捨て合うのと同じになって、そうなると一番いいのだけど。しかし、一挙にこちらだけがのんびりするというか、武器を捨ててしまうのは、やはり危険だと考えてしまうのは年齢の差なのかな。

岡田　ローマ帝国の滅亡というのは、示唆的ですよね。キリスト教が流行って、みんなの心がそっちに向かっているうちに、周辺の蛮族にガーッと攻められて滅びるという。

岸田　そういうこともあるからね。でもねえ、やっぱり不安がある。

岡田　先進国の座は手放したくないですか（笑）。

岸田　いや、手放したっていいですよ、それは。

岡田　今はアメリカ人だって、彼らの典型であるマッチョで自己主張の強いタイプというのが、どんどん減ってきていますからね。

岸田　アメリカの精神療法でも、自己主張訓練法というのが出てきて、これも気の弱い人が増えているのと関係があると思います。でも、まだ、気が弱いのは病気であると考える人が多いとも言え

ますね。

岡田 でも自己主張訓練法なんてものが出てくるというのも、気の弱いアメリカ人が増えているからですよね。

岸田 かつてはなかったですよ。アメリカでも、そういう層が増えつつあることはたしかなんだけど、それに抵抗する層のほうが主導権を握っていますから。

岡田 ただ、僕はそういう変化って、歴史的な必然だと思っているんですよ。

岸田 それは、人間は楽なほうがいいし、それが進歩というなら、そちらへ行くのもいいのかもしれないけど。ただあんまり早く行きすぎると、いろいろ問題が起こってくる。だから周囲の情勢を見ながら、チョコチョコと行くのがいいんじゃないですか。

岡田 そして、今の緩い自我がさらに緩くなって、文字文明を忘れてしまうぐらいにまでなってしまうかもしれない……。僕は、そんな底の底の時代に興味があるんですけどね。

大人のいない社会では不安か

岡田 じつは僕、子どもの頃に心臓弁膜症という病気を持っていまして。医者からは生後一年間、泣いたら死ぬと言われていたんですよ。それで僕の母親は、本当に一年間、一度も僕を泣かせなかったらしいんですよ。

岸田 それはすごい抑圧ですね。赤ん坊にとって泣くことは、唯一最高の自己表現ですから。

岡田 逆に泣かさないようにしたから全能感がすごい。そんな原体験があるから、いまだに払拭し

きれないところがあって、世の中自分の思い通りになると思っているところがあるんですよ（笑）。今、自分も子どもを育てていますが、最近の子育ては、僕の育てられ方にすごく似ている。子どもを泣かさないように、あらかじめ回りこむ。三歳までは母親とのコミュニケーションが大事だからと、泣いたらすぐに抱いてあやしちゃう。すごくかまうから、だから僕みたいな子どもがいっぱい生まれてしまうんだろうな。

岸田　なるほど（一同笑）。

岡田　子どもが五歳六歳になっても、親が回りこんでいろいろな欲求をかなえてしまう。だから、抑圧もあるかもしれないけど、自我の薄さというのは、このあたりに関係しているんじゃないかと思います。

岸田　理論的に言うと、自我というものが母親との関係でしか形成されず、母親以外の現実との関係では、作ることができないというわけですね。そうすると母親から離れた現実というのを、非常にこわがるようになりますね。お母さん子にならざるをえない。

岡田　かつて、子どもはいずれ家を出ていくのが当然でしたよね。でも今は、成長しても家を出ない人が多いですよね。地価が高いから家を持てないというようなことも、合理的な言い訳として成立するし。

岸田　昔は「他人の飯を食わないと一人前になれない」というように、どこかに行って働かなくちゃ生きていけなかったわけです。親は早く死んじゃうしね。でも今は、閉じこもって他の人と接触しない生活していても、生きていけるんでしょうね。

もう二十数年も前から、人間が子どもじみてきたと言われていますが、大人になるということは、本能的なことではなく、社会からの要請なわけです。大人という存在が社会の中に必要だったから、みんな大人になったというだけの話ですよ。だから今は、そういう必要がなくなったということで、人間が怠けているわけでもないと思いますけどね。

岡田 今、大人の人というのは、やっぱり産業社会の中に上手に入れた人であって、そういう人も産業社会がなくなってしまえばいなくなるんでしょうね。

岸田 大人というのは、自分の判断と自分の力で他人の中で稼いで生きていく人、というふうに定義すれば、大人になるというのは大変なことで、本当はみんないやですから、ならなくてもいいなら、ならないほうが楽ですよね。

岡田 民主主義とか選挙制度というものは、自分で自分の判断ができる大人がいるから、成り立つシステムですよね。みんなが大人にならない社会になったら、民主主義なんて崩れても当たり前ですよね。

岸田 ええ、成り立ちません。

岡田 じゃあ、みんなが選挙に行かないというのも正しいわけですか。

岸田 正しいんですが……。どうでしょう。豊かな社会にとっては、だんだんと大人がいらなくなる……。みんなが大人にならなくてもいいんだけども、少数の社会を運営する大人が出てきて。

岡田 子どもばかりの社会なら、大人がいるというのは迷惑なんじゃないですか。

岸田 じゃあ、その社会をどう運営するのかは、誰が考えるのかな？

岡田　だから、そんなことを考えるのが不幸の始まりだって、先生、本の中でおっしゃってるじゃないですか。自分で責任の取れない範囲のことを、誰かがみんなのためになんて。

岸田　じゃあ、それでいいのか……。

岡田　社会システムは、やはり崩れていくと思いますよ。

岸田　みんな狭い社会で、少人数で、それぞれの共同体でバラバラにやるぶんには、全体を考える大人なんていなくてもいいんだ。だから、人類全体がそうなればいいんだけど。さっきと同じ問題に戻るけど……。

岡田　だから、みんなが子どもになってしまったらまずい、というような不安こそがよくないんですよ。

岸田　まあ、それはそうなんだけど。

岡田　だって、今の社会システムでも、みんな幸せになれなかったんですから。

岸田　やはり、僕は岡田さんよりはるかに年を取っているわけだから、その不安があるんだな、やっぱり。

大槻ケンヂ

酒鬼薔薇は僕の代わりにつかまった

Kenji Otsuki

一九六六年東京都生まれ。
ロック歌手。
中学二年のとき、ＹＭＯの音楽に影響され、バンドを組む。八二年、高校在学中にハードロック・グループ「筋肉少女帯」を結成しライブハウスで活動する。一九八七年ナゴム・レコードから発表したシングル『高木ブー伝説』が話題を呼び、翌年、アルバム『仏陀L』でメジャーデビュー。ハードなサウンドと特異な歌詞で人気を集める。音楽活動のほかに、テレビ、ラジオのパーソナリティ、映画出演など幅広い分野で活躍中。著作も多数あり。最新著作に『ステーシー』（角川書店）がある。

この対談が行なわれたのは、折りしも神戸の小六男児殺害事件の容疑者がつかまった直後。対談前、われわれの間ではこんな会話が交わされた。編集「まさか酒鬼薔薇の話にはならないですよね」オタキング「大丈夫。ならないでしょ」。そして、大槻ケンヂさん登場。第一声が「で、あの酒鬼薔薇なんですけどね」一同「……。」しかし、さすがはオタク心のわかる者同士、話は異様に盛り上がっていったのだ。（九七年七月一日対談）

酒鬼薔薇聖斗は筋少の影響を受けている

大槻　例の酒鬼薔薇聖斗[001]ですが。

岡田　この対談が掲載されるのが八月の後半だから、ひょっとしたら真犯人がつかまってるかもしれないし、部屋から何が見つかるかわかりませんね。今のところ『北斗の拳』[002]に『聖闘士星矢』[003]、あと『13日の金曜日』[004]ですか。

大槻　いいじゃないか、『北斗の拳』の愛蔵版持ってたって。

岡田　こういうものが見つかったからオタクだって限らないのに、でもそういう固定観念がまだありますよね。

大槻　まあ、それは関係あると思ってしまうでしょう。でもそこらへんの話になると、必ず、バッシングが始まって、「バーチャルリアリティ症候群」とか、ベタな名前をつけるじゃないですか。俺、逆にそういう名前をつける人たちのほうに、先に名前をつけちゃえばいいと思うんですよね。

001 ——— **酒鬼薔薇聖斗（さかきばらせいと）**
九七年五月、神戸市の小六男児が殺害され、近くの中学校正門前で切断された首が見つかった事件で、同年六月、その中学に通う三年生の少年が逮捕された。少年は地元の新聞社に送りつけた犯行声明文の中で、自らをこう名乗っていた。少年は女児数名を襲った通り魔事件も自供している。

002 ——— **北斗の拳（ほくとのけん）**
八三年より『週刊少年ジャンプ』に約五年間連載され、のちにテレビアニメ、映画にもなった人気マンガ。主人公の決めゼリフ「おまえはもう死んでいる」は有名。PTAから表現が残酷であるなどの抗議を受けることもあった。武論尊原作、マンガは原哲夫。

003 ——— **聖闘士星矢（せいんとせいや）**
『週刊少年ジャンプ』連載、東映でテレビアニメ化、映画化した。中高生を中心に、若い女性の熱狂的な支持を受けた。マンガは車田正美。

004 ——— **13日の金曜日**

「ニューメディア不全症候群」とかベタなやつ。

岡田　そんなこと言う人たちって、たぶん小さい頃、トンボを取ったり田んぼの中で遊んだりしていて、第二次大戦で銃剣でエーイッ、ていう感じでしょ。

　でも俺は今回、あの十四歳は、正直言って根性あるなって思っちゃった。俺が十四歳のとき、あれはできないもん。

大槻　十四歳のときにあの文章は書けました?

岡田　あれは書ける感じがします。一時期、「薔薇」という字だけ覚えてて、書いたら賢いと思われるというような情報があったじゃないですか。報道されていた本人の肉筆は、へんとつくりのバランスが変でしょ。あれは辞書を見て書いた証拠ですよね。

大槻　ひと目見れば、中学生という感じですよね。あの文面については、ゾディアック事件[005]とかどこかのロックバンドの影響があるとか言われてましたけど、俺は『筋肉少女帯』の影響が、大槻ケンヂの影響が非常に色濃いと思いましたね。「俺じゃねえか?」と。

　たとえば「死は、それ以上でもそれ以下でもない」っていう文章は、僕が『アイ・スタンド・ヒア・フォー・ユー』というアルバムで使ってる言葉なんですな。また、以前『風車男ルリオ』という歌を書きまして、その歌詞は「この世界でうまくいかないのは、ほかのやつらが風車を回しているからだ。そいつは首がないんだよ」というものなんです。ほかにも「猫のお腹は薔薇でいっぱい」という曲とかね。

岡田　それ、もろですね。昔、筒井康隆[006]を読んだ子どもが、金属バットでおばあさんを殴り殺す事

八〇年の第一作以来、九本を数えるアメリカの人気ホラー映画。ホッケーマスクをかぶったジェイソンが殺戮しまくるというイメージが強いが、このパターンは三作目『13日の金曜日パート3』から。四作目の『完結編』で一度終了したはずが、その後も延々と続いているのは、さすが不死身の怪人? 最新作「フレディVSジェイソン」では、もう一人のダークヒーロー、フレディとの共演が実現するとか。

005 ゾディアック事件
六六〜六九年にかけて、アメリカ・サンフランシスコで起きた連続猟奇殺人事件。「ゾディアック」と名乗る犯人が、殺人を犯すたびにマスコミや警察当局に手紙を送りつけ、犯行時の状況を述べたり、捜査の遅れを揶揄した。その中の数通は暗号で書かれており、それを解く鍵も送られてきた。犯人は現在まで未逮捕のままである。

006 筒井康隆（つつい・やすたか）
一九三四〜。小説家。五七年SF同人誌に発表した『お助け』で文壇にデビュー。著書に『ベトナム観光公社』『家族八景』『文学部唯野教授』のほか多数。対談中の事件は七九年一月に高校生が祖母を殺害後自殺したというもので、この高校生が事件の前に、母親に筒井作品である『大いなる助走』を読むようにすすめていた。

件があって、そのとき筒井さんが「ショックだけれども、当然だ」みたいなコメントをしたんです(笑)。小説というのは悪意に満ちているから、こんなことがあっても当然だということを、ガーンと言っていたんですけども。

宮崎勤はオタクのイエス・キリストだ

大槻　今回の酒鬼薔薇はまだ容疑者だし、何とも言えないんですけど、ああいう屈折の仕方が俺は非常によくわかる。わりと、内向型の思春期を送った人が持つ憤り方としては、非常にありがちなパターンでしょ。

　あの少年は、「もし村山首相が来たら、僕は何をやるかわからない」と言っていたと、報道されていましたよね。俺、自分があの年代にどんな作文を書いていたか思い出してみたんですよ。俺は高校の卒業文集に、佐川くん[007]のことを書いてるんですよね。「パリまで行って白人女性の肉を食べてきた佐川くんは」って。女性っていう字は「じょせい」ってひらがな(笑)。その文章の周りを、自分が影響を受けたものの切り貼り、コラージュしてあるんですよ。もう、これはやばいっスね。

岡田　つかまったとき、一斉に掲示される典型的なやつですね。

大槻　中学のときには、たしか「われわれは海に向かって全員で自殺していくペンギンの群れに似ている」とか言ってたんです。当時、糸井重里[008]さんが流行ってたんで、ペンギンというのを使ったと思うんですけど。もし僕が捕まってたら、糸井さんがコメントするんでしょうね。

だから、宮崎勤事件[009]のときもそうだったんですけど、被害者がかわいそうだということよりも、

007 ――
佐川一政(さがわ・いっせい)
一九四九年〜。パリの大学院に留学していた八一年、交際のあったオランダ人の女子留学生をライフル銃で殺害。その後被害者の人肉を食べていたことから、パリ地裁は心神喪失を理由とした不起訴処分を決定し、精神病院に収容させた。日本に帰国後、現在は作家として活動中。

008 ――
糸井重里(いとい・しげさと)
一九四八〜。コピーライター。代表作に「不思議、大好き」「おいしい生活」など。七六年から『ガロ』誌でイラストレーター湯村輝彦と組み連載した『情熱のペンギンごはん』が話題に。エッセイ集『ペンギニストは眠らない』アルバム『ペンギニズム』なども出している。

009 ――
宮崎勤事件
↓35ページ脚注参照。

宮崎勤という人間に対して、俺もこうなっていたかもしれないと。今回も、俺が行き着かなかった代わりに、酒鬼薔薇が行ったんだって思うんです。

岡田 僕、あのときのオタク批判で一番いやだったのは、世間の人がオタク批判するんじゃなくて、オタクの人たちが「宮崎勤は特別であって、あれはオタクじゃないんだ」と言っていたことなんです。どこが違うんだ。僕たちと全然違いはないじゃないか。彼が代表してつかまってくれた。言ってしまえば、イエス・キリストみたいなものですよね。

大槻 まったく同感です。宮崎の部屋の映像が出たときに「あっ、俺んちみたい」というあの感じですよね。

岡田 俺んちみたいだし、友だちでこれと同じくらいのやつ十人、これよりひどいやつ十人、ってあげられるわけですよ。だから僕は、宮崎勤事件がきっかけでものを作れなくなったところが、相当あるんですよ。それまではお気楽に、自分たちが思ってることをアニメにぶつけたりゲームをやったりするのはいいことだと思っていたし、いわゆる反体制みたいな感覚も、自分の中にあったんです。でもあの事件で「えらいこっちゃ、これは世の中に反抗している場合ではない」と。

オタクになれないコンプレックス

大槻 あのとき俺は、とにかく宮崎勤にあれだけの知識量を発表する場を与えれば、あんな事件は起こさなかっただろうと思った。俺もそうなんですけど、自分のコンプレックスの部分を外に出しちゃうと、それが世に出る機会になったりするんですよ。だからオタクで悩んでる人は、オタクだ

っていうことをドンと出しちゃうと、わりと世間は認知してくれる。

岡田　してくれるのかな。

大槻　じゃないですかね。でも僕、昔『ＳＰＡ！』の取材で、「オタクについてどう思いますか」と聞かれて、「僕はオタクではない」と言ったことがあるんです。なぜかというと、僕には「自分はオタクになれない」というコンプレックスがあるんですよ。非常に歪んでるんですけども。

岡田　わかります、わかります。

大槻　オタクの人というのは、ものすごい知識量があって、ある一分野については絶対負けない鉄の壁があるわけですよ。俺はそこまで壁を築いていないから、自分はオタクと名乗っちゃいけないんじゃないかっていうコンプレックスがあって。

　ここで僕の屈折のオタク史をかいつまんで語りますと、『筋肉少女帯』のベーシストは、ひばり書房[010]の怪奇マンガを集めたりしてたやつで、彼とは中学まですごく仲がよかったんです。彼は高校で美術部に入ったんですが、それが美術部という名のマン研。

岡田　八〇年代によくあるパターンですよね。美術部と思って入ったらマン研だった。

大槻　その頃ちょうど『ガンダム』[011]がありまして、『マクロス』[012]がありまして、『イデオン』[013]がありまして。

岡田　みんなコロコロ転んだ頃です。

大槻　僕の学校にもアニメグループはあったんですが、彼らはすごいんですよ。いつも『六神合体ゴッドマーズ』[014]の話なんかをしてるんです。彼らのロッカーに「ＧＭのことで用あり」と書いてあ

010 ―――
ひばり書房
恐怖マンガで、マンガファンの間で知られる出版社。

011 ―――
ガンダム
七九年に放映されたテレビアニメ『機動戦士ガンダム』のこと。従来のロボットアニメの基本形を踏襲しつつ、戦争もののリアルさを取り入れた作品。富野由悠季監督作品。

012 ―――
マクロス
八二年～八三年に放映されたロボットアニメ『超時空要塞マクロス』のこと。宇宙からもたらされた未知の宇宙船、異星人とのファーストコンタクト、戦闘機からロボットに三段変形する主役メカ、歌で敵を壊滅させ地球を救う美少女アイドルなどが登場する。美麗な作画の映画版がある。

013 ―――
イデオン
ロボットアニメ『伝説巨神イデオン』のこと。『ザンボット3』『機動戦士ガンダム』に続き富野由悠季が監督。視聴率低迷から中途で打ち切られるが、のちに映画で「接触編」「発動編」として公開、テレビでは理解不能だった最終回も新たに描き直され話題を呼んだ。

ったんで、「GMって何?」と聞いてみたら、ひと言、「ゴッドマーズ」。『六神合体ゴッドマーズ』のことで用があるってのが、まずすごいじゃないですか。まあ、僕も自分にオタク的素養があるのはわかっていたから、「身の置き場のないこの学校の中で、自分がいるべきところは彼らのグループじゃないか」と思って。ところが、そのメンバーに平井和正の息子がいまして、僕が「君のお父さんの本は全部読んでいる」って言った途端、彼は心を閉ざしてしまった。どうも、お父さんに対するコンプレックスがあったみたいなんですね。その上、僕の高校のアニメ好きはみんな小林亜星系で、マラソン大会でいつも後ろのほうにいるタイプだったんですが、僕、そのころ痩せていて、運動ができるように見えたらしいんですよ。それだけで「お前は違う」って言われて。

岡田　差別してくるわけですね。「お前は普通だ」と。

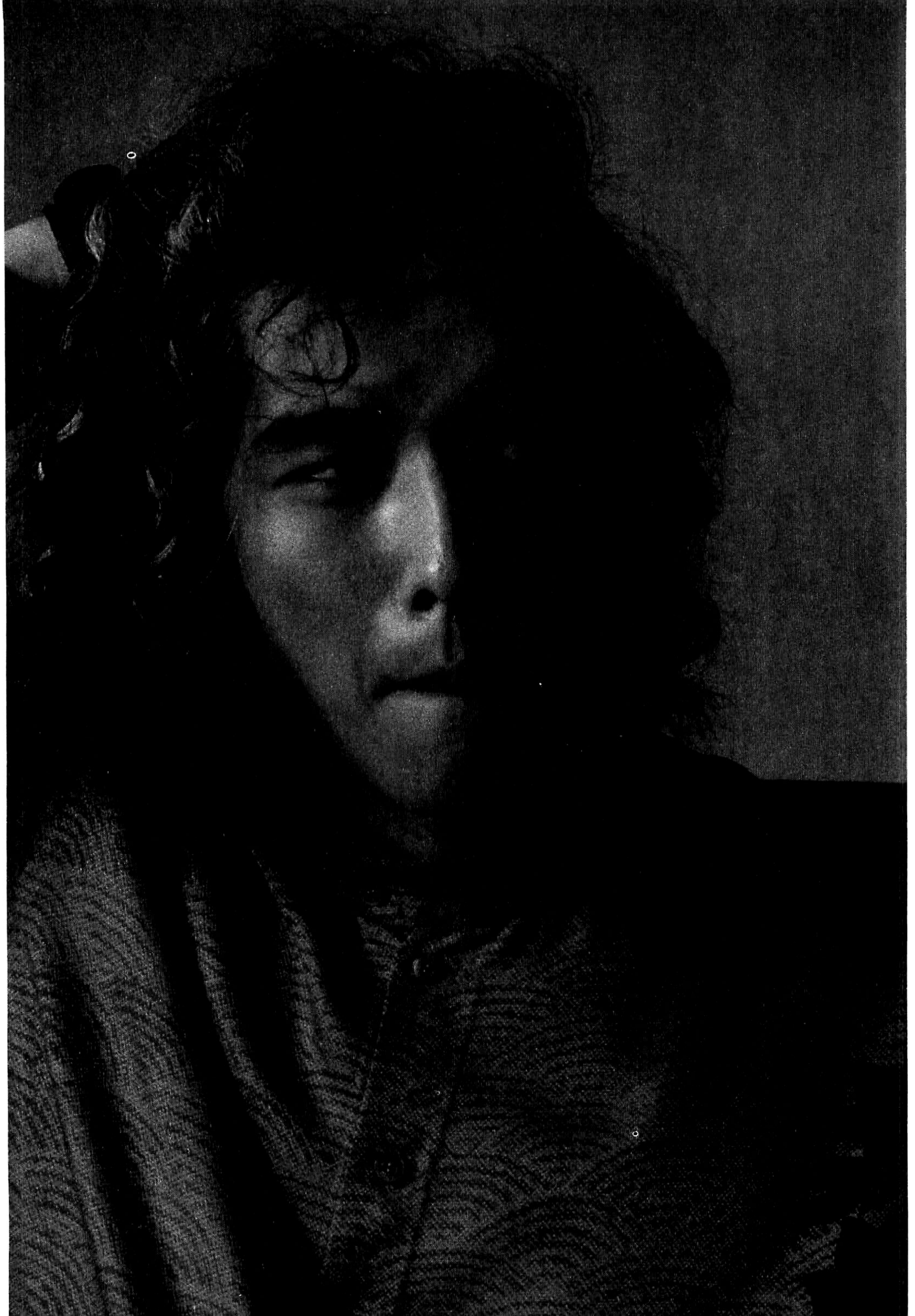
大槻　正直、寂しかったですよ。友だちのほうはアニメグループと接近して、同人誌まで作りはじめて、学園ラブもどきもあって楽しくやってるのに、僕のほうは何もない。それで酒鬼薔薇系になっていったという。

岡田　鬱屈していって、最後には卒業文集に小田晋が分析するような作文を書いた。

大槻　あの文章は、ヤバイよな。中学の成績表の通信欄に、先生が書いたすごい文章がありまして。「学校から」「家庭から」という通信欄があって、先生は言いたいことがたくさんあるらしくて、「家庭から」の欄ぶち抜きで、ザーッと書いてあるんですよ。「ひねくれたものの見方をし、それを楯にして世の中からはずれようとしている傾向があります。このまま行くと取り返しのつかないことになる可能性もあるため、あえて苦言を呈します」。そのあとフォロー、「しかし学校では給食委

014——
六神合体ゴッドマーズ
横山光輝のマンガ『マーズ』を下敷きに作られたロボットアニメ。美形キャラクター、浪花節なシナリオ、派手な画面構成で女性を中心に人気が上昇。放映も当初の予定を大幅に越えて延長された。八一年より放映。

015——
平井和正(ひらい・かずまさ)
一九三八〜。SF作家。初期のテレビアニメ『エイトマン』の原作者としても有名。物語世界に読者を引き込む文章力の持ち主で「言霊使い」と異名をとる。著書に『死霊狩り』『狼の紋章』『幻魔大戦』ほか多数。

016——
小田晋(おだ・すすむ)
一九三三〜。精神医学者。犯罪精神医学が専門で、八二年に起きた日航機羽田沖墜落事故の片桐機長の精神鑑定をはじめ多くの精神鑑定を手がける。新興宗教信者についての、宗教精神病理学的研究なども行なっている。

員として頑張っている」。そんなフォローがあるかって。「給食委員として頑張っています。が、だらしがなく」って書いてあって、めちゃくちゃですよ。

そんなこんながあり、僕はどんどん性欲のほうに行ったわけです。心の拠りどころというのか、性妄想がゴンゴン広がっちゃって……。いろんなところでカミングアウトしてますけどね。

とにかく目立てば癒される

岡田 二十代前半は「モテたい野郎」だったそうですね。

大槻 べつに、今、更生したからとかいう意味ではなく、自分がそういう方向に行こうとしていることに悩んでる人にとって、何かひとつでもアドバイスになればと思うから、言うんですけどね。

僕はその頃、一眼レフに二五〇ミリの望遠レンズとテレコンバータをつけて、三脚持って小学生バレーボール大会を盗撮に行ってたんですよ。

岡田 そういう趣味があったんですか。それとも、そういう仮面が必要だったんですか。

大槻 仮面というのは?

岡田 一時期、小学生の女の子に興味を持つようなことが、ちょっとおしゃれなときがあったじゃないですか。八〇年代を風のように流れた一瞬が。

大槻 そういう、いわゆるサブカルチャーからエロ本に興味を持つのとは違って、本格的に変態性欲道に入っていったんですよ。あれ、撮るときはものすごい興奮なんですよ。ところが、撮ったあと現像に出すじゃないですか。そのとき写真屋のオヤジと会うのが一番恥ずかしいんですよ。「こ

れ、「露光が甘いよ」とか言われちゃって、それがブルマー大アップの写真でしょ。

岡田 オヤジにしてみたら町内に一人や二人、そういうのがいるから、慣れてるかもしれませんよ。でも、若いのにその道に入ってるのも珍しいでしょうね。

大槻 かわいい女の子を遠くから撮って、「これ、俺の彼女だよ」って友だちに見せたりしてたんですわな。やばいですわ。本当にやばいやつでした。

でも、今、「自分はこのまま性犯罪者道とか、本当にやばい道に入ってしまうんではないか」という強迫観念にかられている人もいると思うんですけど、そんなことないですよ。更生というか、発表の場さえあれば大丈夫なんですよ。

岡田 それは言えますよね。でも、それは何歳くらいの頃ですか。

大槻 十六、七。ちょうどライブハウスに出はじめた頃です。

岡田 十六でブルマーフェチっていうのは、相当筋金入ってる。

しかし、ライブハウスに出ていて、ブルマーフェチもやってたんですか。ライブハウスに出れば、女の子のファンが来てるわけでしょ?

大槻 いや、これもそこで気づいたんですよ。どんなに気味の悪いことでも、スポットライトを浴びれば、あるいはメディアに乗れば、女の子は「キャーッ」て言うんですよ。

岡田 その「キャーッ」はだめなんですか。

大槻 いや、だめじゃないです。それでOKなんです。だから、僕はブルマーフェチが高じて、ブルマーをはいてライブやってたんですね。あと、ゾディアック事件って、ゴミ袋みたいなのかぶっ

てるでしょ。あの事件の頃は、俺、白衣着てブルマーはいて、ゴミ袋をかぶって目と口だけ開けて歌ってたこともあるんですよ。

岡田 それでもスポットライトを浴びていれば。

大槻 そう。信じられないことなんですが、そういうものなんです。結局、男の場合、どんどん内にこもっていく原因のひとつに、異性と交流できないというのがあるでしょ。女性もそうかもしれないけど。じゃあ、どうすればいいかというと、とにかくどんな手段でもいいからメディアに進出してしまう。これは絶対に間違いないです。

岡田 つまり目立っちゃえと。

大槻 目立てばいいんです、本当に何でもいいから。たとえばソロバンでもいいんです。小学校のとき、べつに何の取り柄もないやつだけど、ソロバンだけうまくて四桁の計算とかすぐできちゃうやつがいたんですよ。小学校六年生の二月にちょうど珠算の授業があったんですが、あいつはすごいということになった。そうしたら、その年だけ、彼は女子からチョコレートをたくさんもらったんですよ。そのときに「おや、これは」と思ったんですけど。

岡田 でも、小学校くらいのときから延々とモテたいと思ってたんですか。

大槻 いや、それはあきらめてたんですよ。でも振り向いてもらいたいでしょ。つまり「透明な自分」をわかってもらいたいじゃないですか。そのために、ちょっと変質者を装うような行為に出ていたんでしょうね。

だからブルマーをはいて、ゴミ袋をかぶってね。ゴミ袋の下は、ポスターカラーで顔を真っ白に

塗っていて。それでステージにガーッて出て行って、そのまま客席に乱入していくと、女の子が「キャーッ」て言うんですよ。それがうれしくてね。その瞬間は「女の子と交流できた」っていう思いですよ。コートの下に何も着ないで、「ほうら」って言うおじさんとまったく気持ちは同じですけど。でも無視されずに「キャーッ」と言われることが、唯一の救いだったわけですよね。

岡田 僕は女の子とつき合っても、そのへんが晴れなかったほうなんですよ。自分の中にある何か黒いものが、女の子方面ではあまり晴れないというか。わりとこれってだめなのかもしれないなと。

大槻 それは晴れないですよ、結局。わが生涯を振り返って、晴れた日はないですよ、本当に。

宮崎くん事件で、世間様にばれた気がした

岡田 宮崎くん事件のとき、こうやって「宮崎くん事件」と俺の世代は死ぬまで言うんでしょうけれども、一番最初に思ったのは、とうとう世間様にばれたと。

大槻 何か泣き笑いになりますけどね。ばれたっていう。

岡田 今までこれがばれるのがこわかったから、それが俺たちの創作のエネルギーになってたのに。僕らが選んだ生活や価値観を隠して、いかにも「普通ですよ」という顔をしながら暮らすために、現実世界に対して「いや、僕たち、それを商売にして食ってるんですよ」とか、「いやいや、海外でもちょっと評価されてまして」みたいな嘘をこきながら、やってきてたのにという。何で彼はつかまる前に、部屋を燃やしてくれなかったんだろうと。

あれが出てしまったとき、自分がそれまでやってきたものや『マクロス』とかがまっすぐ見れな

かったんですよ。「なるほど、要するにこれって、あそこから来てるよな」と。

大槻　たぶん、僕はそこまでオタクになれなかったコンプレックスがあったから、本当につきつめたオタクの人や、彼の部屋とかそういうものに、いまだに憧れている感じがあるんですよ。だから宮崎勤の部屋が出たときに、「この生活に憧れてる人間だっているんだぜ」と言えばよかった。

結局、オタク的生活をしてきた人には、「自分は身分制度で言ったら、一番下にいる人間だ。それを隠していたのに、宮崎のためにそれが白日のもとにさらされた」っていうのがあったじゃないですか。でも僕は、その人たちの生活に憧れてる。

岡田　俺はそれ、「余裕があるから憧れるんじゃないですか?」というくらい、ひねこびてますね。何か、死体を食ってるところを見られたという気分なんですよ。肉食、草食とかってずらっと並んでて生存競争あるんだけど、自分たちは死体食いだっていう。

大槻　でもやっぱり、俺にはオタクの人に対する憧れがいまだにあるんですよ。今日、それを初めて言えてすごく開放された。世の中では大槻ケンヂっていうと、オタクで、ものごとをよく知っていて、それでやってる人って思われてるところありますから。

岡田　それを幸せに転換してる人、というふうに見えますよね。

大槻　そうじゃないんですよ。僕には、オタクになれなかったというコンプレックスが、中学時代から、酒鬼薔薇容疑者の年齢からあった。そんな僕が、世の人々に、オタクの基礎知識の部分をふりまくわけですよ。本当は広く浅くオタクの基礎知識を知っているだけなのに、それをふりまけちゃう変な才能があるんですよね。そうすると、だいたいメディアってあとからついてくる。

でも、たとえば『Xファイル』[017]なんかも、オカルトオタクにしてみれば、あそこらへんはずっと前から全部知ってるから、流行りだすと「遅いな」みたいなことが言えるわけですわ。だから、もしかしたら、俺はオタクの人から排除されるんではないか。実際、平井和正の息子には排除されたじゃないか、というものすごい屈折したコンプレックスがあるんですよ。

オタクによる世直しに失敗した

岡田　じゃあ、俺のカミングアウトなんですけど、俺は中学のとき、オタクの知識は有効活用できると思ってたんですよ。そのときは、「オタク」じゃなくて「SFファン」って思ってたんですけどね。

大槻　オタクという言葉は八〇年代からでしょう。

岡田　七〇年代後半は、まだ呼び合ってなかったんですよ。「宇宙戦艦ヤマト・ファンダム」っていうのが組織化されたときには、まだオタクと呼び合っていなかった。『ガンダム』からなんです。七九年くらいから急激に流行りはじめた。それは一時期、ものすごい都会のにおい、東京ファンダムのにおいがしたんですよね。大阪にいた俺はSFファンだったので、東京ファンダムにめちゃくちゃ反抗心があったんですけど、その表面のカッコよさだけはどんどん受け入れて。でも、使ってみたら仲間うちで浮いたりして、恥ずかしい思いをしたんですよ。

　カミングアウトに戻りますと、中学の頃、「SFファンによる世直し」とか「善なる独裁」とかそういうことを考えとったわけです。だから自分の内側に行くんじゃなくて、無限に外側に出る誇

017 ――― **Xファイル**
アメリカ生まれの怪奇テレビ番組。「Xファイル」とはFBI内で「解明不可能」と分類された事件を集めたファイルのこと。FBI特別捜査官モルダーと、そのパートナーのスカリーがUFO、超能力、宇宙人など不可解な事件に遭遇していく。そしてそのほとんどが、未解決のまま結末を迎えることが、話題を呼んだ。抜群の人気により、現在は第三シリーズ（サードシーズン）まで作られている。

大妄想的なオタク妄想だったんですよ。

大槻　諸星大二郎[018]のマンガの一部をコピーして配ってたとか、そういう啓蒙運動ですよね、たしか。

岡田　俺、小学校のときから啓蒙運動していて、家に自分のガリ版がありましたから。小学校のときは軍歌が好きで、軍歌を刷って校門の前で配ってて、先生に止められたし。

大槻　それは本当に世直しオタクですよ。オタク三島系というか。

岡田　その後、大阪でアマチュア仲間たちと、八ミリのフィルムをガンガン作ってたんですよ。それでお金儲けて、次の映画ではバンダイからお金もらった。で、ドーンと劇場公開でやってみたら、かすりもしないんですよ。「やっぱり世直しはできないんだ」と、鬱屈が始まったんです。ちょうど八〇年代で世の中はバブルの真っ最中だったから、「じゃあ、そんな古くさいこと言うのはやめよう。自分たちの好きにやればいいんだ。ロリコンはロリコンでいいんだ」と。そう思ったところに宮崎くん事件が起こったんです。いきなり、その方向はせき止められた。それじゃあって行動を変えようとしたら、そこにオウム事件[019]が起きて、もう一方に残っていたSFファンによる世直し運動もだめになってしまった。

大槻　行動派オタクだったから。

岡田　両側ふさがれちゃったんですね。俺、オウム事件のときに「またばれた」って思ったんです。「二大ばれた」なんですよ。宮崎とオウムで。

大槻　酒鬼薔薇で、「三大ばれた」でしょ。

岡田　いや、今回のやつは、僕は最初からあんまりかすらなかったんですよ。「こいつ、結構、力

018――
諸星大二郎（もろぼし・だいじろう）
一九四九～。マンガ家。七四年に『生物都市』で第七回手塚賞を受賞。神話・伝承に取材した伝奇的作品が人気を呼ぶ。作品に『孔子暗黒伝』『西遊妖猿伝』などがある。

019――
オウム事件
↓19ページ脚注参照。

あるじゃん」って感じで。

大槻　オタクの霞を食ってるヤンキー、オタクに憧れてるヤンキー、という感じだね。

岡田　周辺部の人たち、という印象がありますね。俺は宮崎事件のときも、オウム事件のときにも「これ、オタクの犯罪ですね」と言われたら、「そうなんですけど」と言うところから始めていたんです。でも今度は「部屋から『北斗の拳』が見つかろうが、今後何が見つかろうが、それは違います」と。「だいたいそこまでオタクに含めちゃったら、日本人口の三割がオタクになっちゃうけどいいんですか?」というのが、今の気分なんですよ。

自分を仮想化しながら生きていく

大槻　たしかに、まず宮崎事件のときに、オタクに憧れる人間としてはガンと来たものがあって、オウム事件のときもガンと来たんだけれども。両方とも、「もしかしたら僕も、宮崎勤やオウム真理教の実行犯になってたのかもしれないな」という気がしたんですよね。でも、「そうならない方法を俺は知っている」という気持ちもすごくありましたね。それは発表の場を持つということなんですけどもね。

　僕は、オウム真理教事件が起こる数年前、オウム真理教が世の中に出はじめた頃に『詩人オウムの世界』という詩を書いてるんです。オウムという詩人がこの世を憎んで、その言葉が紫の蝶となって世界中に広まる。そうすると燐粉に触れたものは、みんなおかしくなってしまう。それを恐れた警官隊が、オウムを襲いに来るんですよ。それでオウムは、ピエロとかコウモリ、そういうのに

020 ――
いとうせいこう
一九六一〜。作家、タレント。出版社社員

協力を求める。一緒に逃げるんだけど、そのうちの一人が裏切ったために、彼は警官隊の銃弾に撃たれて死ぬ。その死体は北の国に流れ着いた。そういう歌なんですよ。

岡田　予言書みたいですね。ちょうど、杉並区の選挙とかで踊ってた頃ですか。

大槻　その頃です。これは何かすげえなと思っていて。僕『新興宗教オモイデ教』っていう小説書いてるんです。これがオウム真理教の一連の事件に、まあ、ほとんどそっくりなんですよ。それと同時期にいとうせいこうさん[020]とビートたけしさん[021]が、やっぱり新興宗教に関わる小説を書いてるんです。この三つの小説がほとんど同じ内容なんですね。それについて中森明夫さん[022]が『SPA!』で、なぜ若者のオピニオンリーダー的な人たちが、まったく同じ宗教小説を書いたのか謎だと書いていまして。その数年後に、オウム事件が起こったんですけどもね。

それと、オウム真理教が学生を勧誘するサークルの名前が『日本印度化計画』というんですが、これは僕の歌のタイトルなんですよ。あと僕の実家のすぐそばにオウム真理教病院があるんです。その病院の下が呉服屋さんで、俺、そこの店長が多角経営でやってるファミリーマートに勤めていて、職務怠慢でクビになったんですよ。状況証拠だけでいくと、どうも……。

岡田　日本の暗黒史にちょっと力を貸してるというか、グルですね。

大槻　だから、さっき冒頭で出てきたニューメディア不全症候群に陥っている世の心理学者、精神病理学者といった先生たちは、刮目して僕の作品を徹底的に分析したほうがいいですよ。ある意味、俺は、ユング[023]言うところの、そういう犯罪を起こす人の元型、アーキタイプなんですよ。でも俺は犯罪者にはならなかったわけですよね。

を経てフリーのプロデューサー、作詞家、タレントとして幅広く活躍中。もともと表現の場を限らずに活動をしているが、最近では、インターネット小説などにも意欲的に取り組んでいる。ここでいう小説『ワールズ・エンド・ガーデン』は九一年の作品。

021 ———
ビートたけし
一九四八〜。タレント、俳優、作家、映画監督と多彩な活動を展開。九七年ベネチア国際映画祭では映画『HANA-BI』がグランプリを受賞した。ここでいう小説『教祖誕生』は九一年の作品。映画にもなった。

022 ———
中森明夫（なかもり・あきお）
一九六〇〜。作家。八二年に雑誌『東京おとなクラブ』を発行。以後雑誌などの活字メディアを中心に活躍。現在は『SPA!』などで連載中。「おたく」の名付け親でもある。

023 ———
ユング
一八七五〜一九六一。スイスの心理学・精神医学者。分析心理学の創始者。心を幅広いイメージの力動的体系ととらえ、集合性（元型）に裏づけられた目的的過程（個体化）ととらえた。内向・外向の心理的類型論、コンプレックスの概念などが広く知られている。著書に『無意識の心理学』『心的類型』などがある。

岡田　それは、発表することで、そういう欲求とか自分というものを出しちゃってるから、犯罪の方向に現実を曲げないでいいわけでしょう。ある種、メディアの中に自分を出すというのは、自分を仮想化するということですよね。つまり、それは仮想世界がいけないんじゃなくて、自分を仮想化するのに失敗した人が、現実社会でおとしまえつけようと思ったら、殺人とか世直しするわけでしょ。

大槻　似たようなことを、江戸川乱歩[024]の小説についても思っているんですが、あれは結局、昔のオタクたちの話なんじゃないかと。たとえば、やることがないと三年寝太郎みたいになってるんだけど、犯罪心理学とかをやりだすと思いきり没頭しちゃうような人がいて、彼は現実社会に受け入れてもらえない。それでどうしようかというときに、仮想するわけですね。ピエロの格好をしてみたり、椅子の中に入ってみたり、天井裏に忍びこんでみたり、と仮想の中で悪いことをする。彼らは自分のオタク的素養を、現実の世界の中で折り合いをつけようとして、結果として犯罪に走った。唯一、現実社会と自分の中の社会とが折り合ったと思いこんだ世界が、犯罪だったという悲劇を、喜劇にして書いているのではないか、と思うんです。

岡田　大槻さんにはロックシンガー、タレント、文化人といった、いろんな顔がありますよね。いろいろな顔に変化して、ある程度仮想的な自分を作らなかったら、あっち側の世界に行っちゃった可能性って結構あるんでしょうか。

大槻　行ってましたね。

岡田　俺もそうだと思うんです。俺らみたいなのって、みんなそうだと思うんです。でも、その中

024 ――
江戸川乱歩（えどがわ・らんぽ）
一八九四～一九六五。小説家。二三年『二銭銅貨』を発表。以後、一九二〇年代に生まれた都市文化を背景に、大都市が必然的にはらむ解放感と猟奇性という都市生活者の呼吸を巧みに作品に取り入れた。主な作品に『屋根裏の散歩者』『人間椅子』など。

で特殊な人だけが成功するわけですよね。だから、社会的な成功と社会的な犯罪は、表裏一体みたいなところがあって、うまく行けば「ベッコアメ」[025]みたいな会社が作れるわけです。ベッコアメの社長というのは三十歳前で、ランボルギーニを二台持ってるんですよ。くやしいと思ったら「二台とも動かないんですよ」と言ってました（笑）。

大槻　一台は動く車買っとけって。

岡田　三台目買ったら、それもまたイタ車買っちゃって、やはり動かないという。今はレンタカーの国産車乗ってるんですよ（笑）。まあ、彼のような社会的な成功をおさめることもありますけど、だからといって個性教育とかやったら、はっきり言って俺らみたいな人間を増やすだけですよね。

大槻　難しいですよ。

岡田　個性教育を受けた人が千人いるとして、そのうち現実社会で成功する人は、おそらく一人なんですよ。残りの九百九十九人は鬱屈して、中でも特殊な欲求が強いやつとか我の強いやつは、犯罪者になっちゃう。いわゆる自分を仮想化する傾向の強い人は、実際に仮想化してあげないと、この世の中では生きづらくて死んじゃいますよね。死んじゃうか、他人を殺すか。

大槻　駆けこみ寺みたいなのがあればいいのにと、思うんですけどね。俺もまた絵に描いたようなことを言うやつなんですが。たぶん、そういう作業をしていたのは、寺山修司[026]じゃないかなあ。結局、表現意欲があり余ってる、海のものとも山のものともわからないやつを、とりあえず引っつかまえてきて、表現の場を無理やりにでも与えちゃう。

岡田　たしかに劇団を作って癒す、というような構造とも似ています。でも、その中にも、社会的

025 ――――
ベッコアメ
九五年に設立されたインターネットのプロバイダー（接続業者）。独自の料金体系を打ちだして、業界最多の会員数を擁する企業に発展。尾崎憲一社長は、六七年生まれ。電機メーカー社員を経て独立した。

026 ――――
寺山修司（てらやま・しゅうじ）
一九三五〜一九八三。歌人、劇作家。大学在学中から前衛歌人として注目され、六七年には演劇実験室「天井桟敷」を設立、作家兼演出家として多彩な前衛活動を展開する。若者たちへのアピール「家出のすすめ」は多くの家出少年を天井桟敷に引きつける一方、世間の反発を呼んだ。劇作『青森県のせむし男』、歌集『血と麦』、映画にもなったエッセイ『書を捨てよ町へ出よう』など、多数の作品がある。

な組織の現実はできちゃうわけで。そういう現実を抱えたものには、やっぱり入りきらなくなっちゃうんでしょうね。大槻さん自身も溢れちゃうわけでしょ。だから、複数の発表の場を持つしかないわけですよね。

大槻 そうなんだけど、複数持つと、結局また元に戻ってきちゃって、これだけいろいろ中途半端にやってる自分は何だろうと、なっちゃうんですよ。

岡田 それは、一生解決せずに引き受けて散らしていくしかないんでしょうね。病気だから薬で散らすしかないのと同じように。これは欲求というよりは不安ですよね。

大槻 オタク系の人は、とにかく最初に創作意欲、表現欲というのを持ってしまっているわけですよね。これを持っちゃうと人間は不幸で、何かやらなきゃいけないんじゃないかという強迫観念にかられる。それで、ものを集めだしたりとか、いろんなことに挑戦してみるんだけど、うまくいかないものは、そこで悩み、葛藤するんですよね。

俺は今、「誰かに型にはめてもらいたい」という気持ちがあるんですよ。何でもいいから「お前はこれをやれ」と言ってくれるような存在があってくれたらと、三十一歳にもなって思っちゃうんですよ。その自分がまた情けなくてね。

岡田 神戸の事件で犯人と言われている子が、猫とか殺していましたよね。その猫を校門の上に載せたら、それは彼が自分の作品を発表したことになるわけですね。あるいは「怪人○○」と名乗ったら、それは仮想の自分を作ったことになるわけです。町の中に「怪人○○」の噂があって、お母さんが子どもに「『怪人○○』が来るわよ」と言ってくれたら、たぶん彼は相当癒されるはずなん

です。でも、だからといって、俺たちは自分の同類にそれをすすめるわけにいかないけど。

正しいオタクの育て方

大槻　でも変な話ですけど、今、十代でオタクをやっている人々のこれからの育成っていうのを、ちょっと考えませんか、マジで。俺がそんなこと言える身分かとは思いますが、彼らが犯罪に走る可能性もないことはないじゃないですか。どう転ぶかわからない。

岡田　僕には今、小学校二年の娘がいるんですけども、わが家含めて、お母さん方の教育方針や小学校の教育を見てると、俺たちみたいな人間を増やそうとしてるんですよ、明らかに。型にはめた子どもを量産するんではなくて、選択を多くしてもっと自由にさせて、欲望の幅とか、逆に言えば不安の幅を広げようとしてるんですよ。

大槻　欲望の幅＝不安の幅ですよね、本当に。

岡田　今はそれで大丈夫だけど、中学、高校になったら、いきなりみんなすごいことになるぞと思っているんです。

大槻　だから、言葉としては矛盾しちゃうんだけど、「正しいオタクの育て方」みたいなものを考えないといけないでしょう。

岡田　それは、俺たちの後ろ姿で見せる。

大槻　なるほど。職人が背中で語るように。

岡田　俺の背中を見ろ。オタクの背中を見ろ。

大槻　宮崎くんの背中、オウムの背中を見ちゃいけないぞっていう。カッコよくは見えるかもしれねえけどっていう。

岡田　俺は、みんなに対して「大人になれ」とは言えないんですよ。「大人になれ」と言われて、無理やり社会の中で生きようとして、ああいうふうになっちゃうから。もう、「よきオタクになれ」としか言いようがない。

大槻　変な言葉ですよね、「よきオタク」っていうのも。でも本当にそうなってきちゃったでしょ。

岡田　俺は、「大人」というのは、人類史上にまだ一人も誕生していないんじゃないかと感じているんです。だったら俺が最初の一人になって、見本となるしかないとまで考えている。だって今、大人と言われてる人って、状況が許されて、何か適当な欲望とか、適当なサイズの不安しかないからみんな生きていけるわけですよね。でも俺たちからあとに続くやつらって、もっと不安が巨大でしょ。だからこそ本当の大人にならなきゃいけない。

「オタクは大人になれ」と言う人に、俺は今まで全部反対してきたんです。そうじゃなくて、別の意味で、俺たちが人類で初めて大人になってあげなきゃいけないんだって。それは、よき大人になるというようなことと、結構シンクロしてるのかな。

大槻　岡田さんからあとの世代というと、つまり、八〇年代型オタクと言ったらいいのかな。いわゆる『ガンダム』あたりから急激に進化していった、ゲームだ何だというオタク文化で育った人たちですよね。それ以前のオタクというのは、たとえばトキワ荘[027]の人たちなんか見ても、やっぱり戦争がからんでくるんですよね。

027 ――
トキワ荘
旧地名で東京都豊島区椎名町にあったアパート。昭和二十年代の終わりから三十年代にかけて、故手塚治虫が住んでいた縁で、故寺田ヒロオ、藤子不二雄（故藤本弘と安孫子素雄の合作ペンネーム）、故石ノ森章太郎、赤塚不二夫、水野英子などが隣り合って暮らしていた。

028 ――
山田花子（やまだ・はなこ）
一九六七〜一九九二。マンガ家。八七年プ

岡田　あの世代の人たちは、戦争とか焼け跡体験から生まれた、高度成長への憧れとマルクス主義で日本を作った。でも俺たちは『ガンダム』とか『マクロス』といったものを組み合わせて、二〇〇〇年代の日本を作らなきゃいけないでしょう。もう作るしかないんですよ。パーツはそれだけしかないんだから。

大槻　そこで「オウムはハルマゲドンを必要とした」なんて言うと、いかにも、という感じなんだけど。生きるか死ぬかの実地体験をしていないのが、八〇年代型オタクじゃないですか。その前の世代というのは、たとえば学生運動で友だちが死んだとかいうことが、日常にあったわけで。

岡田　九〇年代になって、ふたからこぼれるようにグワッと出てきましたね。前の世代たちの戦いというのか、いわゆる「僕たちの失敗」というやつですよね。

大槻　でも、年を取るって、どうもそういうことみたいですね。みんな自分たちの失敗を繰り返させないために、何とかしなきゃとなる。俺が一番心配なのは、山田花子[028]さんのマンガとかに憧れてるタイプの女の子ね。今「タコシェ」[029]に行って、『ガロ』[030]とか『クイックジャパン』[031]を読んでいるような子。

岡田　なめるように読んで、ライター希望のはがきをガーッと書いてるような女の子ですね。

大槻　べつに、そういう雑誌が悪いという意味ではないんだけど。でも、ミイラ取りがミイラになるというのか、山田花子さんに憧れるのはいいけど、山田花子さんになったら、あんた、人生地獄だよっていうことを、たぶん少女たちはわからないと思うから。

岡田　おっさんくさい言い方になっちゃうんですけど、メディアでとらえられる援助交際とかブル

ロデビュー。『ガロ』『ヤングマガジン』などに作品を連載し一時は七本の連載を抱えていたが、精神分裂症にかかり、二十四歳のとき投身自殺した。その後、日記が『自殺直前日記』として出版され反響を呼ぶ。作品集に『神の悪フザケ』などがある。

029 タコシェ
ホラーマンガや幻想マンガをはじめ、サブカルチャー系の書籍、雑誌などを扱う書店。JR中央線中野駅北口の商店街、「オタクの九龍城」の異名をとる「中野ブロードウェイ」内にある。

030 ガロ
六四年に青林堂から創刊されたコミック誌。もとは白土三平の「カムイ伝」掲載が目的だったが、つげ義春や水木しげるなど異色の作家が集まり、独特のカラーを確立する。社員が全員退職する騒動により一時は休刊したが、九七年十二月に復刊。

031 クイックジャパン
『磯野家の謎』を大ヒットさせた赤田祐一が、創刊した情報誌。ライター陣に若いアーティストやミニコミ編集者たちを起用、いわゆる「サブカルチャー」色が濃い。表紙を『エヴァンゲリオン』の庵野監督が飾ったことも話題を呼んだ。太田出版刊。

セラやってる女子高生というのがいる一方で、そういう女子高生じゃない子というのは、あそこまで享楽的なものをメディアの力であろうと毎日毎日見せられると、いきなりシリアスのシリアス通り抜けて、自己憐憫の極限まで行かないと。

大槻　だから心配ですよ。だいたいそういうタイプの人たちの興味って、それこそゾディアック事件とかマンソン事件[032]とかなんですよ。自分も二十代後半まで、ずっとそういうものに憧れがあったし、現実逃避したい気持ちから、ドラッグに対する憧れなんかも強いでしょ。僕みたいにオタク系でロックやってると、周りにそれでだめになっちゃった人って、ゴロゴロいるんですよ。そういうのを見てきちゃうと、本当にやめなきゃだめよと何とか教えてやりてえっていう気はあるんですけどね。でも、聞く耳持たないだろうな。

情報過多の時代

岡田　今、大槻さんが創作するときに、そういうことが自分の中の動機になりうるんですか。ある意味社会的なことですよね。この子たちに教えてあげたいと語りながらやるのって、恥ずかしいとか、純粋でないようによく言われるじゃないですか。いわゆる宮崎駿[033]のように、椅子に座ってクーラーの効いたところで環境問題を語るジジイみたいなのが、すごくダサイ感覚があるんですけども。

大槻　今、一番困っちゃってるときで、完全完璧なオタクのあり方と、オタクにさえなれないと思っている俺みたいなタイプの歪み方が、わかっているじゃないですか。だから後輩の育成じゃないけど、それこそ歪まないように育成せにゃいかんという気持ちにはなっているんです。でも、そう

032
マンソン事件
六〇年代末期のアメリカ西部で、チャールズ・マンソン率いる伝説的なカルト集団「マンソン・ファミリー」が、彼らの信じる世紀末的な教義に基づく殺人を繰り返した。平和な家庭に突如武装したファミリーが乱入し、その家の人間を惨殺。被害者には女優のシャロン・テート（映画『ローズマリーの赤ちゃん』のロマン・ポランスキー監督の妻）もいる。この事件の衝撃、マンソンの「カウンターカルチャー的な部分」が与えた影響は強烈で、今でも映画や音楽のモチーフとしてたびたび使われている（テレビドラマ『チャーリーズ・エンジェル』は、マンソン自ら、自分がモデルだと言っているらしい。）チャールズ・マンソンは現在、服役中である。

033
宮崎駿
→33ページ脚注参照。

しちゃいかんぜというのをベタに書くのも何だなと思ってる。かといって、どの方法に行ったらいいのかはわかんねえやっていうところですね。

岡田　僕、九〇年代のいつかは、はっきりとはわからないですけど、もうクリエイティブの時代は終わったという気がしてるんですよ。クリエイターたちが自分の思いを形にして許された時代というのは、もう終わってしまい、今それをやれば文化的な環境汚染になりますと。

以前は、私たちの文化というのは海で、それは無限だった。だから、ものすごく趣味に走ったものでも、広い海を流れていくうちに薄まって、過激に受け取るやつもいないんだ、というような前提があった。

ところが、これだけ情報が伝わりやすくなっていて、反復して何回もやれるようになったら、海は有限だとわかった。そこに影響力の強い文化がバンバン出てくると、海が汚染されてくる。ついては今後クリエイターのみなさんは、環境汚染を防ぐためにフィルターをつけてくださいと。

大槻　話が超科学系に飛びますけども、結局、この宇宙は、時間も空間も情報の集合体だという考え方ってあるじゃないですか。そういう意味で、その許容量が有限であるということですね。それ、わかるな。情報の公害というか、情報の詰めこみすぎによって、濃度が上がりすぎちゃって光化学スモッグを起こしちゃうっていうことでしょ。そこで俺、インターネットが出てきちゃったときに、もういいだろうって思ったんですけど。

岡田　インターネットがさらに加速するんですよ。

大槻　インターネット撤廃論っていうのを考えてるんですけどね。

岡田　インターネットが出てきちゃったから、情報が有限になったと思ってるんですよ。あれがなかったら、まだ伝わらないことというのがあるわけですよね。

大槻　『こち亀』[034]の百巻で、インターネットについてうまく説明してあってね。それを読んだときに、こんなものできたら大変だって、両さんに教えられましたよ。

岡田　俺らより三十歳上の人たちが、核兵器と共存する社会というのをしようがなく選んだように（笑）、俺らはインターネットと共存する社会を選ぶしかない。その恐ろしさに気がついている人ってあまりいないんだけど、でも、行くしかないんですよ。

大槻　自分の中の情報が過多になりすぎるから、自分で情報をセーブしないといけないと思っているんです。たとえば、本屋さんに行くと本がものすごくいっぱいあって「これも読まなきゃ、あれも読まなきゃ・でも読む時間がいつあるんだ？」って考えているうちに、ワーッてなっちゃう。それで毎月読む雑誌はこれだけって、ノートにグワーッて書いて。

岡田　はいはい（笑）。

大槻　「読みたい、読みたい、『月刊秘伝』[035]が読みたい」と思っても、その手をグワーッと押さえて。

岡田　話しておいて、今さら言うのも変ですけど、変な人ですね、大槻さんって（笑）。

大槻　そうしないと、自分を律していけないところがあって。だから、たとえば、一人一チャンネル制度とかね。自分は「日本テレビ」しか見ないとか、自分は「テレビ神奈川」しか見ないとか。

岡田　いや、後ろの世代になればなるほど、自分を律するなんてことは、生まれてから一度だって考えたことないでしょう。彼らにはブラウジングというか、ザッピングをさせるしかないんですよ。

034 ——
こち亀
『週刊少年ジャンプ』に連載中の長寿マンガ『こちら葛飾区亀有公園前派出所』の略。バイタリティあふれる交番勤務の警官、両津勘吉を中心に繰り広げられるドタバタコメディ。であるが、そのときどきのトレンドを敏感に反映したネタは質が高い。最近では管理職向けのパソコン講座の回が単独別冊本になった。マンガは秋元治。

035 ——
月刊秘伝
古流武術の専門誌。柔術、剣術、居合、武器術などの現代武道のルーツである古流武術から、合気道・柔道・空手までを取り扱う。BAB出版刊。

それによって平均値を、自分の中でバランスを保てとしか、言えないんですよね。

大槻　でも、そんなことってできるものじゃないでしょう。だから、これからのオタク系の人というのは、自分の中でいらないものを捨てていく作業を、自分で学んでいかなきゃならないわけでしょう。じゃあ何から掃除していこうっていうときに、それこそ、博愛精神とかいうものをまず捨てるという人もいるでしょう。

岡田　いますよね。

大槻　人を殺しちゃいけないという常識を捨てようっていう人も、いるでしょう。

岡田　絶対いますよね。でも俺は、個人を一人一人サポートすることはできないと、ドライに考えちゃうんですよね。千人のうち一人を救えなくても、九百九十九人が大丈夫ならOKだというくらいのシステムが、限度じゃないのかなと。はずれてしまうやつに関しては、俺は目をつぶろうと思ってるんですけど（笑）。でも、そのはずれちゃったやつを救おうというのが、大槻さんの考えなんですよね。

大槻　画一的教育があって、それではずれたやつはしようがないというのが、日本政府の満足するような子どもたち。今度はオタク系の高度情報化社会だから、情報満杯の子どもがどんどん育ってくると。それはしようがない。そいつらが歪まないようにする画一化教育。

岡田　そうです。

大槻　その中ではずれていくやつはしようがないと。

岡田　そうです。

大槻　まったく、それは、今までの文部省の考えと一緒じゃないですか！
岡田　一緒です。
大槻　なんて……。

二百五十六色の画一化

岡田　ただ、今までの文部省の考えと違うのは、このままで行けると思ってないところなんですよ。
大槻　子どもの種類が変わっただけですか。
岡田　子どもの種類が変わったから、早いことシステムを変えないと。今までみたいに子どもを画一化するシステムでも、千人のうち九百九十九人が幸せになっていたわけですよ。基本的には、これでいいと思うんです。でも今のシステムだと、不幸せなやつが六百人もいる。これは早いところ切り換えて、もう一回、九百九十九人が幸せになる別のシステムに行けよと。それはたぶん画一化ではないんです。ブラウジングを自分でさせることによって、そこそこ個性的にはなる。だけど、引いて見てみたら、たいして個性的でないやつが大量に溢れて、でも人間なんてそれでいいというくらいの、そんなシステムでしょう。
大槻　そこではじき飛ばされたやつの中から、それを芸として世に出てくるやつと、そのまま……。
岡田　犯罪として出てきて。
大槻　歪んで犯罪に。つまり時代は変わっても同じじってことですわね。
岡田　そうそう。

大槻　つまり、世の中には画一化されるやつと、ドロップアウトするやつがいて、そのドロップアウトするやつの中から、世に出るやつとだめになるやつがいるという。もう、同じっていうことですね。

岡田　画一化と言ったらそうかもわからないですけど、今までの画一化は、全員赤だとか全員青でしょう。僕が言っているのは、全員二百五十六色まで使っていいと。二百五十六色の中で選べと。自分を十六のパターンに分けて、十六のパターンの中に二百五十六色を配分していいけど、それ以外の色を使うなと。これは画一化とも言えるんですよ。

　でも、あんたらが要求している人類が必要な個性化なんか、そんなもので十分だと。それでもはずれるやつ、そういう俺の仲間はつらいけれども、外側をグルッと回って、何かこういうシステムを作る側に回るか、はずれる側に回るか、表現する側に回るか、どっちでもいいけれども。この二百五十六色の幸せはあきらめろっていう。

大槻　すると、それ以外の色を使っちゃうやつで、それを芸にして世に出られないやつ。つまり犯罪系に行きそうなやつに対しては、やっぱり救世主が必要ってことになるなあ。今こそ弥勒菩薩を、という（笑）。

岡田　今こそ（笑）。でも、あまり弥勒菩薩を強調しちゃうと、二百五十六色の幸せすらなくなってしまいます。

大槻　うーん、誰を救うかですね。

岡田　結局、ブッダが出てきたりキリストが出てきたりしても、インド近辺や地中海、エジプトか

らローマ帝国あたりを見ると、全然幸せにならなかったでしょう。どちらかというと、何千年単位で不幸になる人が増えたじゃないですか。救世主はよけいなんですよ、きっと。

大槻 よけいですか。

岡田 うん。その救世主が生きている間は、何となくいいような気がしますけれども。そのあとえらいことになるというのは、歴史が証明するんだから。

大槻 だからオウムも似たようなことをやろうとして。

岡田 やろうとしていたわけですよね。

大槻 それで言うと、ちょっと話は飛びますが、骨法という格闘技の堀部先生という人は、二十年前だったら大山倍達[036]になれたんです。梶原一騎[037]も生きてたし。でも今は情報化社会のために、嘘が通用しなくなっちゃったわけですね。嘘と言っちゃいけないな、武道の世界では、はったりです。

岡田 あれですね、マス大山が、シカゴの何とかスタジアムで牛と闘って、ゴッドハンドで勝ったとかいう、あんなはったりですね。

大槻 それが効かなくなっちゃったわけですよね。それと一緒で、オウムだってキリスト教なんかと同じ時代に生まれていたら、すごい宗教になっていたでしょう。

岡田 そう思いますよ。キリスト教だって、イエス・キリスト自身が率いていた原始キリスト教の辞典を見ると、恐ろしくセコイ宗派ですから。キリストなんて、ただ単にユダヤ教への反体制運動を言っているだけの、赤軍派みたいな兄ちゃんだろうと俺は思っているんですけどね（笑）。

036 ——— **大山倍達（おおやま・ますたつ）** 一九二三〜一九九四。空手家。四七年、全日本空手道選手権に優勝後、渡米。牛を素手で倒すなどの修行を続け、プロレスラー、プロボクサーを相手に二百七十戦勝ち続ける。手刀でビールびんを切り捨てる技は「神の手（ゴッドハンド）」と称された。六四年、国際空手道連盟極真会館発足。寸止めではなく相手を直接攻撃するフルコンタクトを取り入れた極真空手を創始した。劇画『空手バカ一代』（梶原一騎）のモデルとして知られる。

037 ——— **梶原一騎（かじわら・いっき）** 一九三六〜一九八七。劇画原作者・作家。十九歳のときから空手を始め、大山倍達とともに大山道場（後の極真会館）を設立。そのかたわら児童雑誌にプロレスラー、ボクサーなどの伝記を書き、六三年『チャンピオン太』で漫画界にデビュー。『あしたのジョー』『巨人の星』『タイガーマスク』『愛と誠』など数々の超ヒット作を世に送りだした。

堺屋太一

われら、セコイ首都を待望す！

Tichi Sakaiya

一九三五年大阪府生まれ。
作家、経済評論家。
東京大学経済学部を卒業後、通産省に入省。大阪万博、沖縄海洋博などを手がける。また「通商白書」を五回書き、昭和三十七年度版の「水平分業理論」は世界的に注目を浴びた。そのかたわらでベストセラー小説「油断！」をはじめ数々の著書を発表する。通産省退官後は、執筆、テレビ、講演などで幅広く活動中。現在は政府の「国会等移転審議会」の委員も務める。最新著書に『明日を読む』（朝日新聞社）『「次」はこうなる』（講談社）がある。

この対談は『週刊アスキー』の特集「SIM JAPAN」の中で行なわれたものである。今日本が抱えている問題が「もしこうなったらどうなるだろうか」とシミュレーションをしてみる企画で、この回は「首都機能移転」がテーマだった。「新首都は長野だ」に始まる岡田案に、あくまでも現実路線で対応する堺屋先生。二人の思い描く日本の未来像のギャップは、見方によっては上司と部下、あるいは父と息子の感覚の差のようにも取れ、文字通り、ここでしか読めない異色の首都移転論議となった。（九七年五月十九日対談）

明治以来の最大の議論「首都機能移転問題」

堺屋 首都機能移転問題[001]というのは、膨大な議論と調査が積み上がった話で、国会の議論だけで九百時間を超えてます。普通は一年間に百四十時間なんです。明治以来最大の議論なんですね。だから資料も膨大なら、議論も長大。

岡田 何でそんなに議論するんですか。

堺屋 それはやっぱり、大問題だから慎重に、ということでしょうね。

岡田 論点が分散しちゃうんですか。

堺屋 論点の分散もあれば、深まりもありますね。

岡田 それはどこへ首都を移転するかということについてですか。

堺屋 ということは、今のところまだ議論していないんです。その議論をしたから、これまでのは全部だめだったわけです。平成になってその議論は一切やめて、まず首都機能を移転するという議

001——
首都機能移転問題
日本の政治、経済、文化などの中枢が東京に集中し、人口過密・交通渋滞・環境破壊・災害時の全国機能麻痺・過疎地域の拡大が深刻になっている。その基本的対策として、行政機関や国会等の首都機能を東京圏以外の地域に移転する構想。九八年一月には、移転先地を選定するため、地域ごとの詳細な調査を行なうべき地域（調査対象地域）が設定された。

論をやろうと。どこへという議論は、九八年の一月からやります。
岡田 いつ頃決まるんですか。
堺屋 九八年の末ぐらいです。
岡田 一年で決めちゃうわけですか。
堺屋 そうです。もうそこまで煮詰まってるというわけです。
岡田 具体的な話になっちゃうんですけど、決める先としては東京というのもありうるわけですね。つまり「東京に動かします」ということもあるわけですよね。
堺屋 今のままはあるけれど、東京に動かすという議論はないんです。たとえば、東京の湾岸に持ってくるとか、それはないんです。
岡田 今のままでいくということも、選択肢の中にあるんですか。
堺屋 あります。それは法律に書いてあります。「東京との比較を含め検討する」と。
岡田 官僚たちは動かしたくないんでしょうか。
堺屋 中央官僚への調査では、動かしたいのが五六パーセント、動かしたくないのが四〇パーセントでしたね。
岡田 動かしたい人というのは何に危機感を持っているんですか。みんな東京に家を構えているわけでしょう?
堺屋 いや、家を構えている人は少なくて、公務員宿舎とか、妻の実家などに住んでいる人が多いんです。そういう事情もひとつにはあるでしょう。それと愛国心でしょうね。この日本の現状を見

ていると、やはり動かしたほうがいいという人が多いです。さらに、阪神大震災[002]も相当影響していますね。東京で地震が起こると、どんなにしてもやっぱり救いがたいですからね。

岡田　では動かしたくない人というのは、なぜ動かしたくないんでしょうか。

堺屋　先ほど言われた、自分の家があるとか生まれ故郷であるというほかに、やっぱり東京でなけりゃ俺は勤める気がしないんだという人も多いんです。私が通産省にいたときに、九つの研究所を東京都内から筑波へ移転しました。そうしたら「月給も安いし住宅も悪いのに、私たちが東京に住んでるのは、ただただ、銀座や赤坂の灯を毎日見たいからだ」という人が一番多かったですね。

岡田　どこかへ移転しちゃっても、自分の息子たちはやっぱり東大へ行かせたいわけですね。

堺屋　それも議論が分かれていて「東大の権威が保てるのか」「首都だから東大だ」という人もいれば、「いや、やっぱり東大は東大だよ」という人もいますね。

岡田　「東大を持ってきちゃえ」という人はあまりいないですか。

堺屋　東大は別の観点で千葉県のほうに土地は買っておりますが、それは東大が決めることで、政府が決めることではありません。

岡田　なるほど。

首都は応接間で十分だ

岡田　ところで、今回の「SIM JAPAN」で首都機能移転先を長野にしたんですけど、僕は首都というのは、日本の応接間であればいいんじゃないかと思ってるんですよ。その家の者には白々し

002 ──
阪神大震災
正式には、阪神・淡路大震災。九五年一月十七日五時四十六分、淡路島北部を震源とするマグニチュード七・二の地震が発生、震度は最高で七まで達した。この地震による死者は六千人以上、負傷者は四万人以上にも達し、高速道路の倒壊、中高層ビルの崩壊、火災による被害など、神戸市を中心に甚大な被害をもたらし、戦後最大の震災となった。

い空間でふだんはあんまり使わないんだけど、お父さんのお客さんが来ると通す。つまり外交のための機能だけ果せばいいんじゃないか。となると風光明媚、オリンピックも開催されて一応のインフラも整った長野がピッタシじゃないだろうかと思うんです（笑）。

堺屋　実際には長野という話はないんだけど（笑）、でも首都の機能をどのようなものにするかというのは、移転論議の重要な一部なんです。いわゆる首都機能の三権、司法・立法・行政だけに限った単品都市にするのか、あるいは大学などの文化機能も含めるのか、さらに経済機能はどうするかといったことですね。

――今お二人がおっしゃった「機能」の内容って、微妙に違うような気がしますね。岡田さんは機能というか、概念的なものですね。

岡田　僕らにとって、首都ってほとんど意味がないんです。通信手段や交通網の発達で、首都じゃなくても仕事はできる。だったらもう国民には関係なくて、完全にお客さんを迎える部屋としてだけあればいい。

堺屋　首都機能は、国家がある限り、やはり必要だと私は思います。国会、中央官庁、最高裁判所はどうしても必要ですよ。だから私は、その三つに絞った単品都市にすべきだと思います。応接間と言うより、そこにある応接セットのイメージですね。応接間ほどの比重は持たないけど、人が出入りするからそれなりの格式はある。そして、比較的小規模な都市ですね。経済的機能はまったく必要ないと思っています。日本銀行や証券取引所は作るべきではない。さらに、北海道から沖縄まで全国を公平に見られるような中立性がないといけない。いつまでも東京にぶら下がっていたんじ

ゃ、いっこうに解決しないと思います。
岡田　その三権は、同時に動かして、しかも一カ所じゃないといけないんですか。
堺屋　これについては、延々たる議論があります。たとえばドイツは、国会と行政府は一緒ですが、最高裁判所はカッセルにあります。今度首都機能がベルリンに移りますが、その場合は国会と中央官庁が半分移って、国防省と社会保険庁はボンに残る。また、最高裁判所もカッセルから移らないことになっています。その場合にどんな非能率が生まれるかはわかりませんが、それは国の体制によって違います。日本の場合、たとえば鎌倉時代は、首都機能は鎌倉にあった。多くの人々は、首都は京都にあって首都機能が鎌倉にあったと解釈しているんです。
岡田　でも、三権というのは、僕らとわりと距離がありますよね。そこらへんでホイホイと生活している人にとっては「政治ってよくわかんねーよ」とか。司法といっても「離婚するときには家庭裁判所というのがあるのか」とか、せいぜいそのくらいの関係しかないですよね。
堺屋　そう。離婚や交通事故で訴えられたり借金に追われたときぐらいで、たしかに司法は日本人には縁遠い。でも行政は逆に身近で、何かことが起こると政府は何をやってるとか、役所の規制がどうだとか言う。
——頼りますよね、みんな。
堺屋　頼りすぎなんですよ。だから今は行政だけが強くて、立法と司法が空虚なんです。厳密には民主主義じゃなく、官僚主導制の国なんですね。
おもしろいことに、日本のヒーローには公務員が多くて、とくに江戸以降は水戸黄門、遠山の金

さんなど行政府の人ばかりですよね。公務員でないヒーローというのは、国定忠治だとか幡随院長兵衛[003]などのアウトローしかいないんです。こんな国は世界中にはありません。日本人はホントに官僚が好きなんだなあって、いやになります。なぜそうなるかというと、江戸の将軍様のお膝元に首都機能があった。明治は官僚政府のお膝元に首都があった。また、戦後においても、官僚主導による非常に強い規制と指導によって、日本という国は運営されてきた。このことと密接な関係があるんですね。

岡田　それは富国強兵の思想というか、日本という国を経営し動かしていくためには、いいシステムだったわけですよね。

堺屋　ええ、ある時期まではいいシステムだったと思いますよ。とくに規格大量生産をする上では、非常に効率的な制度だった。この制度はそもそも明治維新のときに、ビスマルクのドイツ帝国を真似したんです。いわゆる官僚主導型啓蒙主義、エンライトメントというんですが、これを真似したことから始まったわけです。とくに戦後の復興は「昭和十六年体制」という戦時下に作られた制度が基本になっていて、それが強化されている。教育においては、何丁目何番地に住んでいる子どもはここの小学校に入りなさいと、役人が強制入学制までやっているわけです。また日本人も、自分の子どもや自分自身が入る学校まで役人に決めてもらうことを喜んでいるという状況です。しかし、ここまで役所が入りこんでいる国は珍しいんですよ。

それに、テレビや雑誌などのマスメディアも東京に集中していますが、これだって自然に集まったのではなく、役人に集められたんですよ。雑誌には東京に取次四社体制というのがあります。つ

003――
幡随院長兵衛（ばんずいいんちょうべえ）
一六二二～一六五七？　江戸初期の侠客。浅草花川戸に住み、町奴の頭領だったが、旗本奴と争い殺された。歌舞伎狂言にも脚色されている。

まり、東京にある四つの取次会社以外は雑誌を取り次いではいけないとされたんです。ですから、たとえば大阪市で印刷された本を橋ひとつ挟んだ尼崎市に売るのにも、東京に持ってこないと販売できない。「再販制度」[004]と絡んで、今必死になって擁護しているのがこれなんです。誰も反対だの、崩せなどとは言わない。

さらにテレビに至っては、世界に類例のないキー局システムです。東京のキー局でないと、全国の番組編成権が与えられないという、特殊な制度です。つまり、ありとあらゆるものを東京へ集めることが、行政主導で行なわれたんです。このために、全国の情報が東京一極発信となったわけです。だから東京からコマーシャルを流すと、同じ製品が全国でさーっと売れる。つまり、規格大量生産には非常に便利な国ができた。

首都はすでに無意味化している

岡田　しかし、ここまでできあがったシステムをいじって変える必要があるんでしょうか。たとえば僕は大阪の出身ですが、最近はみんなが外で大阪弁をしゃべらなくなっています。標準語の扱いがすごくうまい。僕が学生の頃は、大阪弁しか話さなかったんですよ。標準語を使うと「なに気取ってんねん」となる。でも今の学生は気軽に使い分ける。家に帰ったら大阪弁、外では標準語、コンパやカラオケになればノリで大阪弁というふうに。それはやはり小さい頃から、テレビとかメディアを通して、文化の中心は東京にあるのであって大阪には何か違うもんしかないと、そう割りきって考えているんじゃないかと思う。以前は、大阪というのは比較的東京に対抗しているところが

004――
再販制度（再販売価格維持制度）
商品の生産者と流通業者の間で販売価格（再販価格）を事前に決め、その価格を守らせること。独占禁止法では原則違法だが、安売りや乱売による商品の質の低下を避けるため商品限定で適用されている。書籍や雑誌、新聞、音楽CDなどの著作物については現在見直し中で、九七年度末までには方針を打ち出す予定。

ありましたけど、もう過去の話ですよ。すべてが東京からの再拡散で、全国がこれだけ平準化されちゃっている。それをもう一回崩して、以前の地方色豊かな時代に戻そうというのは、あんまり現実性がないと思うんです。

堺屋 いや、あると思いますよ。またそれがなかったら、日本は世界の都市間競争に対抗できないんじゃないでしょうか。

岡田 競争というのは、経済的な競争のことですか。

堺屋 文化的・発想的競争です。それがソフトウエアを生んだり、芸術を生んだりして、経済力に転化しますけどね。たとえば、アメリカは、ニューヨーク、ロサンゼルス、ピッツバーグ、アトランタなど、いろいろなところからあらゆる情報が発信されている。そのうちでどれが勝ち残るかという競争で、常に刺激を受けているわけです。ニューヨークの文化も、ハリウッドの文化も、その次を戦々恐々として、自らも新しいものをクリエイトしていこうとしている。しかし日本にはそういう状態がまったくありません。これは放送局もそうだし、雑誌社もそうだし、証券会社も、政府官僚もそうですよね。もう東京で決めて、全国に知らせたら、地方からの反応はなくていいんだと。だから地方からの反応はなくても東京さえ通ったら、すべてOKという発想になっていますね。

岡田 僕にしてみると、自分自身が、ゲームやアニメなどのソフトウエアだけの産業のところから来てる人間だからなのかもしれませんが、今の首都機能移転論議にあまりリアリティを感じられないんですよ。パソコン通信、ネットワーク、あとファックスなどの通信手段が出てきたら、何も東京に出ていかなきゃいけないってことはなくなりますよね。マンガ家も、昔だったら東京へ出てこ

なければ絶対マンガ家になれなかったのが、もう、どこの地方でマンガ描こうが関係なくなってますよね。つまり、首都というのが、自分たちから見るとすでに無意味化しちゃってるんですね。

堺屋　いや、統計的に見ると、とくにアニメなどの制作はどんどん東京に集まっています。とくにこの十年間、バブルが崩壊してから猛烈な勢いで東京へ集まっているのが現実ですよ。それはなぜでしょう？　以前から、ファックスができたら、その前には電話が直通になったら、その前には新幹線ができたら、飛行機ができたら、地方分散すると言われ続けてきた。そしてアメリカやヨーロッパではそうなりました。ところが日本だけは、逆に猛烈な勢いで東京へ集まってきた。みんなが地方に広がっていったと言われていたけれど、四年たったらやっぱり東京に集まった。こういう結果を繰り返しているのは、なぜでしょうか？　この議論は三十年間、私が青年時代から何回も繰り返されているんです。たとえば地方に行っている人で目立っているのは倉本聰さん[005]。あの方は北海道へ行きましたよね。でも全体としては東京に集まっているんです。

岡田　いや、僕が言ってるのはそういうトップクリエイターの話じゃなくて、もっと零細企業レベルのゲームハウスなんかのことです。みんな地方でも暮らしていけるようになっています。

堺屋　そう言いますけど、統計を見ると、たとえばゲームハウスというのは、北海道にあったのも神戸にあったのも東京へ来てますよ。

岡田　本社機能を東京へ移しているだけで、実際の製作現場は地方にあるんじゃないでしょうか。

堺屋　職業統計があって末端までわかります。これで見ると、現場はもっと東京に集まっていますよ。極めて小さいところに全部集まっています。今の岡田さんの話は、五年刻みで見ると毎回毎回

005
倉本聰（くらもと・そう）
一九三四〜。脚本家。作家。ニッポン放送を経て脚本家に。七七年に北海道の富良野に移り、その近辺を舞台にしたドラマ『北の国から』シリーズで八一年度テレビ大賞を受賞、八二年には山本有三賞を受賞した。八四年、後進の育成のために「富良野塾」を開き、主宰している。

そうなんですよ。だから、その特殊な例の話はよくわかるんですが、それを十年刻みで全体を見てみると、どうもそうではないんですね。放送制作などでも、地方制作のこんな番組が当たりましたっていうと、その番組のプロデューサー以下全員、次の年には東京へ来てるんですね。今までさんざんJターンだとかUターンだとか言ったけれども、結局慰めでしかなかった。やっぱり東京集中が進んでる。とくに知的活動については通信機関が発達すれば、飛躍的に東京に集まるというのは、誰も否定できない現実ですね。

日本人は官僚統制が好きか、嫌いか

岡田 東京へ集中してしまうというのは、東京がおもしろいからだ、というふうにも考えられますよね。

堺屋 それもありますね。

岡田 でも、日本のどこかへ首都機能を移転しても、そこをおもしろくすることって、できないですよね？

堺屋 できると思います。

岡田 できますか。

堺屋 はい。日本中の都市をおもしろくできると思う。それができないなら、首都機能移転というのは、これほど大きな運動にならなかったと思いますよ。

岡田 首都機能というのは、どっか適当なところでまじめにやってくれて、東京はおもしろいまま

に残してくれたほうが、結局現実的じゃないかなと思いますが。

堺屋　その通り、首都機能がなくなったら、東京は非常におもしろくなりますよ。けれども、首都機能が移ったところは、そういった環境の好きな人にとってはおもしろくなると思います。ただ、みんなにおもしろくなるとは限りません。たとえばアメリカならば、ワシントンがおもしろいと思う人もいれば、ニューヨークがおもしろいと思う人もいる。ロサンゼルスだと言う人もいれば、モンタナだと言う人もいます。つまりアメリカの場合は、みんながそれぞれの都市をおもしろいと思っているから、都市間競争があるんだと思うんです。同じことはドイツについても、イタリアについても言えると思いますね。

岡田　それでしたら日本だって、福岡もおもしろければ大阪もおもしろいはずですけども、現実にはあまりおもしろくないですよね。だから、地方の若者が自分のところの方言を捨てて、標準語になっちゃうわけです。もし東京から首都機能がどこかに移っても、その移転先をおもしろくする方法って、僕にはわからない。というのは、僕はおもしろくする専門家だったからなんです。おもしろくなるというのは、だいたいこんな環境が整っていたら、二十年ぐらいで勝手におもしろくなるんじゃないかなと見当がつくんです。その環境を作る、カオスみたいなものが、どうも持ちこまれないような気がするんです。新しい首都の場所を、たとえば札幌でもどこでもいいんですけれども、そこに決めてポンとみんながそこへ行く。それで、札幌の文化を活性化しようとしても、その方法がないですよね。これまでも文化庁みたいなところが、ありとあらゆる文化を育てる試みをしてますけど、ことごとくはずれてますよね。すでにあったものに対して賞を設定するとか、そんな程度

でしょう。

堺屋　それは、はずれてると言うべきか、はずれてないと言うべきか、どちらでしょうねえ。問題なのは、先ほど言いましたように、東京のおもしろさのひとつには、出版社、テレビ局、およびそれに関係している、いろんな人たちがいるということなんです。だから、この一極集中をやめればいいんです。そうすれば、テレビ局だって日本中にキー局ができ、そこで自由に考えた人々が番組を販売すればいいわけで。そこでNCC[006]とか、スター放送[007]とか、そういうものが育つと思うんですよ。あなたがおっしゃったのは、官僚統制に依存してやろうとするからできないんです。

岡田　でも官僚統制というのは、みんな好きなんですよね。日本人のメンタリティとして、そういうのが好きでしょうがないように見えるんですが。

堺屋　いや、それだったら、日本人は自由経済と民主主義に向かない民族だと思いますよ。

岡田　先生の著書にそう書いてありましたけれど。

堺屋　それなら、おもしろいことはやめたほうがいいね。みんな軍服を着て、ちょうど戦争中に官僚が夢見たように国民服というのを定めて、全員ファッションは国民服だとしたほうがいいと思いますね。

岡田　いや、そこまではしたくないんでしょう。つまり日本人が一番好きな姿は、自分らはそこそこ自由であって、誰かに決めてほしいと。いわば、制服がない学校みたいなもんですよね。

堺屋　それだったら、私はこれからのソフト化の時代、グローバル化の時代に、日本は一流の国になれないと思うんですね。私はもっと日本人を信頼してます。たしかに今までは規格大量生産をし、

006 ――
NCC
New Common Carrierの略。電気通信事業の自由化に伴って新たに参入した企業のこと。既存のコモンキャリア（NTT、KDD）に対しこう呼ばれる。いわゆる新電電。

007 ――
スター放送
衛星を利用したテレビ放送は、国境を壁として電波を閉じこめられないため、周辺国でも見ることができる。これを利用し、複数国を対象とする「越境テレビ放送」を行なう放送事業者が現われた。スター放送は香港の放送局。九一年からアジアサット衛星を使って国際衛星放送を開始。日本から中近東までの広範囲に番組を配信し、その視聴者は二億人以上といわれる。

近代工業国家を作るためには、官僚統制制度がいいと思って選択した。言い方を変えれば、官僚統制が便利だったから使っていたという感じだな。しかしこれからは近代工業社会ではない。だから、官僚統制というのを日本人自らが、自由にはずしていくだろうと思いますね。官僚統制が好きな民族だとは、僕は思わない。もっと国民を信頼してます。その点、ちょっとあなたの意見とは違いますね。

堺屋、岡田、それぞれの日本人像

岡田　僕が大学生ぐらいの頃まで、民族にはその成長の過程があるという話を、僕らより二世代ぐらい上の人がよく言っていたんです。たとえば、日本人はまだ子どもだから、官僚に頼っていた。でも、いずれ成長して大人になるんだから、そろそろこれまでのような官僚の干渉やアメリカの干渉ははねのけて、自分で決めよう。そんな内容の話だったんですけれども。

堺屋　それは終戦の頃に言われていた、日本人十二歳論というものですね。マッカーサーやライシャワーといった、いわゆる戦後第一世代の人が来て、そういうことを言ったんですよ。これまた非常に極端というか、かなり誤った議論でした。「日本もアメリカも同じだが、違いは発展段階だけである。日本は十二歳で、アメリカは大人だ。だからやがて日本も成長して、アメリカとそっくりになる」こんな話ですよね。でもそれは相当誤ってましたね。そういう部分も、なきにしもあらずという程度の議論でした。今私が言ってるのは、日本人がアメリカのようになるとか、フランスのようになるとかいうものではなしに、日本人は近代工業国家になるため

の手段として、官僚統制というのを自ら選んだ。ところが、今や近代工業国家を卒業して、これから多様な生産をしていく、ソフトな社会を作らなきゃいけない。そうなってくると、日本人自ら官僚統制を放棄していくんです。国民的な好みは、時代で変わります。平安時代のような公家好みもあれば、戦国時代のようなチャンチャンバラバラの時代もあったわけです。それぞれの時代精神に規定されながら、日本人は変化してきた。日本人は時代に沿って倫理観や美意識を転換していける、極めて敏感で柔軟な能力を持っていますよ。

岡田　僕が感じる日本人の実像も今のお話と同じなんですけれども、解釈が違うんです。そこそこの支配やコントロールをしてもらうのが好きなんだけれども、その中で自分の自由時間ぐらいはほっといてくれ、というような感じだと思います。つまり、もう自由は飽きたんじゃないですか。自由とか創造とかクリエイティブということに、もう疲れてきている。やってみたけどあんまりよくなかったと思って、手放しはじめてるんじゃないかな。

堺屋　そうは思いませんね。日本人は自由な状況を、少なくともこの三百年の間、一度も経験したことがないと思いますよ。

岡田　それはもともと嫌いだったんじゃないでしょうか。

堺屋　いや、損だと思った。

岡田　世界中の人が、というか先進国の人たちが、クリエイティブだ、自由だという方向に向かうのはいいんですけれども、それももう限界がありますよね。みんながそんな自由になれるはずがないですし、衝突だってある。クリエイティブになることで、よその国に文化侵略するということに

もなっちゃいますし、僕がやってるゲームとかアニメにしても、ヨーロッパでは、やってはいけないというところがいくつもあります。そんな状況で、先生がおっしゃられていることというのは、資源が有限だというのと同じように、人の価値観の広がりや転換にも、ある限界というのがあるのではないでしょうか。

堺屋　さあ……。僕はそれほど官僚的な発想はしないんだけどね（笑）。

岡田　これって官僚的ですか。

堺屋　うん、極度に官僚的ですよ。今、規制緩和反対のエリート官僚はあなたと同じことを言います。「先生、規制緩和と言いますが、それは違いますよ」と。ヨーロッパであろうがアメリカであろうが、あるいは中国であろうが、ゲームソフトを拒否したいと思う人もいれば、逆にどんどん受け入れたいという人たちもいます。時代がグローバルになるほど人間は多様性を求めるんだと思いますよ。たとえば、村落共同体でみんなで農業やって、祭りだ、葬式だ、花見だと、生産も消費も娯楽も一緒にやってる。そんな生活をしてるところへ行商人が鮭を売りにきたら、その日は村中で鮭を食べるしかなかったわけです。村にはほかの魚も肉もないわけだから。ところが江戸になり、東京になると、鮭もあれば鰯もある。刺身がいいというのもいれば、洋食がいいというのも出てくる。そんなふうに多様性が出てくるんですよ。

　ある人がゲームソフトを拒否するのは事実です。しかし全体として見れば、各人が自由に選択をするようになり、結果として何百万人がゲームソフトを受け入れるようになればいいんです。それは、とりもなおさず政府の権限から自由になるということです。

無意味な首都、尊敬されない政府

——政府の仕組みを変えずに移転はできませんか。

堺屋　できません。現在の永田町や霞ヶ関がそのままポンとどこかに飛んでいくなんて、物理的にも組織的にも無理です。ある省庁を移すとなれば、どこの課が行くか、どの仕事を持っていくか、これは本当に必要な仕事かといった議論が必ず起きますから。日本の歴史を見ると、首都機能の移転ですべて社会が変わっているんです。奈良、平安、鎌倉、室町、安土桃山、江戸時代。そして現代は東京時代と呼ぶこともできる時代でしょう。逆に、移転しなかったときには、絶対変わらなかったことの証明でもあるわけですね。首都機能は移転する、でも社会は変えないで規制を続けるということは、理論的には考えられても事実上は不可能ですね。

岡田　でも、先生がおっしゃるように、首都を変えるごとに必ず新しい文化が生まれるといっても、基本的には日本が昔から持っている支配体制、つまり集権体制が形を変えて移動しているにすぎないんじゃないですか。

堺屋　いや、必ずしもそうではありません。たとえば鎌倉時代の場合、首都機能は鎌倉にあったけれども、経済機能や文化機能は京都にあったわけです。従って、地方分権が非常に進んだんですね。だから集権的なものが移動したとは思えません。室町時代も同じですね。集権的なままで移動してたら、戦国時代のような内戦状態にはならなかったと思いますよ。

岡田　さっきから、なぜ多様性がいいのかというのが引っかかっていて「何か違うなあ」と思った

んですけどね。堺屋先生が「多様性をもってクリエイティブにならなければ」とおっしゃるのは、国際的に見て日本は文化的に二等国であるという前の世代の価値観、その部分だけがくっついてきているように思うんですが。

堺屋　岡田さんがおっしゃっているのは、国家統制がいいんじゃないか、ということなんですよ。

岡田　向いているんじゃないかと思っているんです。

堺屋　要するに岡田さんがおっしゃるのは、日本というものを、日本人と日本国とに分けて、日本国はどうでもいいと。日本人が世界中へ飛んでいって、それぞれのところで才能を発揮すればいいという意味ですか。

岡田　というか、首都機能のほうもそうだと思うんですけど、僕がその三権をどっかへ持っていって、そこで好きにやらせろと言ってるのは、それによって無意味化が進むからなんです。本気で政治改革したいなら、国民がもっと政治に無関心になるようにしむけるほうが、よほど現実的ですよ。政治改革って「どうしたら国民が政治に関心を持ってくれるか」ということだと思うんです。だから首都は国民から遠く離して、サミットとか面倒なものはそこで勝手にやってもらう。首都はますます国民には無意味になる。逆にそれが国民の意識を変えるんではないかと。

堺屋　そうですね。でも初めにも言ったけど、国家がある限り完全な無意味化はできませんよ。罪悪を犯した人を裁くとか、法律を作るとか、戸籍謄本を作るとか、絶対必要です。ただ、無意味化するのではなくて、その規模を、今のような大きくて立派なものじゃなくて、小さくてしなやかなものにしたいんです。そのためには、東京のような堂々たる都市ではいけない。将軍様のお膝元以

来の伝統を引き継いだ、帝都の発想を払拭しなくてはだめですね。

今の政府というのは、相撲協会なんですよ。まず、相撲をする人は十五歳で相撲部屋に入って、相撲の練習だけではなく、チャンコの世話から、兄弟子の背中流しから、全部やらなきゃいけない。力士になって出てくるときは、ちゃんと髷を結って、髭を剃って、蹲踞（そんきょ）の姿勢をして、柏手を打つ。そして、何よりも大事なことである、誰が横綱になるか、誰が幕内になるかを、すべて相撲協会が決めていくんですね。それと、今は学校教育は公営制で、国立大学はたくさんありますね。道路なんて全部国が作ってますね。つまり相撲取りの半分は政府なんですよ。しかも行司も政府なんですよ。さらに相撲茶屋までやりまして、これがやたらと高いんですね。

でもこれからは、相撲協会は片隅でせいぜい行司役か審判ぐらいをやってくれればいいわけです。それで、力士も相撲興行を行なう座主も民間に任せてほしいというのが、一番のポイントなんですよ。プロレスみたいに、好きなだけ団体作ったらいいんです。それで選手も民間に任せる。べつに柔道界から小川直也さんが入ろうが、ジャイアント馬場さんが六十歳でやってようが、女子プロレスができようがいいじゃないか。もちろんどこそこが一番強いとか、どこの団体が一番美人が多いとかいろいろ言うけれども、それはもう好き好きですよ。で、美人が好きな人は美人プロレスを見にいけばいいし、メジャーの好きな人はメジャーを見にいけばいい。いろんなタイプがあっていいんですよ。その中で誰が生き残るかは消費者が選べばいいわけで、政府が決めることではない。大仁田厚[008]みたいに負けてばっかりいても、人気があればメインイベントでいいと。べつに十四勝以上しなきゃいかんとか、そんなことは政府が決めることではない。そうするためには、やっぱり小さ

008 ———
大仁田厚（おおにた・あつし）
一九五七〜。プロレスラー、タレント。七四年にプロレスラーデビュー。八九年に新団体FMWを設立し、「有刺鉄線電流爆破デスマッチ」や、試合後に泣き叫ぶ「ド演歌プロセス」で人気を集める。九五年に引退するが、その後復帰、九七年に新団体ZENを設立した。タレントとしても活動中。

くて、そして、語弊がありますけれども、あえて言えば、それほど尊敬されない政府になってほしいと思うんですね。

日本を変えるのは「セコイ首都」だ

岡田　ゴールに関しては、堺屋さんのおっしゃる通りだと思うんです。ただそのゴールに行く手法として、僕は、どんどん無意味化していけばいいんじゃないのかと考えちゃうんです。それ以外に、すでに権益を持っている人間から、権益を引きはがしたりする現実的な方法って、ないんじゃないですか。それはすごく苦しいことのような気がするんですよ。

堺屋　たしかに、日本で規制緩和、行政改革、地方分権と叫ばれてから十八年になりますが、この間まったく進まないばかりか、逆に猛烈に強化されたんですね。私にとっては絶望感みたいなのがありましてね。これは、もう、首都機能移転でもしない限りできないんじゃないか。そうでなくても、阪神大震災やオウムサリン事件[009]、O―157[010]などで規制はものすごい勢いで増えてるんです。それを抑えられないですよね。

――お二人の共通点は、首都機能移転が国民を変えるということのようですね。岡田さんは政治の無意味化が人の心の変化を促すから、規制をいじるよりはこのままの状態で、首都をどんどん無意味なものにしていくべきだと。堺屋さんは、首都機能の移転は、人の心を新しい状態にシフトする。しかしその首都は小さくあれということですね。

堺屋　古い言葉で言うと「民心の一新」ってやつですね。それはたしかに効果があると思います。そ

009――
オウムサリン事件
→19ページ脚注参照。

010――
O―157
病原性大腸菌の一種。O（オー）は菌の特性を示すドイツ語の頭文字、さらに大腸菌の分類で百五十七番目に見つかったことから、この名称が付いている。毎年百件程度は、この菌による食中毒が報告されているが、九六年、五月末の岡山県での集団発生を皮切りに七月末までに、全国の感染者が八七〇〇人に達し、死者を七人出した。原因にはいろいろな食品が取り沙汰されたが、真相はわからぬまま。

れと、首都機能が移転すると「日本は変えられる国だ」と誰もが思うでしょう。今は若い人の間でも「もう世の中変わらないよ。今日を楽しく生きたらいいじゃないか」という「陽気なペシミズム」が流行ってるんです。ぜひこれを変えたいと思うんですが。

岡田　「民心の一新」みたいな大局的な目的のために首都機能を移転しよう。でも、その首都っていうのはセコイほうがいい。できりゃ貧乏くさいほうがいいくらいだと。それくらいが自分たちの身の丈に合った首都なんじゃないかってことでしょうか。

堺屋　貧乏くさいってのはちょっと語弊があるけれども、小さくて軽やかな、という……。

岡田　また、そういういい言葉つけちゃうと、いつもみんなそこで誤解しますから。あえて「セコイ首都待望論」でいきましょう。

堺屋　セコイというのはいいかもしれないね（笑）。

鶴見済

ゴドーを待ちながら

Wataru Tsurumi

一九六四年東京都生まれ。フリーライター。
東京大学文学部社会学科卒業後、電気メーカー勤務、編集者を経て、フリーライターとなる。九三年にデビュー作『完全自殺マニュアル』（太田出版）を発表。市販されている薬の致死量、確実に死ねる自殺法などを、物理的かつ詳細に紹介した。この本への社会的反響は大きく、発刊禁止を求める団体もあり、出版業界もさまざまな規制をした。それにもかかわらず百万部のベストセラーとなった。このときのメディアや知識人、読者の反響は、続編『ぼくたちの「完全自殺マニュアル」』（編著・太田出版）にまとめられている。著書はほかに、『無気力製造工場』『人格改造マニュアル』（ともに太田出版）などがある。

この対談は中央大学の学園祭「白門祭」で行なわれたイベントである。都心から遠く離れた中大八王子校舎。駅からの距離もハンパじゃなく、「こんなところまで来るやつはいるのか」と思いきや、そこは若者のバイブル的著作を持つ二人である。会場の大教室は学生で超満員。鶴見氏の追っかけの女の子まで来ていたという盛況ぶりだった。（九七年六月十三日対談）

「大きい物語」不在の時代

鶴見　前に岡田さんと、今のマンガやアニメで「大きい物語」というものが作れなくなってるんじゃないかという話をしたことがあって。

岡田　ちょうど『エヴァンゲリオン』[001]が話題になっていた頃ですね。でも『エヴァ』に限らず、この五年間ぐらい、マンガというものは妙にラストシーンが崩れているんです。

鶴見　それは単に編集部が引っ張るとかそういうことじゃなくて、作家がストーリーの終末ってものを描けなくなったんだろうと。望月峯太郎の『ドラゴンヘッド』[002]も、もう収拾がつかないような状態になってる。なぜ、そういうでかいストーリーを展開すると破綻してしまうのか。それは今の時代状況と関係ある重要なことかなという気がするんで、そこから今の社会の正体を暴こうと。

岡田　前の自分の会社で『不思議の海のナディア』[003]というアニメーションを作ったんですけど、主人公は正義に決まってるから、元気はつらつな少年とかちょっとひねくれた女の子とか、適当に配

001 エヴァンゲリオン
九五〜九六年放映のテレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』。内気な少年、碇シンジが人型兵器「エヴァンゲリオン」を駆り、「使徒」と呼ばれる正体不明の敵と戦う。大胆な表現手法や、十四歳の少年の繊細な内面を扱った内容が大きな反響を呼んだ。ビデオやLDの売り上げは二百五十万本以上で、商業的にも成功をおさめた。九七年三月公開の劇場版を一般に「春エヴァ」、七月公開分を「夏エヴァ」と呼ぶ。監督　庵野秀明。ガイナックス作品。

列すりゃいいわけです。ところが敵を設定するときに、悪の帝国みたいなのを作ろうとしたんですけれども、悪の帝国のほうに視点が移りますよね。そうしたら悪の帝国の内部倫理も描かなきゃいけなくて。悪の組織だろうと、朝飯は食うだろうし、上司は部下に説教をするはずなんですよ。悪というだけであって、実際は企業団体というか集団ですから、そこにだって人間性はあるし、トップの命令ひとつでみんなが動くわけじゃないという現実もある。だからたとえば、その中にだめなやつがいれば、悪の中間管理職は悪の平社員に向かって説教しなきゃいけないんです。「お前、こういうことでいいと思ってるのか」とか、人生経験を語りたおして説教しなきゃいけない。でも、そういう説教の根拠みたいなものを持ちえないんですよね。

鶴見　親が子どもに言う言葉を失ってるのも同じことかな。

岡田　たぶん、それとも共通してると思うんですけれども、これまで考えなくてもよかった「正義が正義たる理由」というのが存在しない。悪者が世界征服だとか、とにかくハルマゲドンだとか、ゲルマン民族優秀だとか言ってくれたから、それに反対するだけでよかったんです。視聴者は納得してくれた。

鶴見　絶対悪っていうのがあってくれれば、簡単なんですよね。最後に善玉が勝ってハッピーエンドとか。

岡田　『デビルマン』[004]なんかは特例ですけどね。途中で悪者の形が変わって、それを内包している人間が悪いんだっていうふうになっちゃったから。あれは、一回しか使えない大技を三十代前半で使っちゃったマンガ家が、いかにつらいかということでもあるね。

002――――
ドラゴンヘッド
『ヤングマガジン』掲載のマンガ。修学旅行中の新幹線事故で、生き残った三人の高校生。極限状況が続くうち、彼らの中にしだいに新たな人格が芽生えはじめる……。

003――――
不思議の海のナディア
九〇年にNHKで放映されたテレビアニメ。ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』『八十日間世界一周』を下敷きにして作られている。制作はガイナックス。企画・原作・プロデュースは岡田斗司夫。

004――――
デビルマン
永井豪のマンガで連載開始は七二年。悪魔に乗り移られながらも、人間の魂を失わぬ少年が、インベーダーとしての悪魔と戦う。

鶴見　そもそも、善玉が悪魔のデビルマンですからね。

岡田　その悪のほうも、じゃあ人類を征服するっていっても、その征服から先が出てこない。

鶴見　今の世の中も、いったい誰がいいのか悪いのか……。たとえば東西冷戦時代なら、資本主義社会ではソ連が悪者でしたよね。それとか、冷戦の一環としてベトナムとアメリカが戦争してて。ベトナムが勝ったっていうのも、とんでもない話ですけど。

岡田　アメリカが尻尾を巻いて逃げた。

鶴見　ゲリラ戦に歯が立たなくて、ジェノサイド（皆殺し）作戦なんていって、枯れ葉剤とかナパーム弾を信じられないほどまいて、なりふりかまわず勝ちにいったのに。当然、世界的な批判を浴びますよね。すると、たとえばジョン・レノンみたいな人が「ラブ・アンド・ピース」とか主張して、善玉がジョン・レノン、悪玉がアメリカとか、非常にわかりやすかった。そういう社会的な二項対立が、今はすっかりなくなりましたね。

岡田　東西冷戦のときに、ソ連が悪だとか、何かを悪とすることに飽き足りないマンガ家たちはどうしたかというと、たとえば「アメリカやドイツが悪いんじゃない。悪いのは戦争だ」っていう形で、究極の「戦争を悪にする」ことができたんですけれども。でも、それにもそろそろみんな気がついちゃって、使えなくなっちゃった。

鶴見　だから、今の時代は敵が見えないというか、敵がいない。この間、ピストルを輸入したがってる人と話をしてて、ピストルが大量に日本に出回るようになったらおもしろいけど、じゃあ誰を撃つんだと。天皇を撃ったって、昔の天皇を撃つ意味とまったく違っていて、意味がない。橋本龍

太郎が最高権力者かって言ったらそうじゃないから、総理大臣も撃てない。結局、全部自殺用じゃないかって。あとは脈絡なく撃つか、使えないんじゃないかって言ってたんですが。

岡田 ピストルを使って、豊かになろうともしてないわけですね。

鶴見 金儲けにも、あんまり関心ないですよね。

岡田 お金って、あんまりあってもしょうがないもんだ、って思っちゃってるし。あと、お金の価値を前提としている社会システムを軽蔑した以上、持っていてもあんまり楽しくないですよね。

鶴見 経済活動に励んでも、円高で叩かれちゃうし、もはや高度成長期のようにはいかない。

岡田 まことにもって、物語を作る人にとっては極めて貧乏くさい……。

生きがいって何？

鶴見 あとは、ラブコメの小さい話しかないのかな。

岡田 ラブコメも相手との関係性を信じられた時代はよかったんです。友情なんていうドラマが成立するのは、友情という題材、心と心のふれ合いという題材に、真実があるような気がしたからですよね。

鶴見 なるほど。

岡田 「この世の中にたった一人、自分を理解してくれる人がいるかもしれない」なんていう、ヘナヘナなことを考えられた時代だったから。もう、それがだめでしょう。

鶴見 最近、片親が多いから、結婚とか永遠の愛なんて神話もむなしい。

岡田　そうですね。日本では昭和三十三年に赤線防止法ができるまで、性風俗、売春なんて合法だったんだけれども、それよりも今のほうが、はるかに当たり前になっちゃってる。昔は堅気のやつってあんまり風俗に行かなかったんですよ。でも、今は堅気のやつでも風俗行くし、堅気の女の子でもどんどん風俗で働いちゃう。そこらあたりで、結婚の必要性とか、結婚への幻想とか、セックスへの意識がヘロヘロと崩れていきますよね。全部巨大な日常に飲みこまれていく。鶴見さんにとっては、願ってもない状況というか。

鶴見　願ってもないというか、俺はずっと前からわかってましたから。

岡田　いつぐらいからそういうふうに思ってました？

鶴見　小学校ぐらいですかね（笑）。

岡田　いやな小学生ですね（笑）。

鶴見　幼稚園かな。幼稚園のときに「終わりなき日常」って、言ってましたから（爆笑）。

岡田　どういう意味で「終わりなき日常」と言ってたんですか。

鶴見　延々と続く同じことの繰り返しの日常生活は、戦争よりこわいとか。とにかく、退屈が大敵だと。

岡田　そんな、ひねた子どもだったなんて。何かいやなことがあったんですか（笑）。

鶴見　いや、この社会に住んでいたら、それはまっとうな感覚だと思いますよ。「日常生活がつらい。戦争でもドッカーンと起こってくれ」という。だって、台風が来るとワクワクするじゃないですか。深夜もテレビで台風情報やってて、緊急事態っぽいし。江口寿史の『ストップ！　ひばりく

005――
ストップ！　ひばりくん
美少女、成績優秀、運動神経抜群、だけど本当は男の子という主人公のひばりくんが巻き起こす騒動をギャグタッチで描いた、学園ものマンガ。テレビアニメにもなった人気作品で、連載開始は八二年。だが、未完のまま現在に至る。

ん』[005]にも「台風が来るとワクワクしない?」って、ひばりくんが言う場面があるし。「デカイ一発」が欲しいんですよ。

岡田 いくつぐらいのときに、「これは来ないよ」って思ったんですか。

鶴見 『完全自殺マニュアル』の前書きに書いた通りなんですけど。岡田さんはあの頃、どう思ってました? 八八年頃の『危険な話』[006]ブームのとき。

岡田 この話するといつも「岡田はバカ」って言われるんですけれど。あのときに俺は、たしか二十冊買って配っているんですよ。人前でこの過ちを話すときはいつも「俺って恥ずかしいやつだな」って。

鶴見 いやいや。俺も、スパゲティ食わなかったっすよ。本当に「東海原発がいつ爆発してもおかしくない」と思ってました。だけどやっぱりしないんですよね、爆発って。

岡田 しろと思ってたんですか。

鶴見 たしか「どっちでもいい」と思ってました。卒業旅行で、中南米の紛争しているところに行こうとしてて。生きがいとかって今どき感じてる人、いるんですかね。

岡田 生きがいを感じてるというか、「生きがいがない」と言えるほど、さわやかなやつはいないんですよ。

鶴見 「生きがいって何?」って感じだな。

岡田 じゃあ、日常がすべてで、「巨大な一発よ、来い」と思っていた鶴見さんの生きがいは、何なんですか。

006 ——
危険な話
八八年に出版された本。チェルノブイリ発電所の放射能漏れ爆発事故を通して、次に原発事故が起こるのは、日本かフランスだろうと予見した。著者の広瀬隆氏は原子力発電所に勤めていた経歴を持つ。

鶴見 生きがいの前に「普通の状態」を目指してましたから（笑）。

岡田 現在の生きがいはやっぱり、チンタラ生き続けることなんですか。

鶴見 生きがいとかと関係なく、ただ生きているだけです。生きものとして（笑）。意味も目的もないです。岡田さんは？

岡田 俺、七〇年代後半はアニメ作ってましたね。

鶴見 燃えてやってた？

岡田 そうそう、燃えてやってた。そうやっていても、やっぱり日常はドンとあって。ただ、その日常が永遠に続くのかとか、巨大な一発が来ないかと思うのって、わりと社会のメインストリートの、それも真ん中を歩いてる人の特権なんですよ。俺らは隅っこだったんで。怪獣好きで、アニメ好きで、こんなにおもちゃガンガン買ってたら、俺たちに未来はねえなと。でも同時に、文化そのものが、たそがれていってましたからね。八〇年代のバブル文化というやつで、みんな、ジュリアナに行って、クリスマスにホテルをバンバン予約して。

鶴見 トレンディなことをね。

岡田 俺らはたぶんその頃、「動画用紙が足りない」とか。（笑）「撮影が手を抜いた」だとか、「ネオ・アトランティス[007]の新兵器どうする」というようなことを朝の六時まで話したりしてる。そうすると、どんどんたそがれた気分になってきて。

鶴見 やっぱり、やさぐれ、入ってくるんですね。

岡田 やさぐれ、入っていくわけですよ。

007 ――
ネオ・アトランティス
『不思議の海のナディア』に出てくる敵の組織。海底に沈んだ超古代文明「アトランティス」の末裔を称する者たちが、首領の「ガーゴイル」に率いられて帝国の再建と世界征服をもくろむ。

鶴見　俺なんか「世の中、ぶっ壊れろ」とか、物心ついた頃から思ってた気がしますよ。
岡田　ぶっ壊れろとは思わないですね。どうも、支配階級と被支配階級がいるらしいから、この構造を利用して支配階級になる方法がないかどうか、ということを考えましたけれどね。
鶴見　戦略的ですね。
岡田　いや、商売人（笑）。

支配者は誰だ

鶴見　だけど、支配階級って、いったい誰？　この日本の社会は、誰が支配してるんですか？
岡田　昔の支配階級、被支配階級ほど象徴的に、支配＝偉い、被支配＝偉くない、っていうわけじゃないんです。会社の中の上司と部下みたいなもので、単なる立場というものが前提となっているんですね。
　たとえば、今この部屋の中では、俺と鶴見さんが支配階級で、聞いてる人は被支配階級。これは僕の基本的な見方なんですよ。世の中で自分の意見が言える人間とか、自分の考えを出せる人間が支配階級で、それを聞いて口移しにしゃべるしかないやつが被支配階級。
鶴見　そうすると、日本全体では政治家が支配階級？
岡田　いや、政治家自身も自分の意見、人の意見を、あんまり変えたりできないんで。
鶴見　じゃあ、誰の意見で、この日本の社会って動いてるんですか。
岡田　おそらく一万人程度のプレイヤーがいるんですよ。残りは駒ですね。

鶴見　どこにいるんですか。

岡田　俺たち、その中に入ってるんですよ。鶴見さんの著作を読んで影響されたり、俺の話を聞いて影響されたりする人間がいる限り、俺たちは支配階級なんですよ。

鶴見　俺はそういう見方じゃなくて、やっぱり、官僚が動かしてるのかなとか。

岡田　官僚だって、俺らの本読んでますよ。勉強会で本の受け売りしゃべってると思いますよ。「鶴見はこう言っている」とか。

鶴見　「覚醒剤はすばらしい！」なんて？　すごい勉強会だな（笑）。

岡田　いや、二次会でしゃべる。「俺、鶴見の言うことわかるんだ」とか言って。わかってねえよって（笑）。そんなのが、俺は見えちゃう。

鶴見　つかまりますよ、その人（笑）。でも、それが支配だと。

岡田　そうですね。だから、かつての統治支配とか経済支配に代わって、俺、自分の本の中で言ってるけど、それは「洗脳支配」なんですよ。

鶴見　支配って言うとイメージ悪いですけどね。俺なんかとくに、読者が何十人も死んじゃってるからね（笑）。

岡田　それは自由競争みたいなもので、俺らだって自分の意見をでっち上げたわけじゃなくて、誰かの受け売りを、適当につないでアレンジして、しゃべってるだけですよね。俺の場合は、岸田秀とか橋本治[008]とか、どんどん恥ずかしい元ネタばらし、やってるんですけど。

鶴見　ということは、ナンシー関[009]も支配階級なんですか。

008
橋本治（はしもと・おさむ）
一九四六〜。作家。デビュー作『桃尻娘』が小説現代新人賞佳作となる。その主人公桃尻娘の語り口をもって清少納言が語るという『桃尻語訳枕草子』はベストセラーになった。小説以外にも、評論、時評、戯曲、画集など、多岐にわたって活躍中。セーター編みの趣味も有名。

009
ナンシー関（なんしー・せき）
一九六二〜。消しゴムアーティスト。日本で唯一の消しゴム版画家。テレビ批評を中心に、コラムニストとしても多数の雑誌で連載中。著書に『ナンシー関の顔面手帖』『何様のつもり』など。

岡田 そうですよ（笑）。

鶴見 俺、結構、本持ってるんすよ……。

岡田 でも、ナンシー関が出てきてから、ものすごい数のコラムニストの文体が、ナンシー関調になったでしょう。体言止めとか使って。あと、ナンシー関的な「つっこむ」っていう考えが一般的になった。ナンシー関なくしてダウンタウン[010]はない、というやつです。彼らはナンシー関によって生まれた子どもだと思ってるんですけど。いやな母親といやな子ども（笑）。

鶴見 俺は、やっぱりヒットラーみたいな、わかりやすい支配者がいてほしいんですよ。昭和天皇、明治天皇とかね。社会が動いてるってことは、誰かが動かしてるわけだから。でも、誰だかさっぱりわかんないです。半数近い人が棄権しても、ひょっとしてゼロになっても、社会は大丈夫かもしれない。政治家なんて誰でもいいわけで、力ないですよね。官僚もなさそうだし。

岡田 鶴見さんの考えだったら、たぶん、システムって言い方になっちゃうと思うんですよね。

鶴見 そうなんです。システム全体が勝手に動いていると睨んでいるんです。

岡田 官僚っていうより、官僚の伝統とか、もしくは官僚文化そのものですか。そういう、彼らのソサエティの中の不文律みたいなものが社会を動かしている。

鶴見 ひと言でシステムって言っても、行政、金融、教育、企業、マスコミとか、全部一緒になってて、とらえどころがない。結局、時計が社会を動かしてるんじゃないかと。そのシステムを探っていったら、一番奥に一個、時計が置いてあった、なんて印象しかないんですよ。

岡田 でも、その時計を分解していったら、誰かがいるような気がするんですけどね。よく池上遼[011]

010
ダウンタウン
松本人志と浜田雅功のお笑いコンビ。多くのテレビ番組を持つほか、著作、歌手活動など幅広く活躍中。

011
池上遼一（いけがみ・りょういち）
一九四四〜。劇画家。原作者と組んで、自らは作画に徹する。「ハードかつ哀愁漂う男の世界」がこの作家の真骨頂。代表作に『男組』『男大空』『I・餓男』などがある。

一[011]とかのマンガで、「支配者は誰だ」ってやっていくと、最後にプールをザバッザバッてバタフライで泳いでて、ザバーッと立って、女の人をバックからいつも犯してるような支配者が（笑）。

鶴見 結局、そんなわかりやすいやつだったりして（笑）。

岡田 「支配してるやつがわかったら戦おう」とか、そういうメンタリティはありますか。

鶴見 それがさっきの話とつながるんですが、支配しているやつがわかれば、敵対とか対立の関係が見えてきますよね。物語がそこから生まれる可能性が出てくる。だけど、こんな状況じゃ対立とか反抗の物語も無理ですよね。レイヴ[012]が広まる理由のひとつは、パンクのように反抗もしないし、「ラブ・アンド・ピース」などと主張もせずに、ただ踊るだけだったからだと思います。

自由という舞台装置の中での「自由」

岡田 尾崎豊[013]みたいなのはもうだめなんですか。俺の知り合いの大学生に尾崎豊ファンがいてね。彼に「尾崎豊って、他人の家の庭で、裸で死んだ男?」って聞いたら、めちゃくちゃ怒られて（笑）。俺はその通りなんだと思ってるんですよ。どんなにいい歌を歌ったか知らないけど、最後は人の家の庭で裸で死んだやつでしょう（笑）。その冷徹な事実を認めろって。

でも彼は「尾崎はそうじゃないんです」と。「尾崎は大人社会というシステムに反抗したんだ。だから、窓ガラス割ったんだ」って。ところが、夜に窓ガラスを割っても、先生にしたら誰が割ったかわからないでしょう。つまり、生徒というシステムに自分が逃げこんでいるわけじゃないですか。学校教育というシステムの中に。

012 **レイヴ**
一九八〇年代後半、イギリスに発生したハウスパーティーを中心としたダンスムーブメント。英語の俗語で「どんちゃん（ダンス）パーティー」の意。

013 **尾崎豊（おざき・ゆたか）**
一九六五〜一九九二。ミュージシャン。青山学院高等部在学中にオーディションに合格。八三年シングル『15の夜』、アルバム『17歳の地図』でデビュー。中高生の挫折感や不満を歌い、若者のカリスマ的存在となる。二十六歳のとき東京・足立区内の路上で泥酔して倒れ急死した。

鶴見 その後、中退しますが。

岡田 え？ 本当に割ったんですか。

鶴見 と、青学のやつから聞きましたよ。今でも尾崎信者みたいなやつがいて、「おお、これが尾崎の割った窓ガラスか」なんて（笑）。

岡田 毎年毎年、その記念日にみんなで割ったりしないんですか（笑）。

鶴見 いや、窓ガラス割ることに何の意味も見出せないでしょう。「いやなら、学校辞めろよ」ってことになるらしい。最近の高校生ってすぐ辞めるんですよ。

今の世の中、不良も見えにくくなってますよね。昔は高校にも不良がわざわざ来ていて、遅刻とかして、反抗的態度を貫きたいみたいで。でも今は、辞めさせるらしいんですよ。考えてみたら当然ですよね。そんなに学校に来たくないなら辞めなさいって。

岡田 やっぱり、反抗しようと考える人って、そういうシステムとかに支配されること自体がいやなんですかね。

鶴見 そうでしょう。それは間違いなく。自分もそうです。

岡田 「支配者側に行こう」とは、あまり考えないわけですね。システムなんだから支配されるしかありえないわけですね。

鶴見 支配欲があまりないし。自由にさせてくれりゃいいんです。

岡田 「自由」あり、なんですか？

鶴見 「生きがい」とか「愛」なんていらねえなんて言ってても、自由は死守ですよ、死守。

岡田　人に「自由」を与える立場になったらどうですか。

鶴見　うーん。

岡田　日本の人、世界の人と言ってもいいけど、みんな自由っていうのが、そんなに似合わない顔をしている。あまり自由を謳歌すると不幸になるから、四割ぐらい導入すればいいんじゃないかな。

鶴見　たしかに「自由にしていい」って言ってるのに、わざわざ不自由なことをしてるやつは多い。女子高生のルーズソックスなんか、崩し方までビシッと同じにしてるし。

岡田　僕らが一番自由を感じるときっていうのは、じつは、ある程度整備された「不自由な」場所へ放り出されたときですよ。ディズニーランドとかゲームセンターみたいに、遊び方が決まってるところへ放り出されるのはいいんです。でも着のみ着のままで、荒野のど真ん中に放っぽり出されて「遊べ」と言われたら、困っちゃいますよね。自由っていう舞台装置がないと自由にできないというか。コカ・コーラのコマーシャルみたいな舞台装置です。友だち同士がいて、静かにしてなきゃいけない図書館で、ちょっとみんなで、「ハーッ」と歌っちゃったり(笑)。

鶴見　ナチス・ドイツなんて、完全に自由を放棄して、徹底管理による幸福を追求した社会ですよね。あれは、クーデターで実現したわけじゃなく、みんながわかっててナチスに投票して成立した。民主主義社会から多数決によって、あんな社会が生まれたっていうのもすごいけど、ナポレオンの独裁とかもそんな感じなんすよ。みんな自由と管理のどっちがいいか、よくわかってないのかもしれない。

管理する側、管理される側

岡田　鶴見さんの考えと、僕の考えの一番違うところっていうのは、いわゆる大衆側に視点があるのか、もしくは大衆側に視点がないのかだと思うんですよ。

鶴見　俺は大衆側かな。

岡田　うん、そうですよね。「管理される」という言葉を使いますよね。僕はおそらく「管理する」と言うんですよ。コントロールする側だというふうに、自分で考えているので。

鶴見　何しろ元工員で、バリバリ管理されて痛い思いしたんで。

岡田　俺はアニメ会社をやって、アニメーターをバリバリこき使った経験があるんで（笑）。たぶん、管理するという考えがあるんだと思うんですよ。

鶴見　そうすると、オルテガ[014]風の「エリートがバカな大衆を支配する」みたいな考え方に近づいていくんじゃないですか。西部邁[015]なんかもそうですよね。大衆社会を成り立たせていくために、一部のエリートが必要だ、なんて考え方。

岡田　宮台真司さんも似たようなこと言ってるんですよ。一部のエリート層を出すための方法論として、援助交際とかを認めてしまって、世の中を巨大な日常にしてしまったら、途端に不満分子が必ず浮き上がってくる。その不満分子というのがエリート予備軍であって、それを鍛えればエリートになる、というのがどうも基本思想らしいんですよ。

鶴見　まったりと生きる人たちだけでは、社会がいつか維持できなくなるなら、維持しなきゃいい

014
オルテガ・イ・ガセー
一八八三～一九五五。スペインの哲学者。デカルト的思考に反発し、歴史的理性の概念を導入した。大衆社会の到来を予告した『大衆の反逆』などを著わした。

015
西部邁
→18ページ脚注参照。

じゃないですか。そんな頃には自分は死んでいるわけだし。

岡田　宮台さんの考えというのは、たとえば、そのエリートっていうのがこの世の中に千人必要だとします。日本には一億何千万人いて、ほとんどがまったりと生きていても、その中で不満持ってるやつがたぶん十万人ぐらい出てくる。この十万人のうち本当に必要なエリートって、千人しかいないわけですよね。残りの九万九千人は、エリートの落ちこぼれなわけです。この人たちが自分たちのことを「俺たちは落ちこぼれなんだからもう一回まったりと生きよう」なんて考えられるぐらいだったら、落ちこぼれないで最初からエリートになっていますよね。ということは、そういう中途半端なエリートのやつは、上のエリートのやつを引きずり下ろそうとして工作するはずなんです。どうするのかというと、上のエリートのやっていることで、人に説明しにくいこととか、矛盾していることを、下の大衆に対して「見ろ、あいつら間違っている」と訴えかけることで、世代交代を図る。これが政権交代の本質なんだと。でもそれって今の言論界の状況そのものだから「宮台さんの言っている状況は完成されてるじゃないですか。宮台さん、幸せですよね」って言ったら、宮台さんは、ウーンと困ってましたけど（笑）。

「第三の波」で世界中が退屈化していく

鶴見　この先もこれまでと同じことを続けそうですね。だったら、この社会が一世紀か二世紀くらい続くんじゃないかな。

岡田　僕は、ゆっくりと、このシステムは崩れていくと思います。とにかく、この社会のインフラ

の中で、僕たちみたいな責任感のないやつが、現場のトップに立つわけです。緩やかに、ダラダラダラッとこの文明社会というのは崩壊していく。それには三百年ぐらいかかるんじゃないかな。

鶴見　たとえば、アルビン・トフラー[016]なんかの考え方に「第一の波」「第二の波」というのがあって。「第一の波」は農業革命で、「第二の波」は産業革命。どちらも社会が激動しますね。産業革命は十八、十九世紀ぐらいから始まって、二十世紀のオイルショックあたりまで続く。

つまり、われわれは歴史の激動から普通の姿に移ったところを、目撃しちゃってる気がするんです。要するに、二回の短い革命期以外は、変わりばえのしない社会がずっと続いていて、これが歴史の普通の姿なんだと。だからまだまだ続く気がするんです。これらの革命に匹敵するものが出てくるとしたら、岡田さんはいつくらいだと思いますか。

岡田　もう、四、五年前から出てきています。それは、デジタルです。「第一の波」、「第二の波」というのは、すべてテクノロジーによって発生していますよね。「第一の波」、農業革命の本質は、それ以前は獲物の奪い合い、喧嘩しかなかったんです。それが、来年も、再来年も食物が取れるというシステムができたんです。そのとき、相手を支配して土地を奪い、生産の上前をはねるという考え方が初めて生まれて、部族ごとの喧嘩が戦争になったわけですよね。「第一の波」が国家すなわち奴隷制度というものを成立させたわけです。

「第二の波」の産業革命は、蒸気機関というやつで、ローマ帝国が崩壊したのは、蒸気機関がなかったからじゃないですか。人間の足とか馬では、これ以上は伸びないという成長の限界があって、自滅的に内側に向かって倒れていく。ところが、産業革命を日本史でたとえると、大陸間を渡って

016――
アルビン・トフラー
一九二八〜。アメリカの未来学者、社会学者。著書『未来の衝撃』『第三の波』で、情報化社会の到来と、人類の生き残る戦略などを説く。

向こうの国に戦争を仕掛けることができるようになった。これで世界的な戦争状態になった。と同時に、発展もあったわけで。

では「第三の波」というのは何かというと、今進行中で、それはデジタルであったり、コミュニケーションの確認です。人間同士、簡単に連絡が取れてしまった。携帯電話とかポケットベルみたいなものを含めて。

鶴見　じゃあ、九二年ぐらいから、農業革命と産業革命に匹敵するような、大きな革命が起きている？

岡田　そうです。「第一の波」、「第二の波」は破天荒な変化を生んでたんですけれども、第三のコミュニケーション革命のおもしろいところっていうのは、巨大な日常を生み出すところ。

鶴見　でもパソコンで通信できるようになっても。茶の間にテレビが来るとか、冷蔵庫が来て、食料が保存できるようになったとか、それまで洗濯板で洗ってたところにバーンと洗濯機が来るとか、そのくらい大きなことじゃないと、革命って言われても。

岡田　「第二の波」のすごい特徴は、豊かになる。つまり、もので測れる。「第一の波」の特徴は、それまで移り住んでたのが、農耕に適した場所に定住するようになるということで、ものではあまり測れなかったんです。「第三の波」も、その特徴をもので測ろうとすると絶対ミスしちゃう。あるパラダイムにいる人間は、次のパラダイムの変化が起こっても、どうしてもそれが変化だとわからない。

鶴見　それに「あるパラダイムの中にいると、別のパラダイムを想像することさえ難しい」と。中

世の封建社会で生きてた人の考え方なんか、理解できない。

岡田　巨大な日常性っていうかね。日常性を持っていることは何かっていうと、劇的なことが起こりえない。集団がなくなって、個人もなくなって、家族もなくなってしまう。代わりに、共同の友だちみたいなものが、無限のグラデーションで、自分の近くにいたり遠くにいたりして。年がら年中不安で不安で、コミュニケーションを取って、電話したり直接話したりして、自分一人でものを考えずに済む、巨大な日常社会。俺にとっては暗いんですけれども。

鶴見　それも革命なんですか。

岡田　革命です。いやな革命。世界的にも、日常化はすごい勢いで進んでるように見えます。というのは、僕が言う日常化社会っていうのは、第三の波の、デジタルコミュニケーション革命で占められるもので、テクノロジーがついてきます。

　貧乏な国って、今、一生懸命豊かになろうとしていますよね。豊かになる象徴が、エアコンとコンピュータなんです。どのくらいその国にクーラーがあるかっていうことと、どれぐらいその国の教育設備を含めてデジタル化されているか。コミュニケーションが進めば進むほど、たぶん、巨大な日常のまったりの中に飲みこまれますよ。まだ貧乏な国っていうのは、生きがいがあって幸せなんですよ。でも、その貧乏な幸せな国っていうのは、どんどん俺たちの国を目指しているわけですから、急激にネットワーク化されて、三十年から五十年ぐらいで、ほとんどの国がほぼ同一水準に達するんじゃないかなっていう。

鶴見　短いですね。

岡田　たぶんね、これ、短いです。後進国であればあるほど、意地になったようにデジタル化が進むんですよ。僕らの社会っていうのは、ゆっくりと電信、電話、携帯電話っていうふうに進んできたんですけれども。そういう社会的文化がない国っていうのは、いきなり衛星電話とか携帯電話に行っちゃうわけです。だって、電気代払わなくて済むわけですから。そういう国ほど、社会的なインフラとして、たとえばパソコン通信とかインターネットの料金を安くする傾向がある。

鶴見　まあ、日本も戦後三十年くらいで退屈化したし。今後はますます短期間に、退屈なそういう社会が生まれてくるのかな。

岡田　あと、何で遅れている社会にみんな注目してるのかっていうと、前世紀まではどんなに南半球に貧乏人がいようと、みんな関心持たなかったわけですよ。それはヒューマニズムの理由じゃなくて、消費者という概念がなかったからです。今、中国とか第三国にものすごい興味を持っているのは、巨大な潜在消費者であると思っているからです。潜在消費者に売りつけるものは何かっていうと、大衆社会の消費物と通信関係のものなんです。これやっちゃうと、どんな民族であろうと三十年もたないです。あっという間に俺たちのようにヘヨヘヨになっちゃって、世界中のやつらがもうすぐ『セーラームーン』[017]のTシャツ着るようになると俺は思います。そのときは『セーラームーン』じゃないでしょうけれども（笑）、そうあってほしいとは思うんですよ。たとえば、それがマドンナ[018]だったら、俺の負けなんです（笑）。

鶴見　『GIOGOI』[019]だったらいいなあ。

　携帯電話ってヨーロッパはそれほどでもないようですけど、世界的に日本並みに普及してます？

017 セーラームーン
正式タイトルは『美少女戦士セーラームーン』。『なかよし』に連載され、同時にテレビアニメも放映された。当初のターゲットであった少女層を超えて、青年層の男性にブレイク。また各キャラクターを演じた声優も人気に。マンガは武内直子。

018 マドンナ
一九五九〜。ロック歌手、女優。『ライク・ア・バージン』をはじめとするセクシー路線で世界的に大ブレイク。九七年には主演映画『エビータ』でアカデミー賞主題歌賞、ゴールデングローブ賞主演女優賞を受賞し女優としても活躍する。

019 GIOGOI
ファッションブランド名。「ジオゴイ」と読む。

岡田　香港は進んでますし、あと、マレーシアのほうはかなり進んでます。でもやっぱり、社会インフラで電話線が通ってる国って、そんなに簡単に、携帯電話にサッと流れないんですよ。日本の場合は、便利だからということと、日本人にオンとオフの感覚がないことでしょう。ここまでで仕事終わり、っていう感覚がないから。ただ、アジアの国々に行くと、日本よりもさらに携帯電話の使用料安いですし、香港なんてこの間まで一カ月に基本料金をいくらか払えば、かけ放題ですから。携帯電話、つながりっぱなしでしょう。

鶴見　女子高生がみんな、携帯持ってるようなところまで行ってます?

岡田　いや、そこまでは。

鶴見　じゃあ、日本は世界一の携帯電話先進国なのかな。

岡田　女子高生まで持ってるという意味では、明らかにそうですね。

鶴見　女子高生に名刺もらうと、必ず携帯かPHSの番号が書いてあるんすよ。俺なんか電話番号だけだっつうのに。

岡田　生まれてから女子高生から名刺なんかもらったことがないですっ（爆笑）。

鶴見　もらってるほうが恥ずかしいかも。

岡田　俺のところに来るのは、「岡田さん、一緒に『電車でGO!』[020]をやりませんか」って（爆笑）。

オタクの保守感覚

鶴見　でも、連絡がつかないと、とりあえず不安になるとか、待ち合わせと遅刻にいつも脅かされ

020 ――
電車でGO!
九七年にタイトーから発売された鉄道運転シミュレーションテレビゲーム。当初はゲームセンターに置かれ、九七年十二月にはプレイステーション版も発売された。プレイヤーは運転手となり、中央線や山手線など実在の路線上で電車を走らせる。ホームに正確に停車させると高得点が入り、逆に途中の運転がヘタだと、客からブーイングがあがる。鉄道ファンのみならず幅広い層の支持を集め、現在では携帯用ゲームが出るほどの人気。

て時間を気にしまくっているとか、そういうときに携帯電話ってバチッとはまりますよね。日本は最も重症かも。時計的支配も世界一強力だろう。ひと部屋に十個も時計があるのは、家電大国の日本だけだろうし、世界一の時計輸出国だし。時計、電話、情報、時間、通信……あたりが、この社会のポイントと睨んでるんですけど。

それと、「今の社会に不満な人ほど、今が激動の時代だと思いたがる」といったところが、岡田さんにもあるのかな。

岡田 俺は古い人間ですんで、今のほうが好きなんですよ。たぶん鶴見さんの言う、もっと生きやすい社会のほうが、だめなんですよ。女の子が援助交際する＝けしからん社会、とかですね。若い者がドラッグをやる＝けしからん社会というふうに、本当はそういうふうに考えちゃうんです。

鶴見 本当に？ ポーズじゃなくて？

岡田 ポーズじゃなくて、本当にそうです。オッサンですから。

鶴見 ドラッグをやるのは悪いですか。

岡田 ああ、オタク的な感覚から言うと。オタクは保守ですから（笑）。

鶴見 違法行為だから？

岡田 それは、だらしない気がするから（笑）。

鶴見 じゃあ、プロザックを飲んでる人は？

岡田 プロザックって何ですか。

鶴見 アメリカで今すごく流行ってる抗鬱剤で、合法ですけど、すごく強いんですよ。

岡田 それはねえ、もう、宮崎駿[021]な考え方が頭にしみついてですね。頭の中で麦わら帽子かぶってる少女が、「そんなことやっちゃだめじゃない」って言うんですよ（爆笑）。

鶴見 玉蟲（たまむし）がダーっときたり。

岡田 オタク根性って、そこらへんにありますね。

鶴見 じゃあ、援助交際は何で悪いと？

岡田 そんなことしたらね、男の人が興奮しなくなるからだめ。これは本音のほうだな、俺。

鶴見 俺は自分に迷惑かけなきゃ、何やろうが知ったことじゃないですね。

岡田 でも、それをやると男は頼りなくなりますよ、たぶん。援助交際を前提にしてセックスができるほど、男性という性は強いとは思わないから。みんな、ヘナヘナと潰れちゃいますよ。

鶴見 じゃあ、ブルセラはどうですか。

岡田 パンツ売るやつですか。そんなもん、売ればいいじゃないですか。

鶴見 それはいいんですか。

岡田 買うやつが、変なんです。

鶴見 倫理が崩壊してるとか、援助交際と一緒に言われてますよ。

岡田 どこに線を引くのかっていうのは、たぶん、個人の趣味嗜好の問題だと思うんですけれども、そこらへんに俺は線が引かれちゃって。だって、買うやつ、変ですもん。女子高生が売春してたら買うのは、それは気持ちとしてわかるんですよ。でも、女の子がパンツ売ってても、俺、買うやつの心がよくわかんない。江川達也[022]がマンガで、女の子のパンツを頭にかぶってる絵を描くんだけど、

021 ――
宮崎駿
→33ページ脚注参照。

022 ――
江川達也（えがわ・たつや）
一九六一〜。マンガ家。代表作に『BE FREE!』『東京大学物語』など。理数系と女と陰謀と性を小道具にドタバタ喜劇調のドラマを描く。

彼はこれを、人類、男性普遍の欲求として描いてた。「あれは誰にでもある、どんな男にも必ずあるでしょう」だって。ないないない（笑）。

鶴見 大学で、高校時代に下着盗みばっかりやってたやつがいましたけど。そいつの楽しみを奪いたくないな。もうウハウハだったでしょう。

岡田 それって、趣味のひとつだっていうのはわかるんですけれど、普遍の欲求って言われたら、それ、ないよって思いますよ（笑）。汚れたパンツ嗅ぎたいっていうのは、フェチ入ってます。

鶴見 じゃあこれ。「いざとなったら自殺をすればいい」は？

岡田 あ、それはOK。

鶴見 OK？

岡田 うん。自殺はありですよ。

鶴見 俺は自殺もそこらへんも、一緒くたに見えますけど。女子高生なんてどうでもいいけど、モラルに反しているけど、人に迷惑をかけない行為ってことで。

岡田 一緒くたな感じがしますか？　俺は、そのへんは分けて考えたほうがおもしろい、と思うんですけれども。たとえば、安楽死って何かっていうと、テクノロジーの限界があると。医学とか医者、医療システムが信用できない。この苦痛が長く続くんだったら、死なせてくださいっていう。それって自殺ですよね。そっちの自殺はよくて、なぜ自分が社会のシステムを信用しないことがだめなのか。それは自分の目で判断したことですよね。自我が判断したことで。それによって自殺、首吊りでも何でもいいですけど、それをすることがなぜだめなのか。

鶴見　俺が言ってる自殺も安楽死ですよ。でも安楽死させてやった医者が殺人罪ですからね。「末期ガンでも強く生きろ」ってことでしょう。

岡田　鶴見さんが言ってる自殺っていうのは、ちょっと死んでみようっていう自殺じゃないでしょう。本の中で、「ちょっと死んでみるのもハッピー」って書いてないじゃないですか。

鶴見　ええ。でも、ちょっと死んでみるのもいいと思います（笑）。どうせ死ぬんだし。命だって本人の持ちものなんだから、どうしようと本人の勝手ですし。

援助交際は日常である

岡田　マヤ文明[023]がわりとそういう文明だったらしいです。ちょっと山のほうに行くと、大きなサウナみたいな部屋があって。その中で麻薬みたいなのを嗅ぐんです。その中は、ただ単に煙たくて苦しいだけ。とにかくひたすら煙たくて苦しくて窓もほとんど開いてないところに一時間座って、仮死状態まで追いこまれる。それでポーンと開けて中から出てくると、世の中すべてが瑞々しく光って見える。それが大流行したんですよ（笑）。

鶴見　本当ですか。それが覚醒剤の煙なら、日本でも大流行だな。

岡田　現代人っていうのは、それを時間的に圧縮するのが好きなんですよ。わずか三分間ぐらい苦しい思いをして、ハッピーになるとかね。古代人っていうのは、一時間とか一年とか苦しい思いをして、丸二日ぐらい、想像もつかないハッピーを味わうのが好きなんですよ。だから、百五十年ぐらいかけて、苦しい思いをしてピラミッドを作って、できてワーッて。

023――
マヤ文明
紀元前後に興ったマヤ族の古代文明。中央アメリカ、グアテマラ高地からユカタン半島にかけて栄えた。四～九世紀に全盛。巨大なピラミッドや神殿を中心に、天文・暦法・象形文字などの高度な都市文明を築く。

鶴見　でもほとんどの人は、途中で死にますよね。

岡田　いや、それはそれで、死ぬことでピラミッドを作らなくてよくなるわけだから、ハッピーじゃないですか（笑）。支那の古文書を読んだら、古代の奴隷だって、現代の会社組織と一緒のようなものです。宮仕えしているようなもんですよ。

鶴見　昔から、生きてる実感を得るのに苦労してそうですね。これからも苦労が続きそうだな。でも、このままダラダラしてて、人類が退化してきても、滅んでも、全然いいと思いますけど。援助交際だって勝手にやればいいし、人に迷惑かけてないなら、誰にも止める権限はないですからね。

岡田　これは、岸田秀という心理学をやっている人の、まったくの受け売りなんですけれども、男性というのは、通常の状態だとじつは性的に興奮しないんですよ。性的な興奮は本来、三歳、四歳の、生物学的な第一次成長のときに止まっちゃう。そのときにセックスできないものだから、男は全部変態になっちゃう。俺の認識の根底には、男に限らず、男女ともすべて変態になっちゃったというのがあるんですよね。まず、日常であれば男は立たない。非日常を作らなければセックスできないという。これが僕の考えているセックス観です。

援助交際について、さっき「興奮しないですよ、まずいですよ」って言ったのは、援助交際は日常なんです。巨大な日常。なぜかと言うと、買いたい男がいる、売る女がいる。これ、当たり前ですよね。心の中のタブーというのをはずしたり、社会の倫理をはずして売春するというのは、極めて当たり前の常識的な行為なんです。この常識的な行為を当たり前にやっちゃうと、セックスが日常になってしまう。セックスが日常になってしまうと、興奮しなくなって人類が滅びちゃう。そこ

でたぶん鶴見さんは、「滅びるんだったら、滅びちゃってもいいんじゃないですか」とおっしゃるんですけれど。

でも、僕が考える滅びのイメージは、いっぺんにある日、パチャンと滅びるのではなくて、千年ぐらいかかってグニャグニャと崩れていく。このグニャグニャと崩れていくときに、たぶん数十億人単位で、すごくいやな思いをするはずだ。それはまずい。ここまで文明持ってきて、みんな幸せになったんだから。ある日パシャンだったら、僕もOKなんです。グニャグニャといっても、毎年一億人死ぬ。それも老衰死みたいに、ゆっくり死ぬんだったらいいんですけれども、苦しんだり歪んだりしながら死ぬのはいくら何でも苦しいよな、つらいよなというのが俺の中にある。グニャグニャッと崩れていくのはやめて、非日常みたいなものを自分らで演出したほうがいい。

僕は、家の中でいつもパジャマ着てたり、下着でウロウロしてるんですけど、人前に出るときには服を着る。俺にとって、この格好は非日常ですから。だから、セックスするのも、当たり前ですが非日常を演じるしかないわけです。「みんな、ガンガン非日常を演じましょうよ」と。よき女を演じたりよき男を演じたりしたほうが、お互いのために幸せですから。そのくらい無理をしたほうがいいんじゃないですかっていうのが、僕の考えです。

鶴見　そうなった頃には、俺、死んでますからね。知ったこっちゃないです。人類の将来考える暇があったら、自分たちがより気持ちよく生きる方法を考えますね。あと、自殺すれば、楽に死ねますよ。

生きやすい世界を作る

岡田　今の「巨大な日常」を作っている日本型の文化と言ってもいいですし、資本主義社会、二十世紀後半の文化と言ってもいいですけれど、これは、僕、だめなんですよ。だから、早めに新しいのを作っちゃって、みんなが非日常の物語に帰結する。それも巨大なひとつの物語ではなくて、多数の物語が同時に参加する形でしかないだろう、と考えているんですけれど。そのあたりはどうですか。

鶴見　「文化を作る」なんて、聞いただけで無力感に襲われちゃうんですよ、俺なんかだと。それは、具体的には?

岡田　自分の帰属観っていうのが、多数複層的にあるっていうことです。つまり、たったひとつの所属しかない、日本人であったり、軍人であったり、お父さんだけであったりすると、みんなストレス溜まって無理ですよね。それがたくさんあることによって、ストレスが溜まったところから常に逃げられる。ひとつの社会から否定されると、それは自殺ということになるんですけれど、社会自体のものの見え方が複数あると、そこからの社会的自殺で済みますよね。それによって、みんな何とかあと千年ぐらいやっていけるんじゃないかな、と思って。

鶴見　それ、生きやすそうですね。俺は今のままでもいいですけど。何か、スローデスできるくらいなら大したもんだって感じで。永遠に続くような感じがするんです。

岡田　俺、今自分と同じ世代が、人の親になったり、学校の教師になったりしてるところから、こ

れは無理だな、崩壊してるっていう感じです。

鶴見 いやあ、でも、思いっきり壊そうとしたってビクともしませんよ、きっと。どうやって崩壊するのか想像もできないし。とりあえず、レイヴ行ってますよ。同じところでグルグル踊って、終わったら帰って、また行ってグルグル踊ってまた帰って、また行って……っていうまったく無意味な繰り返しをやります。もう退化が始まってるかもしれないけど、それでもいいし。

岡田 レイヴは、あと引かないでしょう。「レイヴって、宵越しの興奮は持たねえっていう考え方だからいい」って考えてません？　でも、たとえばそれが、従軍慰安婦に関する運動なんかだと、あと引くんです。家に帰っても続いちゃう。

鶴見 そもそもまったく意味も考えもないんで、引こうにも引けないんです。

岡田 レイヴってどうやるんですか。

鶴見 えーと、夜中から踊ったりブラブラしてるうちに、朝の四時、五時ぐらいに夜が明けてきて。ここが一番好きなんですが。で、日が出て、またいい気分になって、そのまま昼までやってるんです。……踊ったりブラブラしたりを、ずーっと。で、帰る、と。スゲエいいんですよ、これが。何がいいんだか、全然わかんないすよね（笑）。

岡田 日本の土着的な文化のよさを感じますけど。ドンドンドコドンドン……。

鶴見 そうそう、同じなんです。俺らはただ、今まで踊るのを忘れてなかっただけの話で、やっと、部族社会とかの人たちがやってた楽しみ方を、自分らなりにやりだしただけです。

岡田 それはいいことを聞きました。適当にみんな踊らしときゃ不満がないのか。

鶴見　そうですね。ただ踊って喜んでるだけです。反抗とかするのは、止められたときだけ。

岡田　天安門事件[024]で集まった人たちを踊らせれば、みんな平和に家に帰ってた。あのとき広場にいた人の九九パーセントは、勢いで集まってしまった人ですよね。踊ったら、絶対気が済みますよ。

鶴見　鄧小平も一緒に踊ったりしたら、もう訳わかんないですね。それを戦車でガーッとか（笑）。

岡田　でもそれって、宮台さんの言うところの、エリートに都合がよくないですか。

鶴見　どうですかね。踊らせておけば、おとなしくしてますから。ドイツだと「政府がわざとエクスタシーも取り締まらないで、レイヴやらせてるんだ。思うつぼだ」ってレイヴに反対する声もあります。でも、やってるほうだってバカじゃないですから。まあ、バカなんですけど（笑）。「俺たち、管理されちゃって、レイヴも届け出制なんだぜ」って言いつつ、結局、ベルリンのど真ん中で百万人のレイヴやっちゃってるんで。どっちが本当に賢いのかは、わからないですね。

地上に現われた楽園

岡田　俺、これは大学ではときどき言ってるんですけどね。たとえば、オタクっていう言葉の意味を、この二年間ぐらいですり替えちゃったんですよ。アメリカで大して流行ってもないアニメを、「流行ってる」と言ってみたりですね。世界でオタクブームになってるという嘘八百を、いろいろなところに書いてみたりすると、みんな信じるわけですよ。

鶴見　あちゃー。嘘八百。

岡田　行って聞いてみれば確かめられるのに、確かめないから。それをいいことに、少しずつ意味

024 **天安門事件**
八九年六月四日未明、報道の自由や普通選挙制などを含む、広い範囲の「民主と自由」を要求して、全国から集まって北京の天安門広場に座りこみを続けていた学生たちを、人民解放軍の戦車や装甲車が実力排除した事件。中国の民主化運動弾圧については、人権問題として国際問題化しており、中国と欧米諸国との外交関係にも影響を及ぼしている。

を変えていったら変わるんですよ。「ああ、なんだ、世の中って結構、思い通りになるじゃん」って思った。この巨大な遊び道具があるから、俺は結構、楽しいです。

鶴見　被支配者としては、だまされないように十分注意して、あとは踊ると。この楽しみ方のほうが自分に合ってますね。気がついたら「デカイ一発」なんて思わなくなってて、「退屈感」も消えちゃって「この社会は、今まで見たこともないようないい社会だ」とまで言いだしちゃって、もちろんだめなところもたくさん目につきますけど。

岡田　俺は楽園って言ってます。俺がこの社会を動かせるなと思うのは、この十年ぐらいだけなんですよ。それを過ぎちゃえば本当の楽園になってしまって、僕の意見すらもマスメディアみたいなのを通して言えるものとか、巨大なコミュニケーションの相互交換の海の中に入っちゃって、ただ単に「ある池とか、ある湾の中で有力」にすぎなくなっちゃうだろう、というあきらめに似た気持ちがあるんです。だから、そうなってしまうと、僕がいた値打ちとか意味とかいうのはたぶん、この十年ぐらいでなくなっていくだろう。だから、それまでは積み上げていって、そこから先に来る楽園では、楽園に住めなかった進化できなかったサルとして、みなさんの幸せを遠くより見て……。

鶴見　うーむ。俺は自分に価値とか意味とか一切ないと思ってるんで、その心配はないな。

岡田　つらいけれども、それは生物的な限界ですよね。その時代に生まれなかったんだからしょうがない。と言いながら、そこまであきらめてないな。そこで、もうひと騒ぎ起こして、十年を三十年に延ばせないか、それは延命策を考えますよ。

鶴見　レイヴに行く手もありますよ（笑）。

岡田　でも、今、二十歳以下の人ってみんな楽園に住んでいると思います。

鶴見　そうですね。

岡田　援助交際をするっていうのを、さっき俺、ネガティブな表現で言いましたけれど、それは僕自身の倫理、というか美意識です。でも、今の高校生の美意識に照らし合わせたら、悪い理由ってたぶんないんですよ。僕も見つけられないし。古来、人間は、原罪がない状態、人間の原型の罪がない状態として、キリスト教をずっと支えてきたわけですから。やっとその時代になったんだから、いいと思うんですよ。

鶴見　そもそも、こういう社会を目指してきたんですよね。対立も反抗も抗争も何もない、安定した国とか。

岡田　だいたい具体的に見て、演劇とか映画がおもしろくなる時代っていうのは、必ずその社会が貧乏とか、苦しいとか、つらいんです。

鶴見　ベトナム戦争のおかげで『フルメタル・ジャケット』[025]とか『地獄の黙示録』[026]なんて、おもしろい映画ができたし。

岡田　社会が平和で安定して幸せであればあるほど、物語がつまらなくなるのは当たり前でしょう。

鶴見　だから大きな物語ができない世の中っていうのは、決して悪い世の中ではない。逆ですよ。

岡田　ただ、俺にとっては、なんか住みにくいと思っちゃうんです。「君たちにとっていい社会だね、俺はいやだけど」っていう。

鶴見　『完全自殺マニュアル』の前書きとかで、「僕たち一人一人がいてもいなくてもどうでもいい

025
フルメタル・ジャケット
八七年のアメリカ映画。監督スタンリー・キューブリック。ベトナム戦争の海兵隊部隊に送りこまれた若者たちが、過酷な訓練、壮絶な戦場で、次第に人間性を失っていく。

026
地獄の黙示録
七九年のアメリカ映画。監督フランシス・コッポラ。六〇年代末のベトナム。ジャングル奥地に王国を築いたという失踪米軍大佐の暗殺を命じられた主人公の目を通して、戦争の狂気の世界を描く。

存在っていうところが、死の気持ちを膨らませる」なんて書いたんですけど、見方によっては、いてもいなくてもどうでもいい存在なんて最高ですよね。命が軽けりゃ、体も軽いと。

岡田　あらゆるしがらみから解放されるっていうことですからね。俺もあれは感動しました。幸せなんだって、僕も、あれを読んでから考えるようになったんです。

鶴見　「永遠と続く同じことの繰り返し」なんて、ダンスとかテクノがまさにそうなんですが、いつの間にか大好きなものになってましたよ。

　最近「モラルがない」なんてビビって、昔の価値観を復活させようとしてる人もいるけど、あと戻りなんてできるわけないんだから。いいんですよ、なくても。「何もない」ってのが一番いいんだから。みんな気楽そうだから、見てみろっつーの！（笑）

岡田　俺なんかは、みんな過度の気楽はやはり重荷だろうと思って、適当にストレスかけてあげようと思って。やっぱりストレスないとつらいじゃないですか。

鶴見　少なすぎてもよくないですよね。

岡田　だから、とんでもないこと言えば、「日本は再軍備しろ」とか、「若者は兵隊に行け」っていうやつは必要なんですよ。

鶴見　ちょうどいいストレッサー[027]として（笑）。

岡田　極論を言うやつが、この世の中にきらめく星々のようにいて、自分はそれに対して共感したり反対することによって、ようやく保っている。そういうお星様は、大切にしなきゃいけないと思うんですけれど。

027
ストレッサー
ストレスを引き起こす原因のこと。

いくつもの価値観がある「豊かな人生」

鶴見 最近、大学生が元気ないと言う人もいますが。

岡田 元気があるのが変なんですよ。でも、そういうこと言うやつも大切にしなきゃ（笑）。みんな高校終わってダラダラしに行くんでしょう（笑）。ダラダラで正しいんですよ、じつは。昔は大学の頃しか世の中にいいことなかったから。卒業したら終わるとか、俺たちは灰色のスーツを着た大人になると思ったから、祭りがあったわけでしょう。今は社会に入っても同じですから。みんなダラダラしてる。

鶴見 「就職難」なんて、就職しないための口実に使われてますしね。去年、就職できなかった学生の知り合いが二人いるんですけど、一人は編集の手伝いをやって、もう一人はバイトしながらDJやってるんですよ。彼らと同期で就職したどの知人よりも、その二人が楽しそうなのは否めない。就職難にぶつかった人はラッキーだと思うな。

岡田 でも、そのDJと編集者っていうのは俺に言わせりゃ、やっぱり他人に自分の発言とか考えの影響力を及ぼせる支配階級にいるから幸せになれた。支配階級、いいですよ（笑）。

鶴見 まあ、「優越感」っていうのが、近代人にとっての最大の快感とも言えますしね。そう言えば、ニュースの世界がとんでもなく歪んでいるのも、支配ってことなら納得がいくな。従軍慰安婦問題[028]で大騒ぎとか。

岡田 あれは当事者にとって大問題なだけですよ。従軍慰安婦という騒ぎを起こそうというのがコ

028 従軍慰安婦問題
→9ページ脚注参照。

ンセプトですから。極めてその上では正しいんですけれども、端の人間がそれに巻きこまれるのは、消費者に回るということなので、商品を買わされているということですよね。

鶴見　送り手は支配者なんだから、当然好きなように操作するわけだ。

岡田　たぶんね、巨大な悪とか、それに戦って勝つというのは、プレイするゲームの種類として勝敗があるゲーム。たとえば剣道もそうだし、将棋もそうですね。一人が勝って一人が負ける。こういうのを「ゼロ和ゲーム」っていうんですけれど。ゼロ和ゲーム的な考え方ですよね。ところが現在の人類社会っていうのは、地区の人間が一斉に参加して一人が勝って残りが負けるではなくて、順列が決まるという「非ゼロ和ゲーム」型の社会なんで。その中で勝ち負けとか悪いやつを探してもしようがないです。勝ってるやつを探して次につくとか、自分は今百番目なんだけど、九十九番目になるとか八十八番目になるというのが、唯一の戦い方ではないかと僕は思うんです。

鶴見　近代社会のモデルとも見れますね。あらゆるところで常に細かい競争と優越感が生じている。権力について見ると、全員が僅差の横並び状態で、突出した部分はない。支配者がいないというのは、そういうことです。でも、岡田さんの見方は戦略的ですね。結構、本質をついてますよね。

岡田　商売的なんです(笑)。俺、アメリカ人ってそういうふうに考えてるんじゃねえかなと思うんです。あの人ら、絶対に勝負って言わずに、コンペティション(競争)と言うでしょう。物事の本質を競争だととらえてるところが、今のアメリカの強いところだなと。ゼロ和ゲームと非ゼロ和ゲームと言いましたけれども、支配・被支配というのは、一対一対応の「支配＝勝ち」、「被支配＝負け」ではなくて、n対nの、「支配する」、「支配される」の競争なんですよ。心の中の何パーセントを

占めるかの競争を、みんなやってるわけです。だから、鶴見さんの本にしても、「自殺いいじゃねえか」と心の中の三〇パーセントがOKになって、残りの七〇パーセントが反対でも、鶴見さん的にはOKなんです。それが三一になるのはもっといいことですし、二九に減っちゃうのは悲しいんですが、心の中のパーセンテージというか、パラメーターの問題でしかないわけです。

鶴見 何か受験とか学校とかを思い出しますね。優越感欲しさに細かい競争にはまりまくってたな。でも競争は疲れるんで、もう放棄しました。踊ってるのがいいですね。

岡田 富士山のふもとの樹海で死んだやつが、鶴見さんの本を持ってたと聞いたときに、ヤッターと思いました?(笑)

鶴見 わりと、いい宣伝かなと(爆笑)。支配の快感は一切なかったです、そう言えば。

岡田 祝電じゃなくて、弔電打ちました?

鶴見 そこまで関心ないですよ(爆笑)。どうでもいいんです。

岡田 鶴見さんの考えに反対している人も、じつは鶴見さんの支配下にあると思いますよ。言ったことによって惑わされているわけですから。知らないとか気にしないっていうやつが、まだ影響の及んでいないところで。そこへ光を照らしたいと思うなら、自殺の次は人格改造だと思っちゃうわけですよね。今までのある程度のカッコよさっていうのは、生涯ある意志を持ち続けることだった。ある特定の宗教、科学でもヒューマニズムでも何でもいいから、ずっとその価値観でいることがカッコよかったんですけれども、これからカッコいいのは複数とスピードです。いくつもの宗教を信じてもいい、はまってもいい。オウム[029]にはまってサリンまいてもいいとは言わないけれども、オウ

029 オウム
→19ページ脚注参照。

ムでも何でもいいです。とことん行けるところまで信じて、速いスピードで戻ってくる。これを年に四つぐらい繰り返す（爆笑）。たくさんはまって、そのストックをいっぱい持ってると、あたかも人生観が豊かのように見えますから。

鶴見　いいですね。俺は「全部どうでもいい」っていう「全否定」の立場で、それやってます。「全否定」って「全肯定」と同じことなんですよね。「何でもいい」ってことだから、いくつはまってもいい。ひとつだけ認めるなんて、一番つらいですよ。そう言えば、自己開発セミナー行ったら、あっちこっちハシゴしてる人たちがいっぱいいましたよ。

岡田　やっぱり、いっぱいはまると、そのぶん楽しくなります？

鶴見　でもセミナーの価値観って、どこも似たり寄ったりだからなあ。

岡田　まずは、愛は永遠であるみたいなやつにはまって、次にアニメーションは芸術であるみたいなところにはまって、レイヴにはまるってしたら、すごく豊かな人生のような気がしますね。

鶴見　で、ヘロイン教にはまったら、そこでおしまい。（笑）

岡田　帰ってこられないのはまずいですね。でも、帰ってこなかったら逆にそれが幸せと言うこともできますね。

鶴見　シド・ヴィシャス[030]は幸せ者だ。

岡田　行って帰ってくるんだったら、それは冷めてしまって不安になるっていうことだから、行きっぱなしが本当は幸せなんですけどね。

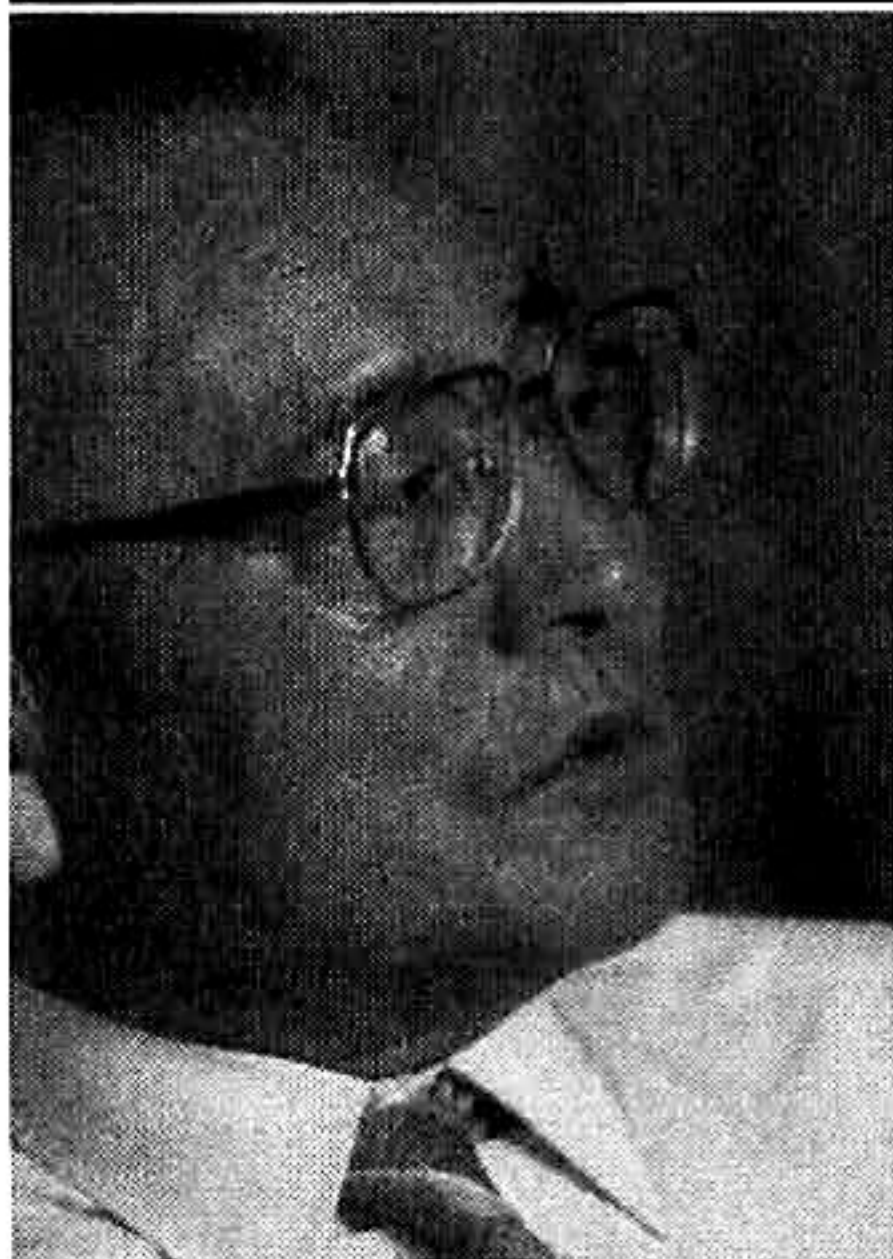
鶴見　じゃあ結局、一番いいのは自殺教ですね。全員行きっぱなしだから（笑）。

030 ――
シド・ヴィシャス
一九五八〜一九七九。イギリスのパンクバンド「セックス・ピストルズ」のベーシスト。暴力事件、殺人事件ざたには事欠かなかったが、それがバンドのイメージとパンク・ロック全体に多大な影響を与えた。二十一歳のとき、ヘロインの打ちすぎで死亡。

小室直樹

日本は滅びる

Naoki Komuro

一九三二年東京都生まれ。
政治学者、経済学者。
京都大学理学部数学科卒業。大阪大学大学院経済学研究科を経てフルブライト留学生となり渡米。ミシガン大大学院で計量経済学、マサチューセッツ工科大大学院で理論経済学、ハーバード大大学院で心理学および社会学を学ぶ。帰国後東京大学大学院法学政治学研究科修了。東京大学法学博士。八〇年、ソ連帝国全盛にあって発表した『ソビエト帝国の崩壊』八五年、韓国経済脅威論が世を風靡していたときに上梓した『韓国の悲劇』がベストセラーに。膨大な知識と鋭い洞察力で日本社会に警鐘を鳴らしつづける。最新著書に『小室直樹の資本主義原論』(東洋経済新報社)『悪の民主主義』(青春出版社)『世紀末・戦争の構造』(徳間書店)がある。

当代きっての学者を前に、さすがのオタキングも緊張気味。しきりに額の汗を拭っている。一方の小室先生は、ひとつひとつの質問に、悠然かつ緻密に答えていく。その様子は、対談というより、むしろ「家庭教師の学者先生に教わっている王様」そのものである。対談場所のホテルの一室は、いつの間にか「小室塾」と化していた。（九七年七月二十九日対談）

論階層のない珍しい国、日本

岡田　アマチュアの頃、大阪で八ミリアニメを作っていて、プロのアニメの作り方って何か違うんじゃないかと感じていたんですよ。商業主義に流れるのは仕方のないことかもしれないけど、見ている人もうれしくないし、スポンサーもうれしくないし、作っているほうもやりがいのないような作品がすごく多いように見えたんですね。で、「俺たちはもっと違うものができるんだ」って思って、それで東京へ来てプロになった。

そんなこともあってついついその目で何ごとも見てしまうんですけども、今の日本って誰がどうやって動かしているんだろうと思ったときに、ここでもやっぱりプロが信用できないという気がするんですね。まず、誰が動かしているのか、はっきりわからないし、どんなプロが動かしているのかもわからない。どうもエスタブリッシュメントというものがあるような気がするんだけども、その人たちが自分たちの義務というものをちゃんと履行しているかどうか、僕らにはチェックもでき

ないし、そういうものがあることが望ましいかどうかもわからない。

小室　今の日本は無階層社会です。「階級」というよりは、もっとさまざまな要素としてランクづけられる「階層」として考えるべきでしょうが、世界史の中でも大変珍しい、階層のない社会です。だからエスタブリッシュメントとして語られる存在もいない。（小室注1・213ページ参照）

岡田　いつからそうなったんでしょうか。

小室　歴史的に言うなら信長の時代から変わりはじめています。それ以前の日本は不平等社会（身分制社会）でしたが、その後徳川時代になると多くの意味での平等社会が現われます。（小室注2）

たとえば、日本では明治に元勲になった人というのは、ほとんどが下級武士でしょう。徳川末期に権力が下級武士に移っている。下級武士と一般庶民は文化的にはほとんど同じですから、教養という点でも高度な平等化が進んでいた。不平等の大きな根源のひとつに、読み書きや教育があげられますが、その点で日本は平等化がされていたんです。これが、今の無階層社会につながっているんですね。

岡田　今の日本で、主権者というと現実には誰になるんですか。

小室　まず正解は、ない。しかし、それに比較的近いのが役人。社会学的にはこれから分析するのですが、ズバリ結論を言いますと、よく近代国家のエレメントとして、司法、立法、行政という三権のチェックス・アンド・バランシズがあげられますね。ところが今の日本では三権の全部を役人が簒奪（さんだつ）しているんですね。行政府はもちろん、立法権といったって議員立法なんか実質的にはできないです。法律もみんな役人が作ってる。検事も裁判官もみんな役人でしょ。

岡田 はい。

小室 陪審員なんて、今いませんな。

岡田 いませんね。

小室 要するに役人が三権を簒奪している。だから、仮に三権を一人で持っているのが主権者だとすると、やっぱり一番主権者に近いのは役人。

岡田 三権分立という、民主主義が本来持たなきゃいけないものは持ってないんだけれども、これだけ国民の生活は平等である。本来だったらそんなに司法、立法、行政が癒着しちゃったらまずいはずなのに、現在の日本はそれでも何とか運営されているわけですね。

小室 ええ、そうですね。ただ三権分立っていうのはもともとモンテスキュー[001]の思想であって、モンテスキューはアメリカ独立宣言のちょっと前に現われたんです。それで、アメリカがこれこそデモクラシーだと思って、アメリカの中に入れちゃったものなんです。ところがほかの国はあんまりこだわりません。イギリスなんて三権分立じゃありませんからね。

岡田 そうなんですか。

小室 立法権中心というのは議会主権みたいなものですから。イギリスの内閣は実質的には議会が選ぶんですよ。アメリカの場合には、大統領と議会は別な選挙です。それから、歴史的に言うと、議会というのは昔は裁判所だったんですよ。それがいつの間にか立法機関になっちゃった。それがイギリスです。だから、三権分立というのがなかったら民主主義でないとは断言できない。あくまでもひとつのあり方ですから。

001 ———
モンテスキュー
一六八九〜一七五五。フランスの政治思想家。『法の精神』を著わし、三権分立を主張、アメリカ憲法やフランス革命に影響を与えた。

日本は滅びる。ものすごいアナーキー状態になる

岡田 小室先生としては、今の日本というのは、わりとこのままでいいんですか。

小室 もうすぐ滅びるでしょう。

岡田 滅びるっていうのは、今の政府が持たないというレベルではないんですね?

小室 ものすごい、アナーキー状態が起きるでしょう。

岡田 その状態は、日本の「健康」にはいいことなんですか。

小室 時と場合によったらいいです。ヨーロッパでは大変なアナーキーから新しい社会が生まれてくる場合も多いわけですね。日本だってそうでしょ。日本の歴史で一番おもしろいのは戦国時代、明治維新でしょ。両方ともものすごい混乱、ものすごいアナーキーですよね。そこから新しいものが出てくるわけです。だから悪いとは限りませんが、悪い側面もたくさんある。

岡田 そのような状態になると、今のような安定って、たぶんすべてなくなっているんですね?

小室 なくなるでしょうね。

岡田 それは世界同時多発的に起きるわけではなくて、今の日本だけそういうふうになるんですか。

小室 いや、外国もそういうところはありますよ。今の日本はその最も危いところのひとつですね。

岡田 そこからもう一回立ち上がるときに、たぶんこうなるだろうなあというモデルって、過去の例では何かありますか。

小室 いくつかの例はありますけど、一番わかりやすいのは三国志[002]ですね。あれの最初のほうで、

002 三国志
中国歴代の正史である二十四史のひとつ。魏・呉・蜀の三国の歴史を記している。日本では、正史の『三国志』よりも、羅貫中の『三国志演義』が広く読まれてきた。日本語版『三国志』としては、吉川英治のそれが有名。マンガでは横山光輝が描いたものがある。

革命のものすごい混乱の中で、もうどうにも食べれなくなって流民（るみん）になっていくんですね。それで流民がほかの村に行くでしょ。でもほかの村だって食べるものがあるかないかのギリギリでしょう、流民に分けてやるのなんてないに決まってる。じゃあどうするかというと、その村の人々を皆殺しにするんです。皆殺しの連続ですよ。

岡田　すさまじいですね。

小室　そう。もう、ものすごい混乱。日本だって、戦国時代だとか徳川時代とかに飢饉はしょっちゅう起こっていますけど、それとは比べものになりません。中国の飢饉はどれも、人口の三分の二から四分の三が死んじゃう。ものすごいでしょ。たとえば、明を作った太祖朱元璋[003]、あの人の家族は全員餓死してます。

岡田　おぉ……。

小室　それで、自分だけが助かってね。それから流民の中に入って大いに頑張ってそのまま王朝を作った。だから社会が解体したときの混乱がどういうものかというと、中国の歴史、王朝交代がいい例ですね。

岡田　なるほど。で、ちょっと先の話になってしまいますけども、その混乱期を短くしたいとしたら、何か方法というのはあるんですか。

小室　どうでしょうか。まあ、あんまり短いよりは長いほうがいいかもしれない。

岡田　うーん、そうですよね。徹底的になったほうがいいかもしれませんね。

小室　しかし、そういうふうになったら、今の日本人にとっては苦しみも大きいでしょう。今の日

003――
太祖朱元璋（たいそ・しゅげんしょう）
一三二八～一三九八。中国王朝、明の初代皇帝。元号から洪武帝と称される。貧農出身で元末の紅巾軍に加わり、揚子江一帯を平定して自立。金陵（南京）で帝位につき、元をモンゴル高原へ退けた。

本社会っていうのは、子どもの暴力気にしてるでしょ。だから恐ろしいんです。戦前戦中ぐらいは男の子は喧嘩して当たり前だった。昔のイギリスのパブリックスクールでは、朝から晩まで生徒が喧嘩してるし、先生は体罰を加えるのが当たり前です。そのいいところは何かと言うと、しょっちゅう体罰を加えてると、怪我させない体罰というのがだんだんわかってくるんですよ。だから、軍隊なんかでも体罰なんてのは日常茶飯事で、目が回るほどぶん殴られても怪我するっていうことはほとんどなかった。見かけ上の怪我は普通でも、本当の怪我はしてない。ところが今の子どもは、殴り合い蹴飛ばし合いなんかやらないでしょう。

岡田　そうですね。

小室　だから、暴力に対して「ここまではいいけどここから先は困る」というけじめがないんですなあ。恐ろしいですなあ。平和ボケになると、ゲリラ戦だとか戦争なんかの殺し合いになったとき、それこそ無差別殺人になるかもしれない。暴力というものを禁止しておくと、暴力の恐ろしさを知らない。これほど恐ろしいことはない。

たとえばカルト教団が人殺しをやるのは世界中共通だから驚かないけど、日本のカルト教団は毒ガス使って無差別殺人でしょう[004]。何のために誰を殺すという目的がない。行きつく果てが酒鬼薔薇事件のA少年です[005]。これほど原因がはっきりしている事件もないのに、評論家、学者は右往左往で、何のことやらさっぱりわからない。日本のインテリの知的貧困をまざまざと見せつけた事件です。もう大変なアノミー（無連帯）ですね。だから、この独特な日本社会に起きる混乱の時代は長くて、収拾は非常に困難だと思いますよ。この次に現われる殺し合い、混乱、アナーキーは空前絶後のも

004――
日本のカルト教団は……
↓19ページ脚注参照。

005――
酒鬼薔薇事件
↓92ページ脚注参照。

のになるでしょう。

岡田　内戦を含んだ、ですか。

小室　はい。しかも、これから始まる日本の内戦っていうのは、まったく無秩序で、誰でもいいから殺しちゃえっていうようになると思います。

岡田　今の日本は、ある意味での力タストロフィに向かっていると。

小室　ある意味じゃなくてまったく確実にそうです。今まで日本をずっと指導してきたのは官僚ですよ。ところがその官僚が犯罪集団だっていうことがはっきりした。官僚だけでなしに、日本の組織というのは官僚的にできてますから、どの組織にも普及してしまって当たり前になっちゃってるんです。巨大銀行の頭取の身でヤクザに金を搾り取られるなんて、欧米諸国では考えられませんよ。そういうことが、現実化しているんです。

岡田　サバイバルぐらいですか、僕らがそれに対して言えるのは。

小室　そのまま死に絶えるかもしれません（笑）。

義務教育はもう時代遅れだ

岡田　こういった状況に対する手当て、あるいは延命策っていうのは何かあるんでしょうか。

小室　教育の大改革しかないでしょうね。でも、問題はそれが可能なのかということです。

岡田　改革の成果が何年かあとに出ることで、社会の崩壊は防げるんですか。

小室　防げるかもしれないし、ますますだめになるかもしれない。教育改革っていうのは、みんな

制度改革だと思っているでしょ。

岡田　はい。

小室　制度改革やるんだったら、入学試験をどう変えるかという程度じゃどうしようもない。まずやらなくちゃならないのは、小学校から大学まで全廃するんです。それで、自発的教育機関だけにするんです。

岡田　つまり、私学のみということですか。

小室　日本では、私学といっても、今では実質的に国立や公立と同じです。簡単に言えば、予備校や塾のようなものだけにするということです。そもそも義務教育というのは、ものすごい時代遅れだけど、みんな気がつかない。あれは資本主義ができてくるときに必要なんです。文盲だと資本主義労働者が出てこないでしょ。だから小学校の必要があるんです。

岡田　その義務教育が資本主義の必要条件であるということを考えると、義務教育を撤回したら、私たちが今持っている民主主義社会の仕組みというものも、ある程度変えざるをえないですよね。

小室　いや、変える必要はないです。だって、一番簡単な読み書きだとか計算なんていうのは、今のような小学校がなくたって、たいがいの人はできるようになっちゃう方法が、ほかになんぼでもあるんですよ。今だって小学校の教師なんてまともに教えないから、小学校中学校の本当の勉強は塾でやるなんて人が多いですよね。だから、ここまではどうしても必要だと思ったら、塾でやればいい。アメリカでは教育は基本的に親がやるんです。小学校あたりから自分の宗派の学校に通わせて、中学校上級生や高校、大学の教育は、親の考えで決める。一番有名なのは、エジソンのオフク

ロ。学校の先生が「お宅の息子は低能で教えきれません」と言ったら、「教える必要はない」って家に連れて帰ってきて自分で教えたでしょう。その結果、あれほどの大発明家が出た。ところが、日本では、どの子どもも徴兵制度と同じように、学校によって教育するんですよ。

岡田 その均質教育の成果で、所得の均質化もあれば、役人に三権全部押しつけて平気な社会もあるわけですよね。だから、先生がおっしゃる、義務教育の撤廃と教育の多様化をやってしまうと、おそらくそこから十年か二十年ぐらいすると、この社会っていうのはがらっと変わりますよね。

小室 変わりますね。平等化が必ずしもいいものかわかりませんからね。むしろ、平等はないほうがいいんじゃないですか。

岡田 その結果現われるのはおそらく、さきほどおっしゃった階級化というよりは、階層化がはっきりした社会。

小室 そうでしょうね。階層がはっきりしたほうがいいと思います。

岡田 多様な階層化のある社会のほうが、今の社会ではおそらく国際競争力も強いだろうし。

小室 そうです。経済そのものが本当に強くなる。階層がはっきりしたほうが経済は強いのです。

岡田 おそらく打たれ強い国になるであろう。

小室 打たれ強い国ですし、非常に強い社会になる。

歴史を学ばない日本には、保守主義はありえない

岡田 今からそちらのほうへ行くとして、何が邪魔してるんですか。

小室　やっぱり日本の慣習です。いったん作ったものは変えられない。「伝統主義」がはびこっているうちは、日本は封建時代と同じです。

岡田　では、もし日本に革新勢力というのがあるとしたら、革新勢力が目指すべきなのは教育制度の撤廃で、保守主義が目指すべきは今の伝統のようなものを守っていくことなのでしょうか。

小室　そうではありません。日本には保守勢力っていうものはないでしょ（笑）。

岡田　それは国民全体が前にあったものを受け継ぎたいと思っているから、わざわざ勢力化する必要がないということですか。

小室　というか、「伝統主義」が強すぎるんです。保守主義というのは、単に伝統を守るっていうのじゃなしに「これはよい伝統だから守る」、「これは悪い伝統だから廃止する」ということです。今までやってきたことが何となく正しいと思ってるのは、保守派じゃないんです。

岡田　なるほど。

小室　ところが「伝統主義」というのはそうじゃなくて、よい伝統でも悪い伝統でも、すでに過去において行なったことをそのまま立たせてくることです。それが一番はびこっているのが、金融業界です。本人たちは犯罪だと思ってやるんじゃなく、今までやってきたことは正しいと思ってやってるうちに、大変な犯罪になる。こういうのは「伝統主義」であっても、伝統の選択でないんです。保守主義は、伝統の選択がなかったら出てきません。

岡田　その選択をするとき、価値のベースって何になるんですか。

小室　価値合理的もしくは目的合理的であるか、あるいは自分の国の歴史に対する反省、そういう

のが保守主義のモデルです。今の日本人は全然歴史の勉強をしないし、歴史を知らないから、保守主義ってありえません。

岡田 では、それに対抗する革新というのを仮定するとすれば、先生がおっしゃった多元的な階層、価値の育成っていうのを揚げて、現在の義務教育制度であるとか官僚制度の撤廃といったことを、かなり徹底的に目指したものなんでしょうか。いわばアメリカの民主党的なやり方とでもいいますか、より強化された国民なりの自由競争というのか。

小室 そうですね、自由競争の強化と言うと、規制撤廃ですよ。規制撤廃と言ったら、資本主義に帰れって言うんですよ。だから、そういうことをもって革新だと言うんだとすれば、それはたしかに革新ですな。

岡田 資本主義だけが目的じゃないとすれば、資本主義に限らず、その、何て言うのかな……。

小室 今、自由競争っておっしゃったでしょ。

岡田 ええ。でも経済競争だけではなくて、その階層内社会でのあらゆる価値観の競争です。

小室 そこへも行くのですけど。まず、経済から話を始めましょう。市場における自由競争の意義っていうのは、はっきりしてるんですね。つまり資本主義なんです。その哲学はアダム・スミス[006]が言うように、「最大多数の最大幸福が達成される」[007]ということです。

これは比喩ですが、正確に言うと、自由競争の結果が資源の最適配分を生むということです。その自由競争を阻害すれば「最大多数の最大幸福」が達成されない。だからいろんな規制を設けるべきではないというんです。これは昔の例だと、ギルド[008]だとか王様が与えた特権です。今の話で言えば、

006 ――
アダム・スミス
一七二三〜一七九〇。イギリスの経済学者。古典派経済学の祖。代表作『国富論』は一九世紀の自由主義時代に世界諸国の経済政策の基調となった。

007 ――
最大多数の最大幸福
イギリスの法学者・思想家であるベンサムによるイギリス功利主義の理念。幸福とは個人的快楽であり、社会は個人の総和であるから最大多数の個人が持ちうる最大の快楽こそ、人間が目指すべき善であるとする。

008 ――
ギルド
中世ヨーロッパの都市に行われた特権的同業者組合。十一世紀にまず商人ギルドができ、十二世紀に手工業者ギルドが派生。都市統治の実権も握ったが近代産業の成立とともに十六世紀以後衰退した。

政府による規制ですね。だからそういうのを全部取っ払うと、「最大多数の最大幸福」が得られると。だから自由競争は望ましいというわけです。もうひとつ哲学的観点で言いますと、簡単に言えば優勝劣敗の論理です。市場を自由にしておけば、よい企業やよい労働者だけが生き残って、悪い労働者や悪い企業は淘汰される。だからよいと。（小室注3・214ページ参照）

岡田　自由競争というのは、市場があって、お金というベース、経済というベースがあるからこそ成り立つんだというわけですね。そこをあえて、ちょっとひねっちゃって言うならば、義務教育という規制を撤廃して教育を自由競争化すれば、国民もしくは市民の間で、人的資源の配分がおそらく最適に行なわれるということと考えていいんでしょうか。

小室　それはそうでしょう。自由をそのように解釈するのは可能ですね。十九世紀は、社会も自由競争でよくなる（ソーシャルダーウィン主義）と主張していた人が多かった。ダーウィン[009]の進化論そのものは、今では退けられちゃっていますけども、そのアナロジーはあちこちで生きてますね。だから、そういう自由競争にしたら最もよい教育ができるという考え方が昔からあって、今でも通用する考えです。日本ではまだ規制が多すぎるから、ろくでもない教育しか出てこない。以前『窓ぎわのトットちゃん』が大評判になったでしょ。あのトモエ学園[010]みたいな学校は、今ではできない。文部省が許さないのです。（小室注4・215ページ参照）

教育マニュアルに正解はあるか

岡田　僕の娘が保育園に通っている頃に、保育園の先生は何を見てるんだろうと思ったら、先生の

009 ――
ダーウィン
一八〇九～一八八二。イギリスの博物学者。動植物の変異の観察などをもとに自然選択説を提唱、生物進化を説明した。生物学ばかりでなく、社会思想界にも大きな影響を与えた。

010 ――
トモエ学園
黒柳徹子著『窓ぎわのトットちゃん』に紹介された学校。中古の電車を六台並べた「教室」、時間割りを設けず自分の好きな科目を自分で勉強するなどのユニークな教育方針を貫いていたが空襲で焼失。現在は学園碑が東京・自由が丘にある。

マニュアル本が売られているんですね。それを見て思ったんですけども、教師一人一人が自分なりの教育哲学みたいなのを持って、それを実行しようと思っても、不安でできないですよね。その基礎価値観が自分たちの中で築かれていない上に、子どもが七歳になったら小学校へ送らなきゃいけないでしょう。自分の信念で育てた子どもの面倒を十五歳、あるいは二十歳までみられるならともかく、七歳の時点でバトンタッチしなくてはいけないんだったら、自分の信念じゃなくて小学校に入るまでに準備すべきことをやらざるをえない。そのための膨大なマニュアルがあるとなれば、どうしてもそれに頼ってしまうというのはあるんじゃないですか。

小室　それが今の日本の最大の問題ですな。今、宗教がないでしょ。欧米諸国であればマニュアル以前に宗教があるから、宗教の権威によってそれをやるんです。日本は宗教がないから、ものすごいアノミー状態になっている。マニュアルといっても、幼稚園の先生や小学校の先生のマニュアルだったらまだいいですけども、お母さんの育児マニュアルまであって、その通りにやればいいんだろうというのは……。育児が恐ろしいとともに、いやでいやでしょうがないらしい。

岡田　僕なんかにとっては、育児マニュアルがあるのがもう当然なんです。まず母親や祖母と住んでいる場所が違うし、電話してもすぐ聞けるような環境にないし、隣組みたいなものもない。ですから、そういうマニュアルがあるのは仕方がないことだという前提で、子どもを育ててきました。

小室　その点、昔は隣の人もいたし、おばあちゃんだとかおじいちゃんだとかがいたから、今と比較にならないくらい安全だった。だから、昔は親殺し子殺しなんて、まずなかったでしょ。

岡田　今、子どもを育てる上での安全策は、マニュアル本をいっぱい読んで、どれかを選ぶってこ

としかなくなってきたんです。

小室　では、どういう基準で選ぶんですか。

岡田　それは、かろうじて自分の中の個性であるとか、哲学みたいなもので選ぶということになっちゃいますね。

小室　じゃあ、その哲学っていうのはどうやって選ぶかという問題がきますね。

岡田　はい。その哲学みたいなものが強固であれば、読まず選ばずとも自分の中から出てくるんでしょうけど、その自分の中から自発的に出てきたものが、やっぱりどうしても信用できないわけですね。

小室　だからそれが最大の問題なんです。

岡田　というのも、今はテレビでも雑誌でも賢げな人がいろいろと正解のようなことを言ってますよね。だから、自分一人で考えるよりは、メディアの中からどの正解を選ぶかということしか、もう残ってないような気がするわけなんですね。

小室　じゃあ、その賢そうな人が賢くなかったらどうするんですか（笑）。

岡田　より賢い人が淘汰されて現われるだろうと、祈るような気持ちで見守っている……（笑）。

小室　それは淘汰に対する、ひとつのプリデスティネーション、予定説ですね。その予定説が作動すれば問題ないんですけれども、じつは間違っていたなんてことになったら大変なんです。

その淘汰を、根本から徹底的にやったのが宗教です。たとえば仏教のお経は悟りをひらくためのマニュアルですが、賢そうな人が書いたお経が山ほどあります。そこで、お経の大切さの順序をつ

ける作業が必要になります。天台智顗[011]の五時八教[012]の教相判釈[013]がとくに有名ですが、彼はすべてのお経の中で法華経を最高としました。そのほかに華厳宗[014]には五教十宗[015]の教相判釈があります。

　つまり、マニュアルが多すぎて困るのでしたら、誰かが「教相判釈」をする必要があります。でも、これは大変な作業です。天台智顗は智者大師と言われ、すごい学者です。学問、識見抜群の人でないとできないでしょうな。

岡田　その方式としてもうひとつあるのが、この五年間ぐらいの育児書とか教育書の売れ筋から言うと、昔の本は教育学者であるとか学校の先生みたいな人が書いていたのが多いんです。でも今はお母さんの体験談主体になっている。つまり権威みたいなものがさらに分解していって、自分と生活レベルや価値観レベルが同じであるお母さんの体験談をいっぱい集めてきて、自分ができそうなものを選ぶ。その本にこうしたらこうなったって書いてあるから安全だと、そこで何か安心して子どもを育てるというようなやり方になっちゃってるんです。

小室　しかし安心できますか。

岡田　これしか今のところの安心はない、ぐらいの気持ちなんだと思います。

小室　だから、いろんな問題が起きるわけですね。

岡田　はい。ただ、その前の段階の教育学者の本しかなかったときよりは、みんなずっとマシに思えている。

小室　その教育学者がエゴで無能だったらどうするんですか。

岡田　エゴだったから今こういうふうになってるんで（笑）。

011

天台智●（てんだいちぎ）　五三八～五九七。中国随代の僧。天台宗第三祖。五七五年、天台山にこもり天台教学を確立した。陳および隋の皇帝の帰依を受けた。

012

五時八教（ごじはっきょう）　智●の行なった天台宗の教相判釈。釈迦の教えを時代に従って五教（小乗教・大乗始教・大乗終教・頓教・円教　※天台宗ではこれを五時教という）に分け、教え導く方法から化儀の四教（頓教・漸教・秘密教・不定教）に、教法の深浅から化法の四教（三蔵教・通教・別教・円教）に分類した。

013

教相判釈（きょうそうはんじゃく）　仏教各宗派の教学的立場を明らかにするため、さまざまの経典を形式や時期、意味の深浅などによって分類、判定し、自宗の依拠する経典を頂点として体系的に位置づけること。

014

華厳宗（けごんしゅう）　華厳経の教説に基づき、中国唐代の僧、法蔵が開いた大乗の宗派。天台教学と並ぶ仏教の代表的な思想。

小室　そうだと思いますよ。というのは、今の日本の教育学のレベルは、決して高くないんです。インチキ学者が多い。たとえば、親子殺し合いの家庭なんていうのが、激増してるでしょ。そうすると、子どもをいろんなところへ連れていくんですね。神経科の医者、精神科の医者、精神分析の医者、それから心理学者、教育学者、と連れていく。その中で一番無能なのは誰だと思いますか。

岡田　うーん。それは、心理カウンセラーが一番まずいんじゃないかと……。

小室　カウンセラーに限らず、日本っていう国には、まともな心理学者だとかまともな教育学者がほとんどいないんです。

岡田　心理学というもの自体が、キリスト教ベースで発達したからということじゃないんですか。

小室　逆です。現代心理学っていうのは、ネズミの実験から発達したんです。

岡田　ああ、なるほど。

小室　だから一番信用できるのはネズミの実験です。カウンセリングだとか人間の心理の研究なんていうのは、心理学の中で最も遅れた部分ですね。だから、親子殺し合いの事態が起きた場合に、一番参考になるのはやっぱり医者ですね。しかし、たいがいの場合は異常なしっていうことになっちゃう。「身体的、精神的にどこにも病気はありません」と。つまり「アノミー」は連帯（ソリダリテ）の欠如で、いわば社会的「病気」ですから、医者の手にも負えないのです。一番インチキなのは教育学者ですけどね。

岡田　僕が思うに、たとえばアトピー性皮膚炎の子どもを抱えていて、心理カウンセリングに通うお母さん方の拠りどころというのは、そこの先生が目的ではなくて、そこに来るお母さん方のサー

015 ――

五教十宗(ごきょうじっしゅう)
五教を理論内容から十に分類したもの。我法倶有宗・法有我無宗・法無去来宗・現通仮実宗・俗妄真実宗・諸法但名宗・一切皆空宗・真徳不空宗・相想倶絶宗・円明具徳宗をいう。

クルに入って、その中の情報交換や価値観構築というところにあるのではないかと。先生はシンボル的であればいいというように考えているんじゃないですか。

子どもをどう育てるのか、もしくはどういうふうに自分の跡を継がせるのか、非常にリアルな問題ですけども、現実には子どもの教育を国家に預けてしまっている。それをこれから自分たちの手に取り戻すのって、どうも無理があるのではないかと思うんですけど。

小室 十年ちょっと前にですね、私は『あなたも息子に殺される』という本を書きました。日本の心理学者、教育学者に挑戦したんですけども、かなり反響が多かったんですね。これは学術書として書いたつもりなんですが、いろいろな人から質問を受けました。「うちの息子に殺されそうなんですが、どうしたらよろしいでしょうか?」に対して第一番目の答えは「潔く殺されなさい」。そうすると「殺されるのはいやだ」と言うから「先手打って殺しなさい」と。

岡田 やはり、そう来ましたか(笑)。

小室 というのは、みなさんまず医者に連れてくんですよ。どの医者が見ても異常なしだと言う。それで家に連れて帰ると、家庭内暴力をふるう。ますますひどくなる。で、ある人はそれを、日教組に影響されていると言いましたよ。日教組は「日本の過去は汚辱の歴史である」と教えたので、日本人は連帯を失ってアノミーが広がっていきました。アノミーにかかると、精神に異常のない人でも、狂者よりも狂的にふるまうようになるのです。

岡田 はい。

小室 だから、教育のスタンダードを求めるためには、医者や経験を積んだお母さんやお父さんに

相談するのもいいんですけどね。ほとんど、効果がないですね。カウンセラーや教育学者に相談するのはまったく無駄です。

岡田　では、先ほど先生がおっしゃった教育の改革によってだいぶよくなるんですか。

小室　自由競争やらせて、そこでその原因が何であるのかっていうことをわかった人が現われれば、救われます。

公的教育機関の恐ろしさは、教育が型にはまった仕事（ルーティン・ワーク）になることです。これが致命的（フェイタル）です。思春期の青少年の心は疾風怒濤（シュルトム・ウント・ドラング）で日に夜に激動しています。それをルーティン・ワークで抑えつけるなんて、猛獣を小さな木箱に押しこむような話ではありませんか。無間地獄（むげんじごく）です。阿鼻叫喚（あびきょうかん）の叫びをあげても当然です。

ゲーテは「すべて偉大なものは青春に生まれる。その後の生涯は注釈である」とまで言いました。昨日までは平凡な青年が飛騰して、世界史的に偉大な人物となることも可能です。たとえば坂本竜馬がそうでしょう。青年はそれだけの偉大さを秘めているのです。沖天するエネルギーを持っているのです。その偉大さ、エネルギーを育ててくれないで、ただ押し殺してしまうルーティン教育なんて！

「自分なりの選択」ができないオタク世代

岡田　小室先生のお話は仮想的でして、どれが一番いいのかは聞く側が選ぶしかないんです（笑）。先生のほうから「これだ」というモデルは提示されない。たぶん、それはそういう職業じゃないか

らというか（笑）、そういう立場じゃないからと僕は勝手に判断したんですけれども。

小室　あのね、それよりも、最善のものとか一番いいということをやるには、選択肢が一直線上に並ぶことが可能だという前提があるでしょ。だからその前提が満たされない場合には、そもそも一番いいっていうことはないかもしれないし、考えることもナンセンスかもしれませんよね。

岡田　ただ、僕の選択肢ってありますよね。つまり僕はこれ以上でもこれ以下でもいけないという、その人なりの基準があって、その中の最善っていうのは選びうるんだけれども、おそらく、みんなにとってとか日本国の最善っていうのは、選べないわけですよね。

小室　ですからね、選択肢っていうものは、直線的に並んでるとも限らないでしょ。よく見比べてみたら、こういう意味ではこっちのほうがいいけど、ああいう意味ではあっちがいい。ジャンケンを考えてみれば、どれが一番強いなんて答えは出ない。チョキはパーには強いけどグーには弱いとか。そういうサイクリックな場合もあるし。

岡田　ただ、それでも、誰かが決めるしかないわけですよね。運を天に任せてというか。

小室　でもそれが決まるんだったら、果して実現できるかどうかっていうことがまず問題です。実現の可能性ですね。

岡田　なるほど。

小室　数学を例にして説明しますと、こういうのがギリシャの昔から問題にされていましてね。定規とコンパスとで角の三等分ができるのか。それから、もうちょっと複雑に難しくなると、体積の二倍の立方体を作ることはできるのか。ところが、それが解決されたのは近代に入ってからなんで

す。数学以外の問題でも、何か問題を出した場合に解答があるのかないのかは、わからないですよ。

岡田　学問というのはだいたいどこまで可能なんでしょうか？　たとえば「今の日本は、ここらあたりまでまずいことになっているから、こうしたほうがいい。こうすればこうなる」ということは、学問でどこまでわかるものだと、先生はお考えですか。

小室　その場合でも、今言いましたように、一番いいという解答があるのかもしれないし、ないのかもしれない。また解答があったとしても、一番よい状態というのが、資本家が全部破産して労働者が全員餓死する状態だということも、理論的にはありうるのです。英国古典派の代表であるリカード[016]が、こういうこともありうると、そこまで極端なことも一例として考え及んでみたわけです。それから、また、みんなが望んだからといって実現するとも限りませんな。一番簡単な例だと、失業なんかいやだとみんなが望んだとしても、失業がなくなるとは限らないでしょう。それから、エイズにかかった人がエイズはいやだと言ったって治るとは限らない。もうちょっと前には、らい病、結核がそうでしたね。その結果、らい文学だとか結核文学なんかがあったわけです。だから、望んだからそうなるとも限らないし、本当にそれが望ましいのかどうなのかも、よくわからないわけですね。

岡田　今、僕ぐらいの世代、三十代半ばくらいの人たちって、わりと上の世代に対して批判的だったんだけれども、いざ自分たちが親になって社会の中核に近づくにつれて、これはえらいことになってると。今の日本、なんかやばいなって気は、たぶんみんなしていると思うんです。すぐ上の、全共闘世代と言うんでしょうか、彼らがあらゆる価値観を潰しちゃって、壊していった。その間に

016 ――
リカード
一七七二～一八二三。イギリスの経済学者。古典学派の完成者。アダム・スミスの労働価値説から出発、利潤と賃金の対抗関係を説いた。また差額地代説を媒介にして地主階級は資本家階級と労働者階級の共通の敵であると論じた。

家庭というのも相当壊れ、一族という概念も壊れ、共同体としての会社の幻想も壊れちゃった。その中でみんな青ざめてるところだと思うんですよ。上のやつら、信用できない。下を見たら中学生が人殺しちゃってると。これどうすりゃいいんだっていうようなことで、僕としては結構安易な回答求めてるんですね。「小室先生、これどうすりゃいいんですか?」と(笑)。「じゃあ、教育よくすりゃいいですか?」「いやよくすりゃいいとも限らない」「じゃあ日本っていう国、一回潰れちゃえばいいんですか?」「潰れるのがいいかもしれないけども、それはわからない」と……(笑)。

小室　潰してしまったほうがいい場合もありますけどね。一度破綻したほうがいいという場合もね。今の日本だと徹底的に全部壊すのがいいと思います。

岡田　僕自身が考えている方策として、ある程度、それぞれの人間が独裁者になったつもりでどうやっていくのかを考えるところから、自分のスタンダードは決めるしかないなと。

小室　それしかないんですよ。それしかないんです。

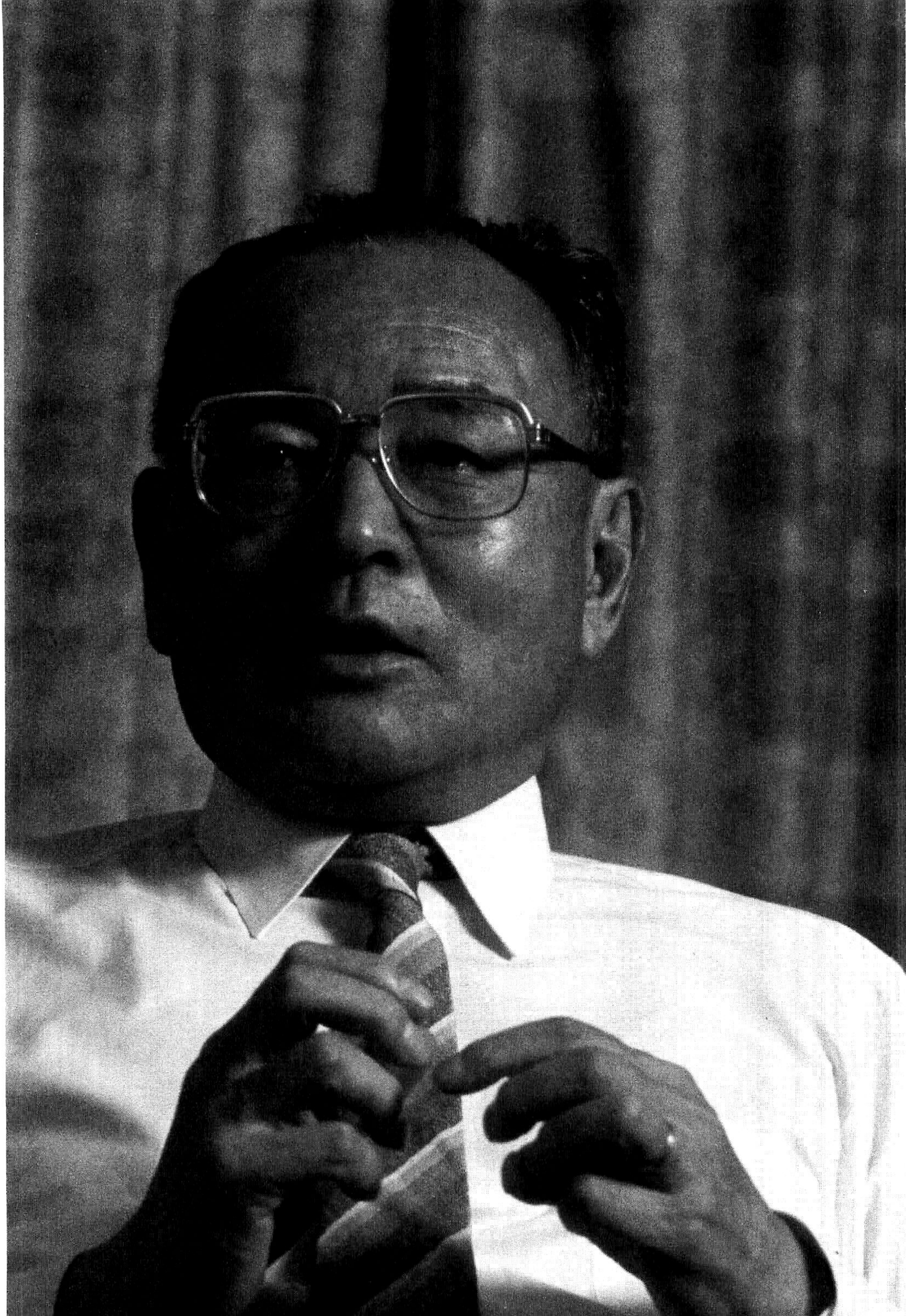
岡田　そういうふうに、一人一人が個人のレベルで考えて、次にそれを家族とか、周囲へ反映させていくぐらいから始めようかなって考えたんですけど。

小室　そうじゃなかったらだめです。まさにそうです。ホッブズ[017]は「万人の万人に対する戦い」[018]から議論を始めます。まったくの無秩序が初めにあったということです。これが「ビヒーモス(Behemoth)」[019]です。ここから考えを始めて、どうすれば無秩序を克服して、何とかして秩序を作ることができるのか。そのように思考を進めていくのです。

岡田　はい。それで、そのための考え、ツールとでもいうのか、やはり僕らの世代というのはすご

017 ――
ホッブズ
一五八八〜一六七九。イギリスの哲学者・政治思想家。自然主義・唯物論を人間、社会にも適用。自然状態では人間は万人の万人に対する闘いの状態にあるが、契約によって国家を作り、これを脱却したとして主権の絶対性を主張、専制君主制を擁護した。

018 ――
万人の万人に対する戦い
原典はラテン語で「bellum omnium contra omnes」。ホッブズがその著『リバイアサン』の中で用いた言葉。自然状態において人間は利己的で自分以外のすべての人を敵として争うという意。

019 ――
ビヒーモス
旧約聖書ヨブ記に出てくる神の創造した巨獣。河馬とされている。転じて巨大でグロテスクな人やもののことをいう。

く脆弱ですので、何かを考えるときには参考書を取り寄せる展開になるわけです。ゼロから積み上げるのではすごく不安が多いし、ゼロから積み上げるとすれば、これまでの何千年にも及ぶ文明の積み上げって何だったんだろうか。過去にそういう例があるだろうし、同じ材料で考えた人も先人にいっぱいいるはずだ。もしかしたらその情報が自分たちに届いていないだけなんじゃないだろうかって考えちゃうんですよ。

小室　たぶん、一番簡単なのはキリスト教に、ゴスペル、福音って言葉がありますね。この福音を聞けば誰でもすぐ救済されると。

岡田　南無阿弥陀仏みたいですね（笑）。

小室　そう。南無阿弥陀仏はまさにそうなんです。法然[020]や親鸞[021]の考え方は、今は末世だから、どんなに修行してもどんなに学問してもどんなに善行をしても絶対に悟りを開くことはできない。でも、南無阿弥陀仏ひとつを唱えたら、弥陀の本願が実現されて極楽浄土へ往生できるというものなんです。日蓮[022]の場合、論理は違いますが結論の現象形態は似ています。法華経を読むのが大変だったら南無妙法蓮華経と唱えるだけでもいいと言うんですから。そこまではパウロ[023]の福音と一緒ですね。

パウロの場合は、イエス・キリストは十字架に架けられ、そして死人の中から甦ったという、それだけを信じればいいと。すべての人間は罪人なんだから、どんなにいいことをしたって無駄だと。というよりどんなにいいことしようと願っても絶対できない。でもそれで救われないのではなく、ただイエス・キリストが甦ったということだけ信じていればいい。ものすごい福音でしょ。最近のアメリカじゃなおわかりやすい。福音のことを「Good News」と言うんです。

020 ――――
法然（ほうねん）
一一三三～一二一二。浄土宗の開祖。比叡山に入り、四十三歳のとき専修念仏の教えを唱えて、主に武士や農民の帰依を得る。旧仏教から激しい圧迫を受け、一時は四国に流される。のち許されて帰洛。

021 ――――
親鸞（しんらん）
一一七三～一二六二。浄土真宗の開祖。初めは比叡山で天台宗を学び、のちに法然の専修念仏の門に入る。法然と同様、圧迫されて一時は越後に流罪。赦免されてからは法然の思想をさらに徹底させ絶対他力による極楽往生を説き悪人正機を唱えた。

022 ――――
日蓮（にちれん）
一二二二～一二八二。日蓮宗の開祖。十二歳で仏門に入り、諸宗を各地で学ぶ。「法華経」によってのみ末世の国家の平安もあるとする。幕府や他宗を激しく批判したため流罪となる。赦免後は甲斐身延山に隠棲。

023 ――――
パウロ
初期キリスト教の伝道者。初めはキリスト教徒を迫害するが回心を体験。エーゲ海沿岸地方を中心に異邦人に福音を伝え、各地に教会を設立。律法によらず、信仰のみによって義とされると説いた。

岡田　それはシンプルでわかりやすいですね（笑）。

小室　わかりやすいですよ。昔の宗教家はそういうふうに考えたんです。

階層社会の風穴としてのエリートシステムを待望する

岡田　最後に、もともとお聞きしたかったことなんですが、エリート階層というものがこれから作れるのか。もしくは、私たちはそれを必要としてるのかどうか、ということなんです。階級とか階層というのがどんどんなくなっているのはわかるんですけども、じつはそれがないという今の状態が、特殊なんじゃないのかなあと。僕自身は、本来社会の中には階層や階級というのが、いくつかの段階でもって存在しているのが、正常な状態なんじゃないのかと考えているんですが。

小室　まさにそうです。それはその通りです。階層は必要です。しかし、人工的に作ることができるかというと、難しいですね。

岡田　あえて作っちゃうと、科挙の制度みたいになっちゃうんですか。

小室　そういうこともある。人間社会っていうのは、ものすごくプリミティブな社会を除いたら、分業の社会ですよ。分業や協働のためには、絶対に階層がないと困るんです。一番簡単なのは、兵隊、軍隊です。軍隊の階級っていうのは、絶対必要なんですな。だから中国で階級をなくそうと思ったけど、軍隊で階級ができちゃったでしょ。社会全体でも同様です。ソ連では革命によって階級をなくそうとしましたけど、「ノーメンクラーツラ」[024]という大変な階層ができてしまった。マルクスは、その理論で「人類の歴史は階級闘争の歴史である」と語っている。どの社会にも必ず階級、

024——
ノーメンクラーツラ
ソ連で、共産党幹部や上級官僚などの特権階級。「党機関が持つ任命職一覧表」の意。

広く言えば階層は必ずできる。階層のない社会なんて考えられませんな。

　ところが日本の社会というのは非常に不思議で、階層をなくすようなものすごい大魔術が、信長の時代以降働いているわけです。明治以後、日本で華族制度[025]というのを一応作ったでしょ、ヨーロッパから輸入して。ところがあれは、社会的には全然機能しないんです。華族は特別な能力もノブレス・オブリージ[026]もなく、社会的に尊敬されません。戦後、いっぺんの命令で消えてなくなった。

　二番目の特徴は、日本には準貴族、英語で言うナイトだとか、バロネットがない。それから準々貴族としての特権階級、ジェントリだとかヨーマンリーがないんです。

岡田　そうですね。

小室　だから、ヨーロッパとは非常に違った階級社会であることはたしかです。

　それでは戦前の日本の階級社会はどうだったのかと言いますと、地主と小作人だけは再構築されたんです。もっとも封建的な階級制度が残っちゃった。なぜ封建的かというと、年貢は実物つまり米で、しかも五〇パーセントという、とてつもない高率だったんです。その年貢の取り立ては地主の任意というところがありまして。たとえば飢饉になったら、そんなに厳しく取り立てることはできませんね。地主の任意でいくらでも低くできるなら、小作人との関係は経済的な取引じゃなく、温情の関係になっていくわけです。

岡田　なるほど。そうですね。

小室　そうなると、小作人は地主から搾取されるだけじゃなくて、人格的にもまた家来であるという、そういう階級制なわけです。それが致命的なんです。近代における階級制度として、最低です

025　**華族制度**
旧憲法下、皇族の下、士族の上に置かれ貴族として遇せられた特権的身分。旧公卿、大名の称とした旧華族制度ののち、公・侯・伯・子・男の爵位が授けられ、国家に貢献した政治家・軍人・官吏などにも適用。一九四七年の新憲法施行により廃止。

026　**ノブレス・オブリージ**
ヨーロッパ社会で、貴族など高い身分の者はそれに相応した重い責任・義務があるとする考え方。

ね。もうどうしようもないほど不合理だった。

おもしろいのは、戦前、地主階級にはマルキシストになる人が多かったんです。何もしないで搾取ばっかりしていたから。

岡田　良心の痛みに耐えかねて（笑）。

小室　その通りです。ところが、逆に小作人にとってはすごい活力になった。さんざん搾取されるでしょ。ところが、搾取されつくしたあとに、風穴が開くようなシステムだったんです。小作人の中で優秀な人は独学で一高、東大に進む人もいたんです。昔の一高はよほどの秀才じゃなきゃ入れなかったから、中学も行っていない人が入れば、これはものすごい美談なわけです。

岡田　階層が生み出す活力、でしょうか。

小室　そうです。だからそういう人たちを、一族はもちろん郷党もみんなで後押しした。彼らはそこから高級官僚への道を歩んだのです。最も大切なことはこれです。郷党も村もみんなから、広く言えば日本中から後押しされて、輿望(よぼう)を担っているうちに、強烈な責任感が生まれてくる。これが日本のノブレス・オブリージです。それが今なくなったことこそ、現代日本を破局に導くものだと思います。だから、ものすごい階級制度や不公平が、かえって社会を活発にしたり、安定させたりという面もあるのです。

岡田　教育の制度をいじって直接エリートを作るというよりは、階層社会をはっきりさせた上で、その中で風穴としてのエリートシステムを待望するということになるわけですね。

小室　そこから新しい活力が生みだされてくる可能性があると思います。今の受験戦争からはノブ

レス・オブリージも責任感も生まれません。合格者は日本中の輿望を担うのではなしに、俺が偉いから合格したと。いや、合格した途端に生きる目的を失ったりします。

ツケが回ってきたような気がする

小室 今日はみんな熱心に聞いてくれて(笑)。

岡田 もう、当事者ですから(笑)。

小室 岡田さんは、若者のホープだそうですね。

岡田 いやあ、もう若くないです(笑)。

小室 今の若者っていうのは、もう悩みなんてなまやさしいもんじゃなくて、生きる目的を失ってるでしょ。たいがい目なんかどんよりしています。戦争中、明日の生命も知らない若者の目は輝いていました。敗戦の焼け跡に立った若者も元気でした。昭和三十年代には、みんな貧しかったのですが、何かこう、明日によいことが起きそうな気がしていました。その後、豊かになるのに反比例するように希望が消えていったんです。

岡田 自分でもそれに関して責任を感じちゃう。どうも八〇年代あたりで好きなことやってきたツケが、自分自身に回ってきたような気がする……(笑)。今日の対談で私が出せる答えの限界っていうのは、「じゃあみんな勝手に考えて」ということになってしまった(笑)。

小室 大変熱心に聞いてくれて(笑)。

岡田 逃げ場がないのによく頑張った、俺(笑)。

小室先生の注

●注1

階級（class）とは、経済的指標で人間を分類することである。一番古くから使われているのは「金持ち」「貧乏人」という分類法であろう。マルクスは、資本主義の人々を、生産手段を私有する資本家と、それを私有せずに自分の労働力しか売るものを持たない労働者との二階級に分類した。

マルクスの二階級分類法は、あまりにも有名であり、影響力も抜群に大きい。資本家が「金持ち」、労働者が「貧乏人」とも限らないが、マルクスの時代には、おおむねそう考えてもよかった。資本主義が作動していくと、貧富の差は大きくなり、資本家は「金持ち」へ、労働者は「貧乏人」へと収束していった。マルクスの産業予備軍説によると、労働者の生活水準は最低生活水準（生活可能ぎりぎりのレベル）に押し下げられる。

その後、経営と資本所有の分離ということも行なわれ、また高給労働者も多く出現し、労働者は必ずしも「貧乏人」とは言えなくなった。が、マルクスの二階級分類法は、長く影響力を持ち続けていた。いずれにせよ「経済」という指標だけで人間を分類すれば、それは一次元的分類法である。

マックス・ウェーバーは、人間を分類するための指標として、経済のほか、威信（prestige　名誉、尊敬の度合い）をあげている。「威信」と「経済」と二つの指標で人間を分類すれば、これは二次元分類法である。「威信」が高くても「経済（的豊かさ）」が低い場合、およびその逆もありうる。徳川時代において、公卿、武士、商人の三者を比べれば、「威信」にかけては、おおむね公卿、武士、商人の順であろう。そして「経済」ではこの逆であろう（もちろん例外はある）。

ラスウェルは「経済」「威信」のほかに、人間分類のための指標を多くあげている。なかでもとくに重視しているのが、「権力（power）」である。「経済」「威信」「権力」と三つの指標で人間を分類すれば、これは三次元分類法である。

このように、いくつかの指標で人間を分類するとき、これを階層（stratification）という。

階級は、階層の一種（a special case　特殊場合）である。「階級」のよく知られた例としては、マルクスの階級がある。「いわく、世界史は階級闘争の歴史である」。「階層」のよく知られた例としては、インドの「カースト」がある。

●注2

たとえば、平安時代、鎌倉時代における身分制（例　門閥）は牢固たるものがあった。

平安時代に、藤原氏が長く高級官僚を、ほとんど襲断したことはよく知られている。鎌倉時代に、完全に実権を握った北条氏も、ついに将軍（征夷大将軍）になれなかった。その理由は、北条氏の家柄が将軍には不足であったからである。鎌倉時代末になると、実権は執権北条氏を去り、氏管領高崎氏（など）に帰した。しかし氏管領が執権になることもなかった。理由はやはり家柄不足である。

ここで、クエスチョンをひとつ。

鎌倉時代、日本の主権者は誰でしょうか。

天皇か上皇か。摂政もしくは関白か。将軍（征夷大将軍、右大将）か、執権か、氏管領か。これらの六人のうち誰でしょう。こんなにも多く主権者がいる理由は何か。

鎌倉時代には、身分制度が確固として不変であったから、ひとたび「身分」ができれば、実権がなくなって不必要となっても廃止できないのである。しかも、その「身分」たるや家柄に密接に結びついていた。馬の骨がしかるべき「身分」になることはで

きなかった。
　この身分制が、信長の出現によってガラリと変わった。
　何の家柄もない秀吉が、以前には五摂家以外の人が絶対になれない関白になった。氏素性もわからない家康が、源氏の嫡嫡でないとなれない征夷大将軍になる。大名のほとんども成り上がり者である（守護大名以上の名門は細川家と島津家くらいか）。

●注3
　このことを正確に言い表わすと、次のようになる。
　経済学における英国古典派の祖、アダム・スミスは「市場を自由競争にまかせておけば、最大多数の最大幸福が達成される」と言った。
　この「最大多数の最大幸福」であるが、ちょっと聞けば何だかピンとくるような気になるかもしれないが、よく考えると何のことかわからなくなる。数学的に言うと、これは二重最適（double optimality）と言って、理論的に不可能なことなのである。表現を正すと、「一定の人の最大幸福」か、「最大多数の一定幸福」か、これらのいずれかしか、ありえないのである。
　アダム・スミスの表現は科学的ではないので、その後経済学者は、科学的表現で言い換えるように努力してきた。その結果、「最大多数の最大幸福」なんていう非科学的表現を用いないで、「パレトー最適（Pareto Optimality）」という科学的表現を用いるようになってきた。

※パレトー最適について
①「パレトー最適」とはどのような意味で「最適」なのか。どのような点（状態）であるのか。直感的に表わすと「すべての人を、よりよい効用に移すことができないことを言う」のである。そのような点を「パレトー最適点」という。
②換言すれば次のように言えばよいであろう。
　今、仮に「すべての人をよりよい効用に移すことができた」としよう。そうすれば、移したあとの点は、移す前の点に比べ、「すべての人」にとって「よりよい効用」の点である。つまり、移す前の点は、最適ではない。
③「パレトー最適」とは、②のようなことが起きない点のことをいう。
④ここまでの議論は、人間の効用（utility）は可測（測定可能・measurable 数値で表わせる）であることを前提として進めてきた。
　ワルラス、メンガー、ジェボンスの三人によって、「効用」という概念が導入されることによって、経済学には革命が起きたと言われる（いわゆる限界効用革命）。この学派に対する批判は、「彼らは『効用は可測である』との前提のもとに議論を進めてきているではないか」と言うにある。この批判に答えてパレトーは「効用」「限界効用」などにかえて「無差別曲線」「限界代替率」などの新概念を発明して方法論的問題点を切り抜けた。この新方法で表現すれば「パレトー最適」とは、「すべての人を無差別曲線上より、選択が高い点に移すことができない点である」と表現される。
　ところでわれわれは「自由競争」という用語を用いてきたが、これは正確には定義を下さなければならない。この討論においては「自由競争」（free competition）とは、「完全競争」（perfect competition）のことであると定義する。そして「自由競争」が行なわれる市場を「自由市場」「自由競争市場」あるいは「自由放任（レッセ・フェール）市場」と呼ぶことにする。
　英国古典派の教義（ドグマ）は「自由市場が一番よい」。すなわち「市場を自由に作動させておくと、資源の最適配分（optimal allocation of resouces）が実現される」というにある。

●注4

本質的にはこうだとは思うのだが、理論上大切なコメントがある。

さて、われわれは経済の「自由市場」から話を始めたのであった。すでに述べたように、英国古典派の教義からすれば「自由市場がベストである」。その後の科学的研究によっても、この教義は大筋においては成立することがわかった。が、細目における重大な留保条件も発見された。それはすなわち「市場の失敗」(market failure)である。すなわち「自由市場がベストである」ことの否定である。つまり「自由市場がベストであるとも限らない」ということである。いわば大原則の例外である。

経済学が進歩してくると「市場の失敗」の例がいくつか発見されてきた。どのような場合に「市場の失敗」が見られるか。たとえば限界生産力逓増、外部経済(outer economy)、公共財の存在……などが重要な意味を持つ場合、「市場の失敗」すなわち「自由競争がベストである」とも言えないことが起きるのである。つまり、自由競争は資源の最適配分に行きつくとも言えないのである。

シュムペーターはまた、次のような重要な例外をあげている。「自由市場(完全競争市場)がベストである」とは、「独占的競争市場はベストでない」ということでもある。

しかし、シュムペーターは論ずる。独占的な巨大企業は膨大な資金と組織を有するから、技術開発による革新のために著しく有利である。この有利さが、自由競争の喪失さをカバーして余りある場合には、「独占的競争が自由競争よりも有利である場合」すなわち「自由市場がベストである」とは言えない(つまり「独占的競争市場はベストでない」とも言えない)場合ではないか。

このように、「市場の失敗」の例としていくつかの場合が発見されてはいる。しかし、経済学がさらに進むと、先の諸例はやはり例外であって「自由市場はベストである」との大原則は、根本的には揺らいでいないと見なすべきであろうとする意見が支配的になってきた。結論を要約するとこうなる。

大原則としては、やはり「自由市場はベストである」と考えるべきである。区々たる「市場の失敗」の例をもって、規制撤廃反対の理由とすべきではあるまい。

ところで、ここに「ベスト」ということの意味であるが、それは「最適(optimal)」という意味である(最大、最小など)。この意味であるから、大切なコメントが必要となってくる。たとえば、「利潤最大」といっても、その数値がプラスであるとも限らない。利潤を最大にしても、依然としてマイナスということもありうるのではないか。数学の例で説明すると、二次関数の最大値が、マイナスとなることも十分にありうる。

最大にした利潤がマイナスであれば、企業は長期に経営を続けていくことはできない。リカードはもっとすごい例をあげている。自由競争の結果、最適状態になったとはいうものの、その状態たるや、資本家は全員破産し、労働者は全員餓死する状態である。

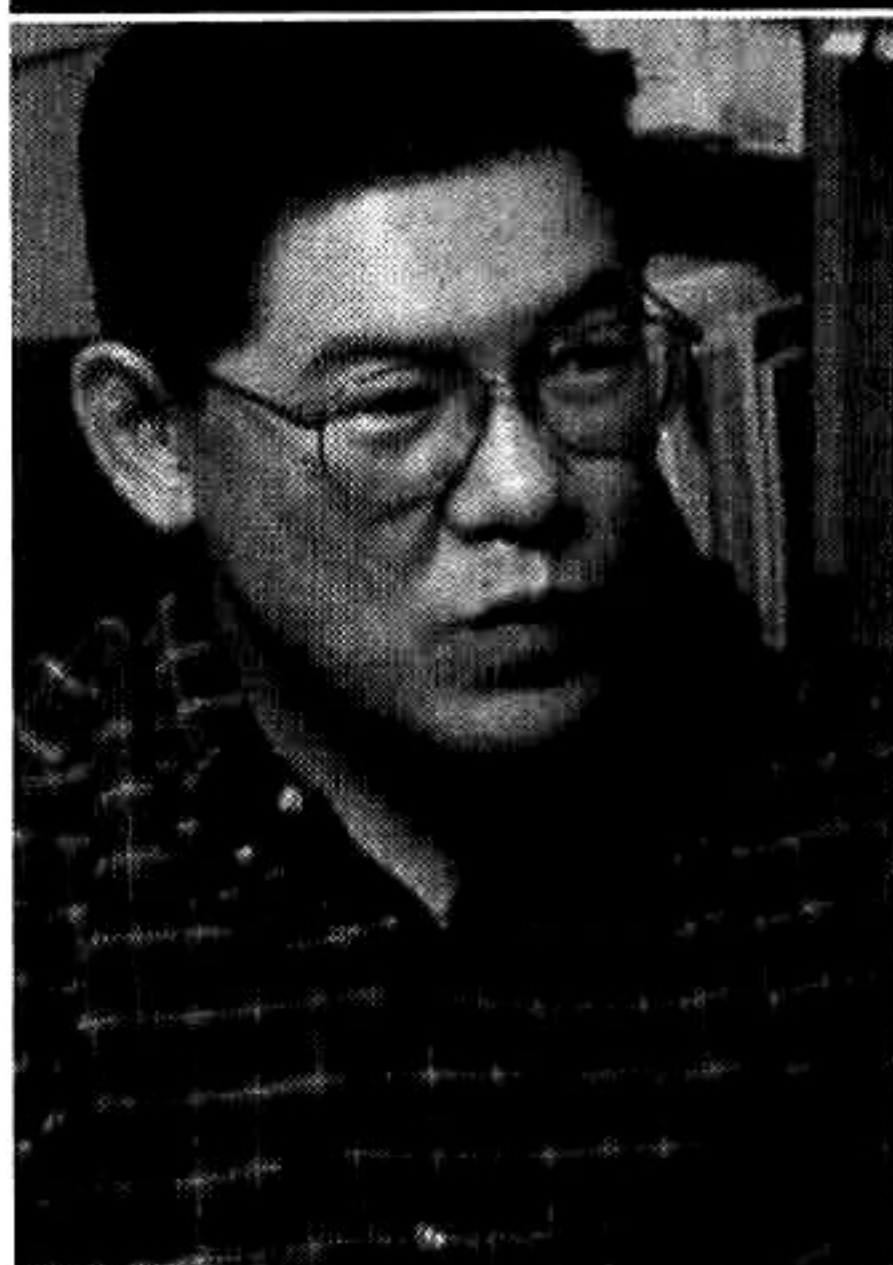
理論的につきつめると、いくつかのコメントがあるとしても、古典派の教義たる自由放任「自由市場はベストである」は、英米資本主義の信条となった。すなわち、何か市場に不都合なことが起きると「市場の自由な作動が阻止されているのではないか」と思いつく。頭が一人でにこう動くのである。

さらに重大な「市場の失敗」の例は、ケインズの場合とマルクスの場合である。ケインズはセイの法則(Say's Law)が成立しない場合には、失業が発生して資源の最適配分は、なされないことを論じた。マルクスは個別資本と全体資本とが矛盾して、資本主義はやがてその矛盾のために没落すると論じた。

今野敏

クリエイターよ、メッセージはあるか

Bin Konno

一九五五年北海道生まれ。
小説家。
上智大学在学中の七八年『怪物が街にやってくる』で問題小説新人賞を受賞。卒業後、東芝ＥＭＩに入社。ディレクター、宣伝を務めたのち、作家に。エンターテインメント小説を中心に、多数の作品を発表する。その一方、空手二段、棒術五段という格闘家でもあり、空手道場「今野塾」を主宰。さらに模型作り、ダイビング、拳銃など幅広いジャンルの趣味を持つ。とくに模型は『機動戦士ガンダム』シリーズだけを作るという、生粋のガンダムマニアでもある。近著に『惣角流浪』（集英社）、『慎治』（双葉社）などがある。

「これ、いいっすよー！」とオタキング大絶賛の小説、『慎治』。表紙にはガンダムが立ちはだかり、オビには「究極のオタク小説」とある。対談始まって以来の正当派オタクの登場とあって、オタキングは興味津々。対談場所となった今野敏さんのご自宅には、モデリングの作業台あり、ガンダムの模型あり、はたまたアニメのセル画ありの、まさに「オタクの部屋」。教育問題からオタクネタまで、何を話してもとにかく楽しそうな「二人の世界」が、そこにあった。（九七年八月二十七日対談）

「小室サウンド」を育てた男!?

今野　『逆シャア』[001]は、ガンダム史上、最高の傑作ですね。

岡田　今野さんは『逆シャア』がトップなんですか。

今野　僕の中では、映像化されているものでテレビシリーズを除くと、あれはトップですね。

岡田　なぜかアニメ関係者の間で、『逆シャア』の評価が高いんですよ。

今野　ただ、終わり方が気に入らなかったんですけどね。でも完成度は一番高いと思っています。僕が東芝時代に担当していた、あのＴＭ（ネットワーク）が曲を作ってくれたしね。

――昔、勤務されていたんですよね。

今野　ええ。三年くらい東芝ＥＭＩに勤めてたんです。そのときちょうど彼らがデビューしまして。当時はバンド名が「スピードウェイ」といって、六人のグループでした。それをたまたま担当していたんです。でも、その頃全然売れなくてね。俺のせいだと言われているんですけど。

001――
逆シャア
劇場版アニメ『機動戦士ガンダム　逆襲のシャア』のこと。オタクによる略称なので、素人には何を言っているのかよくわからない。ちなみに『無印』『ファースト』と言えば、最初のテレビシリーズ版ガンダムのことを指す。

岡田　今はすごいですよね。

今野　小室哲哉さんがあんなに売れてしまいましたしね。当時はただの音楽オタクだったんですけど。いや、そういう意味でも、やっぱりオタクですね、勝つのは。

ストレートなオタク小説が生まれるまで

岡田　僕は、オタクの地位向上というのを目指してこれまでやってたんですけども、この小説『慎治』[002]みたいに、こんなにストレートに「オタクいいぞ！」とやれると思わなかったんですよ。すごくショックだったんですよね。

今野　僕たち小説家は、シコシコとものを書いているわけですけれども、今マーケットの規模だけで考えると、コミケ[003]とかバカにできないですよね。つまり、小説というのはだいたい若い女性が読むものであって、そこをコミケあたりはごっそりつかまえてしまっているわけでしょ。小説だけで考えても、「オタク」と呼ばれているものが、すでにかなりの部分を担っているという現状があるんですよね。これを、社会に対する小説の役割とは何か、ということを度外視して考えてみると、本当にこわいことだなあと思いますよ。やっぱり、オタクはバカにできないというのは、もう数字の上でも明らかなんですよね。

岡田　こういう小説は、今まで今野さんとしては、わりと書かないようにしてきていたんですか。

今野　というか、これは書いてもしょうがないと思っていたんだよね。僕の趣味の部分だから。ただ、もの書きの趣味というのは、どこまでが仕事でどこまでが趣味か、わからない部分というのが

002――
慎治
今野敏作の小説タイトル。いじめに悩む中学二年生の主人公慎治に、担任教師は自分の趣味であるモデリングの世界を教える。学校以外の世界を知った慎治は、いつしかいじめに立ち向かっていく……。九七年八月に双葉社より単行本化された。

003――
コミケ
↓47ページ脚注参照。

あるんですけどね。でも、これは小説にならないだろうと思っていたんですよ。だからこれを書かせてくれた編集者というのは、やっぱり偉いですね。

岡田 これを小説にするまでのプロセスは、どんな感じだったんですか。

今野 作品によってプロセスは違うんですけど、これの場合は、たまたま僕の知り合いがアニメショップに勤めていて、彼から「万引きにものすごい腹が立つ」と何回も聞いていましてね。万引き対策なんかもさり気なく聞いていたんですよ。その話が結構おもしろい。そういう「対万引き戦争」みたいなものに、興味を持っていたのがひとつ。ふたつめは、やっぱりいじめの問題が常に気になっていたこと。そこへ「今野さんの趣味を思いっきり書きませんか」と話があって、それならモデラーの話かなあと。その三つくらいの要素を、頭の中でこねくり回して……。

岡田 いじめ、万引き、モデラー。

今野 そうですね。

岡田 その三つを混ぜながら考えて、雑誌で発表されるまで、時間はどのくらいあったんですか。

今野 そんなになかったですね。春頃に出版社から話があって、いろいろ考えて執筆したのが夏。それで、発表したのが冬です。書きはじめるちょっと前に、いわき市のビデオ屋さんで、万引き現場を撮影したビデオを販売したという出来事もあって、それもきっかけになりましたね。

岡田 雑誌に発表されたときは、どういうリアクションがあったんですか。

今野 そのときはなかったですね。ほっとしましたけど（笑）。

岡田 これであんまり目立ったら、今までのキャリアが……って（笑）。

今野　すべて色モノになってしまう（笑）。

岡田　単行本になってからのリアクションはどうですか。

今野　結構早いですね。やっぱり、これだけ表紙にインパクトがあるとね（笑）。

岡田　今野さんが作った、ガンダムのガレージキットが立ちはだかっている（笑）。

今野　いやあ、この表紙を見たときは僕もぶっ飛びましたよ。僕のを使うという話は聞いていたんだけど、まさかここまで思いっきり使うとは思っていませんでしたからねえ……。まあ、もう行くとこまで行っちゃえって思ってますけど（笑）。今、推理作家協会の常任理事をやっているんですけれども、そんな肩書、どうでもいいやって（笑）。

自分のルールを持って子どもとつき合う

岡田　この小説では、主人公の少年のいじめに対するリアクションというのが、なかなか画期的に描かれていますね。最後のほうで、いじめにはいじめられる自分自身にも責任があるんだと認める。

今野　本当のことを言うと、あんな簡単にいじめは解決しないと思うんですけどね。ただひとつの小説の世界を作る上で、テストケースだと思っているんですけど。

岡田　クライマックスの「夢」みたいなもんですよね。

今野　あそこでぐちゃぐちゃになってしまうと、僕たちは何の解決策も提供できなくなってしまう。もちろんこれが解決策だと僕も思ってはいないんですが、テストケースを提供できたとは思うんです。大人と子どものつき合い方のね。今の社会はあまりにも子どもを大切にするがために、スポイ

ルしてしまうんですよね。
　この主人公と同じ、今の十四歳くらいの子どもの親って、だいたいは僕たちより上の世代ですよね。いわゆる団塊の世代だと思うんですが、大学時代は学生運動をやって、今は中間管理職をやっている人たち。その世代というのは、規範を持っていないんですよ。親が規範を持っていないから、子どもは何に従っていいのかわからずに、イラだちを感じている。その点、この小説に出てくる「先生」は、自分の趣味という規範を持っているわけですよね。自分のルールをしっかり持って子どもに接すると、子どもは自然にわかるはずなんですよ。

岡田　この「先生」っていうのがちょうどオタク世代。
今野　たぶん。僕よりちょっと若いぐらいの設定ですよね。
岡田　いわゆるガンダムのファン層の中心っていうのは、三十五、六歳ぐらいだから。
今野　もっと上だと思うんだけど……。あ、でもそのくらいかもしれないなあ。
岡田　オリジナルが昭和五十四年のオンエアーで、僕が二十一歳ぐらいだったんですよ。大学生でしたが、深くはまって見ていました。だから、もしこれが高校生のときだったら、もっとすごい経験だっただろうなあと思っていましたね。
今野　僕は、ガンダムってそのへんがよくわかっていないんです。自分がはまっていると、周りが見えないじゃないですか。
岡田　ええ（笑）。
今野　僕は、最初のテレビシリーズで、はまったわけではないんです。どんどん深みにはまってい

ったのが、『Z』、『ZZ』[004]の頃から。それから劇場三部作とかすべて見て「なるほど、これはすごいアニメだ」と思ってたんですけど。昭和五十四年というと、僕はもう就職していて、見ることができなかったんですよね。

岡田 二十四歳ぐらいですね。

今野 そうです。ちょうど入社した年で、死ぬほど忙しかったんですよ（笑）。

岡田 そんなときに、夕方五時半からやってるアニメなんて見るわけにいかない（笑）。

今野 まず、できませんねえ。

大人として扱われて「大人になる」子ども

岡田 先ほどの話とも関連するんですが、僕はこの小説の中で、オタク的な知識で結ばれる教師と少年との関係がとても印象に残りました。いわゆる師匠と弟子なんだけど、師弟関係ってある意味、対等なつき合いじゃないですか。

今野 そうですね。

岡田 そういう関係を足がかりにして、少年が徐々にいろいろな世界と出合い、成長していくのに、びっくりしたんですよ。こういう少年の成長とか青春ものという、すごくがっちりしたものを、オタクをベースにして書けるっていうのは、想像もしてなかった。

今野 今の日本の若者は、基本的に甘えていますよね。なぜ甘えているのかというと、昔のように突き放す大人がいないからなんです。だから、大人になるチャンスをなかなか得られない。子ども

004 ——
Z、ZZ
これも略称で、正確には『機動戦士Zガンダム』の続編、『機動戦士Z（ゼータ）ガンダム』、さらにその続編『機動戦士ガンダムZZ（ダブルゼータ）』。第一作から七年後の世界で、新旧のキャラクターが混在するアニメ。マニアの間でも評価が分かれる。

は「大人」として扱われることで、背伸びをするんですね。そうして社会性も身についていくし、人とのつき合い方もわかってくる。たぶん昔は、そうやって教えていたんだと思うんですね。ボーイスカウトにしても、近所の親父にしても。

岡田　印刷屋とか新聞配達のバイトなんかをすると、そんなふうに教えられますよね。とにかく、その人が持っている世界観のディティールで、全部話してしまうという……。

今野　社会に出るとそうですよね。新入社員が最初に会議に出ると、周りが何をしゃべっているのかわかりませんから。僕も入社して最初の会議では、話のペースは速いし、専門用語は飛び交うしで、まるで外国に行ったみたいでしたね。だけどそれについていこうとすることで、社会性が身についていったりするわけですよね。

たぶん、マニアとかオタクの世界がそうだと思うんですよ。たとえば僕は高校時代、ジャズがすごく好きになったんです。それは、周りにジャズオタクがいたからなんですよね。僕も、最初はミュージシャンの名前を聞いても、演奏のアドリブだとかモードだとか聴いても、全然わからない。だから一生懸命その体系を勉強しようとしました。もともとジャズとかクラシックというのは、勉強する音楽ですからね。

岡田　そうやって勉強して細かい知識を積み重ねながら、自分なりの歴史観みたいなものを組み立てないとだめですよね。

今野　だから、ひょっとしたらオタクの世界というのは、じつはアカデミックかもしれないですよね。でも、アカデミズムのパロディかもしれないというあたりがちょっと……（笑）。

アニメを見ずにアニメを語るな

岡田　ところが、今アカデミズムの人たちが、『エヴァ』[005]にどっとすり寄っているんですよ。そういうところでアカデミズムの人が頑張るのはわかるんですけど、好き勝手なことを言われるのはあんまり好きじゃないんですよ（笑）。

今野　的がはずれていますよね。あれは全部、牽強付会（けんきょうふかい）なんですよ。自分なりの論理で読もうとするわけだけど、そもそも、そんなに大そうなものではないというのと、いや、もっと奥が深いぞというのがあって。でも、そのどっちにも針が振れないんですよね。

岡田　『エヴァ』を語っている、アカデミズムの人たちやサブカルチャーの人たちの弱さというのは、つまらないことなんだけど、アニメのことをあまり知らないんです。

今野　それは致命傷ですね。

岡田　オウム事件[006]のとき、オウム評論家みたいなのがいっぱい出てきて、口々に「オウム事件というのはこういう意味なんだ」と語っていたんですけど、その人たちはべつにオウムのことを調べてるわけじゃない。すべて、報道されていることや自分が知っている範囲内での話なんです。ただ、ふだん自分が言いたくてしょうがないことを、オウムに乗っけてしゃべっているだけなんですよ。

今野　そう、それなんですよね。

岡田　『エヴァ』も同じですよね。アニメや特撮のことはあまり知らない。結局、自分がふだん考えている学説や、自分はこういう人間なんだということを言いたいだけなんです。「僕は本当はア

005 エヴァ
↓146ページ脚注参照。

006 オウム事件
↓19ページ脚注参照。

ダルトチルドレンなんです」ということをしゃべりたくて、『エヴァ』を切り口にする。「だからすごい」って言うんだけど、それですごいんだったら『ザンボット』[007]はどうなるんだ（笑）。

今野 自分が言いたいことがあると、起こっている社会現象に目をつけるんですよね。でもそれは間違いですよ。『エヴァ』を語りたいなら、やっぱり『不思議の海のナディア』[008]を見なくちゃいけないし、『トップをねらえ！』[009]を見なくちゃいけないし、『オネアミスの翼』[010]を見なきゃいけないし。

岡田 『帰ってきたウルトラマン』[011]を見なきゃいけないとか。

今野 そうそう、見なくちゃいけない。

岡田 ウルトラシリーズや東宝特撮といったもののガジェット（仕掛け、工夫）の上に、今の作品が成り立っている。だから僕はおもしろいなと思うんですけど、そこのあたりを取っ払ってしまって、何だか急に祭壇の上にまつりあげようとしているので（笑）。

今野 ただ、それだけオタクの側というか、アニメの側が社会的に力を持ったんですよね。影響力がなければ、彼らは歯牙にもかけなかったわけでしょう。僕たちくらいの世代はアニメで育ってきて、原風景としてかなりあるから、抵抗なく受け入れられる。

SFの黄金期は「十二歳」

岡田 僕は昭和三十三年生まれなんですけど、今野さんは何年生まれですか。

今野 僕は昭和三十年です。

岡田 僕より三歳上ということは、中学生や高校生ぐらいでアニメとか特撮を見るのは、まだすご

007
ザンボット
『無敵超人ザンボット3』七七年放映。『ガンダム』の二年前に、同じ富野監督が手がけたテレビロボットアニメ。リアル路線の内容は、後の『ガンダム』の呼び水となった。

008
不思議の海のナディア
↓146ページ脚注参照。

009
トップをねらえ！
スポーツ＋根性＋ロボット＋美少女という内容のオリジナルビデオアニメ。制作はガイナックス。企画、原作、脚本、プロデュース岡田斗司夫。監督 庵野秀明。

010
オネアミスの翼
ガイナックスのデビュー作となった劇場用アニメ。作品としての評価は高いが、興行的には今ひとつだった。企画、総合プロデュース岡田斗司夫。正式タイトルは『オネアミスの翼〜王立宇宙軍〜』。音楽は坂本龍一。

011
帰ってきたウルトラマン
八三年、日本SF大会で上映されるために作られたウルトラマンのパロディフィルム。

く抵抗があった時代ですか。

今野　ああ、一般的にはそうですね。ただ、僕なんかは高校になっても見ていましたからね。円谷が好きで、ちょうど高校のときに『帰ってきたウルトラマン』だったんですよね。

岡田　中学、高校ぐらいで、恥ずかしい特撮とか恥ずかしいアニメが一時期すごくいやだったことがあるんです。自分自身をたどっていくと、『ウルトラQ』[012]あたりが境になってくるんですよね。

今野　ああ、シビアなね。

岡田　『ウルトラマン』がカラーで、毎週銀色の巨人が怪獣とどつき合っているのを見たら、もうダメだと思っちゃって（笑）。どうもこのあたりに、世代の違いがあるみたいなんですよ。僕の場合ですと『ウルトラマン』にちょっと抵抗があって、さらに『仮面ライダー』はもう全然だめだったんですよ。

今野　僕も『仮面ライダー』は見ていない。

岡田　それで、僕より三つ下の庵野秀明[013]は『ウルトラマン』がOKで、『ウルトラQ』にはそんなに思い入れがなくて、『仮面ライダー』はだめなんですね。やっぱり『ウルトラマン』ぐらいにリアリティを感じている世代には、いきなりバイクに乗って跳び蹴りで世界平和を守ると言われてもそれは許せない。でも、そこから下の世代になってくると、『仮面ライダー』はOKなんです。でも「戦隊もの」[014]になるとだめという……。どうもそういうグラデーションになっていくんですよ。

今野　その違いというのは、たぶんテレビを一番おもしろく見る時代に、何の番組をやっていたのか、でしょうね。

紙で作られた精巧なミニチュア、巨大な司令室のセットに比べ、ウルトラマンは低予算。若き日の庵野秀明が、ウィンドブレーカーに顔むきだしで演じている。

012——
ウルトラQ
六六年放映、円谷プロ制作の空想特撮番組。

013——
庵野秀明（あんの・ひであき）
一九六〇〜。アニメーション監督。学生時代よりアマチュアフィルム製作を始め、宮崎駿の作品などにも参加。岡田斗司夫らとガイナックスを設立し、九五年から放映されたテレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』の監督として注目を集める。九七年には村上龍の小説『ラブ&ポップ／トパーズ2』を映画化した。

014——
戦隊もの
七五年の『秘密戦隊ゴレンジャー』を皮切りとする、ヒーローグループのドラマ。『恐竜戦隊ジュウレンジャー』の輸出版『パワーレンジャー』のヒット、自己言及的なネタの繰り広げられた『激走戦隊カーレンジャー』などが最近注目された。

岡田　SFの黄金期はいつかという話があって、「それは五〇年代だ」「いや六〇年代だ」「いや、十二歳だ」というのと同じ（笑）。

今野　見事な論理だね、それ。たぶんそういうことだと思うんだ。小学校時代に何を見ていたかというのは、かなり重要なんだなあ。

表現者は照れてちゃだめだ

岡田　じつは今日の対談の打ち合わせで「今野さんはガイナックス[015]が嫌いなんだそうです」と聞かされまして。今野さんと会ったらまず正拳突きをくらうかもって（笑）。

今野　いや、それはつまり、期待の裏返しですよ。

岡田　もう、申し訳ございません（笑）。それで、どのあたりがまずいんでしょうか（笑）。

今野　あのね、あれだけの……言ってしまっていいですか。

岡田　いや、全然大丈夫です。

今野　あれだけの、異常とも言えるほどの表現力とセンスを持っていながら、どうしてメッセージがないんだろうと思ってしまうんですよ。

『オネアミスの翼』で、主人公は好きな女の子の家が火事になったときに、現場に駆けつけるじゃないですか。あそこでは女の子を助けなきゃだめですよ、やっぱり。燃え尽きたところを見て、呆然とする主人公はだめです。

岡田　あの作品を作っている最中というのは、アニメ界が全部宮崎駿[016]さん化していった時期なんで

015 ——
ガイナックス
アニメ・ゲームソフトの制作会社。映画『オネアミスの翼～王立宇宙軍～』制作の際、岡田斗司夫らが設立した。もともとはこの映画一本限りのプロジェクトチームのようなものだったらしいが、その後も活動を続け、『トップをねらえ!』『不思議の海のナディア』『新世紀エヴァンゲリオン』などのアニメ作品や、ゲームソフト『プリンセス・メーカー』などのヒット作を輩出している。『王立』当時は「二十代の若者たちによるエネルギッシュな集団」といったニュアンスで紹介されることが多かった会社だが、『エヴァ』終了後の庵野監督のインタビューによると「確実に高齢化している」らしい。

016 ——
宮崎駿
→33ページ脚注参照。

すよ。どういうことかというと、ガンダム的なものを否定するというのか、つまり、あまり面倒なことを言うのはやめて、ヒーローはヒーローらしく、とにかくすべて清く正しくというような空気があったんです。

今野 ああ、なるほど。

岡田 僕は、『ヤマト』[017]や『ガンダム』[018]みたいなのが好きだったんですね。ちなみに庵野は『ゲッターロボ』[019]がやりたいって言っていた（笑）。ところがアニメ界に入ったら、宮崎駿という、何だか一番いい子ちゃんのところに、みんな集まっていくんですよ。これはだめだと。僕たちのリアリティというのは、主人公が助けにいくんだけども、何もできないところにあるんだと。

今野 たしかにリアリティはありますけどね。『オネアミスの翼』はどういう作品にならなければいけなかったかというと、単純に言えば、化け物みたいな宇宙船を、とんでもない勢いで打ち上げてしまうドラマでなくてはいけなかった、と思うんです。それを妙にリアリティにこだわって、コンピュータみたいな機械がいっぱい並んでいる、普通の打ち上げシーンなんですよ。そこがちょっと残念だったというのはある。主人公が頑張るんだけど何もできないというのは、それは純文学でいいんだと思います。

岡田 ああ、はい。

今野 大人は、恥ずかしくてもいいから子どもたちに何か教えなきゃだめだ。そんな気がしたんですよ。僕はあのときの、燃え尽きた家の前で呆然と立ち尽くしている主人公、それからどうやって愛情表現したらいいかわからないから強姦してしまう主人公が、そのまま『エヴァ』のシンジくん

017 ―― **ヤマト**
松本零士原作によるSFアニメ『宇宙戦艦ヤマト』。視聴率低迷により打ち切られたが、ファンの支持により映画化。以後テレビ版や映画などが続々と作られ、賛否両論となった。現在の版権は松本氏にあり、原作者による映画化発言なども出て、話題を呼んでいる。

018 ―― **ガンダム**
→96ページ脚注參照。

019 ―― **ゲッターロボ**
永井豪原作のロボットアニメ。テレビ放映は七四年～。

にだぶっていっちゃうんですよね。『エヴァ』の場合はどんどん過激になっていって、表現が先鋭化していくんだけど、本質的には同じものを感じますよね。やっぱり「逃げちゃだめだ」と言っているんだったら、助けなきゃだめですよ。「逃げちゃだめだ」と頑張っているのに、あせってボロボロに崩壊していっちゃったら、これはつらいですよ(笑)。

岡田 単純な、いわゆるカタルシスのあるドラマで、どこまでやらなきゃいけないかというと、まず「これはおちゃらけです」という大前提をふると、本気になれるというのがありますから。

今野 つまり、照れ屋なんですよ、ガイナックスは。僕は常に「表現者は照れていちゃいけない」と思っていますけどね。

岡田 でもねえ、照れなかったら、いきなり『エヴァ』になっちゃうんですよ。あの作品は照れていないですよ(笑)。

今野 そうか。何て言うのかな、「こうしろ」と言っているわけではなくて、「こういうあり方もあったのではないかな」という僕の個人的な見解です。作品の根底に流れている「これを教えたい」とか、「これを伝えたい」というメッセージ性の欠落が、寂しいという気がしたんですよ。だって表現力に関して、ガイナックスを上回るプロダクションは、今のところないですからね。

メッセージを伝えるための表現力

今野 ガイナックスを頂点として、今の日本のプロダクションの表現力は、本当にすごいと思う。これに関してはコミケに行ってもそう思うんですよ。みんなものすごくパロディはうまいし、絵も

うまい。でもそれだけの才能がありながら、誰も自分でメッセージを作ろうとしないんですよね。僕はね、これが今後オタク文化がコアになっていくか、それから市民権を得ていくかどうかの、鍵だと思うんですよ。

岡田　なるほど。

今野　何か言いたいことがあるから、表現力を手に入れなくてはいけないのが本当なのに、彼らはもう先に表現力があるんですよ。最初から「これを使って何やろうかなあ」と考えているわけです。そこを逆転できるかできないか、ですね。

岡田　でも、たとえば小説というのは、ある種、不良っぽいものですよね。でも、その不良の味というのは一割ぐらいであって、残りの九割は、人に何かを教える人生の師というような、先生的なものだったりするじゃないですか。それが、いつしか小説界のほうが先に「純文学」という形で表現力を得て、伝えるべきことを失ってしまった。それで、どんどん変わっていったと思うんですが。

今野　それは、たしかにそうです。小説は、かつてはいい意味でも悪い意味でも、良識の拠りどころだったんですよね。でもその良識を自ら捨てていった。でもね、僕たち小説家が拠って立つところは、今でもそこしかないと思っています。

岡田　なるほど。

今野　それがなければ、ゲームに勝てっこないし、アニメにも勝てない。表現手段として、見た瞬間に心の中に既成事実として残す技術は、もうアニメとか映像には勝てないです。ただ、そこで最後に残る砦というのは、うまくシラケさせないで何かを教えてあげることなんですよ。

岡田　今のマンガ家にしてもアニメの監督にしても、みんな最初に思いつくのはシーンからなんですよ。そのシーンをつなげられるようなストーリーを探す。でも、そういう作業からは、テーマなんて浮かび上がってこないですよね。

今野　それはね、そのうち敗北していきますよ、何かに。

岡田　アニメも映画も「何かを教える」ということは完全に失ってしまった。結局、僕たちが宮崎さん的な立場から離れようとしたのは、世代的にも全部共通だったと思うんですよ。「紋切り型の説教は言いたくない」とか「人に何かを教えられたり教えたりするのはまっぴらだ」とか「もう良識なんてものはないんじゃないか」というような感覚ってありますよね。

　でも本当は「もの作り」には、そのテイストは一割あればいいわけであって、残りはわりと普通のことを言わなきゃいけないんですよね。

今野　そうだねえ。だからさっきいみじくも言った、純文学が良識をどんどん捨てていったのと同じ現象が、今はアニメにも起きているんでしょうね。だから僕は『エヴァ』を最後まで見て、質の悪い純文学読まされたなあ、という感じがしたんだけど(笑)。

岡田　作り手には、いわゆる良識というものを人に教えたり、伝えなきゃいけないという使命はあるんだけれど、作り手自身、何が正しいのか信じられないことがありますよね。でも、この『慎治』を読んでいると「ものを作る人間は、それが最良かどうかはともかく、あるモデルケースを提示すべきだ」という今野さんの信念が、伝わってくるんですよね。

今野　結局、僕たちの役割はそういうことだと思うんです。本って読まれなくてもいいわけじゃな

いですか。つまり、衣食住ということがあって、それ以外はいらないわけですよ。

岡田　そうですよね。

今野　そこで小説家として食っていくっていうのは、社会的に何か意味がなきゃいけない。僕の場合はエンターテインメントの作家だから、まず第一におもしろくなくてはいけない。おもしろければ読者は読んでくれるんです。そこでおもしろくするために、最低限表現力が必要なんですよ。つまり表現力だけで独り歩きするわけじゃなくて、その下に、今の社会に対して思っていることや、こうしなきゃいけないんじゃないかと思ってることがないと、ものを作るモチベーションにならないですよね。

岡田　なるほどね。

今野　動機があって初めて、ものを作りはじめる。これが自然な流れだと思うんですよ。セールスがあってこれだけの目標を達成しなきゃいけないから、来年までにこれを作れ、と言われて作るのはね。

岡田　それが、東芝ＥＭＩ時代（笑）。

今野　ちょっとつらいですよね。

岡田　たぶん、お菓子を作っている人なんかも、同じようなところにいる気がしますね。おいしくするのはいくらでもできるけど、今の時代は体にいいものを作りたいと思うんじゃないかな。

今野　なるほどね。

岡田　そういう意味で、この小説は、読んでいて心にいいというか、元気になる。それができると

いうのが、僕自身はあきらめていたことだったので、とても驚きました。

今野　僕は常に、読んだ人に元気になってもらいたいんですよ。もちろん「世の中そんな甘いもんじゃねえぞ」って、リアリティを追求してどんどん書き続けている作家もいますよ。でも、僕は作りごとでもいいから、元気になってほしいんですよね。今の世の中はそれが必要なんだと思うんですよ。「大丈夫だ、お前はそれでいいんだ、そのままいけば元気になれるんだ」と言ってくれる人がいないと、社会全体がどんどん絶望していきますよね。今は、たとえば某テレビ局の二十何時間テレビなんて、何かしらメッセージはあるんだろうけど、とても空虚なんですよね。そうではなくて、読んで感動すれば心に残るはずだから、そのための表現力だと僕は思うんですけどね。

岡田　そうですね。

今野　みんな元気になってほしいですよ。僕も元気になりたいし（笑）。僕、ずいぶんアムロ[020]に元気にしてもらったもん。ブライトさんとかね。

岡田　ちゃんと大人になりましたよね、ブライトさんも。

今野　「殴られずに一人前になった男がどこにいるか」って。

岡田　ちょっと、やつも大人になりすぎて、『Z』や『ZZ』では俺は戸惑っちゃいましたけど（笑）。

今野　いや、もっと戸惑ったのはね、『逆シャア』で、アムロとブライトがタメ口きいていたとき。もう涙が出るぐらいうれしかったですね。

岡田　アムロ、偉くなったと（笑）。

今野　そう。「おい、艦長」とか言ってね。あれは感動したなあ。

020――
アムロ
アニメ『機動戦士ガンダム』シリーズ第一作の主人公、アムロ・レイ。宇宙都市で暮らす内気な少年だったが、敵の攻撃を受けて避難する際に戦闘に巻きこまれ、やむなく新型兵器・ガンダムのパイロットとなる。乗りこんだ母艦・ホワイトベースは、被災により大人がいない中、ブライトをはじめとする少年たちの手によって地球へ向かい、やむなく兵士として戦う日々が続くことになる。

人間は技術だ

——今野さんは武道をやられるそうですが、格闘技の試合なんかもごらんになるんですか。

今野　あまり見ません。最近、K—1[021]とか話題になってますけどね。自分ができないことは興味がないんじゃないですかね。

岡田　そのあたり、モデリングとは違いますね。モデリングは、上手な人の作品を見て、「おお、これはすごい」って思うけど。

今野　格闘技の場合、うまいとは思わないんですよ。その代わり古武道大会などはよく見に行きます。先達の高段者の技とかね。あと、合気道のすごく強い人のビデオはとても好きでよく見ますね。

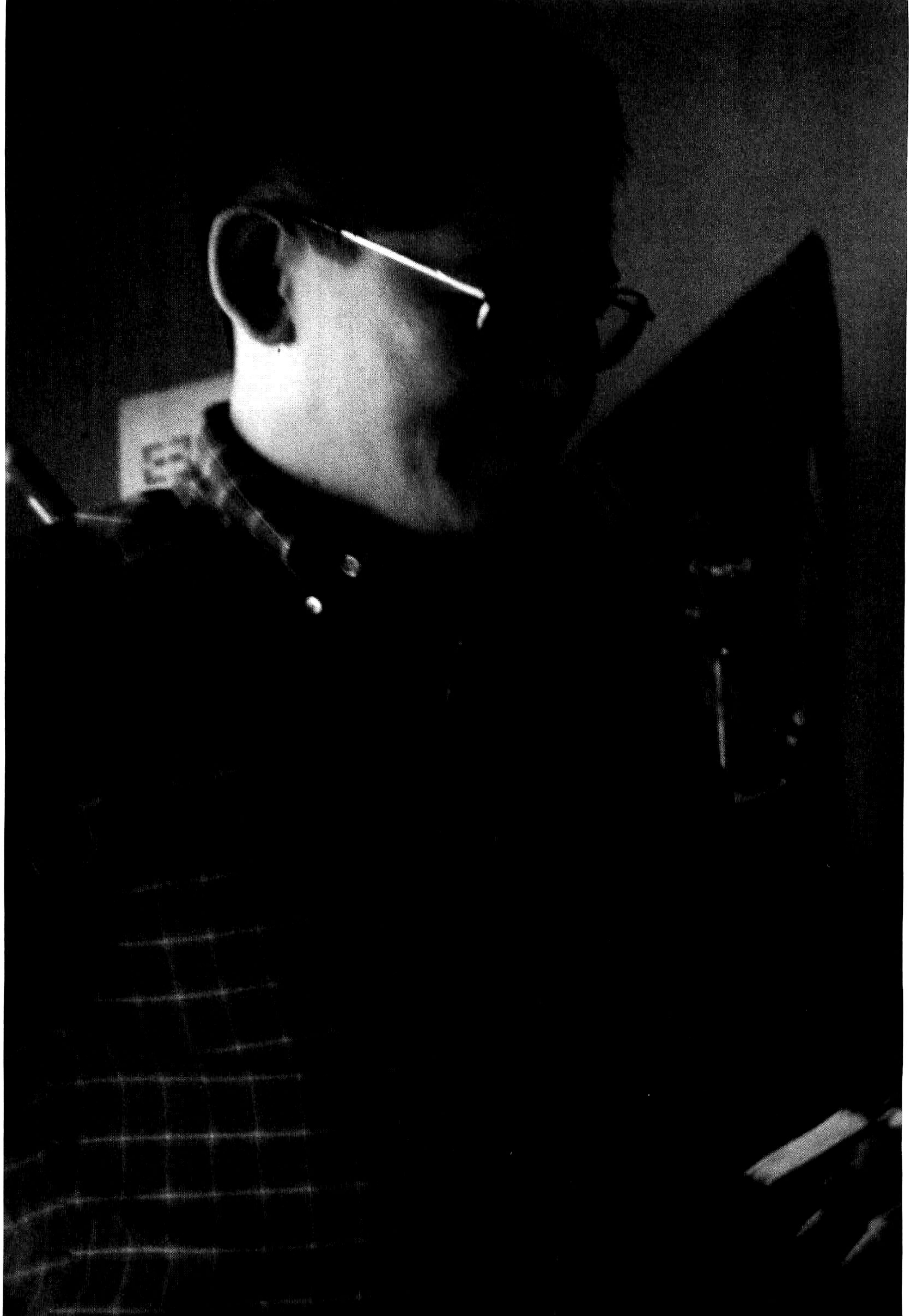
岡田　それは、どんな部分を見るんですか。

今野　モデリングと一緒で、理想型を見るんですよ。たとえば今のK—1とかアルティメット[022]って、普通の人はできないですよね。あれは強ければいいという世界で、僕はそこには興味がないんですよね。ただ、日常生活を送りながら「この先、四十歳、五十歳になっても強いものって何だろう」という関心のほうがありますよね。それは昔の技の中にいっぱい残されている。

岡田　格闘技に対する考え方にしても、『慎治』の中でモデリングを通して語っておられることも、同じなんですね。つまりは何かモデルを提示して、みんながそれを実践できるようにする。

今野　そうですね。僕は、モデリングも武道も射撃も、ひょっとしたら小説も、技術だと思うんですよ。人間という生きものの最大の喜びは、技術を身につけていくことだと思うんです。たとえば

021 ——
K—1
パンチ、キックを主体とした打撃格闘技の世界最強の選手を決定する大型トーナメント。優勝者には二十万ドルが送られる。日本の空手団体である正道会館が母体となって九三年度から開催されている。九六年から格闘技ブームを巻き起こし、フジテレビのプライムタイムでの視聴率は二〇パーセントに及ぶ。正式名称は「K—1 GRANDPRIX」。頭文字のKは空手、カンフー（中国拳法）、キックボクシングなどを象徴する。代表選手に佐竹雅昭、アンディ・フグ、マイク・ベルナルドなどがいる。

022 ——
アルティメット
九三年にアメリカで始まった格闘技大会。アルティメットとは「究極」という意味で、最低限のルールしかないことが特徴。反則は、眼球つきや金的攻撃など生命に関わるものだけとされている。出場する選手のジャンルは問わないため、初期の大会では力士対キックボクサー、空手家対柔術家などの対戦が実現し、話題となった。現在では選手の安全面を考慮し、ルールも規制の多いものに変更されている。九七年十二月には日本でも大会が開催された。

昨日できなかったことが今日できるようになるのが楽しいわけですよね。そうじゃないと、技術もその体系も意味がないですよ。殴り合っているのを見て楽しんでいても、その技術は身につかないですからね。

岡田　なるほど。ということは、小説が果す役割も「生きる技術」みたいなものを教えてあげるというか、実用的なものでなくてはだめだと、考えていらっしゃるのでしょうか。

今野　いや、そうでもないんだけど。ただ、人間はどういうときに元気になるかというと、自分に自信がついたときですよね。そのためには、過去に自分はあんなことができたから、今度はこういうことができるという実体験がないとね。

岡田　こうすれば頑張れるみたいなもの……。

今野　そういうものを提示してあげたいとは、常に思いますよね。ただ「ガンバレー、ガンバレー」って言われても、人間ってなかなか元気にならないじゃないですか。

岡田　べつに『慎治』を読んでモデリングをやらなくてもいいんだけれど、この中で掲げられてるのは、今自分がいる世界だけを見るのではなくて、ほかの世界もあるんだよってことですよね。いろんなところでやってみて、苦しかったら逃げてもいいんだと（笑）。逃げちゃだめ、じゃなくて。

今野　そうです。逃げちゃだめじゃなくてね（笑）。ほかのところで頑張れるかもしれないし。

いじめというのは、この主人公もそうなんだけど「学校に通わなくちゃいけない」という足かせが、ものすごくきついんですよね。たとえば町なかでケンカしても、相手と二度と会わなければ平気なわけですよね。くやしいなあで済んでしまう。でも学校だと、殴られたやつに、明日も明後日

も会わなくちゃいけないんですよ。そうやって続くことが、きついんですよね。しかも閉鎖された社会だから、たとえば一度シカトされちゃうと、ずっとその状態が続くんですよ。仲間はずれにされたらどこかに行けばいいと僕たちは思うんだけど、学校に通ってるときは、そう思えないんですよね。そのうちに、学校の閉塞感でニッチもサッチもいかなくなる。そのときに「学校以外でも世界はこんなにあるんだよ」と、誰かが見せてあげればいいと思うんですよね。でも、『慎治』の影響でみんなが勘違いしてオタクの家庭教師をつけるようになると、こわい世の中になるなあ。

岡田　こわいですねえ（笑）。でも模型教室というのは、ひょっとしたら開かれるかもしれないな。

止まらないオタク話

岡田　今野さん、今、空手は何段ですか。

今野　空手は二段で、棒術[023]が今中伝免許四段です。

岡田　いつから始められたんですか。

今野　大学のときからです。中学校のときは剣道をやってたんですけどね。

岡田　すごいですよね。格闘技やってアニメ見て、モデラーもやって東芝ＥＭＩでＴＭネットワークの担当だったんですから（笑）。

今野　肉体派オタクですよね（笑）。でもモデル作りを始めたのは、東芝を辞めてからなんですよ。会社を辞めて、何かを作りたいなと思ったんですよ。ちょうどその頃、松本零士さんが好きで、アルカディア号[024]が欲しかったんですけど、当時はプラモデルがなかったんですよ。じゃあ作っちゃえ、

023——
棒術
武術のひとつ。棒を武器とする。今野さんは、この対談時は四段だったが、その後五段に昇格されたとのこと。

024——
アルカディア号
松本零士の七七年のマンガ『宇宙海賊キャプテンハーロック』で、主人公のハーロックが乗っている船。

と。二十五、六歳だったかな。バルサ削ってね、アルカディア号を作ったんです。それまでモデリングの技術なんてもちろんないし、本も読んだことがなかったのに。

岡田 うわあーっ。すごいですね。

今野 小中学生の頃、普通の男の子程度に作ってはいたんですけどね。

岡田 どんなものを作っていたんですか。

今野 よく覚えていないんですけど、わりとSF系が好きでしたね。空飛ぶ兵器とか。いわゆる昔のイギリスITC[025]のスーパーカーみたいなのとか。

岡田 今、そういうのはすごく高いんですよ。

今野 僕はキットに対するフェティシズムはないんですよ。最初からフル・スクラッチ[026]やりたいと思って始めたから。

岡田 なるほど。

今野 最近はフル・スクラッチやると時間がかかりすぎるので、ガレージキット[027]を作っています。ビークラブ[028]の「オールザットガンダムシリーズ」[029]というやつ。だからスケールは全部それに合わせているわけですよ。もう、ガンダムしか作らない。

岡田 そうですか。それは信念ですね（笑）。

今野 信念というか、ほかは作っている暇がないじゃないですか（笑）。

岡田 ああ、なるほど。でも、いいなあ（笑）。

今野 「アナハイム・エレクトロニクス」[030]で、『ガンダム』という商品名をつけた機体は全部作ろう

---

025 ――
イギリスITC
六六年の『サンダーバード』を代表とする、スーパーマリオネーション（人形劇）ドラマの制作プロダクション。『謎の円盤UFO』などの実写作品も含め、ゲーリー&シルビア・アンダーソン夫妻の手による、存在感のあるメカの人気は高い。

026 ――
フル・スクラッチ
プラモデルを組み立てるのではなく、プラ粘土などを削り、作りたいものをゼロから作り上げて、ホンモノそっくりに完成させること。高度な技術が要求される。

027 ――
ガレージキット
黎明期にはガレージなどを利用して、個人が少数生産する模型というような意味あいに使用されていた言葉で、アメリカが発祥の地。少数生産のため、大量品よりマイナーなものや、手をかけた精巧な作品を作れるなど自由度が高い。価格も高い。

028 ――
ビークラブ
模型メーカーのバンダイが展開しているガレージキット（以下GK）部門。八〇年代後半のGKブームとともにスタートしたが、当初は「メーカー製のものをGKと呼ぶべきか」「GKで出さないでプラモで出せ」な

と思っているんですけど、そうすると二十体以上[031]あるんですよね。一生のうちに作りきれるかどうかわからないですね。

岡田 そうですね（笑）。一体をフル・スクラッチで作るのにどれぐらいかかるんですか。

今野 それに全部時間をつぎこんだとすれば、二、三カ月だと思います。でも暇がないじゃないですか。ちょこちょこっと作っては仕事してるから、一年以上かかっちゃいますよね。

岡田 でも作ってると、これを型取りしてワンフェス[032]とかで売ってみたいと思いません？

今野 思うんですよ。

岡田 やっぱり思うでしょ。

今野 ただねえ、敷居が高い（笑）。今、ホームページで、自分の作ったモデルを載せているんですよ。それで溜飲を下げているというのはありますね。僕自身はまだまだ未熟だと思っていますから。

岡田 そんなことないですよ。僕ね、今野さんのオリジナル小説つけて売ったら、すごくうけると思いますけど（笑）。

今野 そうかなあ。でもオリジナル小説を書く暇は、もっとないよなあ（笑）。

どの批判も多かった。製品の中に、なぜか二個買わないとテレビに出てきたものを再現できない「パラス・アテネ重装備改造キット」やデカールが一切付属していない「AKIRA 金田のバイク」などの奇製品もある。
※ビークラブは雑誌名であり、同時にブランド名でもあったと思います。

029 ――
オールザットガンダムシリーズ
ビークラブが発売している人気GKシリーズ。かつてのガンダム作品群に登場した数々のモビルスーツ（以下、MS）を、二〇分の一の縮尺で、デザインを多少今風にアレンジして発売している。シリーズの中には模型誌『モデル・グラフィックス』に掲載されていた『ガンダム・センチネル』の、さらに「別冊のみ」に載っている『リファイン版 Ex-S（イクスエス）ガンダム』や、小説『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』（角川書店刊）の中で出渕裕氏が描いた「テールスタビライザーの付いたバージョンのνガンダム」などのマニアックなものもある。

030 ――
アナハイム・エレクトロニクス
ガンダム世界で一作目に当たる「一年戦争」のあとに設立された一大軍事企業。おもにモビルスーツの開発・販売を手がける兵器メーカーである。もともと一年戦争当時に

高い技術力を持ち、名機「ザク」などを開発していた、ジオン公国の「ジオニック社」がその母体となっている。
※富野監督のイメージでは「もう完全にユダヤ系の企業」だそうです。

031 ――――

二十体以上

アナハイム・エレクトロニクス製のガンダムシリーズとしては以下となる。「Zガンダム」、「ZZガンダム」、「ν（ニュー）ガンダム」、「GP01」、「GP02」、「GP03」。映像化された作品の中でガンダムの名を冠しているアナハイム製のMSとしては以上なのだが、『ZZ』を見ている限りでは、Z開発の中でプロトタイプとして作られた「百式」もガンダムという扱いになっている。また、ガンダムシリーズとして作られながら、結果的にガンダムの名を冠しなかったという設定のMSには「リック・ディアス」（当初「γガンダム」という名になるはずであったがシャアが強硬に反対した。心の狭い男だ）、「ガーベラ・テトラ」（本来「GP04」として作られていたものがジオン残党組織デラーズ・フリートに流れ、外装などの変更を受けた）、「リ・ガズィ」がある。ちなみに「ガンダムMk2」はティターンズ製。「サイコガンダム」、「サイコガンダムMk2」はムラサメ研究所製ということになっているようだ。
そのほか映像化はされていないがガンダム年表の中で「オフィシャル」と認められているものでは、「エプシィ・ガンダム」、「ガンダムMk3」、「S（スペリオル）ガンダム」、「Zplus（ゼータ・プラス）」、「FAZZ（ファッツ）」（フルアーマーZZの変形機構やハイメガキャノンなどの機能をオミットした実験機）、「ガンダムMk5」、「クスィー・ガンダム」がある。ちなみに一作目の「RX－78－2ガンダム」と、ビデオアニメ『ポケットの中の戦争』に登場する「NT－1」、同じくビデオシリーズ『08MS小隊』の「ガンダムピクシー」、セガサターンのゲームに登場する「ジム・ブルーディスティニー3号機」はすべて地球連邦軍製のガンダムであり、「ガンダムF91」はサナリィという連邦軍の関連組織製（というか、それ以前にこれは「ガンダムではない」という設定）、「Vガンダム」はリガ・ミリティアという反政府組織製（これも政治的な理由からガンダムという名前をつけられただけで、ガンダムではない）なので、アナハイムとは関係ない……と、わかる範囲で記してみたのだが、実際にはコミックのみに登場する機体や、MSVなどのバリエーションに存在する機体は山のようにあり、果てはGP01のように基本は同じ機体なのだがフルバーニアンなどへのマイナーチェンジで型式番号がちょっと変わってしまうものを「別の機体」と考えるかなど、「これがアナハイム製のガンダム」と簡単に言い切れないほどの設定量になってしまっている。さらに今後も続々と出てくるということも考えられる。Wガンダム、Gガンダムに至っては世界すら違うので論外である。

032 ――――

ワンフェス

ワンダーフェスティバルのこと。年に二回行われるプロとアマチュアによるGKの展示頒布会で、いわばコミックマーケットのGK版である。八五年にGKメーカーのゼネラルプロダクツ主催によりスタートし、現在ではGKメーカーの老舗海洋堂が主催している。このワンフェスでメーカー以外のアマチュアが参加してアニメキャラクターなどのGKを頒布する場合、版権元からの「一日版権」という頒布許可を得なければならない。だが、実際は、その理由は不明だが、ワンフェスでは『ガンダム』の一日版権はおりない（※）。従って、ワンフェスでアマチュアがガンダムのGKを売ることは出来ないが、年に一回行なわれるバンダイ主催のGKイベント『JAF－CON』では『ガンダム』版権がおりるので、こちらでは頒布することができる。
※もちろん、「ワンフェスを潰そう」というビークラブ編集長（八七年当時）の差し金ですね。この人物はこれ以前にも「誌上ワンフェス」などという企画を主催者側に無断で記事にして、乗っとりをはかろうとしたことがあります。

（※＝岡田斗司夫）

宮台真司

僕らがバトンを受け取る日。

Shinji Miyadai

一九五九年宮城県生まれ。東京都立大学助教授。東京大学文学部卒業、東京大学大学院社会学研究科にて博士号取得。大学の友人と設立したマーケティング会社の取締役を経て、東大教養学部助手、東京外語大講師を務める。生物学を取り入れた社会学の一文野である、システム理論の研究者で、現代の若者の行動心理を社会構造の変化の帰結として解き明かす。徹底したフィールドワークをもとに独自の理論を構築、若手言論人の最先端に立つ。最新著書に『透明な存在の不透明な悪意』（春秋社）、『まぼろしの郊外』（朝日新聞社）がある。

この対談集を作るにあたり、オタキングが「ぜひとも」とあげてきたのが、今や若手言論人の筆頭、宮台真司さんである。昨年に引き続き「中学生」がニュースにならない日はないほど。宮台さんも、ますます多忙になりそうだ。さて、じつは同い年というこの組み合わせ、話は尽きず、終わってみればなんと五時間にもわたる大対談となった。オタク世代を代表する二人が、現代社会の歩き方を本音で語る。（九八年一月十四日対談）

ミ・ヤ・ダ・イをコントロールする

岡田　『朝まで生テレビ』って、終わったあとに飲み会があるじゃないですか、全員参加の。出演したときに、こういうのもおもしろいかなと思ってつき合ったんですけれど、みんな宮台さんの話をするんですよ。「宮台は今回来なかったねえ」「逃げたんだよ」とか。なぜこの人たちは、こんなに宮台さんのことを気にするのかと思いまして、聞き耳を立てていたんですよ。

宮台　僕もそれは興味深いですねえ。

岡田　彼らの話を聞いていますと、今、言論とか社会批評をやっている人、また、今後そういうものを目指す人にとっては、宮台さんはひとつのランドマークなんですね。「この件について、彼はどう考えているんだろう」とか「彼がこう言ったら、俺はこう言い返すのに」とか。

宮台　わかります。人々の妄想の中で、仮想問答の相方に使われているんだろうなあと（笑）。それは常々思います。

岡田　そういう会話を聞いていますと、「言論のやつらってこんなに女々しかったのか」と思いますよ（笑）。

宮台　わかりやすく言いますと、メディアに出ている僕は、「ミヤダイ（すべてにアクセント）」で、ここにいる僕は、「ミヤダイ（ヤにアクセント）」なんですよ。こういう言い方をするとまた怒られるかもしれませんが、「ミヤダイ」について注目されることもけなされることも、はっきり言ってさしたる関心はないんです。

僕自身はかなりクールですから、「ミヤダイ」は「ミヤダイ」のパペットというか、サンダーバードの、操り人形のようなイメージです。そのパペットを操って、人々の怒りをかきたてる、あるいはコンプレックスをかきたてるような言動や動きをさせてみるわけですね。すると、おもしろいように、怒ってほしいところで怒る、つっこんでほしいところでつっこむ。こっちは、つっこんできたらボロクソに叩いてやろうと待っていて、倍叩くわけですよね。

僕にしてみれば、あまりにわかりやすくコントロールできるので、最初はおもしろいと思いましたが、飽きてきましたね。

岡田　でも、引っ張られませんか。人間って恐ろしいもので、これはメディア向けの言葉だと割りきって言っているつもりでも、二、三日すると、自分の言ったことを信じていたりすることってありますよね？

宮台　僕はあんまりありませんね。以前、別の対談でも言ったんですが、僕自身のプライベートライフ、つまり「ミヤダイ」の部分と、メディアの「ミヤダイ」の部分の間には、あまりにもつなが

りがない。たとえば僕と新しくつき合いはじめた女の人がいるとします。そうすると、僕のプライベートなふるまい方やものの考え方というのが、「ミヤダイ」から想像される部分とはあまりに違うと、例外なく驚かれるんですね。僕はすごく、論理的な人間だと思われていますが、それはロゴスの訓練を受けてきていますから、訓練の成果という意味では光栄なことですが、「ミヤダイ」の部分は、じつはまったく論理的ではないんですよ。

僕はよく学生に説明するんですが、本当に論理的であろうと思ったら、論理は信じないほうがいい。つまり、論理を完全に道具、レトリック（修辞）として突き放すことによって、ようやく論理は自由自在に操ることができるようになる。自分としての自分が持っている、非論理的なあれやこれやに巻きこまれないで、クールに、ここでこういう修辞を使おうとか考えることができる。もし僕自身にアドバンテージがあるとすると、僕自身が極めて非論理的、情念的だということ。あるいは僕固有のコンプレックスやルサンチマン[001]が、僕らの同世代の中でもと言いますか、同世代ならではと言いますか、相当にあるということです。だって、それよりほかに信じうるものなんてないでしょう。

ですから、たとえばディベートの場面で相手が修辞を使ってきても、僕が訓練を受けていることもありますが、相手の論理を見るのではなくて、相手の手が震えているとか、声が突然大きくなったとか、額に汗が浮かんでいるなどというほうを、むしろ見てしまうわけです。今の修辞はこういう理由で使ったんだとか、あせって追いこまれているな、というふうに。

001 ルサンチマン
ドイツの哲学者、ニーチェの用語。怨恨、憎悪、嫉妬などの感情を、内心にためこんでいること。

情念的な欠落の表明としての論理

宮台 そうやって相手を見る訓練というのは、一九八〇年代前半、当時日本に入ってきたばかりの自己改造セミナーに二年間ぐらい入っていて、身につけたものなんです。自己改造セミナーのトレーナーは、コミュニケーション手段として、相手の言っていることにリテラルには対応しないで、相手のコンテクスト、声の大きさや体の姿勢などに着目するんですね。それで「梯子をはずしていく」。相手の要求しているものを出していったり、反対にあえて出さないようにしたりして、コントロールしていくわけです。そういう訓練を受けていたせいもありますが、先ほども言った通り、ベースではロジカルなものをあまり信用していない。

もし病理的にロジカルな人間がいるとすれば、それは明らかに欠落の反映じゃないですか。同じように病理的にコントロール指向の強い、権力欲の強い人間がいるとすれば、それもある種の欠落の反映です。僕に関しても同じように見ていただいていい。僕が過剰に論理的に見えるのであれば、それは僕自身の欠落の表明で、その欠落は論理的な欠落ではなく、情念的な欠落なわけです。

岡田 僕も「ものごとをよく考えていますね」とか「論理的ですね」とか言われると、つらく悲しくなってきます(笑)。変な言い方なんですが、頭のいいやつはものを考えなくて済むというのが、僕の持論なんですよ。つまりエンジン出力が最初から高い人間というのは、考えずにものごとを進めれば一番いいように流れるんです。だめなやつほど考えなければいけなくなる。靴の紐を結ぶとか、歩くとか、自転車に乗るとかで、いちいち考えているやつはだめですよね。どうも、普通の人

たちの考える「頭のいい」というのは、論理的であるとか、言葉をうまく操って考えていることを説明できる、もしくは相手を言い負かすことができる能力と、とらえているふしがありますね。

宮台　僕はそういうのを「哲学」と言っています。「哲学」の定義をわかりやすく言うと、普通の人は「歩いて買いものに行く」とか「散歩して風景を見る」とか、歩くことを前提の上でいろいろな体験をするわけだけれども、哲学者というのは「なぜ俺は歩いているのだろう」「なぜ右足を先に出さねばならないのだろう」「なぜ手と足は反対に出さなければならないのだろう」というふうに、歩くことの自明性を疑ってしまうわけです。従って、哲学者というのは、自明性の上に乗っかることができない不器用な人なんです。これは永井均[002]さんの比喩ですが、「普通の人は水に浮かべるのに、哲学をする人は水に浮かべないカナヅチである」と。そういうことで言うと、不器用だからという意味では、頭がよくないとも言えると思うんですね。

ただその点について言うと、僕自身は、昔からむしろ考えないで行動してしまうタイプなんですよ。考えないで取った行動が奇矯なものである場合が多くて、ふるまってしまったあとで人に批判されたり、自分でも「なぜ俺はあんなふうにふるまってしまったのだろう」と、罪の意識に苦しむということがありました。僕は、小さい頃から二十代の半ばくらいまでは、自分の行動を自分であとから合理化するために考えるというふうに、頭を使っていましたね。だから、さっきの哲学者の話とは逆で、哲学は自明性が壊れているので事前に考えるのであるとすれば、僕の場合は行動が先行してしまう。ただ行動そのものが非常識だったり、行動を考え直してみると自明性が壊れているので、あとから考えることにならざるをえない。

002
永井均（ながい・ひとし）
一九五一〜。信州大学助教授。現代哲学の研究者。著書に『〈私〉のメタフィジックス』『〈子ども〉のための哲学』などがある。

自我の統一性を放棄した世代

岡田　非常識な行動というのは、あとから考えて正当化なり説明なりはできるんですか。

宮台　うーん、それは微妙ですね。当然、目的は正当化にあるわけじゃないですか。つまり「自分は何者である」ということを納得したいとか、従来の自己イメージとの関係で、整合的に説明したいという意味での正当化が、動機にはありますよね。「なぜこうやってあとになってから考えるんだろうか」ということについてはずっと自問していましたが、それは自分自身が、今後また予想外のことをやってしまうかもしれないときに備えるという部分も含み持ちつつ、やっぱり「俺は何なんだ」ということをとらえたい欲求というのがありましたよね。

で、それは自分探しというより、もうちょっとやむにやまれない感じでした。とくに僕の場合、女関係で訳のわからない展開があったりしたので、あとからとにかく自分自身の行動を説明しないと気が済まない、自分自身がどんな闇を抱えているかわからないと先に進めないという感じがあったんでしょうね。もちろん、ときには人に対して「自分があのときああしてしまったのは、こういうことだったのかもしれない」というふうにエクスキューズ、言い訳に使うときもありました。

そういう期間がしばらく続いて、気がついてみると、変な話ですが、「自己分析の達人」になっていましたね。カッコつきの達人ですけども（笑）。自己分析の達人になるプロセスで、じつは他人の行動を分析するということもずいぶんやりました。他人の行動を分析する理由は、自分自身を分析するためなんですよ。わかりやすく言うと、自分自身は空白でよくわからないので、他人の考え

方や感じ方をシミュレーションして完全に理解した上で、自分もそうやってみる。そんなこんなで、気がついてみたら体験や行為を言葉で説明する能力が、上昇したんだろうという気がしますね。

岡田　そういうことを考えず、おまけに人から奇矯な目で見られずに生きていける人が、一番いいわけですよね。でも、そうやって生きていけない人もいるわけで、その場合は、ある程度ロジカルに自分を再構成するために、考えながら生きていくしかないんでしょうか。

宮台　少なくとも僕なんかの場合は、もともと納得ということが、価値のプライオリティにおいて、上のほうにある。自分の行動に納得がいかないと、徹底して考えるという癖がありましたね。だけど、納得がいかないという状態に耐えられるタイプの人が、僕よりも下の世代になるとむしろ増えるわけじゃないですか。今言った納得とかさっき言った正当化のキーになるのは、「一貫性」ですよね。一見奇矯な、予想外のふるまいをしたようだが、本質的には一貫した構造の中から生まれているんだと、納得するわけですよね。そういう一貫性、あるいは時間軸にこだわるという志向の強さの現われなんです。

だけど、僕が取材している今の若い子たちの多くは、時間的な志向というのをほとんど失っているわけです。それを「今ここ」に集中すると表現してもいいし、刹那的とも享楽的とも表現していいんですが、むしろもっとプロキシミティの上がった状態、つまり直接性の上がった状態で時空間を体感するようになってきている。だから僕のような、一貫性にこだわる生き方を理解してもらうのは、ますます難しくなっているなあと思いますね。

と同時に、僕は彼らがうらやましいですね。何でこの人たちは、時間的な志向というのを折りた

たんでしまえるんだろうか、放棄できたんだろうか、と。最近は、そういう違いが存在することに慣れましたけれど、今から十年ほど前に若い人たちを調べはじめた頃は、彼らがうらやましいと同時に不思議でしたし、自分自身がある種の「欠陥品」のように感じましたね。

岡田　それは、宮台さんがあげられている若者の三つのセグメント、「街」「学校」「家」の中でも「街」にいる人の特徴である、という限られたものでなく、若い人全般に言えることなんでしょうか。古い言い方ですが「統一した自我」というものが、今はどんどん薄れてきてしまっているわけですよね。

宮台　そうだと思います。というのも、統一した自我というのを持とうとすると、生きにくいわけです。その生きにくい状況というのが広がっているんだと思います。「自我の一貫性は放棄したほうがいい」というのは、八〇年代にニューアカデミズムの人たちが強調したことですよね。それをシステム理論の言葉で言えば、「環境適応能力の上昇」のための方法なんですね。つまり行動の自由が広がって、複雑な状況下でも臨機応変にふるまえるようになるというわけです。

「自明性の地平」が崩壊している

宮台　今日たまたま黒沢清[003]監督の『CURE』という映画を見てきました。この作品は、じつは酒鬼薔薇聖斗事件[004]の前に撮影されているんですが、事件が起こったためにしばらく公開できなくなったという経緯のようなんですね。内容はいわゆるモンスターものなんですが、人知の及ばぬ怪物が人に催眠術をかけて、信じられないような殺人を犯させる。動機はまったく不明であると。マンガ

003 **黒沢清（くろさわ・きよし）**
一九五五〜。映画監督。八三年に監督デビュー。主な作品に『ドレミファ娘の血は騒ぐ』『スウィートホーム』などがある。

004 **酒鬼薔薇聖斗事件**
→92ページ脚注参照。

にも同じように、浦沢直樹の『MONSTER』[005]という作品があって、これはヨハンというドイツ人の少年が絶対悪として描かれています。こちらも人知の及ばぬ悪ですね。ほかにもいくつかの作品例はありますが、まず最初はメディアの中でそういうものが出ていた。そして酒鬼薔薇聖斗事件なんですが、これもある意味、人知の及ばぬ悪というか不透明な悪というふうに感じられるわけですね。こうしたものが九〇年代に入って、まずはメディアの世界で、ついで現実の世界でも噴出しているわけです。

これを、いろんなやり方で解釈できるんですが、僕自身は「自明性の崩壊」の兆候だと思うんですね。それは、たとえば、「人を殺してなぜいけないのか」あるいは「売春してなぜいけないのか」でも何でもいいんですが、かつては疑わないで前提としてきたような「自明性の地平」が壊れちゃっているんです。

それで、映画『CURE』なんですが、「CURE」というのは癒しという意味なんですけれど、ここで描かれているのは非常におもしろい癒しなんですね。役所広司演じる刑事、彼は自明性の地平の上を生きている市民なんですけれど、彼が人知の及ばぬ犯罪者に、誘惑されて取りこまれていくんです。それは抽象的に言うと「おまえの立っている地面は、地面じゃないぞ。固い地面の上に立っていると思いこもうとしているだけで、じつはほとんどの人間は立っていない、あるいは立っているふりをしているだけだ」ということなんですね。

最後には主人公である刑事自身も殺人鬼になっていくんですが、それが単に催眠術をかけられているのか、そうではなく、自明性の地平、あるいは意味の構造そのものを取り替えられてしまった

005――
『MONSTER』
『ビックコミックオリジナル』に連載されたサスペンス。舞台は西ドイツ。主人公の医師、テンマは、手術で一人の少年を救った。だが十数年後、その少年ヨハンは次々と人を殺す「MONSTER」となっていた。

のかはわかりません。でもそれが、刑事にとって、また、観客にとって、癒しになってしまう。それは、わかりやすく言えば「俺も壊れていいんだ」あるいは「壊れている俺は特殊じゃないんだ。みんなも壊れているんだ」、「自分は妻を殺したいと思う。子どもを殺したいと思う。そう思う自分を責めてきたけれども、なんだ、みんな殺したいのか」という「CURE」なんですよね。朝日新聞の批評では「それはあまりにも殺伐としていて、頭が痛くなる」などと書かれていましたが、僕自身もこういう映画を見ると、相当癒されてしまったりするわけです。

ちょっと長くなりましたが、僕が言いたいことはただひとつなんです。かつては、自己一貫性にこだわることを支えていたような、自明性の地平というのがあった。でもそれは壊れているんですよね。そのときに自己一貫性にこだわろうとする人間は、逆に自分が壊れないと、あるいは異常者にならないと、意味の一貫性を保てなくなったりするわけです。つまり、自明の地平があったときには、自己一貫性を保とうとすることは、普通に生きることとそう大差はなかった。でもその地平が壊れてきていて、なおかつ自己一貫性を保とうとすると、これがつまり役所広司演じる刑事なわけですが、そうするとストレスが昂じてむしろ壊れていくんですね。そして、向こう側と言いますか、「人知の及ばぬ犯罪者」のほうへ限りなく近づいていくわけです。

僕は、今の社会で一貫性というものにこだわるのは、単に不適応を起こすとか生きにくいとというだけではなくて、もっとこわいことを意味するのではないかという気がするんです。そのこわいことの典型というか、象徴だと思ったのが、九五年のオウム真理教[006]なんですよね。それで「終わりなき日常を生きろ」というようなことを書いたんですけれど。昔のやり方で生きるのは、単に生きるに

006 ── オウム真理教
↓19ページ脚注参照。

くいだけでなく、狂気を意味する。最近の例で言えば、ストーカー殺人なんかが該当しますね。

岡田　凶悪犯罪やオウム真理教のような事件が起きると、その「動機」というものについて、僕らはわりと説明できてしまいます。あるいは、犯罪を犯した当人もすんなりと答えられたりします。今、宮台さんがおっしゃられたことを言い換えれば、犯罪者とかおかしくなっていく人たちは、自分たちがおかしくなる理由も説明できるし、なぜ自分はこんなことをするのかについて、歪んだ論理であれ論理的に説明できる。でも犯罪を犯さない人たちというのは、ただ何となくそうしないだけであって、論理的に説明する必要もない。つまり自分を説明できる人というのは、説明できるがゆえにおかしくならざるをえない、というようなことなんでしょうか。

宮台　そういうことは現実にありましてね。酒鬼薔薇聖斗事件に関して、テレビを通じて中学生からファックスを何千通と送ってもらったんです。その中でとくに女の子に多いんですが、基本的にファックスを送ってくるのは女の子が多いんですけれども、わかりやすく言うと「よくやった」なんですよ。「みんな、そういうことができたらなあと、どこかで思っていると思う。ただ勇気がないか、あるいはそのあとがこわくてやっていないだけだ。彼は勇気があってクールだ、すごい」。これは要するにこう言い換えられるんです。「酒鬼薔薇くん、君は一貫している。自分たちは勇気がないせいで、一貫できていないだけなんだ」と。つまり今の岡田さんのお話で言えば、「なぜ酒鬼薔薇くんは殺したんだろう?」じゃなくて、「なぜ自分は殺せないんだろう? そうだ、単に勇気がないだけだ」という、年長世代からは信じられないような、正と邪の逆転、実と虚の逆転が起こっていますよね。そういう状況になっていることは間違いない。

酒鬼薔薇くんの行動というのは、彼と同世代にとっては、多くの説明を要しないんです。十四歳の子が小学生の首をはねたというだけで何もかもわかってしまうような、共了解の地平というのがある。その共了解の地平というのは、いわば彼らの世代的自明性なんです。僕たちのものとはだいぶ違う、新しい自明性ですね。僕たちが、あれこれあれこれ酒鬼薔薇くんについて説明すると、その説明は彼と同世代にもだいたい当てはまる。だから、なぜ酒鬼薔薇くんだけが犯罪を犯したのかという説明にはならない。僕はむしろこの事件に関しては、そういう説明をしようと思っているんです。つまり、彼らが「それだったら僕らも同じだよ」と思うような要素ばかりを出して、共通性の部分を煽ろうと思っているわけですね。それはなぜかというと、また最初の話に戻りますが、彼らが獲得しつつある新しい自明性というのは、暫定的に正しいからです。

つまり、こういう新しい成熟した社会、もしくは変わってしまった社会の中で、あえて一貫しようとすると、酒鬼薔薇くんのようになってしまう可能性がある。外からのいろいろな圧力、親、教員、友だち、理不尽なさまざまな環境の問題がある中で自分を一貫しようとすると、だんだん狂気になっていく。自分の中にバモイドオキ神[007]のような個人神をうちたてて、それと対話することによってようやく自分の一貫性を保つようになっていったりもする。だからそうなっていくというのは、暫定的にはある種の適応なんですね。人が一貫しろと言うなら、そういう方法しかない。

暫定的と言ったのはどういうことかというと、彼らは一貫しようとするから、酒鬼薔薇に共感する。中学生は、一貫しろというろいろな圧力にさらされているから、しようがないとは思うんだけど、むしろその次の段階に行ってほしいと思うんですね。「酒鬼薔薇くんかわいそう、そんなに

007 ――
バモイドオキ神
神戸小六男児殺害事件の犯人「酒鬼薔薇聖斗」が信じていたという神。彼の犯行ノートではバモイドオキ神に報告する形で、犯行記録や自分の感情を綴っている。

思いつめなくてもよかったのに」という地平に、多くの中学生や若い子たちに行ってほしいんですよ。「お前は誰なんだ?」「僕は何者なんだろう?」と考えるやり方を、はっきり放棄してほしいんですね。現にそういう生き方は、若い子たちの多くがすでに始めているんですから。

成熟への道を粛々と歩む

宮台 僕はお正月のラジオ番組で、「九八年のスローガンはサッカー、ダンス、セックスだ」と言ったんです。十代はサッカーをしろ。二十代はダンス、テクノで踊りまくれ。三十代以上はセックスをしまくれ。サッカー、ダンス、セックスというのは、じつは今のヨーロッパ人の生き方なんですね。フランスなんて失業率が日本の四倍くらいになっていますが、そうして生きているわけです。

岡田 日本より先に飽和しちゃった人たちの社会を見て、という理由があるわけですね。

宮台 あるわけなんです。僕の言っていることは、空理空論というよりも、すでに日が沈んで長い時間がたっているような、いわゆる先進社会、成熟社会の多くがたどっている道なんですよ。

フランス語で「アール・ド・ヴィブル」、人生術という言葉があるんですが、たとえば人生術というのは、ヨーロッパのパーティーカルチャーを指しているわけですね。これを抽象的に言うと「日常の演劇化」なんですよ。日常というのはつまらないんだ、人はわかり合えないんだという、共了解があるわけです。普通にしていたら人生はつまらないし、世界は砂をかむような味気なさで満ち溢れている。だから、パーティを開いて得意な料理をふるまう。ワインの好きな人はワインを持ち寄って、うんちくをかたむける。「何をくだらない、意味のないことをやっているんだ」とは、

言い合わないんですよ。初めから意味がないんです。はっきり言えば、意味のない現実を生きているんですよ。だけど、そうやって現実をちょっと演劇的に加工することで、俺たちはようやく生きていけるんだよね、それしかないもんね、というような優しい共了解があるわけなんですね。

一方、日本とか韓国のような新興国は、まだ「意味の病」に取りつかれていて、「だから何になるんだよ」というようなことを言ってしまうじゃないですか。たとえば、スケボー少年やダンス少年、彼らはスケボー大会やダンス・バトルのために頑張っています。でもそれは有名になりたいでも何でもなくて、本人たちに聞くと「そういう口実があるから、こうやってみんな楽しく集まって頑張れるんですよ。今後に何もつながらなくたってべつにいいんです」と言う。でも僕らは「それが何になるんだ」と言ってしまったりする。それはやはり、僕らの世代が、「過渡的な近代」の作法から抜けだしていないからなんですね。「サッカー、ダンス、セックスしかないじゃん。当たり前じゃん、そんなことは」というのは、むしろ成熟社会の常識。『関口宏のサンデーモーニング』に出たときに「それは享楽、退廃じゃないでしょうか」と関口さんに言われましたけれども（笑）、それは全然違う。むしろ当たり前の国際常識なんです。

岡田　そこでよく宮台さんは誤解されてしまうんですよね。宮台真司という個人が、そういう社会が好きかどうかではなくて、見る人間が素直に見れば、そうなるに決まっていると言っているだけ。自分の好みなんて、ひとっ言も言ってねーよってことですよね。

宮台　さっきも言ったけれども、僕自身は「サッカー、ダンス、セックス」のような方向に全体が動いていくことに、ある時期非常に大きな適応不全を感じてつらいと思ったわけですよ。取材をし

ていても、とても違和感を感じた。でも他方ではとてもうらやましいとも感じたので、あとからついていこうと思って、ある程度、真似ごとのようなことはできるようになった。簡単に言えば、それほど忸怩たる気持ちなく断念することに成功したわけです。

ただ断念の記憶はありますし、その意味で言うと、はっきり申し上げて、完全に違和感なく溶けこめるという状態ではありません。これしかないんだろうなあと思いながら「でもなかなか楽しいよね」というような感じでしょうか（笑）。その意味で言うと、今起こっている現象やさまざまな変化というのは、まさに成熟化というひとつの方向、すでに先人たちが道をつけてくれている方向を指し示しているのであって、それを粛々と歩むしかないだろうと。

岡田　その中で、状況をドライブできる、いわばハンドルのブレはどの程度あるんでしょうか。

宮台　それは、「日本の」という意味ですか。

岡田　「日本の」でもいいですし、「僕らが生きている範囲内で」というのでも結構ですが。

宮台　要するに、どういう水準で考えるかによると思うんですよ。社会学では常識的な学説ですけれども、われわれのような時間観念になったのはここ数百年のことなんです。つまり、遠い未来のことを考えて未来のために頑張らなきゃと思ったり、失われた過去についていつまでも思い悩むとか、過去に存在したものが存在しなくなったことを、嘆き悲しむというような時間観念、「時は過ぎゆく」という観念は、極めて近代的なものなんですね。

それに対してギリシャの「循環する時間」、あるいはインディオの「共在する時間」というものがあります。たとえば、かつて好きだった、愛着のあった人が死んでいくと、近代人の場合は死ん

だ人がいなくなってしまったと嘆き悲しむ。でもインディオ的な時間観念だと、死んでもそこにいるわけです。そういう時間観念は、日本にもずっとありましたよ。その名残がお彼岸の観念ですね。一年に一度だけ、死んだ人たちに出会えるという。たとえば失恋の例はわかりやすいんですが、今ですと「自分がこうだったから恋を失ってしまった」と思い、失ってしまった人を取り戻そうとして取り戻せなくて、いつまでも悩むわけですが、そうではなくて、昔つき合っていた人の楽しい思い出はあると。

私自身は「過去は現在する」という言い方をしますが、過去は思い出として、ここに現在するわけですね。思い出はいつでも思い出せる。だから死んだ人もいつでも思い出して、思い出せばそこにいる。こういう感じ方ですね。これがつまり古典的というか、とくにモンゴロイドの人にとっては、長い間伝統的に培ってきた時間観念じゃないですか。僕はそれに近いものに戻りつつあるなあと、感じています。それは、目に見えない未来の人たちや社会のために、自分を犠牲にするとかという方向が、どんどん打ち捨てられていって、「今ここ」なんですよね。「今ここ」には、じつは過去も未来も全部入りこんで、すべてが「今ここ」に現在する。だから、スケボー大会もその次ということではなく、ダンス・バトルもその次のための手段じゃなくて、いつも数週間先のダンス・バトルを口実にして今を延々と踊っている。やっぱり注意の焦点は、全部「現在」なんですね。

岡田　「今」の連続というか、「今」だけがいっぱいあるような状態ですよね。

宮台　その意味で言うと、僕はとても伝統的な生き方に回帰しつつあるなと思いますね。現象面で見ても、性の低年齢化も伝統回帰だし、あるいは社会の売春化と言われる現象も、日本で言えばこ

れは伝統回帰ですね。つまり、良妻賢母教育というのは、維新政府の政策的なでっち上げですから。日本だけでなく、多くの国が成熟社会になると、「近代過渡期」に持っていた歴史の浅い人為的な動機づけ装置をむしろ打ち捨てていって、元に戻るわけですよ。「サッカー、ダンス、セックス」なんてのは、まさにそれじゃないですか。

だから僕は、今は何か新しいことが起こっているというよりも、「過渡的近代」という異常な時代が終わりを告げて、元の姿というか本来あるべき生き方を、非常に巨大で目に見えにくいインフラストラクチャーで支えながら、回復しつつあるんだ、という時代認識なんですよね。

「お前だけが苦しいんじゃない」

岡田 宮台さんのおっしゃることというのは、僕の世代にはすごくよくわかるつもりなんですよ。どちらかというと、まずそういうことを自分で言語化しない若い人たちというのは、僕から見るとベールを何枚も通したくらいにしか見えないし、逆にそういうことを言われて怒りだす人というのもいますよね。宮台さん言うところの「オヤジ的」という人たち。そういう人たちのことも、気持ちはわかるけれども、やはりベールの向こうなんですよ。「世代的」とくくってしまうのは危険かもしれませんが、今の三十代くらいの人たちは、「わかるんだけれども、でも……」というあたりだと思うんです。この「でも」という部分が聞きたい。よく「でも、宮台さんはそれでいいと思っているんですか!?」と言うときの「でも」は、全部ここにかかってくるわけですよね。

ただ、それでいいかどうかは、ひと言も言っていないわけで、そんなこと言ってもしようがない

わけですよ。僕がいいと言わなければそうならないなら、百回でも言うけれども（笑）。

宮台　おっしゃる通りですよね。ただ、そこは非常に微妙な問題があって、人間というのは食べて、寝て、つまり「生活して」生きている。僕もそうやって生きているわけですよね。さっきプライベートライフという言い方をしましたが、僕は、ここ一、二年間くらいは、むしろプライベートライフについてはしゃべろうと思っているわけです。それは、今まさに岡田さんがおっしゃったように、「じゃあ、お前はそういう社会をどう生きようとしてるんだよ?」という疑問が当然のように出てくるわけです。

僕はそれについて答える必要はないと、長い間思っていました。けれども、自分が「世直しモード」に入ってしまったりすることからもわかるように、非常に古くさい部分を持っていて、困っているやつがいると「あのなあ、こうすりゃあいいんだよ」と言いたくなってしまう人間であるとわかってきたんですよね。それは、オウム信者を取材しているときにも自覚したし、売春している子たちを取材しているときにも自覚しました。僕は取材する場合に、個人的アドバイスをめちゃくちゃいっぱいするんです。その部分は今までマスコミには全然出さないできました。

今の子たちというのは、だいたいこうです。「おまえの言うようになるというのもわかったし、おまえの言う生き方がいいというようなことも、抽象的な意味ではわかった。終わりなき日常を生きる知恵が大事だという気がしてきた。ところで、俺は（私は）、こういう資源しか持っていないのだが、生きられるのか」という問いなわけです。岡田さんと同じように、東大で講師なんかをやっていても、僕のところにはずいぶんそういった身の上相談ばかりが来ました。当初は「うざいなあ」

と思っていましたけれども、それに答えるというのは難しくないなという気がしてきたんですよ。やっぱり必要なのは「CURE」なんです。癒しなんですよ。

昔、大月隆寛[008]さんが「どっかで誰かがうまいことやってる」という言い方をしていて、つまりそれが八〇年代における人々の感覚の働き方だったたんですけれども、下の世代には、もうそういう感覚はほとんど存在しない。悩める下の世代は、それは僕らもそうですが、「俺だけがこんなに生きにくいのか」と思っているんですね。わかりやすい話ですが「お前だけが苦しいんじゃない」というのは、いくらでも言っていけるわけです。

たとえば年末のドキュメンタリー番組で、僕は若い子たちをたくさん取材しました。そうするとそこから見えてくる、とくにストリート系の子たちの生き方というのは、要するに「まったり革命」以降なんですよね。つまり、今ここを楽しく生きることに、本当にみんな集中している。そのためにギャラリーを集めたりイベントを企画したりする。そうやって短期的な目標を作って、何とか「今ここ」を盛り上げようとする。あるいは女の子で言えば、『プリクラ』や『たまごっち』や『ポケモン』などのいろんなコミュニケーションツールを使って、盛り上がろうとする。そんな彼ら、とくに男の子たちを取材していて思うんだけれども、大変なんですよ、「今ここ」を楽しく生きようとするのは。本当にコストがたくさんかかる。全身全霊をかけてやっているんですよ。「どっかで誰かがうまいことやってる」なんて言えるような状況じゃない。終わりなき日常を生きる知恵なんて言ったって、どこかで誰かが大きなアドバンテージを持っていて、それゆえに楽をできるなんていうことではもうないぞ、ということですよね。

008 ――――
大月隆寛
↓37ページ脚注参照。

今度、僕のいる大学院にすごいナンパ系のやつが入ってくるんですけれども、彼は女が五十人いるんです（笑）。その彼も大変で、それは女を維持するのが、ということではなくて「何で俺はこんなことをやっているんだ？」と考えてしまう。そこそこは楽しいんですね。女のケアをして、ハーレム状態を維持して楽しい毎日を生きるわけです。でも「そこまでコストをかけて、楽しい毎日を続けなければいけない理由がわからん」というわけ（笑）。

岡田　そんなところへ思い至ってしまったわけですね。

宮台　僕はギリギリだと思うんです。スケボーの子たちもそうですが、何も考えないで脳天気に生きているというよりも、非常にギリギリ、だましだましと言ってもいいかもしれないけど、そう僕には見えてしまいますよね。まあそれは過渡期だから、そのように見えてしまうのかもしれません。

さっき自明性の地平が壊れていると言いましたが、やっぱり自明性の地平の亀裂というのは、そういうところから見つかるわけですよ。だから、じつはそういう子たちが、たとえば「何で人を殺してはいけないんだ」という発言に、むしろ共感を示してしまう。「ああ、その言葉は何かわかるなあ」と。それは昔だったら、鶴見済くんが「何で自殺しちゃいけないんだよ」と言っていたことのパラフレーズなんですけれども、自殺の場合には人を殺めないので、意外と気軽に言うことができたんです。でも若い子たちが「何で人を殺してはいけないのかわからないんです」と言いだすようになったときに、自明性の地平が壊れていくということの問題の深刻さが、同世代にも年長世代にもやっと理解されるようになってきているなあと。だからこの部分について、しばらくは議論しなくちゃいけない。成熟度がもう少し進んで、「日常を演劇化」して生きることの意味について、

漠然とした共了解というものができ上がっていくまでは、「何でそこまでして楽しく生きなきゃいけないんだよ」という疑問は、当面の間、出てこざるをえないと思うんですね。

とくに日本の場合、それが深刻になると思うのは、やはり宗教的バックボーンがないからです。さっき固い地面と言いましたが、ヨーロッパの場合は神なんですよ。一神教的な神が、いつも固い地面を用意してくれる。それが意味の最終的な根拠を与えてくれる。なぜ生きなければいけないのか。それは神が自分を創ってくれたから、あるいは、それは神との契約（洗礼のこと）があるから、ですよね。あるいは、なぜ貞淑でなきゃいけないのか。それも神との契約（結婚のこと）ですね。日本の場合、固い地面に相当するのは、神ではなくて共同体だったんですよ。仲間で、みんなで支え合って生きていた。「みんながいやがるから、やらない」といったことが固い地面になっていた。

ところが共同体はもう不可避的に崩壊しつつある、というかほとんど崩壊しています。あるいは非常に細分化して、仲間集団はあるけれども、集団同士の間では自明性が壊れている。じつは人が多元的に複数の仲間集団に所属するようになったときに、もう固い地面はないんですよね。そうすると、日本というのは、さっき「哲学的」と表現したような問題に、じつは一般人、つまりいわゆる哲学者ではない人たちが、むしろ直面しやすい。固い地面ではない、液状化したものの噴出みたいなものに、直面しやすい状況にあるんだろうなあと。僕はこの部分について、メッセージを発していくという義務感のようなものを、やはり感じてしまうんですね。

年長者の生きづらい流動社会

岡田　以前、『朝生』で発言したときに、僕は「教科書問題やるのもいいし、西部邁[009]さんがおっしゃるような国家でも伝統でも、何でもいいんです」と言ったんです。ちょっと変な言い方になるかもしれませんが、根底に嘘があるのは当然であって、その嘘を排除したところから、みんな狂いだしたんですよね。その嘘は「神は存在する」でもいいですし、「日本は美しい」でもいいし、「天皇は万世一系だ」でも何でもいいから、とにかく次々と立てていくしかないだろうと。で、それを一本化しようとする試みに無理があるのであって、それぞれの人たちがそれぞれのできる範囲、「俺の家の中では俺の言うことが絶対だ」くらいのすごい狭い範囲でかまわないから、さっきおっしゃった地面みたいなものを、とにかく作るべきなのではないか。

ただ、その地面というのは、共同体単位でしか持てない、いわゆるマンションの各フロアに床だけがあるような状態なんだと思うんですね。つまり厳密に言うと、地面はない。みんなは危ないのでひとつの床だけに足を置かずに、いくつもの床に置くようにするしか防衛策はないだろうと。ですから、その方法で太平洋戦争をやるでもいいし、西部さんが美しい国家伝統をやってもいいし、とにかくみんなで乱戦状態に持っていくしかないんじゃないかと言ったんですよ。

宮台　僕も『新世紀のリアル』という対談集で同じようなことを言ったし、『まぼろしの郊外』でも書きました。人は、幻想あるいは物語がないと生きられないと一般的には言われるんですが、幻想がなくても、ミニマル（最小限度）な生の充実だけでも生きられる人はいるんです。ところが、近

009　西部邁
→18ページ脚注参照。

代の「意味の病」を通過して以降の人は、先ほどの一貫性に相当するようなものかもしれませんが、どうしても物語を必要と「しがち」なんですね。だから僕がよく言うのは、物語を追いかけること自体がいけないわけではない。ただ物語の中には、別の物語を生きている人を脅かす可能性の存在するものがある。必ず「共生」という概念と対で語られなければならない。

従軍慰安婦の問題[010]をやっているジジイたちがだめなのは、その共生という思想が欠けているんです。西部さんは単純に知識がない、僕に言わせるとバカじいさんなんですね（笑）。たとえば、以前『ザ・異議あり』というテレビ番組で西部さんが退席されたときに、西部さんが退席されなかったら僕が言おうと思ったことは、たとえば僕は「専業主婦廃止、家族の廃止」ということを言っています。そうすると西部さんがそこで、「いやそれはよき伝統なんだ」と言いだすわけです。そんなことを言うから、僕が勝っちゃうんですよ。専業主婦もよき家族も、伝統どころかせいぜい三十年の歴史しかない。最古のイギリスでさえ、三百年の伝統はない。フランスでも、フランス革命以降の二百数十年ぐらいの伝統しか存在しないし、母性愛なんかに至っては百年の歴史も存在しない。日本に至っては、政策的なでっち上げと言ってもいいようなものなので、伝統なんてことを持ちだしてきたら、青少年のセックスや大人同士の売買春を許容する僕が勝っちゃうに決まっているんですよ。

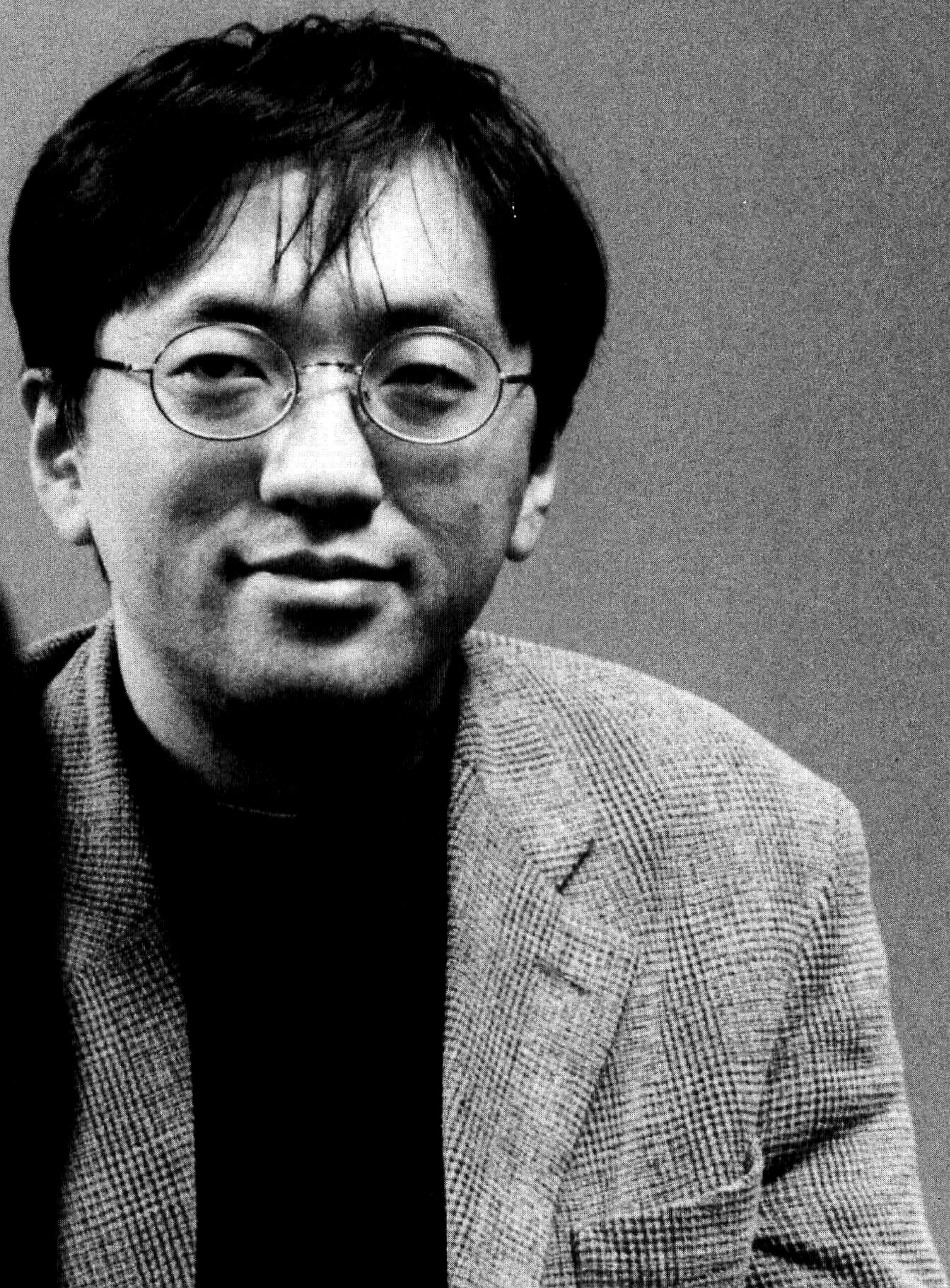
僕が、売春もいいじゃないか、低年齢の性もいいじゃないかって言ってるのは、まさしく「伝統に帰れ」っていうことですよ（笑）。もし西部さんが僕を論破したいと思うんだったら、「宮台は若造のクセして伝統、伝統と言っておるが、人間はそれが伝統であろうがなかろうが、物語を生きる

010 従軍慰安婦の問題
→9ページ脚注参照。

権利がある。それが伝統でないからと言って、お前らごときに家族の夢を壊される筋合いはないんだ」というふうに反論しないと。

岡田　「論争」である限り、僕は西部さんに勝ち目はないと思っています。西部さんが明らかにメリットがあるのは、非論理的な言葉を平気で言えるところと、年齢と、あの顔が持つ愛嬌みたいなものですよね。となると、泣きながら「そうなると、ワシが小さい頃好きだった日本はどうなるんじゃ」って言うしか、勝つ方法ないですよね。

宮台　そうであれば次のステージに行けるわけです。「ですから私は共生ということを言っている」と。さらに次のような話もできた。それは『新世紀のリアル』でも話しましたが、年齢が上であればあるほどハードドラッグをやってもOK、というシステムにしていくべきだということなんです。成熟社会、つまり固い地面のない流動社会では、年長者ほどきついんですよ。かつての思い出を、現実のものとして生きていくことができないんですね。

これは弱者救済ってことなんですけども、僕は本気で主張しています。若いやつはクスリやっちゃだめ。二十代になったら、あるいはハイティーンになったら、マリファナぐらいはいいだろうというところから始めて、セロトニン系のドラッグを許容していき、僕ぐらいの年齢になったら、覚醒剤は副作用がありますから、覚醒剤と同等の機能のある副作用の少ないドーパミン受容体ブロック系のクスリもOK。さらに五十代以上になったらヘロイン、アヘン系もOK（笑）っていうふうにやっていいと思いますね。

共生へと至るエゴイズム

岡田　言論の人たちっていうのは、すぐに一般性や客観的な事実に頼ろうとしちゃいますよね。西部さんだったら、まず伝統というのがあって、それで引っ張ろうとする。でも、その伝統を好きなだけで、この「好き」というのが前面に出せないですよね。「俺が好きな伝統」じゃなく、「伝統だからこれが正しいんだ」というふうに引っ張ってきちゃう。では、本質的な伝統とは何かという話になると、もう勝ち目なんて絶対にないですよね。

宮台　うん。だから「ワシの夢を壊さんでくれよ」というのが、最もまっとうで正当性のある言い方なんですよ。「ワシはこの夢がなくちゃ生きていけねぇんだ」と。そうすれば、こちらは「老人はドラッグOK」と切り返せるんですけどね。

岡田　テレビを見た人に「宮台っていう人、ひどいわね。あのおじいさん、泣いてるじゃない」と思わせれば、西部さんの勝ちなんですよ。それが、西部さんの好きな伝統を守る方法だから。つまり「おじいちゃんを大切にしよう」という(笑)。

宮台　「ワシの夢を壊さんでくれよ。宮台の言うように、単なる思い出にすがっているだけかもしれない。でもそれは私にとっては大切なものだ。その思い出を抱えて生きる道も許されていいはずだ」と。そういうふうに言ってくれればいいんです。そうすれば、「あんたは勝手にやれ。ただし思い出を押しつけられるのはゴメンだ」と言い返せる。

岡田　オウムや酒鬼薔薇事件などが起こって、社会的リスクとしてそれを許容しなければいけない

私たちの、最低限持てる唯一のルールって、それくらいですからね。

宮台　人間は環境の動物ですから、僕があえて言うまでもなく、共生ということはこれからますます重要になっていかざるをえないんですよ。たとえば地球環境問題ひとつ取ってみても、なぜアメリカがあれほど鈍感でヨーロッパがあれほど敏感なのか。ヨーロッパの連中は国境が接していて、川あるいは雨を通じて酸性雨なり汚れた水なりが絶えず隣国に流れこんでいく。それが戦争の原因になる可能性があるんです。

岡田　千年前に、世界は有限だって気づいちゃった人たちは強いですね。

宮台　そうなんですよ、強いんです。自分たちが生き残るために、環境のことを気にせざるをえないんですよ。つまりただの空念仏ではなくて、大事にしないと隣国に攻め入られる可能性があると、そういうことですよね。アメリカはカナダと国境が接していますが、偏西風が吹いているのでカナダのことはあまり考えなくていいんですよね。

　人間っていうのはエゴイスティックな動物で、そのこと自体は少しも悪いことだとは思わない。エゴイスティックな動物であるがゆえに生き残ろうという動機があって、生き残ろうと思うから共生が必要だという帰結が出てくる。これは成熟社会としてのヨーロッパの展開ですが、これと同じようなことが地球全体規模で近い将来必ず起こります。最低限の自分たちのエゴを満たすためにも、共生ってことを考えざるをえないだろうとなっていくんですよ。だから西部さんのような人は、私に言わせると脳天気です。ちょうど今の日本の政治状況と同じですけど、まだ共生の可能性についてそれほど強く考えることを迫られないで済むような、思い出にすがるためにすら周到な方法が必

要だということに気づかずに済むような、楽天的な状況にあるからだと思います。

「オタクは飽きた」

岡田　自分の話になりますが、お正月に載った朝日新聞の記事で、取材した記者が「岡田さんが『オタクは飽きた』と言ったのをタイトルにしますけどいいですか?」と電話してきましてね。どうしようかなあと思ったんですけれど、でもやはり、今の自分の感覚に正直にありたいという難儀な思いが出てきてしまいまして(笑)。去年の後半まではそんなでもなかったんですよ。そんな退屈でもなかったし。自分の考えや社会の状況を説明したりとか、誰かがものを考えて組み立てていくときに、僕の考えていることがブロックのひとつみたいにして使えたら、そんな実用的なのは役に立っていいなあと思っていたんです。でも年が押し迫るに従って、非常に無意味に感じてしまった。

宮台　僕は、岡田さんの選択は社会学の立場から見て、極めて妥当だと思います。それを理論づけることができると思いますね。というのは、岡田さんは僕と同世代で、原新人類＝原オタクの元祖世代に相当します。僕もそうだし、中森明夫[011]さんも、大塚英志[012]もそうです。この原オタクの特徴というのは、上昇志向にあったと思うんですよ。それは、宗教の例で言いますと、現実社会の中で、企業共同体で出世していくというステップアップの道であるとか、あるいは政治家として成功していくという道があるとすると、それはできないと、いろいろな意味であきらめた人たちが、宗教というステージでステップアップしていく。これを社会学では地位代替機能と言うんですが、近代社

011 ――――
中森明夫
→107ページ脚注参照。

012 ――――
大塚英志(おおつか・えいじ)
一九五八〜。編集者、評論家。フリー編集者のかたわら、漫画、ファミコンなどの評論活動を行なう。おもな著書に『少女民俗学』『戦後まんがの表現空間―記号的身体の呪縛』などがある。

会における宗教への参入動機には、オルタナティブな上昇を求めるというのがありますね。

初期のオタクというのは、明らかにうんちく、知識を競っていて、僕は十年くらい前にそれを「オタクの階級闘争」と書きました。やはり宗教のステージを競うのとよく似たような、つまり現実社会での階級闘争のオルタナティブ、別の領域ではあるけれども、働いている力学はあまり変わらないというのがあったと思いますね。代替的自己実現というか、もうひとつのマッチョ主義とも言うべきものですね。

ところがこの二年くらい、コミケット[013]などに行ってみてつくづく思うのは、それこそ米沢嘉博[014]さんがおっしゃっているような「みんな幸せになろうよ」というスローガン通りになっている。つまり、うんちく競争なんてものは本当にすたれてしまって、『ときメモ』[015]なら『ときメモ』という話題で、一時間自分をさらけださないまま、なかなか楽しくて幸せなコミュニケーションの時間と空間を維持することができる。ちょうど、『プリクラ』で数十分間盛り上がれるというのと同じです。かつてのオタクに、現実社会の男文化と同じようなコントロール指向というのがあったとすると、今はコミュニケーション指向に一元化してきた。「みんなで一緒に楽しもうよ」というやつですね。コスプレもそう。個別のゲームやアニメについての話題も、みんなで楽しく盛り上がるためのもの。そこにうんちく競争をやりに来るやつがいると、「何か変わってるよね」みたいな感じになる。

こういう状況を背景にして言うと、やっぱり原オタクが出てからの約十年間は、一方に現実社会の階級闘争があり、もう一方にオタクの世界での階級闘争があった。でもオタクのほうは、あくまでもオルタナティブだとしか見られなくて、差別もされた。でもその差別に対する反発もあって、

013 ——
コミケット(コミケ)
↓47ページ脚注参照。

014 ——
米沢嘉博(よねざわ・よしひろ)
一九五三〜。マンガ評論家。大学在学中よりマンガ、SFなどのサークルに入り、七五年から同人誌市場・コミックマーケットを開催。現在コミケット準備会代表を務める。主な著書に『戦後マンガ史3部作』『マンガ批評宣言』などがある。

015 ——
ときメモ
恋愛シミュレーションゲーム「ときめきメモリアル」の略。男子高校生が高校の三年間で、好きな女の子をふり向かせるために頑張るというストーリー。ゲームに登場するいろいろなキャラクターにファンがついて、そのファンクラブまでできるほどの人気ゲーム。

失地回復というか「いや、もうひとつの現実といったってそこに差はない。むしろ、これからはこっちが主流だ」という自意識の持ち方を、必要としていた人たちがいたと思うんですね。でも、僕の目から見るとそれは、時代がたてばたつほどオタクの世代交代の中ですたれていくことになった。「オタクだってすごいんだ」とか「オタクだって国際的だ」という言説を必要とする若い子はほとんど存在しない。現に今は、オタクとオタクでない子たちの見分けなんてつかない。みんな、今ここにある状況を楽しもうとしているだけですね。そのときに何をネタとして使うかという選択肢が違うだけになった。こうなったときに「ことさらにオタクの推奨をするのは飽きました」というのは、非常に理にかなった選択だと僕は思いましたね。

岡田　僕は「必要十分」と言っているんですけど、社会的地位が必要十分に上がって、さらに上げようとすると、さっき例に出した西部さんのようなことになってしまう。もうこの先は「でも俺はアニメが好きなんだー！」としか言えなくなる。でも僕は、そこまで素をさらせるほど強くはないので、じゃあこのへんで手を引こうかというふうに考えたんですけれど。

宮台　現に公認されちゃいましたからね。そういう意味では、もう次のステージが始まっていて、岡田さん的な引き際というのは僕も参考になります。役目というのは、いずれ終わりますからね。うまく見極めて次のステージに適応していくというのは、すごく重要なことだと思いますね。

岡田　それで、「オタクが終わったら次は何をするんですか？」と聞かれるわけですが、今度僕がやろうとしているのは、今自分が好きなことしか考えないということなんです（笑）。今日、宮台さんからお話を聞くまでは、何で自分がそんなことを思うのか、まったくわからなかったんです。去

年まではかろうじて残っていた使命感や世直し的な願望が、今年になったら急にすっからかんと抜けて、自分の好きなことしかやりたくなくなっているのは何でだろうと思っていました。

宮台 僕はあの記事を読んで、ちょっとうらやましかったです。僕自身「世直しモードは十二月何日でやめます」と周りに宣言していたんですよ。でも結局、宣言通りにはいかなかった。

なぜいかなかったのかというと、昨日もさきがけの代表である堂本暁子さんとお会いして、四時間ほどお話ししたんです。じつは今、さきがけは与党三党合同で「東京都買春規定」と同等のものの国法化、法律化をしようと考えているらしいので、具体的な法案の中身を細かく検討して、勘違いの部分は勘違いだということを申し上げてきた。たとえばテレクラだったら、テレクラ規制条例を作って単に住宅地とかコンピュータの回線の中に追いやってしまうのでは全然だめで、むしろフロントを残して透明性を上げたほうがいいんだといった具合に、たとえばここをこういじればこうなる……ということを申し上げますと、堂本さんは「えー!? そんなこと誰も言ってくれなかった」と言うんですよ。あーあと思ってね。こういうことを堂本さんが言うから、これから以降は、僕が堂本さんに情報を与えなければいけない役目になりますよね(笑)。僕はどうしても、そういう役目を引き受けてしまうんですよ。

岡田 今年から世直しモードをやめようというよりは、去年までは言論のほうで何とか行けるかと思っていじっていたら、どうもこれは動かないので、システムのほうで何とか動かせないかと。操縦席を替えてみたということではないですか。

宮台 政治や行政の人に会うというのは、そういうことですね。でも本当だったら、それはやりた

くないことなんです。つまり、僕についてきている読者の一部は、僕自身がサブカルチャーの中で、ものを体験し知識を積み重ね感受性を培ってきて、その領域でものを書くようになったという経緯を知っているので、彼らに対しては一部裏切りになるかなあという気がするんです。なぜかというと政治や行政というのは、サブカルチャーが全般的に「今ここを楽しくやろう」という方向なのに、やっぱり何かを支配したりコントロールしたりする世界ですから。たとえ世の中を「今ここを楽しく過ごせる世界」にするためのコントロールではあっても、でも、やはりコントロール、権力、嫉妬の世界なわけです。そういうのに関わっていくというのは、はっきり言ってすごくいやですよね。でも、しばらくはしようがないと思っています。

　これは今度出る江川達也[016]さんの『BE FREE!』[017]文庫版の五巻の解説で書いたんですけれども、江川さんのマンガのいいところというのは、「全能者に対する指向」というのが必ず出てくるんですよね。けれど、その全能者、たとえば虎子光に対する笹錦のようなもので、全能者に対抗する無頼が出てくるんだけれども、その無頼自らが全能者になっていくという逆転が『BE FREE!』では描かれるんですね。似たようなモチーフは『東京大学物語』[018]でも繰り返し出てきますけれども、つまり管理反対とか押しつけ反対、あるいは誰かに支配されたり、誰かを支配したりするのはやめようというふうに言っていく。その言説の効力、あるいは政治的なコミュニケーションの効力を最も上昇させようとすると、やっぱり自分たちが拒絶しようとしている支配の世界に、接近していかざるをえない部分があるんですよね。はっきり言うと、それは痛みですよね。でも、誰かがやらないと……。

016 ――――
江川達也
→168ページ脚注参照。

017 ――――
BE FREE!
『モーニング』で連載された江川達也のデビュー作。新任数学教師・笹錦洸は大財閥の御曹司・虎子光の人間管理教育と対立するも、最後には文部大臣になる。

018 ――――
東京大学物語
『ビックコミックスピリッツ』に連載中で、TVドラマにもなったマンガ。主人公、村上直樹とガールフレンドの水野遥の、受験時代から東大生としての日々を、Hなシーンてんこ盛りで描く。

岡田　順番というふうにあきらめるしかないんじゃないですか。

宮台　うーん。そうですねえ、順番でいいんですけれども……。

岡田　ほとんどバトンのようなものですよね。

宮台　誰かがやらなくちゃいけないということは、納得いくんだけれども、なぜ僕が、僕がですよ、やらなくてはいけないのかということには、いまだにどうしても納得ができないですよねえ。

岡田　僕、去年『朝生』に出させていただいて、番組の最中に不思議に思ったんですが、雑誌なども含めて、なぜマスメディアの人たちが政治の実権を握らないんだろうと。第四の権力とか言っている場合ではなくて、すでに第一の権力になっていると言ってもかまわないんです。「自分たちがもう第一党です。政策を立案しますからこれに従ってやってください」と言ってもまったくかまわないのに、何でやらないんだろうって。

宮台　おっしゃる通りですねえ。

岡田　そう言ったら「それをやるのはマスコミの責任ではない。マスコミがそれをやると相互監視する人間がいなくなる」と言うんですよ。で、僕は「相互監視なんて、電子ネットワークがすでにできていますから、マスコミは今や監視下にあるんですよ。だから安心して権力者の側に回ってください。誰かが権力者の側に回らなければならないのに、何を尻ごみしているんですか。それでも男ですか」と言おうとしたら、そこでCMに入ってしまって（笑）。

宮台　それは大変重要な意見でね。文部省の課長で改革派の筆頭である寺脇研さんという方は、単位制あるいはクラスをなくすという方向を強力に推し進めていまして、広島の教育長時代には、広

島の高校からクラスをなくしてしまえということを現にやってきた人です。ただ彼は、法学部出身で教育のスペシャリストではないので、何をしたらどうなるというシミュレーションがちゃんとはできない。だから間違ったことも、ずいぶんやってしまっているんですね。

たとえば九一年の業者テスト批判で、内申書評価、観点別評価と言いますが、主体性、協調性、積極性などを点数化して高校に報告するというものが、導入された。そうすると「学級委員をやりたい人」と言うと、全員が手をあげるというバカげた状況になる。またボランティア活動も点数評価するようになると、中学校のときはこぞってボランティア活動をするけれども、高校に入ったとたん、本当に誰一人やらなくなる。そんな状況も現実に生まれているんですね。つまり、意図はいいんです。明らかに教育を正したいという善意でやっているんだけど、情報がないんですよ。それは、さきがけの堂本さんも同じです。彼女も非常にリベラルで、いい社会にしたいと思っているんだけど、情報がない。先ほど例にあげたテレクラ規制も、何をどうしたらどうなるというシミュレーションをしてくれる人が、周りに誰一人いない。つまり、情報がないんです。

僕はこれは特徴的なことだと思うんですが、経済が国の課題であったとき、しかも成長経済だったときには、比較的政策と結果の因果関係が透明だったけれども、これからはますますコミュニケーションが重要になっていくんですよ。たとえば今の時代に文化、教育、あるいは性の領域などで、何をしたらどうなるというシミュレーションは、じつは従来の学問の全体をもってしても、極めて困難なんですね。そのときに、政治や行政に関わっている官僚や政治家に、マスコミの連中や文化人と言われる文化的な領域でコミュニケーションしている連中が情報伝達してあげられないという

のは、ものすごく大きな損失、とても危険なことなんですよね。善意でやられて、意図せぬ結果が生まれるというのは、これからものすごく頻繁に出てくると思うんです。だからその善意を支える情報こそが必要なんです。

正義漢集団、マスコミの仁義

岡田　日本にしてもどこの国にしても、まだ、国民あるいは有権者の意見を束ねて、そこから代表者を選んで、代表者たちに利益調整してほしいというのはあると思います。ただ、今の選挙で選ばれるシステムではそうはなっていないだろう。では、今、一番民意を聞いた上で判定し意見を出しているのは誰かというと、僕らみたいなテレビに出ている文化人ですよね。

宮台　そうですね。まったくおっしゃる通りです。

岡田　つまり僕たちは自分たちのファンという有権者の投票で選ばれていて、テレビという国会に出てきている。マスメディアが第一党になればいいと思ったもうひとつの理由は、引いて見た視点から言うと、唯一まだ正義感みたいなのが残っているのって、マスメディアしかないんじゃないかと思うわけです。

宮台　うーん……それは一部条件つきですが、そうかもしれない。なるほどね。

岡田　それがいいことか悪いことかは置いておいて、この世の中をある程度純粋にとらえて、何とかよくしようと考える人があれだけ大量にいるのは、マスメディアの世界しかないんじゃないか。マスメディアの人たちというのは、常に見ている人たちがおもしろいと思わなければいけないし、

見ている人たちに支えられなければという、いわば有権者意識というのを強く持っている。では、この人たちが与党になればいいんじゃないかと。

先日『UNO!』の花田編集長[019]と、安原顕[020]さんとの座談会に出たときに「なぜそれをやらないんですか?」と言ったら、二人ともすごくいやがるんですね。つまり「自分たちは批判する立場であって、それが前に出たり上に上がったりするわけにはいかない」と言うんですよ。「その『いかない』というのはなぜですか」って聞いても、そこから先はもう、ロジックでは答えようがない。

宮台　まあそれは、昔の「社会党」的な立場にいたいということの表現だと思います。というのは、自由に発言できるのは批判勢力だからなんであって、ということはあると思います。実際、僕自身が行政のだんだん上のほうとコミュニケーションが取れるようになってくればくるほど、やはり僕の自由度は、放っておけばどうしても下がる。

僕がさっき、自分のプライベートな情報、人の顰蹙（ひんしゅく）を買うような情報もあえて出していこうと思ったのは、そういう危機感があるからでもあります。ですので、政治システムが、マスコミ、あるいは文化活動に関わっているような人たちの情報を必要としているということは、紛うことのない事実なんですけれども、その情報をどう伝達していくかについては慎重に考えたほうがいいと思います。というのは、今マスコミで真剣に正義漢としてふるまっている人たちも、実際に政治の権力の中に巻きこまれていったときに、どうふるまえるのかということなんです。たとえば、栗本慎一郎[021]をはじめとして、社民党の保坂展人[022]さんや辻元清美[023]さんに至るまで、文化的な領域から政治の領域に入った人というのは、ほとんど何もできないわけです。それは単純に、その文化人が選挙で当

019
花田紀凱（はなだ・かずよし）
一九四二〜。文藝春秋社の『週刊文春』『マルコポーロ』編集長を経て、現在は朝日新聞社の女性誌『UNO!』編集長を務める。

020
安原顕（やすはら・あきら）
一九三九〜。中央公論社の『マリ・クレール』で副編集長を、メタローグ社の『リテレール』で編集長を務めた。現在はフリー。

021
栗本慎一郎（くりもと・しんいちろう）
一九四一〜。衆院議員。もともとは、経済人類学の創始に寄与したハンガリーの学者

選しても、永田町文化の壁の前でいかんともしがたい状況になるからですね。

岡田　それまでは国民の声を作れる「メーカー」のほうにいたのに、政党に入るとか議員になることで、国民の声を使って何かをするいわば「下請け業者」のほうに行ってしまったという自覚が、本人たちにはありませんよね。自分たちが格落ちしたっていうのが、わかっていませんよね。

宮台　でも、堂本さんと話していても思ったのは、政治家側も文化的領域で仕事をしているような人たち、つまり僕のような人間にもっと情報開示を求めてほしいということです。政治家が驚くような重要な情報を持っている人が、文化領域にいることがわかるわけですから。だから政治家は、マスコミに記事が出る、論文が出る、あるいはテレビに出演しコメントしているような人間に少しでも関心があったら、秘書を通じてコンタクトを取って、あのコメントについてもっと詳しい話を聞かせてくれということをやってほしい。そう堂本さんにも申し上げたんですよ。

　これはすごく重要なことで、政治家に会うことは難しいとみなさん思われていますけれども、マスコミに出ている人がちょっとしたつてをたどって、何かの法案を立案している人に「ちょっと待ってくれ。重要な情報を知っているので、時間を取ってほしい」と言えば、必ず会ってくれます。本当はそういうことを、いわゆる文化人と言われる人はやってほしいですね。それは、決して表には出ない活動ですが、でも、マスコミ活動をしている人のかなりの部分は正義漢なわけで、つまり恒常的な「世直しモード」なんですね。だったらむしろ、そういうことをやっていただいたほうが、目的に照らし合わせると、最も近道だと思いますけれどもねえ。

岡田　でも花田さんや安原さんがあんなにいやがるのを見ていると、あの世代の人たちには無理な

カール・ポランニーの紹介者として一躍注目された、経済人類学の第一人者。九三年衆院議員に初当選し、現在二期目。初当選時は新進党だったが、現在は自民党所属。

022 ——

保坂展人（ほさか・のぶと）
一九五五〜。衆院議員。ジャーナリスト、フリーライター。若者の場として「青生舎」を主宰。また、教育をテーマとしたルポを執筆、子どもの声からの取材を続ける。九六年衆院議員に初当選する。社会党所属。

023 ——

辻元清美（つじもと・きよみ）
一九六〇〜。衆院議員、ピースボート共同代表。大学時代より大型客船をチャーターしてアジア諸国をめぐる平和運動「ピースボート」を続ける。九六年衆院議員に初当選する。社会党所属。

のかなあなんて、ついつい思ってしまいますけれども。

宮台　まあ、ああいう方たちは、自分の同僚で政治の世界に入った人がいっぱいいるんだと思うんですよ。そうすると、ある意味で汚れるわけですよね。汚れたぶん、何かができるかと言えば、日本の政治システムというのは、長い間そういうふうにはなっていなかったですよね。永田町の文化に適応するだけで終わる、ということになりかねないというか、そうなるしかなかったんですよね。

終わりなき日常を生きる知恵

岡田　僕、ある程度テレビには出てやろうと思ってるんですよ。それは、今は神話の時代に入ってきたのではないかと感じたからなんです。あの論理的なローマ市民たちが、何でギリシャ神話なんか信じていたのかというと、それは人間にとって必要なことだからではないかと思うんです。つまり、上のほうでキャラクターたちが喧嘩していて、それを下にいる人間たちが噂するみたいな機構ですね。テレビがない時代は、神話とか聖書とかを読むというのでよかったんでしょうけれども、今は自分の考えと似たようなものを持っている何人かの人間が、自分の感情やキャラクターをむきだしにして喧嘩したりくっついたりしているのを見ている。そういう時代を生きているんではないのかなあと。だから僕は、西部さんには泣いてほしかったと言ったんですよね。

宮台　なるほど、それはよくわかりますねえ。社会学ではそれを「コスモロジー」と言うんです。わかりやすく言えば、ノモスに対してコスモスなんですけれども、ノモスというのは日常秩序のことですが、人間は日常秩序だけで生きられなくて、その日常秩序を評価するための、ものさしを必

要とするんです。それは、時代によって、たとえば宗教が提供する時代があったり、イデオロギーが提供する時代があったりするわけですね。中間は飛ばしますが、たとえば冷戦体制下のような時代であれば、保守と革新というのが重要なコスモロジーになっていて、誰が保守的なのか、誰が革新なのか、誰が一番進歩的なのかという軸で、人の政治行動や文化活動を評価できたじゃないですか。こういう時期も、ある程度続きました。その後、冷戦体制が壊れてしまうと、保守と革新というような政治的な対立軸が、コスモロジーにならない。つまり、自分たちの組合活動や投票行動を評価する軸を、与えてくれなくなるわけですね。

じゃあそのあとは何がコスモロジーたりうるのかというと、岡田さんがおっしゃったようなことだと思うんです。たとえばいわゆる文化人と言われる人たちが、まあ半分ピエロ、半分茶番かもしれませんけれども、対立劇をマスコミ上で演じている。あるいは直接対立していなくてもいいんです。ここではこう言っているやつがいる、あそこにはああ言っているやつがいるというように、意味的なマッピングが一部の人々の中にそこそこ共有されていって、インターネットみたいなところで、俺はこいつに賛成、俺はこいつに反対と言い合っていくというのがあると思うんですね。インターネット上で何かをしゃべるというのは、大半のメッセージは内容的にはゴミですから何の社会的影響もありませんけれども、そこで俺はこいつに投票、俺はあいつに投票と言えるということ自体が、コスモロジーを参照してノモス、つまり日常秩序を生きているということを意味する。

これは「終わりなき日常を生きる知恵」のひとつなんですよ。文化人たちの活動を参照しながら、絶えず床屋政談的なイチャモン、まあ大半はゴミですが、お互いそういうものをぶつけ合いながら

「俺はこうやって生きるぜ」って自己確認していく。これからはそれが大変重要な機能になりつつあるので、「文化人になりたい」という人間が踏まえるべきことは、文化人になるということはたぶんそういうコスモロジーに参加して、「マナイタの上のコイ」になって、あれこれイチャモンつけてもらうことなんだと。そういうことは知っておいたほうがいいでしょうね。

岡田　僕らの中には「人間はいざとなったら自分で繕いものして服とか作って、めしも作って山の中で一人で生きていけるんだ。それが本来の人間だ」といった幻想がある。でも実際はそうじゃないですよね。それと同じで、今の社会の中でたった一人で感情を持つことは不可能ですね。

　つまりテレビで恋愛劇を見ることで恋愛の仕方を学び、主人公のリアクションを見ることで、自分の感情の動かし方のバランスを見る。「あ、これには共感できる」というように、僕がさっき言った神話的なものへ委託して、自分の自我をそれとの関係で構築していく。つまり、一対一の神との契約のようなもので、社会的なメディアとの一対一の契約でようやくみんなバランスが保てる。文化人も、そういう状況の中に置かれているのではないかと。

宮台　たとえば恋愛、ロマンチッククラブというのも、そもそもそういうものでしたよね。十九世紀にフロベールという人が『ボヴァリー夫人』[024]という小説を書きましたけれども、ロマンチッククラブというのは、最初は上流階級の人のものだったんです。のちに小説が庶民に広まってからは、庶民が読んで「これが恋愛なのね」と考えて、それを自分でやろうと思うことから、現実のロマンチッククラブが始まった。日本でも北村透谷[025]が明治二十年代に恋愛を輸入して、それを読んだ文学青年、文学少女が「これが恋愛か」と思って、恋愛をするようになる。これは近代社会においては、まっ

024 ――
ボヴァリー夫人
一八七五年の作品で、フランス・リアリズム文学の代表作。うだつのあがらない医者と結婚してしまった女が、華やかな生活、すてきな愛人に憧れ続けたあげく破滅していく。

025 ――
北村透谷（きたむら・とうこく）
一八六八〜一八九四。詩人、評論家。島崎藤村らと『文学界』で交遊、浪漫主義運動の先駆をなした。

たく通常的なことですよね。

とりわけ今の時代は、恋愛のコミュニケーションや友だちづき合いのようなものは、やはりモデルが必要なんですよ。モデルとのかね合いで、それをものさしにして自分自身のハンドリングをしていくということは、むしろ普通なんですね。つまりそれだけ複雑性の高い社会システムなので、とりあえずモデルを必要としている。モデルとは、踏み台ということです。「これはいやだよね」とか「これはありえないよね」などと言うことも含めて、極めて重要なコミュニケーションなんです。そういう意味で言うと、いわゆる文化人、あるいはテレビでドラマやさまざまな番組を作るというのは、それがネガティブな評価の対象になることも含めて、これからますます重要にならざるをえないと思いますね。

神様になるのは意外と簡単だ

岡田　そこで、僕は四年くらい前に、ここは一発、神様になってみるのもおもしろいかなと思いまして（笑）。僕が考えていたのは、政治をやっている方に話をするとかいうのではなくて、裏技を使って最大限効率のいいことは何かということだったんですよね。

宮台　そうですか……神様になってみるのもおもしろい、と思われましたか。僕はそういうふうに思ったことがないんですよ。

岡田さんのような方は、僕らの世代でもむしろ珍しいかもしれませんよ。つまり僕らは、上野千鶴子[026]さんの世代から「私生活主義世代」と言われ、実際にもそれが浸透していますよね。面倒くさ

026
上野千鶴子（うえの・ちづこ）
一九四八〜。東大助教授。専門は家族社会学、記号論、女性学、人類学。著述や講演などの活動を通じ、女性解放運動、女性問題を手がける、この分野での指導的な理論家の一人。著書に『女遊び』『近代家族の成立と終焉』など多数。

がりだし、自分が楽しいことをやっていたいと思う。ところが人に影響を与えるとか、ボスになるとか、仕切るとかというのは、面倒くさいじゃないですか。人を支配するとか神様になるという、そのこと自体が、よほど享受に値することだと思っていない限りは、大変コストばかりがかかるわけです。

岡田　なるほど、そうですか。僕はそれを自分の生得の権利だと思っているので、神様になれないのはけしからんと、思うんですよ。そう考えるから、飽きるという感覚もあるんでしょうね。

宮台　でも、神様になるというのは意外と簡単なことだったと思いませんか。こういうことを言うと、また反発を受けるかもしれないけれど、いわゆる文化人、マスコミの矢面に立った人間が、何で立ってしまったのかと考えてみると、非常にシンプルなメカニズムになっているんだなという気がしますよね。

つまりボーティング（投票行動）ですから、動員すればいいんですよ。動員に成功した人間が勝つ。かつての政治活動とほとんど同じメカニズムが働いているわけですね。かつてのボーティングと違うのは『朝生』のような場所が存在して、それをギャラリーが見てコスモロジーを頭の中に構成できるような形になっているということでしょうか……。動員のノウハウも、かなりその人の志向別にパターン化できるようなものじゃないかと思っているんですね。たとえば、『朝生』のような場所に出た場合、どういうふうにすれば目立つことができるのかというのは、完全にマニュアル化できる。これはその人が持っているリソースによって、使える手段は変わってきますけれどもね。

先ほど飽きるというお話をされていましたけれども、僕は何かを支配するとか目立つことという

のは、じつはあんまり享受に値しないなという気がしました。その意味は、昨今の若い人たちのセックスが薄いのと一緒です。性に関するタブーや困難が激烈であればあるほど、困難によって盛り上がることもあれば、タブー破りで盛り上がる快感もある。でも、ほかに楽しいことがいっぱいあるとなると、快楽の手段もいろいろあって相対化されていく。それとほぼ同じで、実際に政治家になることも、マスコミで有名になることも、一定の資源があればさほど難しいことではないし、難しくないがゆえに、享受に値しないことだと思うんです。

昨今の政治状況において、投票率の低下を嘆く声がありますけれども、僕は違うと思っています。投票率の低下や無投票層の増大というのは、これがひとつのボーティングなわけで、無投票層が増大すればするほど、政治家にとっては政治家であることのうまみというのは低下していくわけです。つまり、自尊心が満たされない。「政治家、誰やそれ?」と言われたら、政治家になる動機要因というのが低下していく。じつは、これが日本の政治システムの組み替えには、一番重要なことだと思うんです。つまり、政策理念みたいなものが一切なくても、みんなが「先生、先生」とあがめてくれるから、永田町共同体に入りたいと思うという状況がある。むしろ無投票層というのがもっともっと増大して、政治家になることを誰もほめないというふうにならないと、こういう状況は変わらないだろうなという気がしますね。

政治家は支配できますが、「だから何なの?」といった感受性が育つのはいいことです。学者志望者にも、何を学びたいというのではなくて、単に学者になりたいとかいうのがいるんですよ。そういう抽象的な動機というのは、以前にもまして増大しているんですよね。昔は社会を変えたいと

か、社会を変えるための有効な手段は、自分の力量からいうとこういうことだと考えるやつは多かったけど、今は文化人という記号、あるいは岡田斗司夫、宮台真司という記号に憧れるやつがあまりにも多い。まあこういう連中は、インターネット・ローカルならばいざ知らず、マスコミに登場するや否や簡単に淘汰されていってしまうので、そのへんはとくに強調しておきたいことでもありますよね。

宮台真司キャラクター化計画

岡田　先ほど宮台さんが「これからはプライベートの部分も、もっと話そうと思う」とおっしゃいましたが、僕はそれを聞いて「それだ、それだ」って思っていたんですよ。というのは、僕が考えている「みんなもっとキャラクター化を推し進めよう」というのに、とても合っているからなんですよ。西部さんに泣いてほしかったと言ったのもそれです。宮台さんにはもっと派手な場所で言い負けるシーンもほしいですし、プライベートなことを話すシーンもほしい。

つまり、見ている人たちが、ツールとしての宮台真司ではなくて、キャラクターとしての宮台真司を好きになったほうが、さらに有効性が増すのではないかと思うんです。言論の人たちって、ぶつかり合うにしろ協力するにしろ、もっとキャラクターを前面に出すべきなんじゃないでしょうか。政治家というのは、本来、オーラみたいなものを持っていましたよね。それがつまりキャラクター化なんだけれども、二世、三世議員たちというのは、そうなることをもう放棄してしまっていますよね。

宮台　そうねえ、そこは僕自身はなかなか難しい部分があるなあ。というのは、僕自身をキャラクター化することに関しては両義的なんですよ。つまりキャラクター化しようとする色気はあるんです。そのほうが実効性が上がるからという単純な理由ですが。他方で、何か言ったときに「あの人はああいうキャラクターだから」と無害化されて、最初から牙を抜かれてしまう。キャラクター化したら一〇〇パーセント、そういう現実は起こるわけです。それは利害得失の問題じゃないですか。

岡田　それくらいのほうが安全かな、と思ったんですよ。つまり、自分が言ったことの受け取られ方というのは、真剣に受け取られてたとしても、それには何通りもあるわけじゃないですか。その場合の安全策として、キャラクター化されているほうが大丈夫なんじゃないかなあと。それくらいでなければ、僕らは「コンビニ」に並べないと思います。

宮台　わかります。それはたぶん僕の考えで言うと、単にキャラクターになることではなくて、自分の意図する目的があって、目的に合致したキャラクターの内容というのがあると思うんですね。僕自身はそれはコントロールしたいと思うんですよ。たとえば、僕が『朝生』の誘いを五回に一回くらいしか受けないのは、やっぱり自分でコントロールできないキャラクター化というものを拒絶したいからです。なぜなら、僕には世直しモードという政治的な目的があるので、マイナスになるような要素を拒絶したいと思うからです。とはいえ、『朝生』はこれまでにたぶん四回ほどは出ていますけれど、それはやはり目標達成に必要なキャラクター化なら引き受けようと、あるいは出ることを引き受けた以上は、精いっぱいやろうということなんですよね。

たとえば「専業主婦廃止論」ということを言うと、激烈なリアクションが来る。これは僕が意図

していることなんです。つまり、短いワイドショーとかバラエティーのような番組で、僕の持ち時間は全部で五分間しかないといった場合、その五分間で僕の考えをすべて説明することは難しい。ならば、わかりやすくてなおかつ違和感のあることを、わかりやすいフレーズで言えば「え!? 何言ってんだ、こいつは」という反発があるじゃないですか。そういう反発が起これば、当然議論も起こる。「いや、それでいいんだと思うな」というやつと、「そうじゃない」というやつとの間で、たぶんブラウン管の向こうで、たとえば会議とかインターネットとかで争いごとが起こる。それで「じゃあ、実際何を言っているのか聞いてみよう」ということで、僕を講演に呼んでくれるとか本を読んでくれるというようになれば、結果として、僕が伝えたかった情報のほとんどは伝わるわけですね。

僕が考えているキャラクター化とはそういうことなんです。随時、機会主義的に変化可能な枠の中で、反発をもあえて買う。「最近、専業主婦はいらないとか言っている変なやついるじゃん」というような(笑)。

岡田 おっしゃっていることは、僕なりにはわかるつもりなんですけれども、キャラクター化がコントローラブルだということは、もう捨てちゃってもいいんじゃないかと思うんですけれど。

宮台 岡田さんのおっしゃることは、よくわかります(笑)。じつは僕もそう思います。ただしそれは目的次第だと思うんです。僕自身も世直しモードから完全に脱却できれば、そう考えられるようになる、というか、そうしたいと思います。

岡田 僕が言っているのは、世直しモードが自分の中で本気であれば、確信があれば、コントロー

ルしきれないキャラクターでも十分機能するんではないかと。

宮台 一縷の可能性はありますよね。まあそれは、ちょっと様子を見てから決めたいと思いますけどね（笑）。いやあ、最近、中森（明夫）さんにも、そういうふうに煽られているんですよ。「宮台くん、もう自分をコントロールするのはやめよう！」って。たしかにそのほうがおもしろいような気もするし。

岡田 つまり、コントロールすることで得られる利益というのはもう十分取られたので、逆にこれからは、コントロールしないことによる不利益のほうが、利になると思うんですよ。それによって宮台さんのところに来てしまう層が、本来宮台真司が得るべき層なんですよ。

宮台 ああ、なるほどねえ。うーん……。貴重なアドバイスをしていただいて。それは考えたいと思います。岡田さんのご忠告は、結構重要な問題なんですよ。というのは、現実に今、僕が直面している問題そのものだからですよね。

僕は、ある意味で、過去四年間で役割を果したという感はあります。ですので、今後はまた別の方向へシフトしていこうという意図はありますが、何かを意図してその課題を達成するというのは、ブルセラ・オウム・サカキバラと過去三回くらいやって、それはそれで成功したと思うんですね。またここで目的を立てて、一年くらいかけて成功させていくということにどういう意味があるのかというのは、コントロール・リソースが枯渇しなくても、問題になりますよね。

有り体に言ってしまえば、ものを書くということは面倒くさい仕事じゃないですか。非常にコストがかかるし、快感の多くない、コストパフォーマンスの悪い仕事だと思うんですよ。もっと楽に

仕事をして楽しく生きていこう、幸せになろうとしたら、もの書きになるというのは最も悪い選択のひとつですよね。生活は不規則になるし、大事な人間をケアできなくなるし、いろんな部分がめちゃくちゃになるわけです。それでも書くわけじゃないですか。何でものを書くんだろうという、そういう根源的な問いにつながってくる問題でもあるんです。だから、キャラクターとして出るものをコントロールしたほうがいいのか、しないほうがいいのかという問題も、根源的な問いに関わる問題なので、じつは最近よく考えることなんですよ。

岡田　テレビなどで見て宮台さんのおっしゃっていることがわかる人は、宮台さんがコントロールされていない状態でも、まず大丈夫だろうと思いますね。逆にわからないという人は、コントロールしていようがしていまいが、わかんないだろうと。その意味で言うと、コントロールされていないほうが、彼らにとっての好感度が少し上がるだろうから、損得計算すると得なのではないかなあと思うんですよね。

僕が言っているキャラクター化というのは、単にいい者になれ、悪者になれ、あんたはこういう役割ね、というのではないつもりなんですよ。こういう問題の枠内というのではなくて、宮台真司という人間のままで受け入れられるかの勝負、というふうに考えているんですよ。表現する人間、何かを書いたり、発表したりする人間の最終的なゴールというのは、そこしかないですよね。

宮台　どうやって、丸ごとダシにしてもらうかということですよね。

岡田　はい、そうです。それだけが、この薄い世の中でできる濃密な生き方であり、神話の中の伝説として生きられることですよ。私たちが風呂に入って戦って、みなさんはそのダシを飲んで生き

てくださいというようなものですから。

宮台　そうねえ。よくわかります。でも、冒頭の話に戻ると、僕は「ミヤダイ」と「ミヤダイ」の間にどうしても距離を感じてしまうんですよ。その距離を戦略的に埋めていこうという考えもあるんですけれども。

僕と同世代の人って、メディアのすれっからしが多いじゃないですか。だから「仮想現実だからいけない」なんて言う人間は、まずいない。そういう世代であるからこそ、メディアの中で自分のイメージを露出して消費されることを、単純に喜ぶというのは難しいですよね。単純に言うと、メディアで消費されるということに恥ずかしさがありますし。

岡田　恥ずかしさって、裏返すとうれしいって状態だと思うんですよね。「うれし恥ずかし」って言うけれども、理性だけだと恥ずかしいほうしか見えない。裏返すには、こういう言い方はおかしいかもしれないけれども、理性を取ってしまう。

宮台　はっきり言ってうれしくないですよ、そんなに。

岡田　うれしくない場合は恥ずかしくないと思います。そう思うんですけど、違いますか。恥ずかしいという感情は、うれしいという感情を隠すところから始まるものではないですか。

宮台　僕が「ミヤダイ」と「ミヤダイ」は違うんだと言うときの、いくつかのファクターがあるんだけど、ひとつには恥ずかしいからなんですよ。その恥ずかしさが僕に食いこんできてほしくないので、そういうふうに距離を置いていると。もちろんもうひとつは、さっき言ったように、行動の自由度が上がるということですね。

癒しを求めるシステムを変える

岡田　キャラクターになっちゃおうというのは、私たちが癒されましょうということなんです。つまり、私たちが癒されることを見せることで、癒しを必要とする人を減らし、同時に癒しを必要としている人は、代償的に癒しを得る。おそらく、そういう癒ししかないであろうと。すなわち私たち自身が、最も癒しを必要としている人間なので、それをキャラクター化して一番つらい部分を人々に見せる。

宮台　今、分けたのは、癒しを与えるのか、それとも癒しを必要とする人間の数を減らすのか、つまり、システムを変えるのかどうかということなんですね。それで言うと、僕は後者のほうをやりたいんですね。ただ、プライベートな問題をしゃべっていこうと思ったのは、前者の部分、癒しの提供という部分については、自分にそういうことができるとは、長い間まったく思っていなかったんです。

　けれども最近、すでに僕が持っているリソースで、比較的コストがかからずにできるということが急速にわかってきた。いろんな電子メールや手紙を見ると、僕が書いている程度のことで癒される人が、大勢いることがわかってきました。たとえば『世紀末の作法』に関するメールで多いのは「私は（僕は）、ストリートで生きているような子の生き方はしていませんが、私は生きていてもいいんだと強く励まされたような気がします」というようなものなんです。それがあまりにも多いので、昨年末はちょっと考えましたね。こういうことで癒されるのか。だったらその癒し機能という

ことについて、もっと自覚的であるべきだろうなあ、と思うようになりました。

ですからそのキャラクター化計画についても、色気があるというか、迷うところがあるんですよ。ただ、僕自身がまだ手放していない「世直しモード」の部分、癒しを必要とするような社会システムを組み直そうという部分を手放せないというのはあるので、迷うんでしょうね。

岡田 癒しを必要としない社会システムというのは、かつてどこかの世界で現実化したことがあるんですか。

宮台 一切ありません。ですから全部、機会主義的なものです。今、こういう種類の癒しを必要としている人間がいるとすれば、その癒されるべき、特定の苦しみを生みだすシステムを何とかしようと。つまり、そこが納得できない者には、何でそんなことをするのかよくわからないと思われるでしょう。

でも、世の中には宗教的メンタリティというのがあって、僕は自分にそういうメンタリティがあるんだと思います。宗教者にはふた通りいて、多くの宗教者は癒しを与えることに機能を特化していきますが、世の中には救済の神学に基づく「世直し運動」というのがあって、日本にも南米にもいろいろなところでときどき起こる。これは、癒しを必要とする人間があまりにも多すぎるという状況を前にして、癒しを必要とするような状況を生みだす、社会そのものを変えなければいけないんだ、となるからです。つまりそれが「世直しモード」なんですよね。

岡田 つまり、たとえば中世でペストが大流行して、人々がバタバタと死んでいくので、もっと神に祈れとみんなが言っているときに、そうではなくて早寝早起きの健康な生活をしようということ

ですね。神に祈らないから平和に死ねなくても、これで長生きできる。君たちはペストがいやなんだろう。僕は、今ペストで苦しんでいる人には何もできなくて申し訳ないけど、でも何年かしたらこの社会からペストを減らすことができると、そんな感じですか。

宮台　ああ、とてもわかりやすい比喩ですね。その通りです。

岡田　ただ文化人の中にもペストで苦しんでいて「ペストなんとかしろ」と言っている人は、宮台真司の早寝早起き説を聞いて激怒するわけですよね（笑）。「それは、今のペストにはどう役に立つんだ」って。今のペストには役に立たないけど、これでペストがない社会を作ることができるのは、当たり前だと。

宮台　そうですね。だから、その上で僕自身にも、今ペストで苦しんでいる人に、ちょっとだけ苦しみを軽減するメッセージを出す力があるのかなと。その部分を自分でどう評価できるのかってことで、迷いが生じるんですよね。

岡田　僕は、それはどっちかということでもないと思いますね。僕がキャラクター化にこだわっているのは、キャラクター化することで自らが癒される。それをディスプレイしながら、同時にシステムを変えるというのが一番いいのではないかと思うんですよね。

宮台　うーん。そうですねえ。いや、今日の話は私個人にとっては、非常に有意義な話だと思います（笑）。

岡田　私は日本にとって有意義な話をしているつもりなんですけど（笑）。

ベストを尽くしてシステムを変える

宮台　僕自身がなぜ癒しということに躊躇しているかというと、有り体に申し上げれば、こういうことなんです。

たとえばある宗教があるとします。その宗教が苦しんでいる人を効果的に癒せば癒すほど、人々の中から社会変革の要求というのはなくなります。よく言いますが、現状補完的機能を宗教が存分に発揮することによって、むしろ現状は、その宗教によって支えられてしまう。いわゆる救済の神学と言われるものにはふたつの方向があって、現状維持的な機能を果す場合と、世直しに役立つ場合とがあるわけですけれども、僕はそのことを危惧していて、癒される人間が増えれば増えるほど現状補完的になります。僕にとってはそれが、気にかかるんです。

だから、人を怒らせたり人を不安にするようなことを、あえて長い間言い続けてきているのはなぜかというと、むしろ人々を癒すよりも、癒しが必要なサスペンディング、つまり宙吊りにされた状態に落としたいと。そのために、オヤジから安定した地面を奪うという目的の下で何年かやってきて、それがある程度は成功した。つまり梯子ははずせたし、オヤジもゲタをはけなくなった。そういう意味で言うと、成功したがゆえに今はちょっと考えどきなんですよ。

岡田さんがおっしゃってくださったように、僕の計画はたしかに成功したんです。ですので、今さら不安をかきたて続けるというのはどうなのか。酒鬼薔薇事件がひとつのきっかけになるんですけれども、具体的な提案をしていくようになる理由は、その提案を正当化するときに、それこそさ

まざな意味の体系を使いますよね。「こういう理由でこういう選択肢が推奨されるべきなのである」という具合に。そうやって、提案と同時に理由の部分を語ることによって、僕が今考えているふたつの機能、つまり、癒すと同時に、癒しを必要とする社会システムそのものを変えることができるのではないのかなあと。具体的な提案は社会システムを変えるのに役立つし、具体的な提案を補強するためのコンセプトの組み替えは人々を癒すのに役立つという具合に。

岡田　僕は、自分の中の動機とかやりたいことに、そこまで明確な自信がないんですよね。自分自身では、おそらく自分を解放しても大丈夫であろうという見こみだけで考えているんです。コントロールして自分が善であるかどうであるか、社会にとっていいものであるかどうかを考えてみたけど、たぶんこれはバカの考え休みに似たりであって、あんまり考えてもしようがないんじゃないか。それよりは、これを解放して影響力を持ったほうが、僕にとっても社会にとっても幸せなんじゃないのかと。

でも、そういう生き方をみんなに強制することができないので、強制する根性のある人がやればいいやと。で、ほかの人はそれを見て納得するしかない。だからさっきのペストの例で、僕がやろうというのは、ペストで亡くなった人たちのお葬式をすごく盛大にやろうとか、ペストで死んだ人がかわいそうだという歌を作って歌う、というようなもんなんです。それによって何の実効力があるかというと、実効力はわからないけれども、そのくらいしかできないんじゃないかと。その中で、ベストを尽くせば、何かベストを尽くすなんて言葉を使うと、もうほとんど宗教ですけれども（笑）、でもベストを尽くせばという言い方にならざるをえないんですが、システムのほうが変わるんだっ

たら変わるだろうし、それは計算して変えようとする努力と同じ程度か、ひょっとしたらそれを上回る効率があるんじゃないのかなと。

　僕がこれまでやってきてうまくいったことを客観的に見ると、それは考えてやったことではなくて、自分の内なる動機と表面用に考えて作った動機が、ちゃんとシンクロしたときだけなんですね。

宮台　ひとつだけ逆説を申し上げますと、自分の言葉にある程度の影響力を獲得することに成功したときに思ったことは、僕にとって自分の言葉は、どのように語っても人が聞いてくれないという状況であったときのほうが、語ることの自明性は高かった。つまり、固い地面を信じることができました。ところが、僕が何かを発言することによって、条例や法律に大きな変化が起こるかもしれないということが現実的になってくると、逆に不安は増大しますよね。「なんだ、固い地面だと思っていたのに、そうじゃない」と。たかが僕程度の人間が、何かを言うかどうかによって世の中が変わるとすれば、ある別の観点から言えば、それは望むところでもあるんだけど、地面の存在を信じていた僕の中では不安は大きくなりますよね。

岡田　恐怖ですよね。

宮台　そうですね。じつは、不安は大変に大きいんです。それは「失いたくない不安」でもあるんですけれども。自明性の崩壊や喪失ということで言えば、僕自身がもの書きとして本が売れるようになればなるほど、僕自身の自明性は崩れていくという、妙な状態にありますね。ほかのもの書きの方はどうなんでしょう……僕はよくわからない。小説家ならば問題ないんですけれども。

　ある種の宗教家の方々にとくに聞いてみたいなあと思うのは、彼らは生き方を説きますね。その

ときに「何言ってんだ、バカヤロー」と言われているぶんにはいいんだけど「あなたのおっしゃる通りだ」と多くの人が言うようになったときに、不安は感じないのかということですね。それはいろんな人に聞いてみたいですね。何せ、何もかも複雑で、よかれと思ってやったことの帰結が読めないという感覚って、僕らの世代には、もう染みついたものとしてあるじゃないですか。

岡田　僕に宗教家の資質があるかどうかはわかりませんけれども、少なくとも僕は「あなたの言う通りです」と言われたときに不安は感じないですね。おそらく、そういう不安がないという欠損のある人間だけが、そっちの世界に踏みこんでいけるんだと思います。前にも言ったんですけど、生得の権利だと腹の底から認識しているからですね。

宮台　そうか……。まあ腹のくくり方が足りないのかもしれませんね。

岡田　いや、くくり方とか覚悟で発生するものではなくて、ある種の壊れ方ですよ（笑）。

宮台　そうでしょうね。しかし、もし僕にアドバンテージというか、もの書きとしての優位があるとすれば、たぶんその不安なんだと思うんですね。不安が結構あるわけですよ。そういう部分は僕の書いたものには、随所に表われているはずです。たとえば、僕はよく「逆説」というキーワードを使いますけれども、僕が最も好きな言葉のひとつなんですね。パラドックス、よかれと思ってとんでもないことが起こるというのがわかりやすい例になりますけれども、逆説というのは複雑な社会システムの至るところに満ち満ちていますからねえ。

岡田　そうですね。僕は昔から「神様は意地悪だ」と思っていましたから。何でこんなに祈った通りのことはしてくれるのに、その意味が違うんだろうと（笑）。こうなりたいとかこうしたいと思っ

たら、必ずできるんだけどその意味が全然違うとか、善意を持った人がやったことというのは、なぜこんなに難儀なことを発生させてしまうのかとか。

宮台 そうですね。一般に合理主義の非合理ってあるじゃないですか。ロジカルなのはいいとして、この人が過剰にロジカルなのは何なのかと。ロジカルであろうとする理由というのは、必ずしもロジカルじゃないからですよね。それは多くの人が潜在的に思っていることですが、その種のことには敏感でありたいなあと。僕自身がロジカルであろうとする理由は、まったく非ロジカルなものだし、誰にとったって、それ以外にありようはずがない。

岡田 一番最初に、宮台さんがじつは非論理的で感情的だということを聞いて、じゃあその部分を出しちゃえばいいと言いましたのは、たぶんそのほうが、パワーは三倍くらい強いのではないのかなあと思ったからなんですよね。つまり、家族に対するのと世間に対するのでは、その間に線を引いていらっしゃるわけですよね。家族に対するように世間に接するのも、おもしろいんじゃないですか。

宮台 今はちょっと実験的なんですよね。『ダ・ヴィンチ』でやっている『世紀末相談』という連載は、僕が「ちょっと考えている実験的なプランがあるので『相談』というかたちでやらせてほしい」と編集長に提案して始まったんです。これの反響が大きいので、ちょっとびっくりしているんですよね。

ですので、今は試行錯誤している状況で、それでうまくいくようであれば、岡田さんのおっしゃるような方向に行くのもありかなとは、漠然とは思っていますけれどもね。

場を組織・提供するやつが勝利する時代

岡田　ところで、僕はこれまでの対談で、クリエイティブは終わったと言っていまして。かつて、表現するべき強い自我を、みんなが目指して幸せになった時代は、みんなが作家になって自分の思うことを表現できるということはすばらしいと言っていた。で、これまでの百年くらいは「表現とは人間性の解放である」みたいなことを合い言葉として進んできたんですけれども、その欺瞞にみんな気がついてしまった。だからみんな「クリエイティブ」じゃなくて、より小規模・小リスクな「ディスプレー」で満足するようになってしまった。従って押しの強いクリエイターも生まれてこない。

今の宮崎駿[027]さんや庵野秀明[028]くんから名作が生まれるということは、まだ僕はあると思います。でも、たぶん今の三十五歳以下からはここから先、新進の人は出てこないだろうなと。それがクリエイティブが終わっていると思うゆえんです。マンガ家も例外を除けば、昔みたいに二十代に山ほどの層があって、新人がガーッといて、という状況はない。今、編集者が考えるのは「どうやってこのマンガ家を引退させないか」ということなんです。メジャーデビューさせた瞬間に、次の作品はマイナーになっていって、同人誌に描いて、いろんな雑誌でジプシーのように小さな連載を繰り返すようになってしまうわけですね。ゲーム作家もそうですし、アニメでもそうです。宮崎駿さんは後進が育てられませんでしたが、それは若い人がいないということでもあるわけですね。宮台さんがおっしゃってきたような社会状況から生まれてきた人には、クリエイティブは必要ないということ

027――宮崎駿
↓33ページ脚注参照。

028――庵野秀明
↓227ページ脚注参照。

となんでしょうね。

宮台　おっしゃる通りですね。今の若い子たちはＤＪに憧れますよね。たぶん、クラブＤＪという人材はニーズも高いし、実際質の高い人材も供給されているんだけれども、かつての作曲家とは全然資質が違っていて、要するに、場を見極めてその場が要求しているものを、その場で短時間に自分の引きだしの中からセットアップして出せる力なんですね。そこがどういう場であるのかということを観察して、その場に最もふさわしいメニューを短時間にセットアップできる能力。これはかつてのクリエイターに要求されていたこととまったく違う。これは、受け手が「お前は何が表現したいんだ」ということにまったく関心がなくなって、その場で適当に盛り上がりたい、仲間うちで戯れたい、延々としゃべっていたいといった要求しか持っていないことと結びついています。

岡田　リソースとしてのクリエイターの作品は必要なんだけれども、かつてのものとは違って、たとえば小説の映画化というのと同じように、リソースとしての素となる作品があれば、そこからＤＪみたいなのがやっていけると。

僕は今おもちゃを集めていて、すごくそのあたりが気になるんですが、最近はおもちゃは売れるけど作品は売れないというケースが、ものすごく多いんですよ。『ポケットモンスター』も、ゲームよりアニメのほうが売れているし、アニメより関連商品のほうが売れているしと、どんどん作品のほうが単なるリソースになり果てて、関連商品のほうが膨らんでいく。『セーラームーン』[029]も『エヴァ』[030]もそうです。これを今までのように著作権元が、全部のリソースはうちだと管理するのが限界にきているんですよね。

029 ――― セーラームーン
↓165ページ脚注参照。

030 ――― エヴァ
↓146ページ脚注参照。

宮台　僕は、DJもそうですけれども、場を組織したり提供するやつが勝利する時代になると思うんです。それはコミケットの米沢さんみたいな行為が、出発点に当たると思う。『ポケモン』も立ち上げにずいぶん苦労したみたいですが、成功したのはゲームが売れたこともさることながら、関連商品が売れたことが大きい。本当にそうやって人々が楽しめる場を作ることにコストをかけて、「場」を組織し終わったときに成功者が生まれる。でも多くの人は成功者の名前を知らない。それは人々はその「場」を楽しむことだけを考えているからということなんですけど。今の若い子たちは、DJ的な、あまり名前は覚えてもらえないけど「何かいいよね、この人」みたいのがカッコよくて、「俺は誰だ」なんて自問しているクリエイターはカッコ悪いと思っている。つまり、自分としての自分だけが持っているものを表に出すのはカッコ悪い。「何だよ、こいつ」となる（笑）。

岡田　僕が実感したのは、庵野秀明の幸せ度が上がらないことなんですよ。あれだけの、日本の映像の歴史に残るほどのヒットを記録したのに、彼の幸せ度があんなに上がらないのは、本人の資質の問題ではなくて、クリエイティブはよきことであるというクリエイター信仰の破綻ですよね。『エヴァ』本を出した人とか、関連商品で儲けたガイナックス[031]のほうが幸せそうなんだもん（笑）。こんなことがあったらクリエイター神話は崩壊しますよ。

宮台　でも庵野さんというのは「場」を提供したじゃないですか。みんな『エヴァ』については語りまくったし。

岡田　彼はそれを幸せとは思えないんですよ。古いタイプのクリエイターだから。

宮台　そうなんですか。それは不幸ですねえ。

031 ガイナックス
→228ページ脚注参照。

岡田　不幸ですよ。いろんな『エヴァ』論が出ている中で、すごい不満だと思う。そのへんではすごく宮崎駿的なんですよ。本人いわく「宮崎駿の弟子」ですから。自分の考えている、ただひとつの解釈が流布してほしくてやっているのに、さんざん勝手なことばかり言われて、という感じなんですよ。

宮台　なるほどねえ。でも庵野さんは、僕らと同世代じゃないですか。その感覚は本当に僕らの世代までだと思うんだよなあ。ＤＪで有名な人というのも僕らと同世代だけれども、もとはヘビメタファンだったりパンクロックファンだったりするわけですよ。そういう人たちが自分を捨てて解脱して、つまりクリエイター信仰を離脱してＤＪをやっているわけですね。僕らの世代が、ちょうど分水嶺なんですよね。今のＤＪ第一世代というのは、クリエイター信仰を苦労してあきらめた世代なんですよね。

岡田　それは捨てている、あきらめているという言い方もそうですが、宮台さんが前におっしゃった永続性や統一をあきらめて「今」に固執すると、ＤＪにならざるをえないわけですね。

宮台　そうです。つまり自分を表現するということは、一貫して変わらない自分があるという前提に立つことですし。そういう意味では、今は非常にいい方向に来ているんじゃないかなあと思いますけれど。日本はとくに、去年テクノ系のダンスがブレイクしましたけど、今年はほんとに広がると思いますね。それはみんなでねぶた祭りで踊っているようなものですね。ねぶたは一年に一回しかありませんが、ダンスはその「場」に行けばできるという。デートクラブもそうなんですよね。デートクラブの店長が「場」を作ってくれるんですよね。何の斡旋もしていなければ、紹介もして

いない。女の子はその「場」をどうとらえるかというと、商売する「場」というのが名目だけど、実質はまったりできる「居場所」であると。そういうニーズが高まっていますよね。

倫理的な崩れの世代間ギャップ

岡田　僕は鶴見済さんとの話で、日本はいずれ崩れていくだろうと言ったんですけれども、それは社会的なインフラ、たとえば下水道とか電線とかというもの、そういう職人的な仕事に対するロイヤリティは、今後下がる要因こそあれ、上がる要因はないからだと考えたからなんです。

宮台　そのインフラを支える基本的な職人的メンタリティの低下というのは、じつはコンピュータソフト業界などでも起こっているんですが、国際化による人材の流動性で埋め合わされて、日本からハングリーなやつがいなくなっても、シンガポールや台湾からハングリーなやつが入ってくるという状況になると思う。人材間のノウハウの伝達にさえ失敗しなければ、それはさしたる心配ではない。

でも全体の問題で言うと、日本ではエンジニアリング的な面でのディスアドバンテージよりも、むしろ政治システムに象徴されるような制度面でのディスアドバンテージのほうが大きいですから。

そういう意味で言うと、制度的なディスアドバンテージによって五年、十年という短いタイムスパンでは確実に沈没していきますけれども、ただそのことによって何が変わるのかってことですね。テレビの『サンデーモーニング』でも言いましたけど、「経済的に沈む」ことを日本が傾くことだとか、「天下国家の一大事」だとかと騒ぎ立てる人がいますが、それは老オヤジと中年オヤジだけ

なんですよね。こういう類の「日本沈没主義者」は人口学的に一定の規模以上にはならない。あるいはどんどん減少していく。日本が二流国である、あるいは日本が二流国になる。だからどうなんだという人が増える。

総理府のデータで言うと、「ものの豊かさはあなたにとって必要ですか」という質問に「必要です」と答える人間は、世代が上になるほど多いわけですね。それは自分たちが加齢してきた過程で、社会がどんどん豊かになっていくということが現にあったわけだし、それが自分の人生の目標でもあったからですね。生まれたときから豊かさが自明な連中は、おもしろいことに、ものの豊かさにもさしたるこだわりは示さない。これはヨーロッパと同じ状況です。つまり日が昇る国から日が沈む国になったとしても、日が沈む国には沈む国なりの楽しみ方があるさ、という(笑)。そういう意味で言えば、鶴見済くんの言うように、今すでに生じているいくつかの動き、ダンス・カルチャーに象徴されるようなものは、どんどん広がっていって、それで定常的なシステムになる。

岡田 僕は全世界的に、たとえば五十年がかりで似たような水準に達したとき、それで歴史が終わるというんじゃないんですけれども、あきらめとか有限感みたいなものが上限に達してしまう。それによってモラルが崩れるという、そういう社会システムの崩れはあると。だから一流国、二流国という後退はあるだろうけど、誰もそんなこと気にしないような状態そのものが、崩れだと言ったんですよ。つまり、僕らの世代ギリギリまではそれが崩れだと思うけれど、鶴見さんの世代から見るとそれは崩れとは認識できない。

宮台 じつは、冒頭に申し上げた「自明性の崩壊」というのは、そういうことと結びついているん

ですね。みんながそこそこ、今を楽しく生きるというふうになるわけでしょ。それが延々と続くときに、「まったり生きる」ことと「脳死状態」と、いったいどう違うのかということだけが、重要な問題となって残ることになる。

岡田　僕のたとえで言うと、僕が駅前に自転車を止めるときは、鍵をかけなくてはいけないんですが、大阪では鍵をかけずに済んだんですよ。でも今は大阪でも鍵をかけなくてはいけなくなったそうなんです。これを鶴見さんの立場にしてみれば、もともと鍵をかけるのは当たり前だと。これは崩れている世界にいる人間の自覚なんです。僕はその崩れた社会についていけないので、「何で東京では……」とか「この頃は鍵をかけなくてはいけないので物騒だ」と考えてしまう。でも物騒な世界に生きている鶴見さんは、それを物騒とはとらえずに当然のこととして、注意点として見る。では鶴見さんよりもさらに下の世代は、彼よりさらに気を使うようになるだろうと。そういう崩れはあると思うんです。それを僕は、倫理の崩れというふうにとらえているんですけど。

緩慢で終わりなき日本的システム

宮台　ただ、難しいと思うのは、今コンビニがどんどん広がっていますよね。コンビニが広がると万引きも広がるんですね。今の中学生で万引き体験者というのは、全国で確実に半分を超えているんですよ。この間、ラジオで東京の有名進学校の高校生を集めて話を聞いたときには、万引き体験者が三十人中三十人全員という状況なんです。これは僕らの高校のときだったら、本当に考えられない。僕らが高校生の頃だったら、同じ東京の進学校でも万引き経験者はたぶん二割いかなかった

と思うんですよ。そのくらい万引きが広がっているんだけども、でもそれで僕たちのシステムが壊れるかというと、ちょうど三億円事件のときに、保険金のシステムがあるので誰も被害者がいないというのと同じで、コンビニ産業そのものが万引きされることをコストとして織りこんでいて、それで順風満帆にシステムが回るようになってしまっている。そういう状況、これがたぶん「終わりなき日常」なんですね。

岡田 なるほどなるほど。

宮台 それはたぶん「崩れ」ではあるんだけれども、「世の中が崩れる」と言ったときに、年長世代が言うような全面崩壊はやってこない。じつは、そんなに簡単に崩れてくれないんだと思うんですよね。そのくらい僕たちの社会というのはフレキシビリティの深さがあって、問題を吸収できてしまう。

とくに日本は宗教がないのでそうなりがちです。みんなうまくいっているのでいいじゃないか、このシステムで、と許容してしまう。やくざという非合法的組織がずっと生き残れたのもそう、総会屋のようなシステムがずっと続いてこれたのもそう。でもこれについては、今は経済システムが国際化して、それではやっていけませんよというある種の外圧ですが、外在的な状況が変化したので、総会屋もたたみましょうと。これだって外圧不在でシステムがうまくいっていれば、永久にそのままですよ。

岡田 それはその通りですね。

宮台 日本はそういうシステムなんですよね。「崩れ」ても問題はないんですよ。万引きとコンビ

ニの関係というのは、よく考えればイラだたしいことですよね。たとえばコンビニで万引きすると、昔なら通報しますよね。でも通報すると、調書を取られて時間的コストがかかりますよね。だから本屋なんかも含めて、今は多くのお店で通報しなくなってしまっている。

岡田　僕は、西部さんがおっしゃる意味で使っているんですけれども、伝統を守るにはコストがかかるということを、みんなが認識したほうがいいと思うんですよ。つまり学校側がコンビニに金払うしかないわけでしょ、万引きを減らしたかったら。それによって三十年前まであった、みんな万引きしないという文化は唯一守られるわけじゃないですか。

宮台　万引きの問題が非常に克服が難しいのは、かつてみんなが万引きしなかったのは、必ずしも倫理観ではなくて、そういうことをすると潰れてしまうお店が現にあって、その店も含めて近隣社会は形成されているということが、あったからなんですね。そういう地域共同体がなくなって、なおかつ保険のシステムや、さまざまなコスト計算のシステムができ上がってくると、日本人としてのメンタリティは何ひとつ変わっていなくたって、万引きしてOKとなってしまうんですよ。昔、日本の伝統社会で浮気してもOKだったのと同じなんですよね。日本人は不道徳だったかというとそうではなくて、それで社会がうまく回っているんで、お互い様という感じ方の中で許容していたわけです。でもそういう部分って、日本社会のある意味利点でもあるんだけど、ある種の潔癖な倫理主義者が日本に来ると、どうしても許せないところに見えてしまうでしょうね。

これがどういう問題を引き起こすかというと、究極的に言えば、生きていることの意味がわからなくなるんですよ。このシステムの中では、ほぼすべてのことが許容されるという状況は、「壁が

ない」状況なんですね。壁に囲まれていなければ、そこがどこであるのか意味をつかむことができない。まあ、「意味の病」があるからなんだけれども（笑）、万人が意味の病から離脱することは絶対にありえないから、日本的な緩慢な、鶴見くん的に言えば変わらないシステムというのは、きついやつにとっては本当にきついだろうと思う。

ただそういうふうに言いながらも僕が不満なのは、三十人が三十人万引きしちゃっていて、「万引きはいやだ。やらないよ」という潔癖な人間は一人くらいいないのか、ということですよね。

アメーバのような壁のない社会

宮台 ご存じかもしれませんが、今年に入って東京都が中学生を調べた「絶対にやってはいけないことランキング」が公開されて、万引きが五位、援助交際が六位なんですね。援助交際よりも万引きはいけない。その万引きをクラスによってはほぼ全員がやっているんですよ。援助交際はまだ一割とか二割なんだけど。

日本て、つまりこれなんだよね。援助交際が今はまだ一割二割なのは、もちろんある意味で万引きよりも敷居が高いからだけれども、その敷居の高さは倫理観とはまったく関係がない、ということです。病気のリスクとか、ばれたら恥ずかしいとかそういうことです。で、ちょうど援助交際と同じくらい悪いというので並んでいるのが、友だちを叩くこと（笑）。

岡田 それはリスク高いですもんねえ（笑）。一位は何ですか。

宮台 一位は、クスリ。クスリは八割以上がいけないと答えています。これも、解釈には迷うなあ。

これは「人間やめますか」という、いわゆる威嚇教育の成功かもしれませんね。でも、単に威嚇教育が成功しているだけなら、アメリカを見ればわかるように、五年で終わりです。五年で、クスリはいけないと思う人の割合は、半減すると思います。

立花隆[032]さんが一九七七年に『アメリカ性革命報告』という本を書かれたときにすでに予言していることですが、（一九七七年の）現状の統計で見ると、日本のOLはアメリカのOLよりはるかに遅れているように見えるが、五年後か十年後かわからないが、しばらくすると日本のほうが性的にルーズになることは間違いないと。その通りになりましたね。

朝日新聞の調査でもやりましたけれども、アメリカでは不倫はいけないという既婚者は七割いますけれども、日本では五割を切る（笑）。これはつまり日本の伝統なわけです。また、これは少し前の調査ですけれども、三十代の既婚者の婚外性交渉の数というのは、G7では日本がフランスと並んで最も多い。

こういういろいろなデータを見ていくと、先ほど岡田さんがおっしゃった「崩れ」ですけど、そもそも新たに崩れるものなんてあるのかという気がしますよね。原則不在・共同体依存という点では、非常にわかりやすい社会であるんだけれども、共同体的文脈しだいでどうとでもなりうる、わけのわからないアメーバのような壁のない社会。酒鬼薔薇事件もいろんな理由がもちろんあるんだけど、半分以上の中学生が平然と「わかる」と言ってしまうのがね（笑）。これは僕たちの社会が持っているもともとの構造ですよね。だから、これを前提にしてどうするかということしかありえない。全面的にアメリカのような社会に作り上げて、宗教的倫理を持ちこもうとするのは不可能です

032

立花隆（たちばな・たかし）

一九四〇～。ノンフィクション作家。七四年、膨大な資料をもとに田中元首相の金権政治の実態を暴いた『田中角栄研究』を発表、一躍その名を知られる。社会的な事件や事象を一時的偶発的なものとせず、その発生源にまでさかのぼって克明に調べあげるニュー・ジャーナリズムに、日本で初めて形を与えた。著書に『日本共産党の研究』『脳を究める』『立花隆の同時代ノート』など多数。

し。ただ否定しようが肯定しようが、これが日本の社会の変わらない前提ですからね。実験室的な意味ではおもしろいですよ。こんな社会はないぞという意味ではね。

岡田　こういうときに今までのパターンで言うと、日本というのは何か内的な事情で崩れたり次の段階が来るというのではなくて、外側からの引き金みたいのがあって、それでいっせいにコロッと変わるというのはありますよね。その要因が全然見えないですよね。私たちがその概念の中にいるから、見えないのかもわからないけど。

宮台　おそらくかつてのように外圧があっても、おそらく「動員」はできないんですよ。たとえばヨーロッパと日本は伝統があるので、近代が成熟して未来に輝きがなくなったときに「サッカー、ダンス、セックス」というのはよく似ているんだけど、決定的に違うのは、ヨーロッパはまだ動員ができるんですよ。

たとえば労働組合ひとつ取っても、労働組合の組織率はフランスなんかでもまだ半分を超えて、六割くらい。でも日本は、もう二割を切っているような状態です。背景には失業率の高さとかの問題もあるんだけど、一般に何か問題があったときに、人を動員するということが日本ほど難しい国が、今はほかにないことも事実でしょう。

日本はヨーロッパのような階級社会じゃないし、アメリカのように貧富の差が大きいわけでもないので、利害の対立軸が不鮮明なのが大きいですね。日本の労働組合というのは産業別ではなくて企業別で、企業共同体であることを前提としていますよね。企業が共同体じゃなくなってくると、もう労働組合は意味がないんですけれども、ヨーロッパは階級社会ですから、階級的利害が今でも

厳然と存在しています。簡単に言えば、労働組合も産業別で、ある種の同業者組合なんですよ。

岡田　日本人にとって階級に相当するものって、物理的な距離だと思うんですよ。ですから、話が一挙に飛びますが、キー局の崩壊しかないんじゃないかと思います。キー局の崩壊と地方局の乱立によって今のテレビの自由化をもう少し推し進めて、道州制なんてものではないくらいに、日本が単一国家であるということを捨てて、ヨーロッパ並みにする。日本は島国だからみんな狭いと思っているけど、高低差はあるし恐ろしく広いですよ。地域ごとに人の考え方も違う。だから、物流のコストをものすごく上げればいいと思います。その地方で取れたものをその地方で食って、その地方のメディアを見る。そうやって多国籍化しないと。今の日本で唯一、あるグループ内の人たちが、今は寂しいなあとかうれしいなあと共通して感じられるのは、「気候」しかないと思うんですよね。つまりそれが「地域」なんですよ。たとえば、今、雪が降っているところでトレンディドラマを見せられても腹が立つだけですよ。雪国は雪国だけの価値観を持って、すべてのもののコストを持っていいのではないか。で、表裏という言い方をやっぱりしちゃうんですが、表日本、裏日本っていうのも、その地域差によって個々で違ってくるのだろうと。

宮台　そうですね。有能な官僚の考えというのは、今の岡田さんの考えと非常によく似ています。つまり、今後自由化していくと、地域間格差というものが広がっていくだろうと。反対する人は、地域間格差が広がることを最大の反対理由にあげるんです。でも有能な官僚にとっては、それが賛成理由なんですね。つまり、利害で結集することができない日本の状況、平均的政治意識が低いまま、国民的共同利害について話し合うような土壌も生まれない状況を変えるには、とにかくいった

ん利害が対立するような状況を広げていくしかないんですね。階級的特殊利害なき日本の場合、岡田さんの言うように地域的利害が重要なんですけれども、それに加えて世代的特殊利害というのも見逃せません。

まあ僕がやっていることのひとつは、世代的特殊利害が、地域間格差を除けば今の日本の中で見つかる唯一に近い利害対立なんで、徹底的に世代間対立をあおるということですよね。階級もないし、地域間格差にも乏しいという中で、かろうじて世代的利害の対立のみが存在する。それ以外に動員の口実、そこそこの規模で人々を共感させうる口実は、しばらくの間はないと思っています。

岡田和美

さらば言論の日々、そして

Kazumi Okada

一九五八年大阪府生まれ。
オタキングの妻、（株）ガイナックス経理部長。
大阪教育大学を卒業した八一年の秋、岡田斗司夫が手がけていたSF専門店ゼネラルプロダクツの立ち上げを、その場のなりゆきで手伝う。以後ずるずるとこき使われて翌八二年の二月に結婚、「岡田和美」となるが、入籍を四月まで忘れていたお茶目さん。八五年、ガイナックスの設立にあたっては、発起人として参加。九二年夏、夫がガイナックス社長を突然辞めるも、同社で経理部長を続ける。九四年より、なりゆきで夫の執筆作業まで手伝わされる。現在、一週間のうち三日は（株）ガイナックスの経理部長業務、二日は（株）オタキングの諸業務をこなす。一児の母。
（オタキング記す）

最後のマジメな話のお相手は、奥様の岡田和美さんである。和美さんと言えば、オタキングの執筆担当としてファンにはおなじみだが、こういう形で登場されるのは珍しい。じつはこの対談「最後にうちの奥さんと話したいんですけど。対談した理由とか、僕が今考えてることを話しておきたいんで」というオタキング自らの要望で実現したもの。妻と話すときは、関西弁になるというオタキング。思いきり素に戻って、今の心境を赤裸々に語った。（九八年二月十二日対談）

和美 え～、私から聞くんですよね？　ああ、恥ずかしい（笑）。

岡田 まあ、かまわへんやん。君との対談の企画意図というやつを説明しますと、このままこの対談集を出版したら、あまりにも自分の今の気分、感覚とズレまくってしまうなあって思うてんよ。

和美 対談したのは宮台さんを除くと、去年の九月までかな？

岡田 うん。正直その頃までは、「オタク一匹、何ができるか」とか「人民を善導するのじゃ」とか思ってた。ところが九七年の末頃から、そういう気持ちがまったくなくなったわけね。いや、悪いと思てるよ。読者の人とかみんな僕のあとについてきて、ウワーって「オタク号」に乗り込んでくれたわけですよ、いよいよ出港だっていうときに、自分はさっさと降りちゃって「エー？」、でも「船長さんもいるし、エンジンも大丈夫！　いってらっしゃーい」。そりゃ怒られるやろうけど、怒られてもいいから降りたいと思ったわけだから。　僕はやっぱり自分の中の動機・熱意がいちばん大事やからねえ。その気持ちが冷めてしまった。

和美　じゃあその熱意が冷める前の原稿読み返して、どうだった？　何が印象に残りました？

岡田　うーん……小室さんと話したとき、学問も大したもんやなあ、と思うたな（笑）。

和美　何かいいこと教えてもらったんじゃなかったっけ？

岡田　「完全自由競争」と「自由市場」。自由市場っていうのは、何やったっけ……？「ある条件のもとでしか成り立たん」っていうようなことを……。去年やったら言えたのに（笑）。

和美　もう忘れた？　私、教えてもらって、まだ覚えてるよ（笑）。すごいうれしそうに教えてくれたでしょ、「賢くなった、賢くなった」って（笑）。

岡田　それは「夢（ゆめ）、幻（まぼろし）」でした（笑）。

（このあと突然「社会学的定義による完全自由競争」の説明始まる。立て板に水状態）

和美　よかったね、覚えてて（笑）。

岡田　あと印象に残ったのは、鶴見さんの原稿チェック。直しの入った原稿見たらね、対談したときよりさらに、「僕はいい加減なんです」っていう演技を深めてはる。中央大学で話したときは、もうちょっとマジに受け答えしていたのに、直し入れた原稿見たら「世の中、滅亡したっていいじゃないですか」っていう不健全野郎になってやがる。この野郎～、「悪い子ブリっこ」しやがって～（笑）。おかげで対談原稿が嚙み合うてないねん。

和美　あの～、私が聞いてるのは「熱意が冷める前の自分を見て、どう思うか？」ということなんですけど。

岡田　了解、では「マジメな話」を。原稿読み返して、正直びっくりした。ただ単に僕、自分の言

いたいことを区切って言ってるだけやねん（笑）。

和美 人の言ってることを聞いてないっていう意味？

岡田 聞いてるよ、聞いてインスパイアされたことを勝手にしゃべってるだけやねん（笑）。

和美 つまり、ちゃんと聞いてないっていうことね（笑）。

岡田 意に介してない（笑）。

和美 ひどい（笑）。でも、小林よしのりさんについては言ってたよ。この対談じゃなくて、初めて会ったときに。

岡田 東大（のゲスト講義）のときに、とにかく「負けた」って言うたね。この十年間で負けたと思ったのは初めてやからねえ。あの覚悟に負けたんやったかなあ？　何でかなあ？

和美 でも、最初すっごい悪口言ってて、私が「そんなの当たり前じゃないの」って言ったら、「負けた、負けた」って言い出した。なんで怒ってたんだったかなあ。

岡田 えーっと、何で怒ってたんかなあ……。あ、つまり「薬害エイズにしろ、従軍慰安婦にしろ、その問題が結果としてどうなろうと、自分はじつはかまわない。大騒ぎになればいい」というようなことを言ってらして。それに対して最初僕は、責任感がないとか怒ってたんやけど。

和美 「そんなええ加減なことでええんか！」って怒ってたね。

岡田 君がそれに関してどう言ったかは覚えてへんけど、僕がどう思ったかは覚えてるよ。君に一発説教かまされた結果、私は改心して「結果をコントロールしようとするのは不遜である」というふうに考えるようになったんよ。結局、大騒ぎを起こすことはできるんやけど、大騒ぎしてどうす

るのかは、各個人が決めればいいのであって、結果までどうこうしようっていうのは、不遜であるし、第一不可能である。できないことであるし、なおかつ失礼である（笑）。そう考えるようになって、「小林さんに負けた、私にはそこまでの覚悟はございませんでした」（土下座のポーズ）。

「対談集を読まされる人は災難やなあ（笑）」

岡田　でね、原稿を読み返して思うのは、ホンマにねえ、「去年の僕は賢かった」（笑）。結構ご立派なことをほざいてるわけや（笑）。

和美　今年の僕は？

岡田　今年の僕はバカやねん、ホンマに感心すんねん（笑）。去年の僕の賢さというのはねえ、たぶんこの本読んでも、読者の人、わからんような気がする。僕、キーワードばっかりしゃべってるから（笑）。キーワードしか言うてへんから、対談相手の人にあんまり伝われへん。そら当たり前やな。自分が考えてることのキーワードみたいなものを、ポンポンポンポン出してんねんけども、それは「取りつく島もない」というか。だいたい、対談なんだから、自分のことばっかり一方的に言うわけにはいけへんやん。それでもなんかね、小林さんのやつなんか読んだら、そうとう僕、一方的にしゃべってんねんけど（笑）。

和美　何ていうやつ。

岡田　はっきり言うて、対談集を読まされる人、災難やな。岡田斗司夫という人間を知ってたらわかるようなことが多いんやけど、じゃあ知るためには何したらいいのか？　僕のほかの本、読んだ

らいいのか？　そんなことと違うんよ。本人とつき合うしかない（笑）。

和美　そりゃあ、あんまりよ。小林さんのファンが「わあ、小林さんが載ってる！」って買っても、わからないわけ？

岡田　小林さんの考えはよくわかる。小林さんとか鶴見さんの考えてることは、ハッキリ言って、小林さんや鶴見さんの著作より、よくわかるようになってる。でも、それはね、僕にとってよくわかるようになってるだけであって（笑）、読者にとってわかるのか言うたら、そんなん、ようわかれへんなあ。まじめな読者であればあるほど、小林さんのヤツはとくにショックやろうし。

和美　ほんと、勝手な人ね。

嘘を作るというクリエイター、作家の特権

岡田　僕、人と話してる最中にいろんなことを思いつくやんか。今野敏さんと話してて、僕は「物語を作る人っていうのは、良識のもととなるべきである」というようなことを、今野さんは言わへんかったけど、言うたような気がしたんや。

和美　（プッと吹き出す）いつもと一緒（笑）。

岡田　いつものこと。『インデペンデンス・デイ』[001]でタンス開けたらヘルメットが出てくる、みたいなもので（笑）、今野さんが言ったような気がした（笑）。で、確認したらやっぱりそういうふうに思ってはった。それは、去年の大発見やった。それまで私は、「もう、ものなんか作らんでもええわ」と思ってたんだけど、これはもう修正！　今度、小林さんに会ったら「小林さん、マンガ描い

001 ――
インデペンデンス・デイ
九六年公開の映画。ローランド・エメリッヒ監督。エイリアンの地球侵略を壮大なスケールで描いた大ヒット作。巨大宇宙船襲来から、ホワイトハウスなどが吹き飛ぶ都市破壊シーン、壮絶な戦闘シーンまで、迫力の映像が目白押し。

てくださ〜い！」って、この対談で言うたことと、まったく逆のことを言わなアカン。

和美　コロコロ変わる迷惑なやつ（笑）。

岡田　だって価値観、良識、世界観っていうのは虚構でしかないわけやん。何でかって言ったら、人間っていうのは言葉を使うて生きてるわけやん。言葉を使ってものを考えたり、生きてる限り、ぜったい現実とのズレがあるよなあ。そのズレが慢性的に溜まってきて、しまいには「言葉で定義された価値観」っていうのが現実と思ってしまう。そのズレっていうのは意識化されないから、ますます激しくなっていくやんか。本来、フィットするはずのない「言葉の世界観」というのを、みんな使って生きてはるわけや。そのためには嘘も必要やし、宗教も必要やし、もととなってる価値観やね、たとえば「男女の愛は永遠だ」でもいいし「人は一人では生きていけない」でもいいし「自然との共存」でもいいんやけど、いやホンマになんでもいいんやけどな（笑）、中心部には「巨大な嘘」がいるわけや。その嘘を作るっていうのは、クリエイターとか作家の特権やと思う。

和美　でも、それは「物語」の中で語られるべきでしょ。たとえば、戦争で手柄を立てた人を褒めたたえるっていっても、結局それが語られるときは「物語」の形になる。

岡田　そうそう。人間って「物語」のかたちでしか、認識できへんから。事実であっても、それは物語化されて人間の頭の中に、やっとこさ入ってるようなもんやから。まあ、そんなことをやなあ、今野さんと話してる最中に考えとってん。今野さんには悪いんやけど、じつは途中から今野さんの話を聞けへんようになって……（笑）。

和美　いつものパターンね（笑）。

「ＯＫ、じゃあ問題ないからサイナラ～ッ」

岡田　『朝まで生テレビ』で話したり、語ったり、インタビュー受けたり、対談したりっていうような、いわゆる賢い方向の評論家っぽいやつをやってたけど、それって、その前四、五年間ぐらいの、「何か賢いこと言うてみようか」っていう僕のチャレンジの集大成やねん。

それが役に立ったかっていうと、気が済んだとしか言いようがない。宮台さんと話してたときにも痛感させられたけど、今はそんなことにさらさら興味がないんですわ。

和美　そんなことっていうのは「賢いこと」っていうこと？

岡田　賢いこと自体には一定の興味はあるんやけど、もうそれに関して自分の中で結論がついてると申しましょうか……。なに驚いてんの？

和美　（あきれ顔）結論って、どんな結論？

岡田　考えるっていうのはいかなることであって、どういう効果があって、どんないいことが将来起こりうるのかなんていうのは、だいたい感覚として把握できてるわ、っていう結論やな。

和美　賢いことを考えて、ちょっと賢くなった結果、自分にどんないいことがあるかがわかったってこと？

岡田　ほかにも「みんなに、どんないいことがあるのか」とか、「これからこの世の中、どういうふうになっていくのだろうか」というようなことに関して、だいたい漠然とした見通しがついたんで。要するに「地図を見て、もう行った気で」っていうやつ。アメリカの地図をもらって、「ハイ、

OK。もう行かんでええ」。

和美 それっていうのは、たいしていいことなさそうだから?

岡田 アメリカの地図見たから、気が済んだ(笑)。行ったらいいことあると思うよ。現役で頑張ってる人らも、いいことあるんやと思う。けどなあ……。

和美 普通、そういう地図を見て、ああもあるこうもあるって考えるもんでしょ。行ってみたいなあって。

岡田 それぞれの現地人に会って話したもん。その現地人の人らっていうのが、宮台さんだったり、小林さんであったりする。それ以外にも、大月隆寛[002]だとか浅羽通明[003]、あと中森明夫[004]さんとかとパラパラパラパラと会って話した。『朝生』出てたり、評論家と呼ばれる人らと、ここ三、四年がかりで話して、そういう人らが、何で発言してて、どういう気持ちで、どういう価値観の世界に住んでいて、どうしたいのかっていうのがほぼわかって、それでOKになった。

OKになったっていうのは、彼らに任せといて大丈夫やいうことやねん。基本的に私が出て行って、その中で混ぜたり、その中のひとつになってやったりして、いいことも悪いこともないよな。その人らが右の極端から、左の極端までで頑張ってるんやから。

和美 A地区担当、B地区担当みたいな?

岡田 そうそう。その能力っていうのが、こんぐらいやったらええなあっていう要求水準より上であるっていうのがわかったから、もう気が済んだんですわ。説明しにくいけど、プロデューサー気質っていうやつでね。

002——
大月隆寛
↓37ページ脚注参照。

003——
浅羽通明
↓53ページ脚注参照。

004——
中森明夫
↓107ページ脚注参照。

たとえば僕、アマチュアフィルム作ったりしてたときに、自分の家を提供したり、お金を出したりしてたわけやん。普通、日本映画界ではそういうふうな人間は、監督になるわけやな。でも、僕は昔からそういう感覚がなくて、どっちかっていうと、自分よりちょっとでもうまい人を見つけたら、そいつに監督やらせてしまう。そうやって、自分よりうまいやつ、うまいスタッフって当てはめていくと、しまいには、自分一人で作るよりもはるかにいい映画ができる。自分でも気がつかんこと、自分ではできないことっていうのもリストアップして、また自分よりうまいやつを見つけてくる。で、うまいやつ同士で競争が起こるようにして、その競争があったときにはちゃんと見て、よりうまいやつが上に立てるようなシステムを作るっていうのが、僕の考えるプロデューサーの一番ベーシックな仕事やから。

それで言論界のほうを見てみたら、みなさん、僕よりうまい。弁が立つ、立てへんとか、文章の表現がどうかという枝葉末節な意味と違うで。みんな基本的に勉強してるし、まじめやねん。あと、僕みたいに思いつきでしゃべらへんな（笑）。

和美　ちゃんと論理立てて、積み上げて発言しているっていうことね。

岡田　その分、対立は深刻やけど。何かと言うとみんな口喧嘩する（笑）。それはもう、「機械の作動音がうるさい」みたいなもんで、言うてもしゃあない贅沢や。『朝生』っていうのは、作動音だけ聞かせて金取ってるようなもんやな（笑）。

で、言論界を見てみたら、「いろんな方向からものを考えなアカン」もしくは「こういうふうに考えたらいいのに」という、そのすべてに関して人材は豊富やった。各ジャンルごと、人権派やっ

たら人権派に、極右だったら極右に、だいたい「人物」っていうのがおって、その人らの話聞いたら、「まあ、この人に任しておけば十分や」というのがいっぱいおった。

さらにその向こうで、現実的に世の中を動かしている、現場の人だったり、メーカーの人だったり、官僚だったり、政治家っていうのも、そこそこ考えてるのがわかった。それで、彼らの間に、コミュニケーションギャップがあるのかというとそうではなくて、まあわりとみなさん話し合い、理解し合ってるのがわかった。で、僕は「OK、じゃあ問題ないからサイナラ～ッ」っていう。

これ以上望めないくらい「作動」している言論界

和美 問題ないのはわかるけどさあ、普通、プロデューサーっていうのは、それを使って何かするもんじゃないの?

岡田 それは違うなあ。放っといたら、何にもできへんというんやったら、どうにかするよ。たとえば映画を作りたい集団があって、そいつらが映画作られへんかったら、プロデューサーがいて映画作ればええんやけど。彼ら単独で映画が作れるんやったら、放っておいたらそれでOK。ほな、サイナラ～みたいなもんでしょ。

和美 今いちよくわかんない。

岡田 たとえば商売人がいて、砂糖は余ってるけど塩がないA地点、砂糖はないけど塩はぎょうさん余ってるB地点があったら、その間の架け橋になる。でもそのうち、流通の経路ができたら、その商人にはやることがなくなるやろ? どっかほかへ行って、また新しく商売すればいいだけやん。

それを「いや、独占流通権はうちだけが」とか言うてると、体に悪いし、精神衛生上もよろしくない（笑）。「自立して動き出してるのがわかった状態で、タッチするのをやめる」っていうの、わからへん？

和美　「とくに問題がない」っていうとこ、わからないなあ。

岡田　問題があるって思ってたんよ、三、四年前までは。「これは日本は大変なことになってるな」って思ってたし、「はっきり言って、アホばっかりやなあ」と思ってたわけや。でも話してみたら、そんなにアホばっかりと違うて、出版の事情であるとか、言論界の事情であるとか、もしくは、さっき言った喧嘩するときの作動音がアホっぽいだけであって（笑）、みんなOKやった。OKっていうのがアカンのかな？

和美　OKで頑張ってるっていうのはよくわかるけど。それでいいっていうのがわからないなあ、やっぱり。

岡田　これ以上、望まれへん。ちゃんと作動してる。これに僕が入って、みなさんの生産効率が上がったり、新概念が出てくるんやったら、そら行きまっせ。でもそれとは違う。もう十分に作動していて、これ以上の効率は僕には上げられへん。たとえば宮台さんを「スーパー宮台さん」にして、小林さんを「スーパー小林さん」にしてとか何とか。そんなのできへんよ。確認するだけがやっと。本人たちにとっては、せんといて欲しい、余計なお世話やってんけどな（笑）。「何で、お前に確認されなアカンねん」。僕は僕で、僕が確認せんだら、世界中の誰が確認しても信用なんかできへんから。コンコンていきなりドアをノックして、ガバっと開けて、機械の調子見て「あー、こうなっ

てるんですね。OKですよ、宮台さん！　じゃ！」ってバタンと閉めて帰ってくる（笑）。

和美　何か、すごい迷惑な気がするけどね、相手には（笑）。

岡田　迷惑かもわからへんけど、僕にしてみたら不安やったから。この本の対談相手だけじゃなくて、だいたいこの三、四年間で会ったり、本を読んだりした人の総体として、言論OK、政治OK、何かエブリシングOKになったんで。

和美　現実として、あまりOKっぽくは見えないけど。目一杯がこれで、これ以上の改良点がないっていうこと？

岡田　根本的な改良点はないね。改良だと言い張ることはできるよ。改良だと言ってドライブかけて、今の状態を右や左へ少しは振れさせることはできるやろうけども。まあ生産性は上がらへんよね。朝のラジオ体操の歌を変えるようなもんや。これで生産性が上がりますって言い張ることも可能やし、いろんなデータや社会学的な統計で立証することも可能なんやろうけど、そんなん、やってもしゃあないやん。

和美　それは言い換えたら、することが見つからなかったっていうことじゃないの？　または、できることとか。

岡田　うーん……。ま、そう。御用聞きに行ったら、用がなかった。「みなさん、お部屋のお掃除いたしましょうか？」って行ったら、きれいやったという。

和美　で、OKって言って、ドア閉めるしかなかった？

岡田　そやね。それに、僕はそれに関してプロの業者として行ったのと違って、素人は素人として

「こんなもん、信用できるかあ！」って言うて行ったわけやから。

あとは自分がどうするかだけだ！

和美　話が戻るけど、今年になって頭が悪くなったたっていうのは、本当に悪くなったの？　それとも社会問題から興味がそれたの？

岡田　頭がよくなった、悪くなったっていうのは、客観的メーターを読み取っているわけと違って相対的な観測やからね。去年言うてることと見たら、「今年の僕、こんなんよう言わんわ」と思ったんで、「きっと去年の僕は頭がよかったんでしょう」と思ったわけやけど。

和美　「よう言わん」というのは、発想とかのこと？

岡田　「このタイミングで、ようこんな切り返しできるわ」とか、そういう演芸的な反射神経もあるし。あとねえ、「僕、賢いこと考えてはるやん」って正直思ったわけや（笑）。でも『週刊アスキー』[005]が潰れたあたりからかなあ、そういうふうなことにヘラヘラーと、見事なまでに興味がなくなっていったからねえ。

やっぱり学者にしても、政治家にしても、政治評論家にしても、僕が思ってたような職能の人と違ってた。みんなもっと本来の意味に近くて、学者というのは学問を研究する人であって、評論家というのは評論をする人であって、それ以上のことを期待したら申し訳ないと言いましょうか。

和美　その前はどう思ってたの、いったい？（笑）

岡田　何だかんだ言うて、普通の人はみんな、テレビで言ってたり、本に書いてあることを気にし

005 『週刊アスキー』が……
九七年五月末に創刊された週刊誌。はじめは総合誌としてスタート。ちなみにこの本の対談はその中の連載「岡田斗司夫のオタキングダム」で行なわれたものが中心となっている。九月末に、リニューアルのため休刊。十一月よりパソコン専門週刊誌として新創刊した。

てるやん。それを信じたり、受け入れたり、自分の中で解釈、咀嚼して、自分の価値観の一部、生きるツールとしてるわけやんか。そのことに関してもう少し自覚的で、よい商品を作るメーカーみたいな考え方してるんかと思うてたら、もっと純粋やったな。

和美 「世直し屋さん」みたいな人だと思ってた?

岡田 そうそうそう。でもこの世の中に、そんな人おれへんねん(笑)。

和美 そりゃいないよ(笑)。

岡田 「困ったもんやなあ」と思ってた時期もあったんだけど、言論界総体としては限界一杯まで動いてて。それも昔は「現状は出力六〇ぐらいやけど、八〇ぐらいにでけへんかな」と思ってたけど、実際は三五ぐらいやってん。それが限界一杯。そりゃ、日本国中が知恵を絞れば、三八ぐらいには上げられるかもしれへんけど、そこまでして三上げてどないすんねんっていう、効率の問題やなあ。

和美 そりゃ効率の問題だけど、機能はしている?

岡田 これぐらいのゆらぎ、あそび、無駄、ロスはしょうがない。ただ、大きい問題点っていうのは、いろんな人が語ることによって多面的な方向から光が当てられるようになってるから、そうなったら自分はどうするのかしか残らへん。

消費者である私たちっていうのは、どういうふうに考えるのかじゃなくて、結果としてどのような行動をするのかしか、選択肢はないやん。どんなふうに考えても同じやんか。

たとえば日本が戦争をガーってやって、よその国を侵略してるときに、みんな心の中で戦争反対

って思ってもしゃあないし、考えてもしゃあない。遺書に書いてもしゃあないやん。それは個々人の行動として、人を説得するでもいいし、反政府運動を起こすんでもいいし、もしくは賛成して鉄砲持って走るんでもいいんやけど、行動に移して、初めて意味があるよね。

和美 社会として意味があるよね。

岡田 でも、その前の段階の、考えたり思ったりするのって、まったく意味ないやん。

和美 でも、たとえばオウム[006]の事件が起こっても、「まあこわい、オウムは悪いわ」「いやオウムは悪くない」で終わりでしょ。たいがいの事件はそういうものじゃないの？　いろんな意見が出ても、それはただの「意見」で終わり。何にもできないよね。

岡田 そりゃ、意見を言う人は、意見を言って流通させるのが仕事やから。流通させるっていう行為をしてるわけやから。

和美 その人たちはいいだろうけど。でも、テレビを見てる人とか……。

岡田 テレビを見てる人は、それで行動が取れるやん。たとえば近所にオウムの人がいたら家にものを放り込むとか、挨拶されても知らんふりするとか（笑）。もしくは、暖かく社会に受け入れてあげるとか、職を世話するとか。何でもいいよ、とにかく行動化できるやんか。その行動化っていうのをしないで、「いや、もうちょっと考えなアカン」と僕も含めて全日本人が（笑）、腰が引けてたのが去年まで。全日本人っていうのは極端かもしれへんけど、何となくそんな雰囲気やった。で、考えるツールとか方向っていうのは、いろんな人が方向なり角度なりを提示してるわけやから、それによって自分の態度を決めて行動できるっていう状態にあるのがわかった。だから僕は自分のプ

006 オウム
→19ページ脚注参照。

ライベートのことにしか興味がなくなってしまったんですよ。「じゃあ、僕はどうしましょうか。なるほどね、教育に問題があるんですね、じゃあ、わが家の教育問題、こうしましょう」とか（笑）。世界が見えて自分とのつながりができたんで、無理やりに「社会的」なことは見なくてもよくなったというのかな。べつに僕がマイホーム主義になったんと違うよ。世界の構造が信用できなくて不安やった。だから見に行ったんやけど、なるほど、効率が悪いなりに、今、最適のシステムで動いてるっていうのがわかったから、もう目を離しても大丈夫やねん。

信頼性の高い工場＝言論界

岡田　僕にしてみれば、社会問題を考えることは「下請け」に出したと考えてるねん。たとえばTシャツを作るんやとしたら、自分でデザインして、版下作って、権利を自分で取りに行って、染料の色見て、生地取り寄せて、ここで縫製やってっていうのを全部、自分で管理せなアカンやろ。ところがある日、下請け屋さんが来て「それぜんぶ、うちでやりますわ」って言うてくれた。もちろん最初は信用できへんよ。で、工場見せてもらって、職人さんの働きぶりを見て、いいとこも悪いとこも見て、その上で下請けさんに任せようってなったら、気遣いから解放されるやん。それと同じように、社会問題に関しては下請けさんに任せて大丈夫やってわかった。

和美　社会問題に関しての「下請け工場」って、どこなの？

岡田　言論界全体。あそこ、トータルで巨大な工場としてみたら、信頼性はわりと高いねん。個々のパーツで見るからすごい問題があるように思うねん。たとえば「保守反動があんなこと言ってる。

放置しててもいいのか！」とか言うんやけど、僕らは放置しててOKやねん。もちろん、あの工場内の人らにとっては、クオリティーコントロール活動をやってるわけやから、放置することは許されない。「流れ作業の効率が悪いぞ」とか「○○支部は問題だと思います」とか言うてるようなもんで（笑）、でもそれは僕らには関係ないねん。

その結果生み出されている社会常識とか僕らの社会の価値観っていうのは、ギリギリ何とかいいものが生産されてるからな。これがもうちょっと悪くなったら、また行きますけど。

「知的増税」はぜったいに許さない！

岡田 下請けっていう意識が出てきたもんだから、この前『朝生』に出たときにとんでもないこと口走ってしまった。隣にいた辻元清美[007]さんっていう政治家の人が、「もうちょっとみんなも、社会問題や政治について、自覚を持って考えるべき」って言うから、腹は立てへんけど急におかしなってきて、「僕らはそういうことを考えて解決する専門家として、あんたらを雇って金払って、食わしてるんや。その上、僕らにものを考えさせようとは、何という怠慢か」と言って、むちゃくちゃ怒ってん（笑）。当たり前やけど、政治家のみなさんには不評でした（笑）。僕は腹の底から、主権＝俺様だと思うてるからさ。政府とは何か言うたら、僕の代わりをしてくれる機関であって、そのために税金というギャラを払うて、経営してもらってる。国家運営を下請けに出してるわけやんか。下請けさんが国防とか、民主主義とか、竹島とか領土問題とか、あと天皇の管理とかやってくれてるわけや。不満と言えば、競合会社がないからすぐ効率が悪くなってしまうんやけど、複数の国家

007――――
辻元清美
↓281ページ脚注参照。

に税金払って、競争させるっていうのは今のところ無理やから、まあこんなとこでしゃあないやろ、と手は打ってるわな。どうしてもいやだったら、国籍変えるっていう手もあるしな。

去年まではそんな意識なかってんよ。今年あたりからポポポーンて出てきて、思わず言うてしもうた。で、『朝生』の帰りのハイヤーの中で、「ああ、言うたらよかったなあ」って思ったのがねえ、ルポライターやってる今井一[008]さんっていう人が、沖縄の名護のほうではヘリポート問題で住民投票があった、もっと住民投票の結果を受け止めるべきやとか、政治に関心を持つべきやとか演説して、僕それにめちゃくちゃ、ムカっと来てん。でも何でかはわからんかった。

ハイヤーの中で考えてわかったのは、彼らが言ってるのは「知的増税」やねん。経済的増税って何かって言ったら、国家の経営がこれ以上うまくいかへん、あんたらから預かった金ではこれ以上やりくりできへんから、もうちょっとお金ください、っていうことやろ。知的増税っていうのは、あんたらからギャラもらってる私ら賢い人だけでは、問題が解決できません。みなさんも、もうちょっと問題考えてください。そんなことを、あいつら要求してるわけやんか。

和美 それって「考えてください」ということになるの?

岡田 「考えて行動してください、考えて投票してください」っていうことやろ。何ていう無茶を言うんやと思ってさ。それを健全な姿やと思ってる。そりゃあいつらにしてみれば健全やろ、知的増税取立人なんやから。一人でも多く「社会的な意識を持って考えること」が、彼らの得につながるんやから。でも僕らにしてみれば、それは経済的増税と同じように、人生で楽しかるべき知的活動の一部を、社会奉仕のほうに使わなアカンということや。そんなこと考えないで済むように、議

008 ――
今井一(いまい・はじめ)
一九五四〜。ジャーナリスト。八一年から二年間、戒厳令下のポーランドを取材し、まとめた『チェシチ!―うねるポーランドへ』でノンフィクション朝日ジャーナル大賞を受賞。また「国民投票」を提唱し、著書『大事なことは国民投票で決めよう!』がある。

論が効率よく進むために、それ専門の専業家を雇ってるはずなのに、何ちゅうけしからんことを主張するやつやと思うて。帰りのハイヤーの中でそんなこと思って、「今度『朝生』出たら、絶対言うたろ」と思ったけど、そんなこと言うたらえらいことになるわな（笑）。絶対、一人も賛成してくれへん。テレビの向こうで誰もOKサイン出してくれへんよ（笑）。

和美　みんながあなたみたいな考え方はしないからね（笑）。

岡田　去年言うた「プチ論壇」と同じように「知的増税」っていい言葉やと思うねんけど（笑）。評論に飽きたっていうのはインターネットなどでの議論集団、いわゆる「プチ論壇」のせいもある。バカにしてるのと違って、彼らはじつはレベルが高いんねん。問題もよう見てはるし、勉強もしてる。それ見てて「これで私にできることとって何があるんですか」って思ってしもうたことが、事実としてあるな。テレビに出たり本を出したりしてるような人たちのレベルと、アマチュアでまだチャンスはないんやけど、インターネットでやってる人らとの間で、個人個人の優劣のレベルで差があるだけで、プロ、アマチュアの圧倒的な差はないねん。

もうここまでみなさん知的になってきてるんやったら、知的専門家としての評論家なんて、じつはそんなにいらんよなあ。少なくとも岡田斗司夫はやらなくていい。OK、OK、消費者の一番上のレベルはここまで考えてる。だから、去年で僕のオタク評論も終わり。

「冒険家」は一人でもう十分だ

和美　評論家の部分はわかったけど、オタクは?

岡田　オタクをツールにして、批評とか言論っていうのをやってたわけやん。

和美　言論界のオタク地区担当（笑）。

岡田　言論の人らって、自分のやってることに自信がないねん。自信がない人って、原始人呼んで話を聞くという癖があって。環境問題やってて話が難しくなったら、突然アマゾンの原住民とかアボリジニ呼んできたりして、素朴な言葉で語らせる。それで感心して「うん、聞くべき何かがある」っていうのがみんな好きなわけ（笑）。僕はそれやねん、オタク界の原住民みたいなもん。連れてきたら英語ベラベラで、「旦那、いいもんあるよ」みたいな感じでガンガンしゃべれるから、珍重されてたわけですわ（笑）。

和美　原始人の言葉だったの？

岡田　そりゃプロの言葉じゃないよ。僕の話は、すべてがたとえ話の連続やんか。「岡田さんの話を聞くとわかったような気になる」って言ってくれるのは、ぜんぶたとえ話だからであって、ある種「教祖」の話を聞いているのに近いわけやな。イメージが湧くし、わかった気になれるんやけど、それを応用しようとしてほかの人に言おうとしたら、僕の言葉の使い方以外にないんやんか。すごい伝えにくい。

「これはおもしろいな」というのと、「これは必要とされているな」というその両方があったからやってこれたけど、もうあんまり必要とされてるっていうのが感じられなくなってきた。去年の後半あたりから、オタク関係の書籍がバンバン出てきて、オタク評論家みたいな人もパンパンパンパン新しい人が出てくるし、古い人も急にフーコー[009]の言葉引用してみたりして、肩に力入れてオタク

009――
フーコー
一九二六～一九八四。フランスの哲学者。狂気の歴史学を開拓。構造主義の旗手の一人であったが、のちにポスト構造主義的立場から、知と権力の内在的関係を分析する。著書に『狂気の歴史』『性の歴史』ほか。

論語ってるやん。かわいいもんや、任せて大丈夫やよ。かわいいもんなんて言うたけど、僕より頭のいいのもバンバン出てきてるしな(笑)。そしたら、僕がこんなところで中途半端な言論やってるよりも、さっと身を引いたほうがカッコええしやな。

フロンティアとしてのおもしろみっていうのもあったけど、四年間ぐらいやってきて、最後の一年間は量産体制に入って「似たような言葉の繰り返しになってきたぞ」っていうのが、去年の秋頃に見えたから。『週刊アスキー』がポンとなくなったのをいいことにやめてみたわけや。そしたら何と、枯渇感がない。『週刊アスキー』で連載する前までは、「自分が考えてることを残さねば。この自分が持っている価値観や認識とかを人に伝えなければ、死んでも死にきれない!」みたいな焦燥感がたしかにあったんやけど、終わってみたら、ぜんぜんないなあ、と。

和美 言うべきことは言った、聞くべきことは聞いた。

岡田 これ以上言うべきことがあんまりない状態で、それでもまだ何か言うたら、昔から僕自身が批判している、「お前はもう作る時期じゃないのに、まだ作ってる」という作家と同じになってしまうからねえ。やっぱり、人間、引き際が大事ですよ。

和美 でも本来、大衆化してから浸透するわけよね。

岡田 その浸透のプロセスと、中心にいる人間がだめになる度合いは比例してるからねえ。だめになるのがいやだったら、さらに過激になるしかないんやけど、こっから先の過激は「過激のための過激」になってしまう。これまで言ってきたことは、自分なりの積み重ねがあったんやけど、こっから先は「言うために言う」ことになってしまう、人の耳目を引くために言う。それは何やら気色

悪いし、家帰ったあと恥ずかしい。布団の中で「ウワーッ」とか、また言わなアカン（笑）。

でも何かね、僕にしてみれば代表して味わってきたっていう気分があって。僕、昔SFファンやった頃、アメリカのSF大会に行ってきて、帰ってきてみんなにそれを話したら、みんな同じ話でも何べんでも聞きたがんねん。それっていうのは、誰か一人の体験談を何度も聞くことで、それを自分の体験と化して、アメリカという国であったり、世界のSF事情っていうのを、何とか自分の中に取り込もうとしていたわけやん。僕と同じ三十代後半ぐらいの世代で、オタクやってたり、世の中に中途半端な関心持ってて、本格的な知的訓練受けてないような人、そういう人たちが今の社会でものすごく人数が多い、大多数って言ってもええんとちゃうかな。その一人の冒険談の一部分が、この本なわけやね。それを読むことによって、みんな気が済んだらええよな。だって一人一人が行く必要は、やっぱりないもん。

僕は日本の知的状況の中で一番おもしろいところに、ちゃんと現実に行って、会って、向こうを怒らせたり、自分も怒ったり、テレビに出て恥をかいたり、いい思いをしたり、お金を儲けたり、損したり、有名になったり人に嫌われたり、さんざんごっそり経験してきた。その結果として言えることは、「スッゴイおもしろいところやけど、べつに君らがやる必要はないよ」。それがようわかった（笑）。

和美　でも何だか、勝手な意見だなあ（笑）。

岡田　僕は気が済んだから、君らも気を済ませてくれとしか、よう言わんわ（笑）。

プライベートなものの代用品

和美 最近の関心はおもちゃばっかりですねえ。おもちゃとかアンティークおもちゃ屋さんの状況とか、いつも話題にするね。急に来たねえ。

岡田 今の仕事に一段落ついて、最大の関心事であった評論とかから、急に関心がなくなって。

あと、あれやね、僕には三カ月周期の躁と鬱っていうのがあるやんか。それと同じように何年か周期の外向的と内向的の波があって、今、また何年かぶりの内向的な波に入りだしてるんやと思う。去年ぐらいまでは人に会って話したり、自分の意見を言ったりしてたんやけど、今は自分について考えたりとか、あと、何で自分がそういうふうに感じるのかとかいうほうに、ダーっと行ってるなあ。だから対談とかえらい困るけど、でも、そういうでっかい周期があって、それにはあまり逆らわないようにしているわな。その周期って、あんたから見てわかるの?

和美 本人が言うから、そうかなあと思うけど(笑)。自己申告の世界ですから(笑)。

岡田 躁と鬱のときはわかるの?

和美 強烈な鬱はわかるよ、さすがに顔見たら。強烈な躁もわかる。しゃべる高さ、声が違うから(笑)。あとしゃべる速さも違うよね。鬱のときとかしゃべらないでしょ。

岡田 去年はどうやった?

和美 去年は鬱では苦労したねえ。後半からでしょ、苦労しなくなったのは。

岡田 おもちゃも外向的な頃だったら、産業構造とかいうほうにもっと興味が行くと思うんやけど、

あんまり興味行かへんねん。昨日、パソコン通信で知り合ったおもちゃ好きが集まって、おもちゃ見せっこしたりする、おもちゃオフ会っていう会議みたいなのをやってん。でも、ほかの人のおもちゃ見ても、ぜんぜん興味ないんよ。僕が集めてんのはおもちゃではないみたいやねん。もっとプライベートな気持ちの代弁者を集めてるだけであって。古いおもちゃじゃなきゃっていうわけでも、どうもない。何やら特定のものでなきゃいけないっていうことであって、それを話せるのは三年ぐらいしてからやなあ。その三年間どうやって食べていけばええんやろうか?

和美 大丈夫、大丈夫……ちょっとだけ食べればいいから（笑）。

世の中の無意識と僕の無意識のギャップ

岡田 ところで、僕が評論家みたいな仕事をするのはどうでしたか? そのまえはアニメ作ったり、ゲーム作ったりしてたわけやん。そのあと、チンタラしてたわけやん。そこからフィンフィンフィーンってエンジンがかかって、何やら社会評論みたいなもんをやりだしたわけやん。それに関して君は、どう思ってた?

和美 そりゃ、ずっと同じことやってるより、変わったほうがおもしろいよ（笑）。端から見ててもエキサイティングでしょ?

岡田 勝ってるか、負けてるかとかいうのとは違うんやろ?

和美 まず、落差がある。最初、アマチュアでブイブイ言わせてたのが、プロになった。プロになってもそれなりにブイブイ言わせて、そのあとゲームを作った。ゲームを作ってそれなりに儲けて、

それっきり鳴かず飛ばずなわけで（笑）。

岡田　アハハハハ（爆笑）。

和美　まずその差がおもしろい。「一発当てて儲けて」というんだったら、ありがちな、いわゆる大成功の人生でしかない。鳴かず飛ばずっていうのも、ありがちだけど（笑）。そのあと、ある程度似てるけどまったく違うジャンルで、それも今までは共同作業、みんなで作ってたのを、個人で活動して、テレビ出たりとかぜんぜん違うことして、それなりに成功して、というのはおもしろかったよね。

岡田　「おもしろい」しかないの？　やめてほしかったとか、もっとやってほしかったとか、「どうせやったら、ここまで行かんと男とちゃうで」とか、思わへんの？

和美　評論活動に関してはねえ。本人がそこまで「自分は熱意がない」とか「これ以上できない」って言うんだから、そりゃしようがないと思うでしょ。そりゃどうせだったら、世の中を動かすような評論家、昔の小松左京[010]さんみたいに、大阪万博をやっちゃうような活動があったほうがカッコいいよね、影響力としては。

私が思うのは、みなさんそれぞれ言論界でちゃんと活動してて、いわゆる制作現場はあるわけでしょ。だったら、その制作現場使って何か作りたくないのかなっていうのはあるよ。ある程度の影響力は持ってるわけだし。

岡田　なるほどなあ、わかるわかる。さっき言った、業界みたいなもんがあって、映画の製作現場みたいなもんがあって、何で映画を作ろうと思わんのかっていうことやな……。何で作ろうと思わ

010――
小松左京（こまつ・さきょう）
一九三一〜。小説家。人類史、地球史、自然史など幅広い知識と教養のもと、日本のSFを開拓発展させた草分け的存在。博覧会のプロデュースは、大阪万博のほか、九〇年の「花と緑の博覧会」も手がけている。

へんのかやな……。それはね、うん、思ってた、思ってた。それは、一本化させて何とかしようと思ってて、それに関しては、何かこういうふうにすればいいんと違うかなっていうビジョンが、自分の中にあるような気がしてた。その責任感もあったし、自覚もあったし、やる気もあった。けど、正直な話、手に負えんなあという感じがしたよなあ。それはその工場が手に負えないんじゃなくて、この工場の力をまとめて市場に行くには、ちょっと僕も含めて力不足かなあ。それがさっき言うた、限界やとか力がない、とか。

和美 出力、三五って言ってたからね。かなり低いもんなあ。

岡田 それは、政策立案能力とか実行力とかと違って、マーケティング能力というやつやからなあ。みんなの幸せがどっちなのか誰も決められへんねんから、これは個別発生的にそれぞれの人がそれぞれの方向の幸せにアプローチするしかない、としか言われへんねん。以前は全体の方向でも、ある程度束ねて「こっちや」というのができるつもりだったんだけど。これはできへんなあ、やったらアカンねんなあって思ったんよ。

和美 それはみんなの幸せがバラバラだから?

岡田 僕にわからへんから、みんなの幸せが。もう手に余る事件、続出。

和美 ああ、いろいろ最近ありますねえ。

岡田 あのねえ、酒鬼薔薇聖斗事件[011]というやつで、まず第一回目の「わからん、これ」。それまでの快進撃は何やったかと言うたら「おまえらオウムわからへんの? 俺、わかるで」っていうのがものすごくあったわけや。「隅から隅まで全部わかるわ」っていうのがあって、ヒャーっと行った

011 ——— 酒鬼薔薇聖斗事件
→92ページ脚注参照。

わけやけど。で、去年の夏に酒鬼薔薇聖斗事件があって、あんとき「あ、わからへんこともあるわあ」って思ってヒャーと引いてって、今に至るわけですわ。

和美　腰引けまくり（笑）。

岡田　もうこんなん（思いっきり腰を引く）ですわ（笑）。こんなことしゃべるのは、辛うじて残ってる評論家みたいなこともやる岡田斗司夫にとって、ものすごい致命的やねんよ。わからへんっていうのが致命的な職種やから。でもわからへんことを、あえてわかるように努力するっていうのもいややし、わかるふりするのもいややし。努力してわかるなんてこと、あるはずないやん。世の中のウジャーとした無意識みたいなもんと、僕の無意識が一体化してるから、わかるっていう状況があるわけであって。

和美　それは理解するとかいうことと違って、ピンとくるとか、感覚としてフィットするとか、そういうことね。

岡田　ところが世の中の無意識と僕の無意識にこんなにもギャップがある。僕の考え違いでした。やれることはオウムとかそこらあたりで、もうやり尽くしてしまいまして、あと、本をちょっと書いてそれぐらいで終わりですわ。

和美　それは、「自分にはわからない世代が生まれてきた」というのとは違うの？

岡田　今までもいたんだけどね。生まれてきたんやなくて、わからん世代がおるっていうのにやっと気づかされて。それは世代の問題やなくて、きっと同世代のたぶん半分もわかってなかったんやと思うよ。でも、オウム事件を、みんながあんなにわからへんて言うてくれてたおかげで、あれが

わかる僕は、ぜんぶわかってるような気になってたんやけど……。

和美 イケイケな気分だったんだな（笑）

岡田 でもよく見たら「ウワー、下半分裸やー」（笑）。それで今、過剰に腰が引けてるんかもわかりまへんけど。

和美 でもそれって、今、言論界で活動している人でも「わかる、わかる」っていう人はいないんじゃないの？

岡田 いない、いない。でも僕は今まで「わかる、わかる」でブイブイ言わせてたわけやん。どうして僕みたいな素人同然の人間が、その道何十年の人らに「そんなん、違いますよ」って言えてたかというと、僕はわかるからという前提で（笑）。女性論戦わせてる現場で「女ってそんなもんじゃないわよ」って言い出す、ヤな女みたいな気分やったわけやよ（笑）。これは本当に感覚の問題なんやけど、今は階段がない、ハンドルがない感覚。景気悪い話やねえ。

和美 そうねえ。わからないからって、突然バタフライナイフ持ってみてもね（笑）。

岡田 三十九年間培ってきたもんやからねえ。ここから二年間やそこら頑張ってもなあ。

「『無知の知』を知ってるよ、俺は（笑）」

岡田 でも、今言ったことって、言い換えたら「去年までは勘違いでした」って言うてるようなもんやから（笑）。

和美 でも、去年までの事件はわかってたんでしょ？ それは「勘違い」とは違う。そこは大事な

違いだと思うけど。それまでは、わからない人らが事件を起こさなかっただけなのかな。

岡田　僕が今、かろうじてすがってる優越感は「『無知の知』を知ってるよ、俺は」(爆笑)。『朝生』出てるやつは、こうはいかんやろ(笑)。これぐらいしか叫ばれへんわあ。貧乏くさいですなあ。

和美　昔、ほとんど仕事をしてないようなときは、毎日すごい抽象的な話をしてたような気がする。たとえば「人間の意識とは何か?」みたいな話をしてたよね。でも最近の話題は、具体的な人の話題が多いよね。あと、最近、人のことをバカだとか、アホだとか言わなくなった。いろんな人のいろんなパターンは認められるようになったような感じはするなあ。

岡田　それは『SPA!』でやってる、人間のタイプ別っていうのの影響やね。ああいうふうに人間を考えるようになって、ただ単に「こいつはバカや」とか「こんなことわかってへんのか」とか思ってたのが、「なるほど、この人のパターンと立場と性格、この三つを組み合わせたら、これしか出てきようがないよなあ」って考えることによって、腹は立てへんようになるよな。それがいいことやとは、あんまり思わへんけどね。

和美　腹が立つほうがいいの?

岡田　感情が動くからね。感情が動けへんかったら、納得するしかないわけでね。共感なんていうのはもともと無理なわけやから、そこにあるのは納得であって、諦めであって、心が動かないっていう状態だけやねん。

動機づけのレベルからして、そのパターンの中で納得してしまってるわけやから、ある種あの考えは、僕にとって福音であると同時に撤退やよ。たしかに、ツールとしてはメチャクチャに便利や

ねん。けど、ツールとして使うために必要な、一番最初に自分はこうしたいっていう動機が持ちにくいね。

とくに去年の夏ぐらいからこっち、誰に対しても腹が立てへんようになって、「これはもう、こういうふうなもんやからしようがない」っていうようなことが重なってきて、おまけにわからん事件っていうのがやってきて、今、自分の巨大な流れとして主観的になろうとしてるんやと思うんやけどね。もし主観的になれへんかったら、今年後半の僕は使いもんになってないと思う。

そこでですね、よけい内向的になってですね、「僕っていったい何でできてるんでしょうねえ」っていうことで内側見つめて、ロケットかなあとか、モノレールかなあとか……三つめがもうないんやけど(笑)、またロケットかなあとか(笑)。未来カーとかもありますけど(笑)。

「今日から僕は『女々しく』行きます！」

岡田　最近、僕、「おセンチ野郎」になろうとしてる。前はどちらかというと、「理性」と、理性のベースになってるのはモチベーション、「情熱」みたいなもんやね、それがあった。「こういうのは問題だと思うな」っていう情熱があって、その上で、「でも、こうだよな現実って」っていう理性・分析みたいなのがあった。今はそういうのはぜんぶ置いといて(笑)、心の中の使ってないもう反対側で「でも僕はこうでなきゃいやだあー」とか、「僕はこれがあればいいんだあー」っていうやつをキューッと凝縮しようとしている。「おセンチ」っていうのをある程度言語で説明すると、こういう感じですかね。「おセンチ」と言ってみたり「リリカル」と言ってみたり、いろんな表現

を使ってみたりしてるんですけど。

和美 ノスタルジー？

岡田 懐古的……。これまで僕はノスタルジーって嫌いやったからね。おさまりかえってるオッサンらが、懐古的になりやがって、自分は現役やよって思っててんけど。「でも僕は現役じゃないんだ、酒鬼薔薇もバタフライナイフもわからない〜」って思った瞬間に「昔はよかったあ〜」っていうのがズズズって出てきて（笑）。

和美 それってオッサンくさい？ 私のイメージとしては女の子っぽいかなと思ってたけど。

岡田 じゃ、そういうふうに切り替えます。オッサンくさいと、まだ今日までは思ってましたけど、今日から女々しいと。

和美 そのほうがまだいいかな？

岡田 女の腐ったみたいなのって考えたらええねんな。

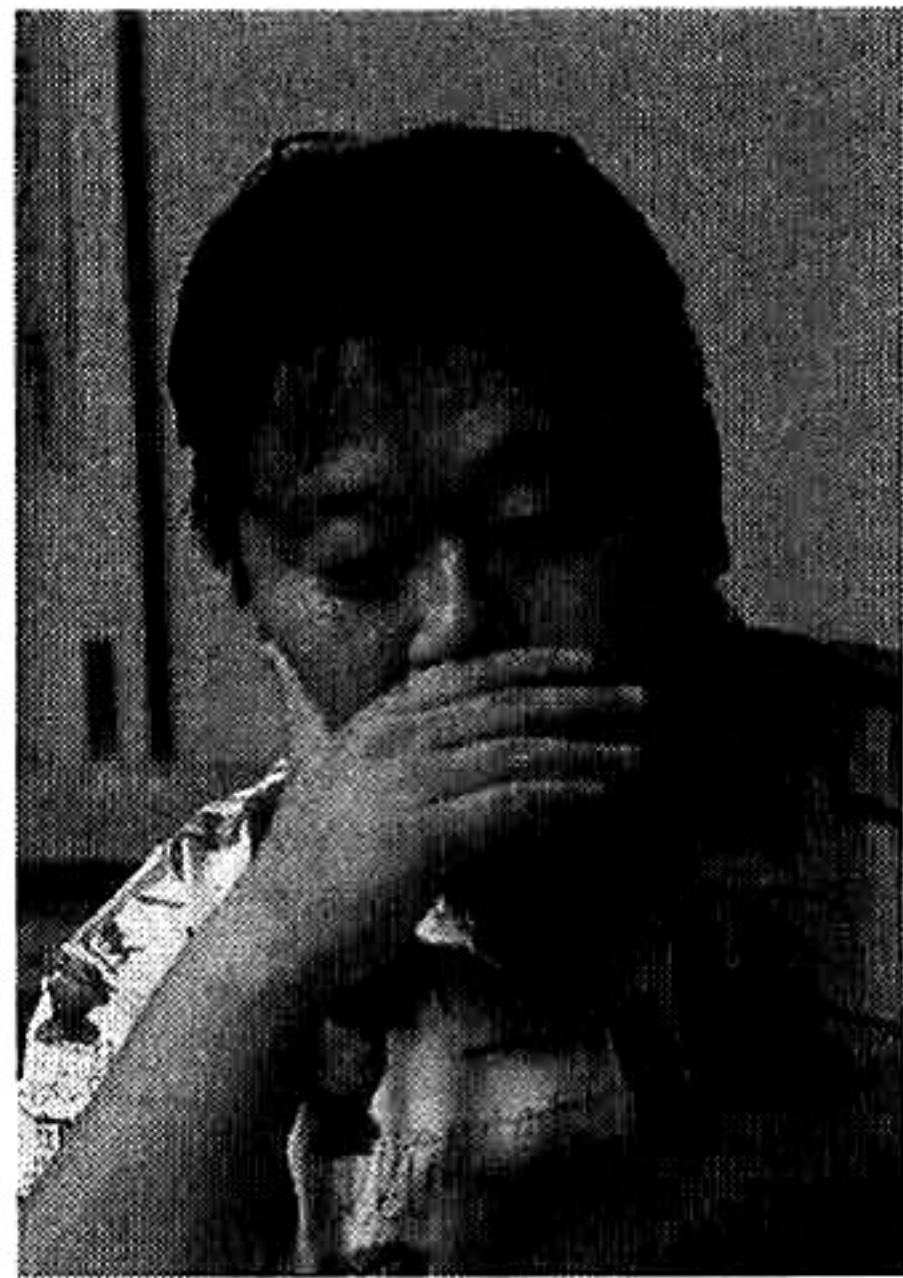
和美 ムカムカ。

岡田 君、この表現、昔から嫌いやね。

和美 男でも女でも腐ったやつはくさいから。

岡田 くやしい〜（笑）。

和美 何で？

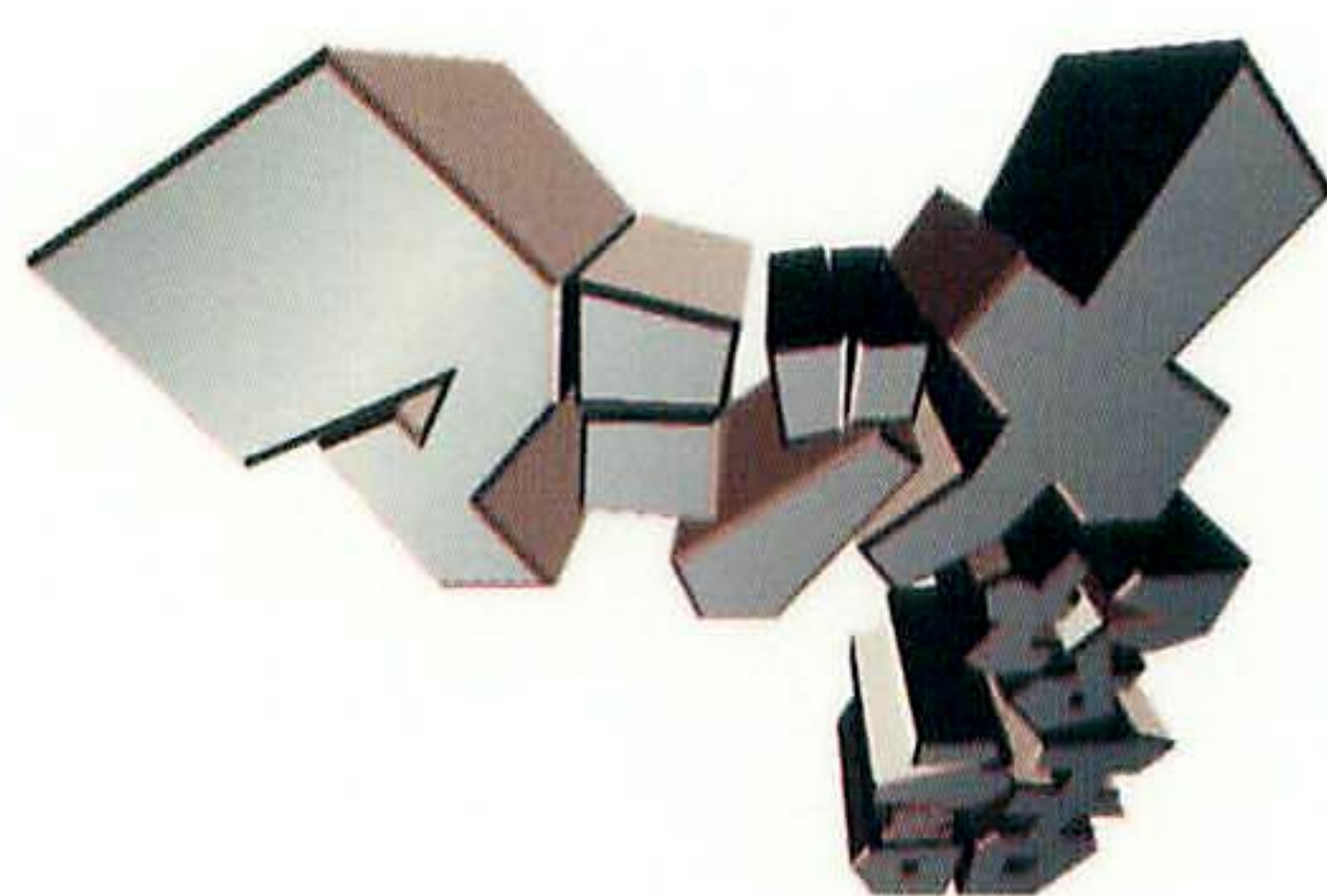
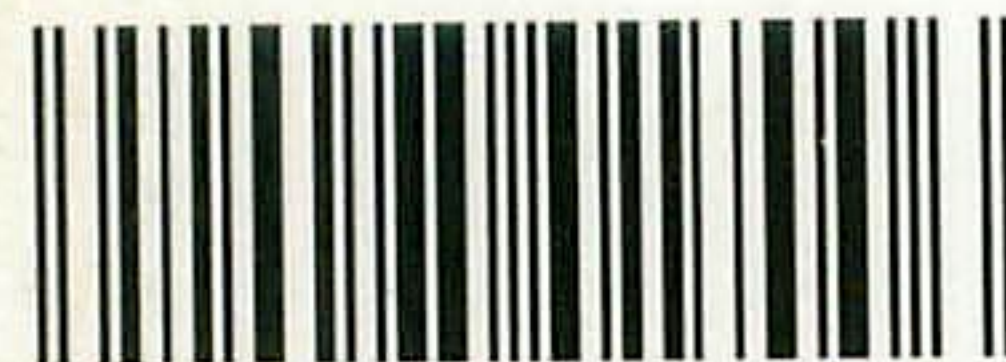
岡田 一ミリも反論できへんからや（笑）。今日から僕は女々しく行きますから……こう決意したら雄々しいかな？（笑）

岡田斗司夫（おかだとしお）
一九五八年、大阪府生まれ。
作家、プロデューサー
八五年にアニメ、ゲームの制作会社ガイナックスを設立、代表取締役を務める。映画『オネアミスの翼』、ＮＨＫアニメ『不思議の海のナディア』、パソコンゲーム『プリンセス・メーカー』などを手がける。九二年に同社を退社後、東京大学教養学部メルチメディアゼミ講師を務める。そのかたわら多数の雑誌に連載を持ち、さらに新聞、テレビ、パソコン通信など、幅広いメディアで活躍中。著書に『ぼくたちの洗脳社会』（朝日新聞社、九五年）、『オタク学入門』（太田出版、九六年）、『東大オタク学講座』（講談社、九七年）、共著に『オタクアミーゴス！』（ソフトバンク、九七年）がある。

◉写真――――――清水啓二／皆川智彦／今村敏彦／岡田斗司夫
◉編集協力――――武藤誠／溝上憲文
◉脚注協力――――岡野勇／多根清史／松虫／みのうら
◉ＤＴＰ協力―――(株)モリヤマ／中村タマヲ

岡田斗司夫　世紀末・対談
マジメな話

一九九八年　四　月一一日　初版発行

著　　者　岡田斗司夫
発行人　廣瀬禎彦
編集人　渡邊直樹
発行所　株式会社アスキー
〒一五一―八〇二四　東京都渋谷区代々木四―三三―一〇
電話（〇三）五三五一―八一一一（大代表）
発売所　株式会社アスペクト
〒一六〇―〇〇二三　東京都新宿区西新宿三―一一―二〇
オフィススクエアＢＬＤ新宿五階
電話（〇三）三三二九九―一三二五
装　　幀　佐々木暁（HEADZ / aGrippa records）
印刷所　凸版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
　ISBN4-7572-0022-6　Printed in Japan.　1189162

9784757200227

1920095017006

ISBN4-7572-0022-6

C0095 ¥1700E

定価 本体1700円+税

ASPECT

OTA-KING
II
Toshio Okada
the talk with generations of japan